



TITLE:

京都東山山辺における近代以降の
景観変容に関する研究(
Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

出村, 嘉史

CITATION:

出村, 嘉史. 京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究. 京都大学, 2003, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2003-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k10492>

RIGHT:

京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究

2003年8月

出村 嘉史

「京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究」 もくじ

第1章	京都の近代と山辺の空間変容	5
1-1	研究の背景と目的	
1-2	研究の位置づけ	
1-3	論文の構成	
第2章	京都の近代と山辺の空間変容	15
2-1	京都の近代化	16
1	京都における近代化のプロセス	
2	洛東の近代化	
1)	復興期の洛東	
2)	活性期の洛東	
3)	拡大期の洛東	
2-2	近代山辺の景観域	22
1	山辺における複合景観域	
2	対象地域の特徴	
第3章	丘陵地開発のデザイン — 神楽岡	31
3-1	神楽岡地域における敷地と参道の構成	33
1	神楽岡（吉田山・紫雲山）の地理と地形	
2	主要社寺の沿革	
1)	吉田神社	
2)	真如堂（真正極楽寺）	
3)	黒谷（金戒光明寺）	
4)	その他	
3	社寺領域内の参道	
1)	吉田神社	
2)	真如堂	
3)	黒谷	
4	絵図から見る道の原形	
1)	街路網の原形	
2)	参道の延長としてある街路	
5	結語	
3-2	神楽岡地域における遊興文化	47
1	近世の遊興空間	
1)	経路に沿う遊び場	

2) 経路外への遊び場の展開	
2 近代以降の遊興－谷川茂庵の数寄	
3 結語	
3－3 近代の数寄と住居の総合的開発	53
1 対象地の敷地	
2 茂庵庭園の地形操作と空間構成	
1) 自然地形を活かした苑路の工夫	
2) 茶庭全域と茶室周辺の関係	
3) 密に景観が操作される茶室周辺	
3 谷川住宅の地形操作と空間構成	
1) 段地上に構成された9つのブロック	
2) 丘陵地形に収まる建築の景観	
3) 石段からの景観	
4 二つの領域	
1) 両者比較による相違点と共通点	
2) 茂庵庭園と谷川住宅の都市環境的位置づけ	
5 結語	
3－4 向かい合う丘陵地間のデザイン	66
1 対象地の敷地	
2 宗忠神社参道の形成	
3 吉田山荘の景観デザイン	
1) 建築と庭園の配置	
2) 内部への導入	
3) 志向された眺望	
4 結語	
3－5 まとめ	75
第4章 疏水周辺のデザイン — 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子・・・・・・・・・・	79
4－1 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域における名所の原形	82
1 社寺由緒	
1) 八神社系	
2) 大豊神社系	
3) 若王子神社系	
2 社寺の景観特性	
1) 社寺の配置と構成	
2) 構成に見る景観志向	
3 社寺・集落・道の構成	

4	結語	
4-2	琵琶湖疏水分線の建設	97
1	復興期の京都と琵琶湖疏水	
2	琵琶湖疏水分線のルートと断面	
3	疏水分線建設による環境変化	
4	結語	
4-3	文人界隈の形成	103
1	浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の都市計画	
2	はじめの開発者による地域的デザイン	
3	文人と住居地域の発達	
1)	居住した文人達	
2)	南部地域（鹿ヶ谷ー若王子）	
3)	北部地域（鹿ヶ谷ー浄土寺）と散策路の形成	
4	西田幾多郎と散策路	
5	結語	
4-4	まちと山辺の均衡	117
1	「哲学の道」成立の顛末	
2	「哲学の道」のデザイン	
3	結語	
4-5	まとめ	122
第5章	東山の近代公園デザイン ― 円山・真葛ヶ原・祇園社・・・・	125
5-1	近世の円山時衆寺院	128
1	絵画史料の解題	
2	長楽寺の空間構成	
1)	全域 一階段状に並ぶ平場とその接続	
2)	平場における建築	
3	安養寺の空間構成	
1)	全域 一斜面に収まる塔頭群	
2)	各塔頭における庭園と建築の関係	
4	双林寺の空間構成	
1)	全域 一並列する塔頭群	
2)	各塔頭における庭園と建築の関係	
5	円山時衆寺院における文化的活動	
6	結語	
5-2	近世の祇園社	142

1	祇園社の縁起と地理的特異性	
2	2つの門前：まちとのつながり	
	1) 祇園社楼門―二軒茶屋―下河原	
	2) 西門―祇園町	
3	祇園社境内の賑わい	
4	祇園林の景観	
	1) 祇園林と桜	
	2) 馬場，射場，貨食家，相撲場	
5	結語	
	1) 山辺における祇園社の位置づけ	
	2) 近世の円山・真葛ヶ原・祇園社	
5-3	山辺における近代化の受容	158
1	初期の円山公園敷地指定	
2	公園周辺の分割的な近代化	
	1) 近世の敷地利用の流れを汲むもの	
	2) 新たな敷地利用	
4	結語	
5-4	公園拡張後の造園	164
1	植治による総合的デザインの意図	
2	傾斜地形の操作	
3	回遊式苑路とせせらぎによる造園	
4	庭園をとりまく飲食店	
5	結語 ―近代造園の成果と限界	
5-5	まとめ	171
第6章	結章 ― 複合景観域の創造・・・・・・・・・・・・・・・・	175
	前章までの成果	
	ケーススタディの統括	
	1) 地形的・基盤的特徴について	
	2) 近代に選ばれた「布石要素」のデザインについて	
	3) 複合景観域を形成する要素の構成について	
	4) 場所に対する意識の変容について	
	結論	
	今後の課題 ― 京都の郊外とその美学	
	謝辞	
	付録 関連事項整理年表	

第 1 章

序章

1 - 1 研究の背景と目的

国土の3/4が山の地形¹⁾である日本において、都市は多くの場合、距離の差こそあれ、周辺環境に山地と接する場所、すなわち山辺を持つ。この山辺という環境はその歴史上各時代において、都市と自然との関係をつないできた。ただし、都市住人は山（自然）へは直接立ち入らず、都市と自然の間に存在した郊外、山辺あるいは野に多く足を運んだ。それは、「心のばはむ²⁾」ことを目的にする都市住人、あるいは自ら都会の喧噪と距離を置いて隠遁生活をする文化人であった。この隠遁者の場合は、石川丈山の例のように、山辺に居を構えて庭を造り、独自の愉しみを追求した者も現れ、山辺それ自体に文化が形成される事もあった。ただし、これらの文化は、都市と全く無関係ではなく、寧ろ都市との間の往来があつて一層洗練され、栄えるものであろう。実際、近世には山辺の寺院境内で茶室が盛んに造られたが、草庵を求める侘び茶は、都市において洗練された文化である。

とりわけ京都においては、都市と近接して取り囲む山並みの麓に、人々の遊びの場となった公共性の強い良好な空間が存在してきた。よく知られているように、山辺の寺社境内は、この性格のものであり、空間づくりに趣向が凝らされてきた。これらの山裾は、古くより都市から足を運ぶ人が集い、活動する場となってきた。特に近世の東山においては、名所地を中心に物見遊山・社寺巡りのいわゆる観光ゾーンとして人を集めたばかりでなく、書画展観や茶事、宴席などの文化的諸活動を目的に人の集う場ともなっており、山辺の空間を魅力的な愉しみの場としていた。

しかしながら、近代に起こった都市環境の大転換は、日本全国押し並べて都市の外側へ向かう市街地の粗雑な拡張を許してしまった。計画には存分に尽力されたにも関わらず、思慮に欠ける開発が多く、山辺で行われたことは、都市の郊外を開発する際に、その場所的価値の認識、あるいは有用性への洞察における、基準となるものを持たなかった事、そしてかつて山辺と都市の間に形成されていた関係を見失ってしまっていた事による。そうであれば、かつて日本人が持っていたとされる、自然と人為の良好な関係性とはどういうものであったのかを詳細に明らかにして、今日までの無配慮を改めるための基準とすべきであろう。そして激動の近代において、この無配慮の問題に対する解を見出すことができるならば、それを手掛かりに、今日でも都市環境の創造を図ることができるに違いない。

ただし、実際に直面する技術的問題の前に、その有用性を失ってしまう知見では意味がない。ある解の適用される、時代における社会構造の違いが、考慮されなくてはならない。例えば、近代の日本における社会的条件は、今日とは全く異なるものである。そこには近代を通して輸入された西洋的価値観で溢れている。梅原猛がいうように³⁾、この時代には、感受性を根本原理としてきた日本にとって、意志と論理を根本原理とする西洋に肩を並べるために、自らの価値観を捨てて空虚で一辺倒な意志を持たなければならなかった。従って、時代の風潮を把握しながら、その根底にある日本固有の空間のあり方を探る必要が感じられる。その執念は、ややもするとナショナリズムに傾倒する危険性も孕むが、近代以降の一時代の観念に囚われずとも、日本固有の文化とは、本来その歴史の始まりとともにその「和魂」のアイデアのようなものがあつた訳ではなくて、様々に外来の知恵や技術を取り入れて、新たな調和を生み出していく作法であつたはずである。日本の伝統文化に作法

が重要であるのはこの事とも関係が深いだろう。この作法に基づく空間のデザイン、あるいはそういった空間から抽出されるこの作法を明らかにすることが求められる。

先に述べたように、京都東山の山辺では近世までに、その地形的条件を活かして、人々に共有される良質の空間を、積極的に作っていた例が豊富に見出される。しかし、ここでも同様に、外来の技術が氾濫した近代には、著しい都市化の中でその姿を変えていった。その時、多くの文化的領域がただかつての名声を語られるだけの荒廃をみせるに至った最中に、幾つかはより洗練されて魅力的な空間へ変貌したのである。破壊されていった例は、京都のみならず日本中に文字通り山ほど見受けられる。しかし、京都の魅力は山辺にあると現在でも言われるほど、押し迫る都市化と自然との間で巧みに折り合いを付けてきた例が比較的多く存在し、しかもそれらが単なる遺産の保存ではなかった事は重要である。

現在、間違った開発や杜撰な計画は数多く指摘されるが、同時にそれは私たち都市住民の生活空間への関心が高まっている現れであると考えられる。しかし、住空間周辺の景観美、あるいは体験の臨場感を獲得する事に対する理解は、未だ成熟しているとは言えない。求められる都市美とは、単に街路や建築の単位空間の美しさだけでは捉えきれず、地形や風土などを考慮したさらに大きな領域の中で、空間の重なりや体験によって創出される姿が評価されるべきであろう。すなわち、広域で良質な景観領域、あるいはそれを形成する公共的な（皆が一定のマナーのもとで享受できる）領域を意識的に獲得することが、豊かな都市生活の必要条件となる。

良質で広域な領域のあり方を探るには、多くの事例を体験する事によってその全体的性質を把握する感性を高めることが一番であると思われるが、ある限られた佳良な例を丁寧に分析する事により、その景観領域を形作る要素の構成と人との関わりを描き出すことはさらに有用である。近代の社会的な大転換の中で形成されてきた新しい空間の好例から得られる知見は、現在の都市と自然、そして私たちとの良好な関係を結ぶ上で極めて有益な情報となろう。

本論は以上のような背景に基づき、次のような対象を設定する。すなわち、人による場の利用を前提とした景観的領域として、京都東山の山辺の中でも、近世には名勝旧跡であり人々の遊びの場となっており、さらに近代化によってその景観を大きく変容させながら、新たな界限あるいは文化を形成してきた領域とする。そして本論において考察の軸となるのは、「いかにして近代において山辺の美的景観を創造することが可能であったか」という問いである。日本人の生きる場所に求められる、美的観念を追求したい。

ここでは、空間の構成論を基底として、即物的に対象における景観の変容を分析する。そこから山辺に対する人為の変化を明らかにすることにより、美的で良質な空間の形成を構造的に把握することを目的とし、以上の問いに対する解の一つを提示する事によって、今後の山辺利用と領域計画における指針を導き出そうとするものである。

1 - 2 研究の位置づけ

本研究の枠組みは、概ね3つの領域の既往研究と関わりがある。第1に、山辺の領域の空間的特異性を把握することに関連して、景観研究において重要な都市空間論に関する研究分野の既往研究を基盤としている。第2に日本の山辺の立場を把握することに関して、山辺の敷地を対象とした空間認識の研究分野を、そして対象領域における近代化の過程を都市との関連で把握することに関して、近代の都市論を展開する歴史研究分野を土台としている。

本論では、3つのケーススタディから、都市空間として市街地へと取り込まれていった近代の山辺における、良質な空間形成のための構造的な解決を導き出すために、既往の都市空間論による研究の視点を土台としている。本論の軸となる仮説は、ヒューマンスケールで、個々の地域性に則った一つ一つの都市景観が、都市の生活者にとって、自己形成の場となる大切な環境であるとする考えである。この源流には、次のようなピクチャレスクの景観を発見する動きがあった。

19世紀後期にC. ジッテ⁴⁾が、当時主流であった軸線崇拜・幾何学的秩序の崇拜に疑問を投げかけ、中世都市の広場を再評価し、ピクチャレスクな景観の重要性を明らかにした。この流れを承けて1960年代にはG. カレン⁵⁾をはじめとしたタウンスケープ派は、二つ以上の建築から構成される「タウンスケープ」を提唱して、都市各部の詳細な景観を示し、都市景観を構成するこれらの要素の分析から、空間の認識と構成の方向性を多様なキーワードで示した。伊藤⁶⁾は、このような即物的あるいは視覚的な美的感覚に着目する流れの中で、日本古来のデザインを記述した。伊藤の取り組みは、タウンスケープ派に倣い、日本の景観をピクチャレスクなものとして再発見するものであり、豊かな視覚的文化をもつ日本における景観要素の特異性を鮮やかに示したが、自己形成の現場となる都市景観を構造的に把握するものではなかった。

一方、詳しくは第2章で述べるが、本論では、都市生活者によって経験される実質的な景観の生成を、一定の領域の形成とほぼ同義で捉える。この領域が形成されるために必要な構造を考察する事で、近代における山辺の景観変容を説明しようとするものである。K. リンチ⁷⁾は、大きな都市環境も、感覚に訴えやすい形態を持つことができるという信念から、都市環境のイメージを、わかりやすさという観点で議論し、実際のケーススタディから、パス、エッジ、ノード、ディストリクト、ランドマークといった5つの視覚的形態を抽出した。しかし、リンチの卓抜な洞察によるこれらの成果は、日本の、あるいは京都の風土においても、同様の分かりやすさで迫ることができるだろうか。例えば、京都のイメージにおいて、強力なエッジとして判断されるべき山の領域は、実際の生活者の認識では、単なる線上のエレメントとしては決してみなす事はできず、より曖昧で有機的な構成として捉えられるものと思われる。リンチの基本的な研究の視点に則り、情緒的で流動的に捉えられる、日本の風土における領域構造を明らかにする事は、意義のある事に違いない。

C. アレグザンダー⁸⁾は、さらに積極的に市民が自ら環境を作るための共通言語としてパターン・ランゲージを発表し、大小各種のパタンのつながりから構成される空間づくりを提唱した。本論の考察は同様に、小スケールの構成から、大スケールの領域構成全体に及ぶ、

関係性の抽出の作業でもある。個々の景観のディテールは、全体的構成の中で捉えられている。そのため、ケーススタディにおける小領域の景観構成の分析を必要とした。

以上のように、都市空間論の文脈における本論の枠組みは、都市景観を構造的に把握する試みとして、ヒューマンスケールと広範囲にわたる景観的領域を結ぶ構造を抽出し、京都という特殊な風土条件において見出される、景観的領域の構成を把握するものである。

さらに、日本の山辺は、日本の景観を考察する上で重要な位置を占めており、山辺を対象とした景観研究は、以下の通り多く為されてきた。笹谷⁹⁾は、地形の認識について体系的に整理しており、全国の地名とその指示する地形の形態的特徴との関係を、実証的に示しながら類型化し、その意味的コードとして地名を体系化した。また記号で構成された一つのテキストとして捉えた村落の、空間認識的枠組みを把握するコスモロジー・モデルを抽出している。ただし、笹谷が明らかにした地名の意味する地形の形態的特徴は、視覚像として現れる地形の姿ではなく、空間の骨格としての地形構造であった。

樋口¹⁰⁾は、空間の骨格としての地形構造に着目してランドスケープを捉え、これを視覚的構造と空間的構造に分けて論じた。視覚的構造は距離、視線入射角、不可視深度、仰角・俯角など視点と視対象との関係により規定され、それによって立ち現れる具体的視覚像の空間性を明らかにした。空間的構造については日本の伝統的社寺空間や都市の領域の骨格を形作る地形構造を蔵風得水、八葉蓮華、秋津洲やまとなどの7つのパタンに類型化して示している。これらの基本構造は、さらに領域内部のディテールに迫る本論の考察において、重要な基礎をなすものである。

山辺敷地の空間認識論としては、山田¹¹⁾の研究がある。山田は京都盆地の山裾敷地を対象として、山裾の微地形構造を、山・野・里の三重構造でモデル化し、山裾敷地における空間マネジメントの手法を分析した。そして敷地に関わる認識は、その内部の空間認識にとどまらず、山一里の二元構造で説明される多元的性格を持つことを示し、山辺から都市内部に到るまで、この二元構造が繰り返し入れ子式に現れる事を確認した。

日本の山辺環境に関する以上の秀逸な研究により、山辺のような一見茫洋とした環境が積極的な空間設計の対象として分析可能であることが明らかになった。特に山田の研究は、自然環境までを含めた日本の都市構造の中で、考慮されるべき秩序を問題としており、良好な環境で生活する人々の空間を設計する上で非常に有益である。しかし、以上の研究は、都市と山辺を結ぶ領域を、地形を含めた断面で捉えるような、具体的な空間デザインの分析には至っていない。

本論で重要となる、時間的・歴史的な考察は、その基礎を、以下の多くの秀逸な研究に負っている。近代京都の山辺を捉える際に大切な概念となる、風致に関する研究としては、荻谷¹²⁾、土井¹³⁾、中嶋¹⁴⁾の研究がある。荻谷は、近代京都の景観保全を行政面からあとづけて、近代の京都を琵琶湖疏水建設と平安遷都 1100 年紀年祭の二つのインパクトによって3期に分け、それぞれの時期の特徴を抽出した。ここでは京都市の山林にたいする風致保護が早い段階から意識されていたことが明らかになった。また、土井は京都市の公園形成史の概観をまとめた。旧都市計画法制定以前の京都市には、円山公園・岡崎公園・五条公園・嵐山公園の4公園しかなかったこと、昭和初期の京都市の都市像は「田舎に京あり」であり、風致や緑地保存の重要性が認識されていたことを明らかにしている。中嶋は京都の都市環境としての緑地についての一連の研究で、近代京都の山辺が「公園」として位置

づけられて施された整備内容を明らかにした。

近代に発達した郊外の新たな景観に着目した研究は、矢ヶ崎¹⁵⁾、石田¹⁶⁾によるものが優れている。矢ヶ崎は、特に南禅寺近傍に著しかった琵琶湖疏水の水を用いた「数寄的な空間」について、数寄空間の展開の歴史の中に特徴的に位置づけた。特に風致行政が進む中で東山地域における別邸の建設が奨励されていたことを確認している。石田は、近代京都の郊外住宅地が新たな生活環境として作られていく形成過程において、人々が郊外に期待し開発した内容を詳細に示した。

また田中¹⁷⁾は、近代に導入された琵琶湖疏水をはじめ京都市内の水辺を、都市に必要な基盤施設として「水系基盤」とよび、これにより生み出されたアメニティは、重要なインフラストラクチャーの役割であることを論じており、本論における基盤の考え方の出発点になっている。

以上のように先人による多くの成果を基礎として、本論では、京都の山辺の領域に現れる景観の変容を、近代の都市化の文脈のなかで明らかにするものである。そのため、近世における山辺景観の実態と、近代におけるそれを詳細に調査して、明らかにすることを必要とした。近代京都論の中でも、本論は、都市化されていく山辺において、良質な景観的領域を形づくるに至った場所の、構造的な理解を目的とし、ヒューマンスケールの山辺の景観（1/500～1/2500）から、大スケールの景観的領域（1/10,000 程度）に至る関係性をとらえ、場所における文化的価値の創造を論じるものとして、独創的である。

本論は次のように展開する。

第1章（本章）は序章であり，本研究の背景と目的，研究の枠組みを提示している。

第2章では，京都における近代化，特に洛東における近代化の文脈を把握し，次に本論で取り扱う空間的な概念として，「複合景観域」について説明する．さらに，この複合景観域として，次章以降のケーススタディを行う対象地域を選定する。

第3章から第5章までは，選定した対象地域における近代化以降の景観変容を分析するケーススタディである．第3章では，平安京の北東に位置した吉田山と紫雲山で構成される「神楽岡地域」を対象にする．ここにおいては，近世までに作られた，現在の敷地割と道の構成の原形を，蒐集した絵図や史料からの分析から把握する．同時に前近代における場の利用のされ方を，文献史料などから明らかにする．そして，近代に作られていった新たな景観を，現地踏査，測量，ヒアリング調査などから把握し，変容の要点を整理する。

第4章では，中心市街地からやや離れた山並みに沿って郊外の奥地に位置した「浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域」を対象にする．第一に，絵図や名所図会，歴史的文献の分析により，前近代における景観域の構成を，その特性景であった山辺の社寺の景観特性を手がかりに把握する．続いて，近代この地域に建設された琵琶湖疏水分線により，新しく景観が形成された様子を調査し，実際の空間構成を，地形や平面構成などのハード的なアプローチと，文人の関わりなどのソフト的なアプローチで考察する．そして，京都市の都市計画以降の市街地形成の文脈の中で，創られた新たな複合景観域の構成を明らかにする。

第5章では，中心市街地に近接する山辺地域として「円山・真葛ヶ原・祇園社地域」を対象とする．まずは近世における場の利用を踏まえた景観を，絵図や名所図会，歴史的文献を手がかりとした分析により明らかにする．続いて近代以降，円山公園の敷地で行われた景観デザインを，現地踏査や行政資料などから分析し，その詳細を明らかにする。

第6章は結章であり，以上の研究の成果に基づき，近代以降の東山における山辺景観の変容をまとめ，比較することで，本論の結論となる領域概念のモデルを提示する。

以上，本研究の構成の概略図を図1-1（次頁）に示す。

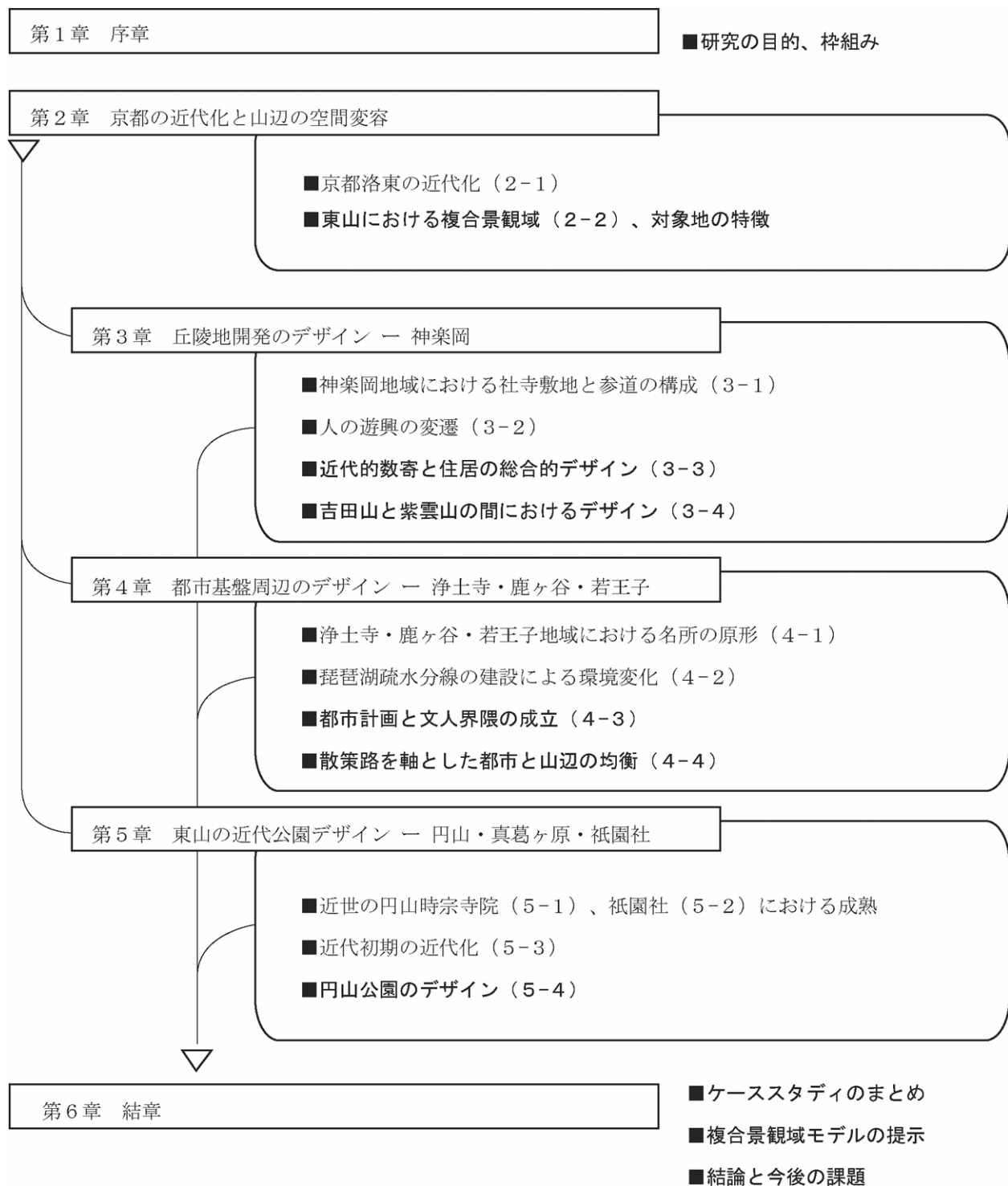


図 1-1 本論の構成

◇序論 参考文献

- 1) オギュスタン・ベルク『空間の日本文化』（ちくま学芸文庫，1994） p.126
- 2) 古橋信孝『平安京の都市生活と郊外』（吉川弘文館，1998.4） p.74
- 3) 梅原猛『美と宗教の発見』（筑摩書房，2002.10） pp.111-162
- 4) C・ジッテ『広場の造形』（鹿島出版会，1983）
- 5) G・カレン『都市の景観』（鹿島出版会，1975）
- 6) 伊藤ていじ『日本デザイン論』（鹿島出版会，1966）
- 7) K・リンチ『都市のイメージ』（岩波書店，1968）
- 8) C.アレグザンダー『パタン・ランゲージ』（鹿島出版会，1991.2）
- 9) 笹谷康之「地形の意味に関する研究」（東京工業大学博士論文，1990）
- 10) 樋口忠彦『景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間—』（技報堂出版，1975）
- 11) 山田圭二郎「地形文脈における敷地マネジメントに関する景観論的研究」（京都大学工学研究科博士論文，2002）
- 12) 荻谷勇雅「明治期の京都の風致景観行政に関する歴史的研究」（『土木史研究第11号』，1991.6） pp13-23
- 13) 土井勉「京都市の公園形成史—第二次大戦前まで—」（『土木史研究第11号』，1991.6） pp.167-174
- 14) 中嶋節子「近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置付けとその整備」（『日本建築学会計画系論文集第496号』，1997.5） pp.247-254
- 15) 矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」（『日本建築学会計画系論文集第507号』，1998.5） pp.213-219
- 16) 石田潤一郎「郊外の発見」（『京・まちづくり史』昭和堂，2003.7） pp.186-197
- 17) 田中尚人「水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究」（京都大学大学院工学研究科博士論文，2001.10）

第 2 章

京都の近代化と山辺の空間変容

2 - 1 京都の近代化

本論は、時間的な観点、つまり近代化の進行の段階を縦系に、場所の基盤的特殊性、つまり地形や風土を横系にして、近代における京都山辺の空間変容にみられる自然－人為間の均衡を、そしてそこに創造される場所の構造を探求するものである。ここでは、その縦系となる、京都の近代化の動きに関する基本的な事項を整理する。京都の近代化は、明治2年（1869）の東京遷都によって、精神的・経済的基盤が動揺した状態から始まった。

1 京都における近代化のプロセス

よく知られるように維新政府は、明治2年（1869）の版籍奉還、明治4年（1871）の廃藩置県と続き、政府が土地整理行政を円滑に行うための準備をいち早く執り行った。その一環として、社寺が支配してきた領地についても、この支配を解体して新政府の所管とするために、明治4年（1871）と明治8年（1875）の二度にわたる上知令が布告された。社寺は、一次上知令で「境内主城」（社殿や堂宇の敷地と祭典・法要の広場）と「付属域」（付近の山地や田畑や宅地や不毛地）以外を失い、続く二次上知令で境内付属域も失った¹⁾。それらの土地は官有となった。

着実に進められる中央政府の新政策とは裏腹に、京都における混乱は大きかった。元治元年（1864）の蛤御門の変により「南北三十町、東二十町」と広範囲に及ぶ町域が焦土と化し²⁾、復興する間もなく東京遷都が敢行されたのである。この状況から復興するために、京都府は一大事業を画策する。それは、兼ねてからの懸案であった琵琶湖から水を京都へ引き込む琵琶湖疏水の建設であり、その目的として、①製造機械（水車利用）、②運輸、③田畑の灌漑、④精米水車、⑤防火、⑥井泉、⑦衛生が挙げられたように、多岐に渡る発展の基盤とする目論みであった。

明治22年（1889）になって、京都市制がスタートし町村制が施行されると、琵琶湖疏水の完成や、第三高等中学校の設立などにより活気を取り戻し、京都市は近代都市としての道を本格的に歩み始めた。明治28年（1895）には平安遷都千百年紀年祭が大々的に開催され、増加する電力需要に対応して第二琵琶湖疏水と、それと併せて道路拡築・電気軌道、上水道の整備が、「三大事業」として着工された。日清・日露戦争後の特需景気を追い風にして明治45年（1912）にこれらの事業は竣工し、ここに京都の都市的発展のための基盤が整えられた³⁾。

さらに大正8年（1919）に都市計画法が制定されると、翌年には都市計画京都地方委員会が設立され、都市計画区域が議論された。大正11年（1922）に都市計画区域が決定、大正13年（1924）に用途区域が指定される。鴨東に宅地化が最も激しく起こるのは、この時期以降である。

このように、近代京都の都市化のプロセスには、簡略化して3つの段階があったと考えられる。1つ目は、東京遷都、版籍奉還、社寺上知令によって疲弊・衰退した京都が復興へ邁進する「復興期」、2つ目は、京都市政がはじまり、琵琶湖疏水の完成、第三高等中学校・京都帝国大学など重要な文教機関の設立、平安遷都千百年紀年祭と続く、都市基盤の

充実を背景に都市政策を展開した「活性期」、そして日清・日露戦争後の特需景気の中、都市計画法に基づき都市域を拡大させた「拡大期」と表現できる。

2 洛東の近代化

こうした京都の近代化の動きは、本研究で対象とする東山山辺を含む洛東においては、どのような変化として現れたのであろうか。上述の3つの段階毎に、その影響をまとめる。

1) 復興期の洛東

図2-1⁴⁾は参考に明治中期における東山の様子を示したものである。ここではまず、都市と山との距離に留意しておく。つまり、東山一帯の中で三条以南は比較的鴨川へ接近しており、特に八坂神社（祇園社）の辺りは、既に洛中から鴨川を越えて東へ展開した市街地と一体化している。他方、三条通以北では、山際が大きく後退している地形の特徴がよく把握できる。この地域において、市街地は鴨川を東に越えてはおらず、都市の拡大という側面では近世までと比べてもさほど著しい変化は見せていない事が分かる。すなわち、一帯は広大な農園地帯であった。

さて、上記復興期の京都では、近世には既に市街地と接するようになっていた三条以南の地域において、京都市復興の流れに強く影響されて、次々と新たな景観を生み出した。

特に、古くからこの地域を占有してきた八坂神社（近世における祇園社）、安養寺、長楽寺、双林寺などは、上知令によって多くの領域を手放すと、その一方で手放された土地が開発の適地とされた。これらの領域における再開発は上知令が施行されるやいなや急速に始まっている。明治5年（1872）の第一回京都博覧会の折に緩められた外人遊歩規程が、明治10年（1877）に撤廃されると⁵⁾、多くの外国人客が京都を訪れ、いち早くホテル（安養寺塔頭跡の也阿弥ホテル）が営業されたこの山辺を訪ねた。さらに同じく安養寺塔頭跡において、明治10年（1873）人工温泉が設けられ⁶⁾、周辺に温泉街が出現するなど、

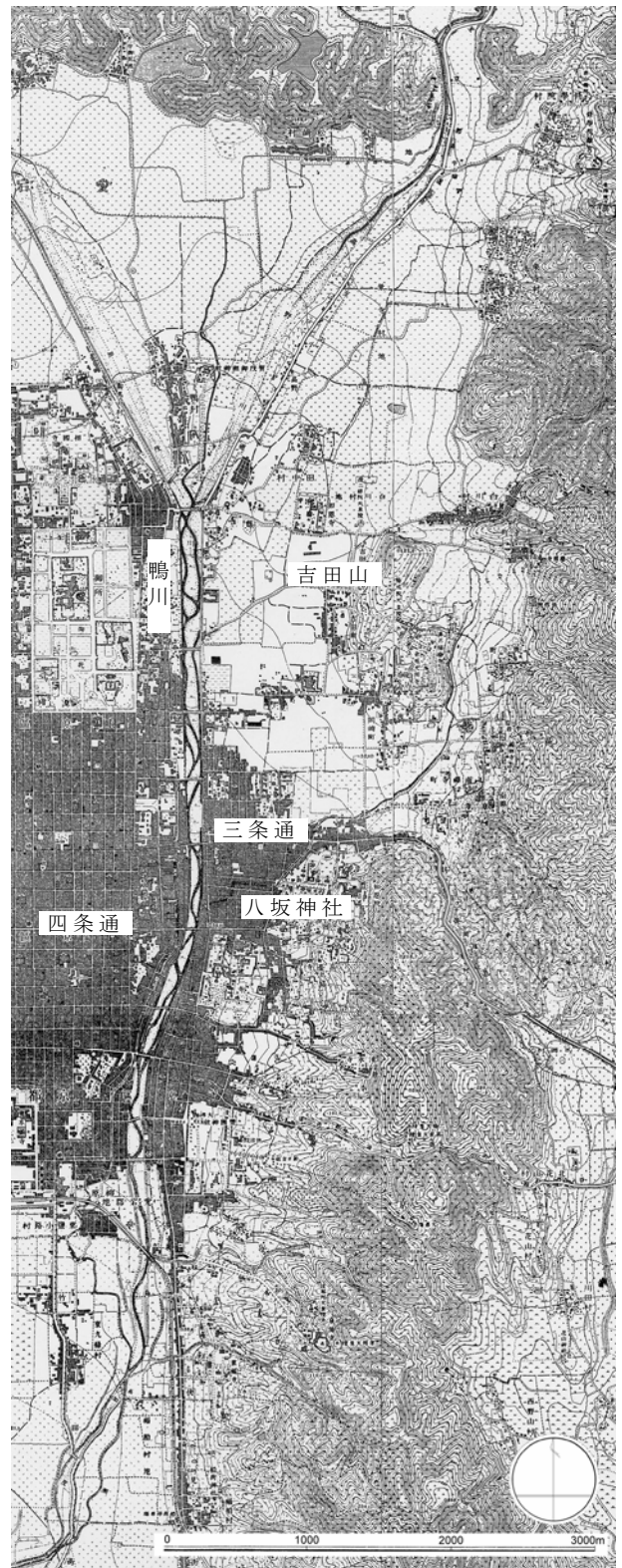


図2-1 復興期の洛東 明治22年（1889）

大衆的な遊興も同時に沸き上がった。

しかし、近代化政策の一環としての京都博覧会と密に結びつき、外国人客を受け入れ、同時に大衆的な空間となったこの境界の発達には、都市と自然に折り合いがつくような洗練された関係を一体的に計画するほどの余裕を与えなかった。この地域において、明治19年（1886）に、社寺領域であった土地とそれらを結ぶ道に円山公園が開設された後も、ホテル、料理屋、茶屋の経営や耕作、バラックによる居住など、変わらぬ営為活動が離散的に繰り広げられ、全体的に雑然とした景観を嘆く人々がいた。

京都復興策として最も期待された琵琶湖疏水も、東山の景観変容に一役買っている。疏水本線（鴨東運河）は岡崎地区へ導かれ、当時人口に膾炙した「鴨東開発論⁷⁾」に基づいて、近代を象徴的に飾る街区形成の基礎を築いた。また、蹴上から北へ廻る疏水分線のために南禅寺の谷に設けられた水路閣は、花崗岩と煉瓦で積み上げたローマの水路橋風の意匠で文化的環境に合わせようと意識的な美観への配慮がなされ、結果として竣工前から新しい名所となった⁸⁾。さらに北の疏水分線が通る予定になった浄土寺村と鹿ヶ谷村は、疏水開通に伴う都市的発展を見込まれ、京都市上京区へ編入された。当時はこの沿線に、水車動力の産業が期待されていた⁹⁾。

以上のように、「復興期」における洛東、特に東山周辺では、その都市域からの距離によって状況は大きく異なった。近代化の影響を受けてその景観を著しく変容させたのは、祇園の周辺にあたる領域であった。また近代京都待望のインフラストラクチャーであった琵琶湖疏水は、景観変容を起こす十分な可能性をもって鴨東地区に通された。

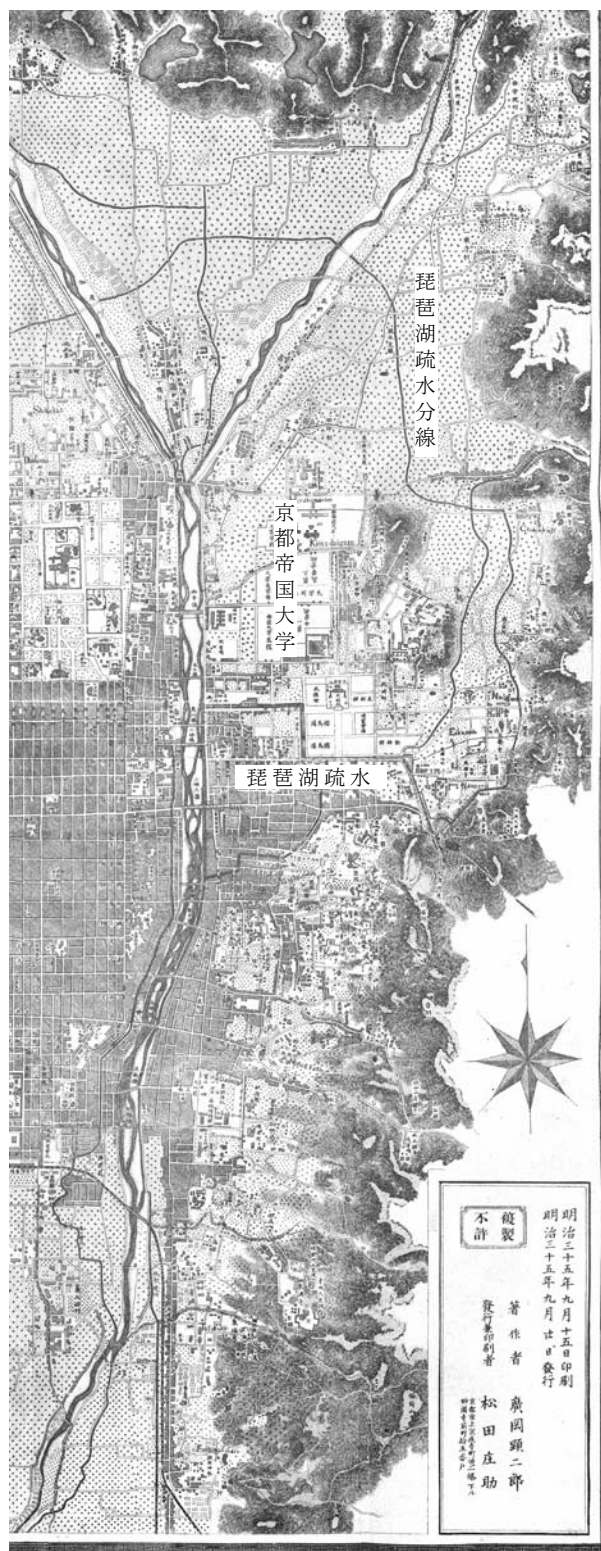


図 2-2 活性期の洛東 明治 33 年（1900）

2) 活性期の洛東

明治 23 年（1889）に琵琶湖疏水が完成し、平安遷都千百年紀年祭が催され、京都市が活力を取り戻す 30 年間程がこの時期である（図 2-2¹⁰⁾）。

琵琶湖疏水の竣工と同時に付随する重要な施設として、日本で最初の水力発電所が蹴上に建設された¹¹⁾。この水力発電により市内への電力供給が可能となり、水車動力による産業の必然性はなくなった。これは蹴上以北の疏水分線が通る地域において必ずしも工業地域としての発展を見込まなくてもよい結果となった。

明治33年(1900)に内貴甚三郎初代京都市長が提案した新しい都市構想は、「京都トシテ決シテ放棄スベカラザル事業」と位置づけて、「東方」の風致保存の必要性が説かれた¹²⁾。この風致保存の一つの方針が、実際に始まっていた、敷地内に庭園をもつ別荘群の開発であった。特に山県有朋別荘の無隣庵の造営、続く近江商人の塚本與太郎による別邸地の開発を契機とする政界・経済界の有力者による別邸造営が、南禅寺周辺の下河原を中心に大々的に行われたのはこの時期である¹³⁾。この条件となったのが、竣工したばかりの琵琶湖疏水であった。別邸の造園は、七代目小川治兵衛(植治)とその長男柏楊によって手がけられ、疏水から水を引き、庭園内の遣り水とする方法で統一されている。この結果、南禅寺邊下河原には、図2-3にみるような、琵琶湖疏水を基とする水のネットワークが成立した¹⁴⁾。

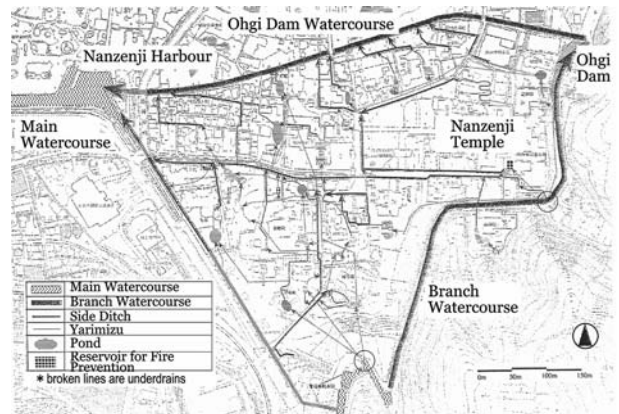


図2-3 南禅寺邊の庭園群と水系



図2-4 大正4年(1915)京都近傍図
吉田山以西が市街地化

鴨東北部では、明治22年(1889)に第三高等中学校が、明治30年(1897)に京都帝国大学がそれぞれ設立され、文教地区として変化を始めた。鴨川から吉田山までの間の著しい市街地化は、大正4年(1915)の地図(図2-4¹⁵⁾)で確認できる。しかし、その東側については、依然農村の風景が展開していた。

一方中心市街地に近接する祇園周辺の山辺では、引き続いてめまぐるしく人為が展開していた。円山公園周辺は、さながら京都において近代的広場をどう捉えるか試行錯誤が繰り返られる試験場のようであった。也阿弥ホテルが増築を繰り返して、山辺上部に大きな建築群を展開させたが、明治41年(1909)には過去の二度の火災によって営業不能となり閉業した。同じ時期に円山公園は、二度の拡張を経て、離散していた敷地を一つにまとめた。明治末年には同じ山辺に村井吉兵衛が洋館を建て、大正4年(1915)には円山公園の改良工事が竣工した。

めまぐるしく変容したこの時期の円山公園周辺の景観は、ますます進行する都市化の中で、山辺に場所を求めるための奮闘であったようにも読みとれる。結局公園敷地拡張後に、



図 2-5 現在の石塀小路

自然を基調とする造園が大々的に行われ、全域が統一された。

円山公園の南にあたる高台寺周辺においては、明治の初めに上地された領域が民間に払い下げられた後に藪地となり、製茶の販売で財をなした上村常次郎によって明治末期から大正初期にかけて借家として開発された。この下河原に造営された借家群は石塀小路と呼ばれ、石畳を敷き詰めた路地と木造住宅地の総合的开发だった（図 2-5）。同時期に、周辺の榎屋町内においても藤井家による同様の開発が行われた¹⁶⁾。余剰資産の保全運用¹⁷⁾として良質の開発に変えて残す動きがここにあった。

以上のように「活性期」の東山には、復興期に引き続いて祇園周辺の景観的な変異が起こり、さらに南禅寺周辺においては別邸群が現れ、京都市の風致政策ともよく適合して、競って庭園が造営された。しかし山並みが東へ窪む若王子以北の地域では、予測された産業も興らずに依然牧歌的な風景が残されていた。

3) 拡大期の洛東

大正 8 年（1919）に制定された都市計画法が、この時期の都市空間の変容に大きく影響していた。昭和 5 年（1930）には、鴨川沿岸、北山と併せて東山が、都市計画風致地区に初めて指定された。同時に京都市が、都市計画区域を決定し、事実上の市街地が急速に拡大した（図 2-6¹⁸⁾）。円山公園の地域は、先の

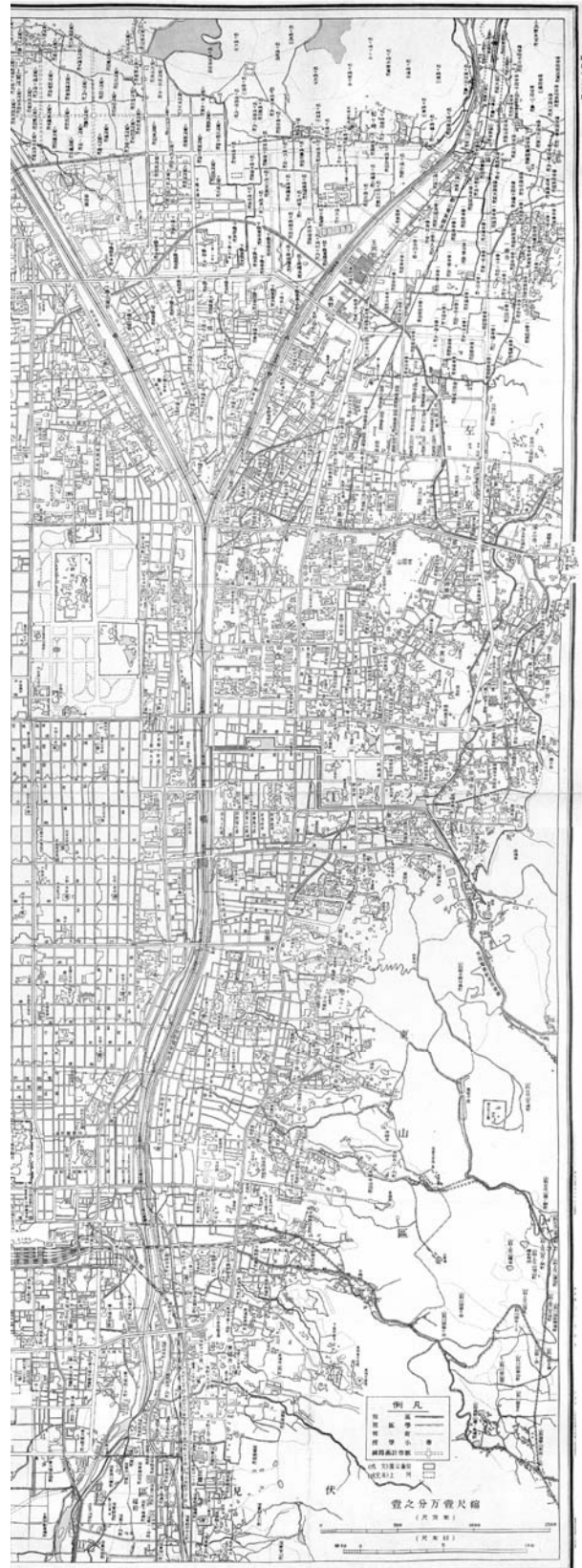


図 2-6 拡大期の洛東 昭和 15 年（1940）

改良工事によってほぼ山辺における風景的な特性を固定されていたが、これまで市街地から距離を保っていた吉田山以東の地域において、宅地開発が大々的に進み、周囲の山辺の風景も変容を免れなかった。

都市計画道路として今出川通が出来、市電が通され、さらに白川通が通されるというように、この時期に爆発的に都市圏が拡大した。この開発の波が、吉田山を越えて、さらに東部まで押し寄せたことを図2-7¹⁹⁾は示している。新たな利用適地とみられたこの地域の開発は、主に住宅地域として進められ、丘陵地における宅地開発も進められた。それは「活性期」に創立された京都帝国大学の学生や教官をはじめ、文人たちが周辺に住まった。

以上のように、近代化プロセスにおける「拡張期」は、山辺深くまで都市化が進行する段階であり、その中でかつての日常を離れた遊び、あるいは精神文化の場であった領域が、次第に失われていき、山辺に対して新しい見方、あるいは態度で開発に挑んだ時であった。



左が大正 11 年（1922）、右が昭和 10 年（1935）

図 2-7 短期間に増加する住宅地、都市計画道路の開通

2-2 近代東山の景観域

以上において、議論の縦糸となる近代の時間的段階を概観した。続いて、ここでは横糸となる場所の概念を構築し、これに基づいて議論の対象を選定する。

1 山辺における複合景観域

私達と環境との関係は、単に主体と容れ物という関係で成り立つのではなく、もっと深い結びつきで形成されているはずである。ある環境に住まう私達人同士の、あるいは環境そのものと私達の相互コミュニケーションの場となるのが、公共空間といわれる場である。カトリーヌ・グルーは、公共空間の概念について、「何人かの人々が集まるだけの空間ではなく、他者の前に自らの存在を示し、人々が互いに交際し、耳を傾け合う共有空間、つまり視覚と聴覚によってもたらされる空間²⁰⁾」であると述べている。民主制の礎となったアゴラや、それ以前に存在した自由で平等な人々の集会を基とする、この公共の概念は、日本においては西洋からもたらされた借り物の概念であるが、近世以前の日本においても「相互コミュニケーションの場」として、「公共的」と捉えられる空間は多く存在したものと考えられる。ただし、オギュスタン・ベルクが指摘するような、「離しながら結び、存在せずに存在し、肉体のないものを肉体化」し、さらに「簡略化、公式化」の還元作業を伴う²¹⁾ような日本人の感受性にとっては、独自の公共的な空間を想定する必要がある、その範囲は視覚や聴覚を越えて人々の認識の中に生起し、一連の文化的体験によって決定すると考えられる。かつての人々は、様々な小領域をつないで一つの大きなランドスケープを意識の中で形成することで、都市空間に組み込まれる豊かな空間の広がりをつまえていたのではないだろうか。

このような感受性において、公共空間性と体験される風景とは密接に関係している。日本において好まれる風景は、西洋における透視図の観点、ピクチャレスクな観点、つまり写真に収められる風景観では捉えきれず、見る者（主体）と見られるもの（客体）の間に完全な分離が行われずに、空間の広がりそのものが主体と一致する体験である。例えば、中村良夫が指摘するように、われわれの行動、または仮想の行動と結びついた、空間の操作的意味において、人と自然（環境）とが一体となる融即的感応の世界が想定される。たとえば、室町山水画である書斎画や、室町期から近世までとくに好まれた山水画の「臥遊」には、「多景同幅」に一画面の連続的な大地形描写が描かれて、その空間への仮想的な参加が組み込まれていた²²⁾。では、具体的に立ち現れる、上記の広がりをもつ公共的で景観的な領域とはどのようなものであろうか。

京都には長い歴史の中で環境と密に結びついた空間が多く存在する。とりわけ市街地からすぐ近くに郊外を提供する東山連峰の懷には、平安京の成立以来その郊外として次第に発達した数多くの社寺が並び収まっている。これらの敷地は概ねその空間的広がりをその境内だけに限らず、周囲に並ぶ他の境内や名所地と直接、あるいはそれらへ続く道を介してつながって大きな連続的公共空間ともいえる領域を形成していた。これらはある程度の連続性として確認できるものであり、大きくは平安京を囲む外部の一帯としてひとつながりに捉えられ、繰り返し『洛中洛外図』（次頁図2-8²³⁾）によって表現されている。より



図 2-8 洛中洛外図屏風 守護家本（『江戸時代図誌 京都』より）

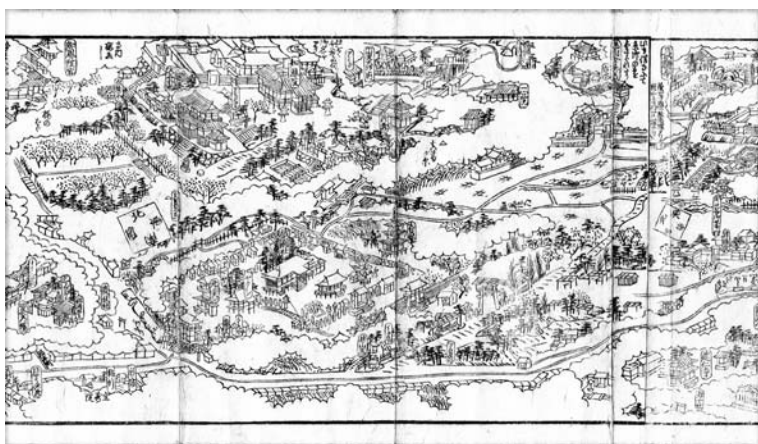


図 2-9 『都細見之図』，道が朱に着色されている



図 2-10 現代の観光ガイド本

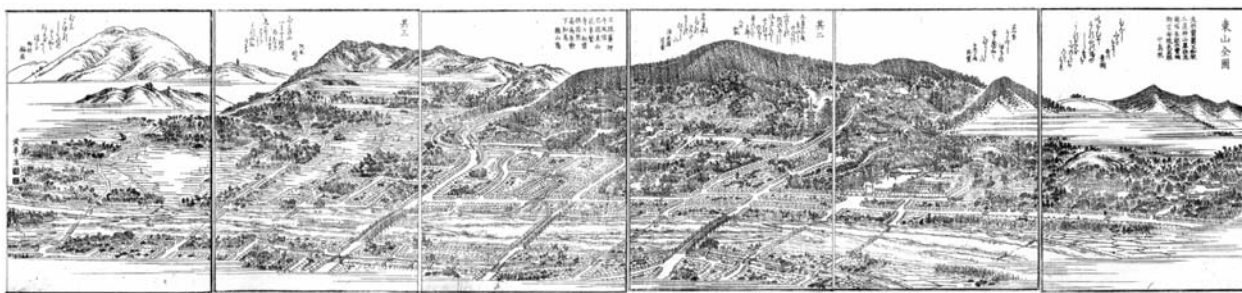


図 2-11 『花洛名勝図会』の東山全図其一，二，三

対象に迫るスケールでも，例えば『安永八年京都細見之図』（図 2-9²⁴⁾）のように，あるいは現代における観光ガイドブックの構成（図 2-10²⁵⁾）にも見られるように，領域が一連の行程を軸として捉えられてきた。

『花洛名勝図会』は，この両方の視点から描かれるものであり，細かな一つ一つの名所紹介の前に，京都東山を洛中側から概観する「東山全図其一」～「其三」（図 2-11²⁶⁾）で始まる．しかも，この「東山全図」は，中世の洛中洛外図に描かれた東山のような，特徴のある要素を描きそれらの間を雲形で繋ぐ手法とは異なり，東山の連なりを一つの絵図の中に全て表し，一つ一つの領域の位置関係が丁寧に描き入れられた．この構図は，文化 5 年（1808）に洛西からの視点で描かれた『花洛一覽図』（次頁図 2-12²⁷⁾）とほぼ一致して

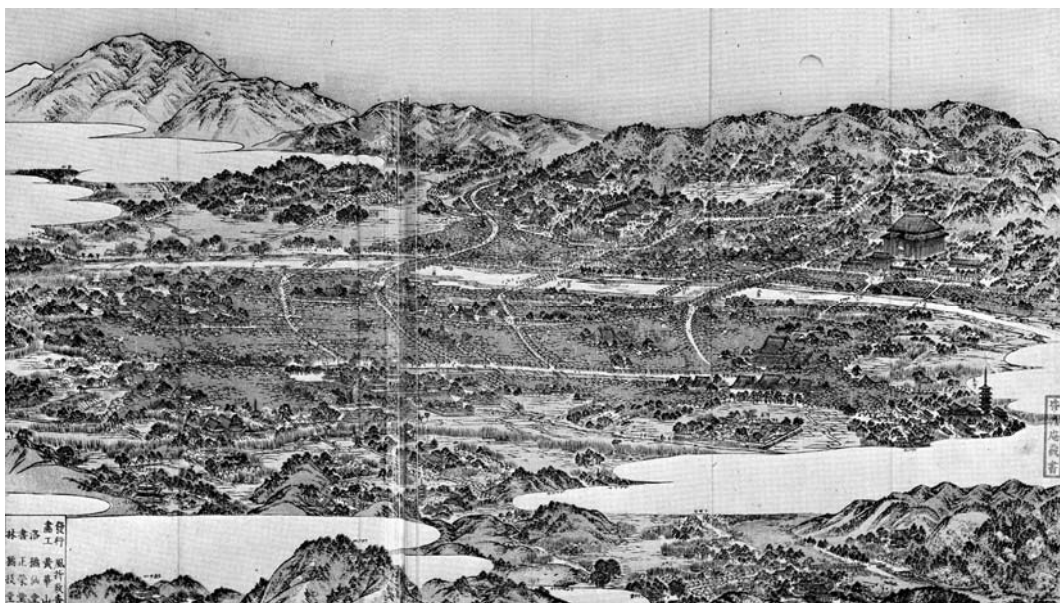


図 2-12 『花洛一覽図』に描かれる東山

おり、これは同時代の風景観であったことが分かる。この新しい風景の見方が提示された事は、さらに明確に各部のつながりが意識されるに至ったことを示している。ただし、人がその場の景観を捉える場合は、この『花洛名勝図会』で言えば「東山全図」よりも、その後の頁に続くいわゆる特性景²⁸⁾（これが名所案内図の醍醐味である）を体験するはずである。先に触れたように中世から繰り返し表現されてきた臥遊の山水画に始まり、『花洛名勝図会』のように山辺に並ぶ名所がそれらを結ぶ道と同じ重要度で描かれたことは、この空間認識が、少なくとも当時には衆知されていたことを示している。これは『花洛名勝図会』に至って特に顕著となり、例えば図 2-13 に示すように、連続性が一枚の絵図の中に留まらず、幾頁にも続く道のつながりが描かれ、このまとまりを表現している。

このように東山山辺の景観は、幾つかの領域をまとめて捉えた方が分かりやすく、的確に場所の特性を把握でき、ここに何らかの秩序を見出すことが期待できる。本論では、この何らかの構造を持った景観的まとまりの領域を、とりあえず「複合景観域」とよぶことにする。

しかし、このように近世後期に既に形成されていた一連の複合景観域は明らかに、近代以降大きく様相を変えた。これらの構造的な変容の実態を探ることこそ、本論のテーマであるが、この要因の一つは、明治 4 年 (1871) と 8 年 (1875) に発令された、社寺上知令によって、複合景観域の核を形成していた社寺領である領域が召し上げられ、その土地利用が分割的に行われたためであり、さらには、近代化のプロセスの中で、京都の市街地が急速に拡大されていったことの影響であったと思われる。

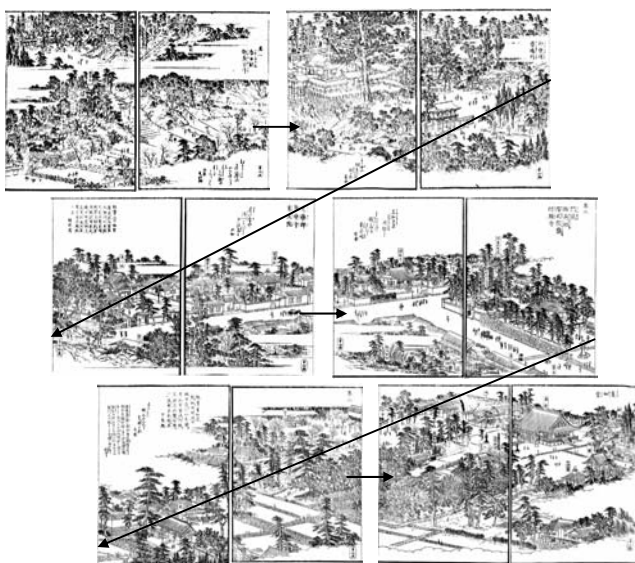


図 2-13 『花洛名勝図会』に見られる連続性

2 対象地の特徴

良くも悪くも、景観を変容させる近代の力とは、一体どのようなものであったのだろうか。景観を変化させるに十分な特徴的事項は、外力としての「上知令」と、内力としての「都市拡大」であった。ただし、いかに上知令が圧倒的な形式上の転換を図ったとしても、いかに新たな建設技術が前近代までに不可能だった構築を可能としても、その上に自然と人為の関係性を保つことはできたはずである。変容の直接的要因は上知令のような政策の大転換によって生じた土地用途の改変を迫られた事であるが、その根底における動機は、近代の人々が都市の領域を拡大する意志を持ち、何であれ自主的に周囲の自然を支配する近代的（西洋的）姿勢をとったということであろう。日本における他の都市で行われたのと同様に、京都においても「都市化」とは「西欧都市化」の意味合いが強かったが、結局は西洋的な論理に従って都市空間を構築する習慣を持てなかった為に、この大々的な試みの多くはヒューマンスケールに至ると徹底されず、それまで空間に培われてきた微妙な構成上のバランスが、崩壊するだけに終わったように見受けられる。

このような背景にあつて、それでも見込みのないかに見える戦いを挑み、遂に新たな調和を獲得した領域の例においては、何を以て敗退組との歴然の差を生み出したのか。

これを本論はデザインの問題として扱うのであるが、ひとつの仮設が根底にある。すなわち、新たな調和とは、自然と人為が一体となっており、それ故にその場所におけるリアリティが感じられる状態である。近代的な技術で開発に取り組むにしても、かつて歌に詠まれて愛着のあった名所のように、山水草木の息吹を感じる空間を創ることが出来たか否かによって、結果が調和をもたらすものになるどうかが決まると考える。そのような調和の美学は、景観の体験者の行為に関わり、どのように享受されるのか、どのような行動とともに体験されるのかを問題とする。調和は愉しまれるものであり、それは人の愉しみの行為、遊び、あるいは生き生きとした生活に関わるものでもある。本論は、このような視点からそのデザインを読み解こうとするものである。

そのため、近世に既に名所として知られ、特にそこにおいて独自の愉しみ方、遊びの様式が見出されており、そういった場所が近代において変容し、新たな性質を帯びるようになった所を対象としたい。過去に既にあった原形と近代の変容の比較、そしてその状況の場所による比較が、本論の問いに答える手がかりになるに違いない。

そこで場所選定の為に、『都名所図会』に絵図が記載されているものを出発点とし、それが近代以降にどのように変容したのかを、昭和の同趣旨、すなわち同時代の名所を紹介する目的で編纂されたと考えられる『昭和京都名所図会』を参考にして次頁の表 2-1 にまとめる。概観すると、特に劇的な空間変容を果たした場所が幾つか浮かび上がる。それらは、近代化以降に何らかの営為、あるいは計画によって新たな要素で特徴づけられた景観へ変容し、環境との関係を結び直された複合景観域であるようだ。これらを含む複合景観域で、変化の大きかったものを図 2-14²⁹⁾ (次頁) に表し、南から順に A から G まで記号をつけた。さらに北には比叡山の山頂領域が含まれるべきであるが、市街地から明らかに遠く離れているため、除外しても議論に差し支えはない。

これらの中から、領域におけるデザイン上の試行錯誤、すなわち混沌からの調和、あるいは調和による空間の質の転換を明らかにするための対象領域を選択する。この志向に基

表 2-1 都名所図会と昭和京都名所図会の比較にみる名所の景観変化

都名所図会	昭和京都名所図会	変化の内容
三ツ峰稲荷	◇	
東福寺	○	市松模様の庭
泉湧寺	◇	
三十三間堂	◇	
大佛殿	●	豊国神社、博物館
少林寺	◇	
清閑寺	○	バイパス
清水寺	◇	
西大谷	◇	
霊山	▼	塔頭の衰退
高台寺	●	霊山観音
八坂法観寺	◇	
下河原	●	石塀小路
祇園社	●	八坂神社、円山公園
双林寺	●	音楽堂、大雲院
東大谷	◇	
長楽寺	○	客殿建築
安養寺	●	円山公園
知恩院	◇	
粟田口	●	インクライン
南禅寺	●	水路閣、庭園群
永観堂	◇	
若王子	●	哲学の道、画神堂
光雲寺	●	庭園、疏水分線
安楽寺	◇	
法然院	◇	
黒谷	◇	
真如堂	◇	
吉田社	●	宗忠神社、京都大学
銀閣寺	●	白沙村荘、哲学の道
白川の滝	▼	白糸の滝(人工)
一乗寺詩仙堂、八大天王	◇	
赤山社、玉山社、御蔭社	◇	
八瀬	●	八瀬遊園、京福電鉄
大原	◇	
古知谷	◇	
寂光院	◇	
江文社	◇	
比叡山	●	比叡山ドライブウェイ、気象観測所、レクリエーションセンター

構成上 ●:大いに変化有 ○:多少変化有 ◇:概ね変化なし ▼:衰退

づき、以下に大雑把ではあるが、南から順を追って検討する。

領域 A は現在の国立博物館のある領域である。近世には大仏殿を含む広方寺の境内であった。博物館の建築は、片山東熊によって設計された洋館であり、いかにも近代の文明開化を物語るに足る適例ではあるが、現在は山へ連続的に続く領域とは見做し難くなってしまっているため、山辺の地形を主に議論する本論では対象外とする。

領域 B は、都心との近接性により、『都名所図会』においても、要素の集中する領域で、しかもそれぞれの空間が、近代において大きく変容している。B の領域の中では、円山公園の占める部分は圧倒的であり、その上近代にはじめて登場した「公園」の概念を巡って、様々に議論され、試行錯誤された結果が見え隠れしている。本論では、このように顕著な

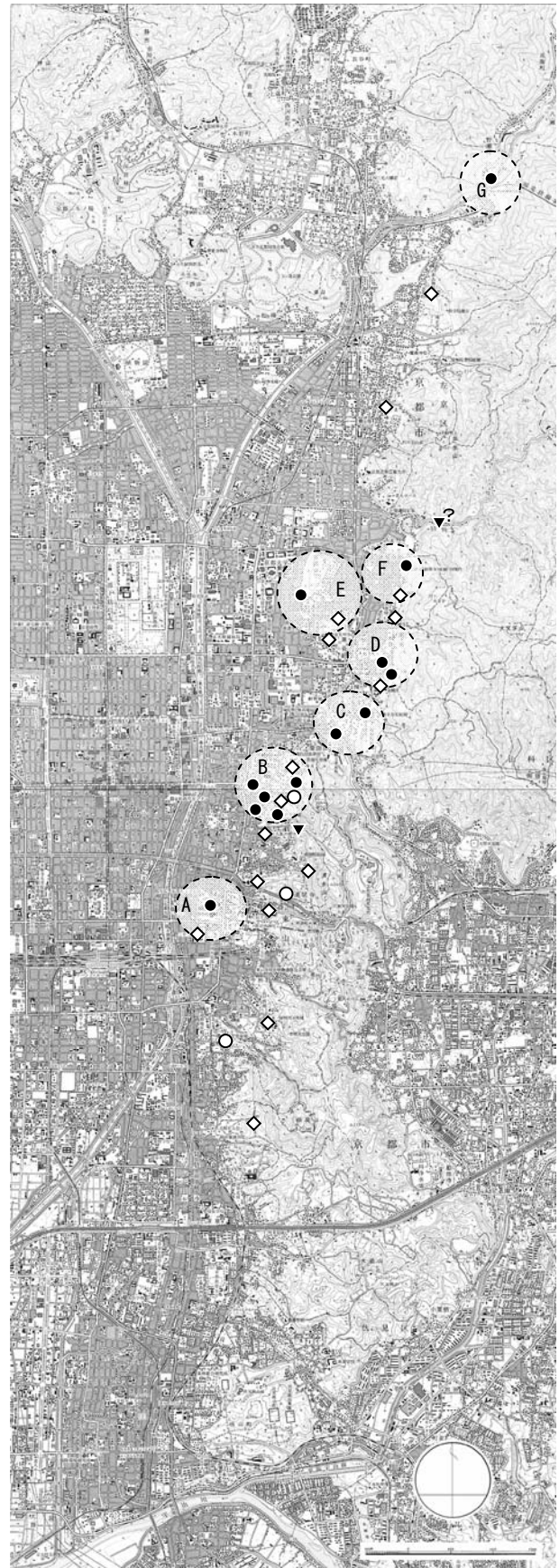


図 2-14 『都名所図会』が紹介するポイントと景観変化の著しい領域

変容の例である円山公園の領域に注目する。

領域Cは、南禅寺周辺の変容を示している。先に示したように、琵琶湖疏水の建設にともなう変化（インクライン、水路閣など）と、さらに発展して遣り水庭園を持つ別荘の建設が集中する。この変容は非常に興味深いものであるが、既にこの領域の敷地変容の概要は矢ヶ崎³⁰⁾により明らかにされている。これによれば、この領域の近代における開発は、本論の論旨に照らしても、近代の技術を導入して場所のリアリティを創造した、一つの典型的な成功例と見做す事ができる。地形と空間の構成に着目してさらなる分析も可能であり、今後追ってケーススタディを行う必要はあると考えられるが、本論では他の領域におけるデザイン上の試行錯誤を、相互に比較して際立たせるために、この領域はケーススタディの対象とはしない。

領域DとFは、ともに琵琶湖疏水分線の建設にともなう変化である。『都名所図会』では、この二つの領域は分けられ、間に吉田山周辺（領域E）を挟んでいるが、現在では「哲学の道」と呼ばれる散策路によって一つの領域と見做される場合が多い。この事実に見られる領域（複合景観域）の変質は興味深いものであり、本論で詳しく言及する。

領域Eは、吉田山周辺の変容を示している。この領域の西側における市街地化は、吉田地区に広範囲にわたって大学施設が建設されたことにより加速された。この時大学施設の敷地は、近世末に吉田山のすぐ西のふもとに造営された尾張藩屋敷の敷地跡を利用しており³¹⁾、周辺に成長する市街地と山との間の領域を大きく占めるものだった。つまり、自然領域と町とのつながりを形成するために、非常に重要な位置であったと考えられる。しかし、尾張藩屋敷に応じて吉田神社の参道が作られる³²⁾など、西側地域に対する変容は見せたものの、その後吉田山と連続する顕著な領域形成は見られない。展開する領域の観点から本論で注目すべきは、その後に東側の山辺の開発が盛んに行われたことである。『昭和京都名所図会』では触れられていないが、近代にはじめて吉田山の東側が居住地として開発された。

領域Gは、八瀬の変容をしめしている。近代に円山公園に続く行楽地を郊外に開発する意図で、八瀬という山奥まで気軽に出向く事を可能にする電気軌道と共に遊園地が建設された。その後、多くの市民の遊び場となったが、本論の議論と離れて、観光、行楽といったテーマで扱うべき対象である。

以上の領域の中から本論のケーススタディの対象とすべき領域は、自ずから導き出される。すなわち、次に挙げる3つの複合景観域である。本論は、これら3つのケーススタディから、山辺の空間デザインが為してきた努力の解を見出すものである。すなわち、背景の自然と都市の折り合いの付け方のデザイン、そしてどのようにしてそれが可能であったのかを明らかにする。

以下に、各ケーススタディにおける分析の視点と、比較によって照らされる事項を明確にしながら、領域の概要を紹介する。

1) 吉田山、黒谷の地域

東山連峰の中でも、独立峰である二山（丘陵）で構成される地域である。吉田神社、真如堂（真正極楽寺）、黒谷（金戒光明寺）、四軒寺（迎称寺、大興寺、極楽寺、東北院）、善正寺、宗忠神社、公安院など多くの社寺が集積している地域である。近代には、隣接する

吉田地区の文教地区化とともに、都市化の渦中に巻き込まれた。注目すべきは、この中で、それまでは野遊びの場として知られた山辺の地を利用して、幾つかの芸術的な風景が創造された事である。この特異な開発に着目し、山辺の丘陵地形をどのように活かし、そこにおける街と山(自然)の中間に当たる重要な部分を自覚的にデザインしたのかを考察する。ここでは、地形の特殊性を、場所形成の解を導く手だてとしている事が予想される。

2) 浄土寺、鹿ヶ谷・若王子の地域

東山地域の中でも洛中から距離を置く山辺に、点々と社寺の並ぶ地域であり、何よりも近代以降は「哲学の道」の周辺として知られている。本論では、慈照寺、八神社、法然院、安楽寺、霊鑑寺、大豊神社、若王子神社を含む領域を一つの複合景観領域とし、永観堂から南禅寺に至る領域とは分けた。この地域は近代に挿入された琵琶湖疏水分線、そして宅地開発によって大きく景観を変貌させた。その地域開発は、先に概観したように計画され、非常に急速に行われた。都市計画が大枠を規定したことは、他の二例よりも明確であるが、大雑把な計画の中で、どのように住居や、界隈を形成していくのかは、新しく住まう住人に委ねられていた。ここでは、地形による分析に加えて、地域形成の視点で臨む事が適していると思われる。

3) 円山、真葛ヶ原、祇園社の地域

現在の円山公園の敷地となっている地域である。近世には安養寺、長楽寺、双林寺の3つの時衆寺院と祇園社の領域、そしてこれらに囲まれた真葛ヶ原と呼ばれた空地で構成されていた。この領域は全体として街から山へ至る大きな山辺を形成しており、すぐ傍の街では、道が拡張され市電が走り、めまぐるしく都市化が進行する事に、甚大な影響を被った。円山公園は明治19年(1886)に成立するが、拡張後に現在の敷地を獲得したのは明治42年(1909)の事である。この間の公園における景観変容は著しい。春は花見客、秋は紅葉狩りの客で賑わうように、四季の愉しみを備え、自然との間合いにおいて近世から拾い上げ継承された遺産を持ちながら、さらに近代的な造園により導き出された、場所のデザインに対する一つの解はどのようなものであったのかに着目する。

◇第2章 参考文献

- 1) 『京都の歴史 第7巻』(京都市, 1974.4) pp.524-532
- 2) 同書 pp.182
- 3) 田中尚人「水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究」(京都大学大学院工学研究科博士論文, 2001.10) p.108
- 4) 「地形図 京都・伏見・大津・醍醐村」(大日本帝國陸地測量部, 京都府立総合資料館蔵, 1891.10)
- 5) 『京都の歴史 第8巻』(京都市, 1975.3) p.276
- 6) 『京都市の地名』(平凡社, 1979.9) p.128
- 7) 小林丈宏『明治維新と京都 公家社会の解体』(臨川書店, 2000.4) pp.170-173
- 8) 『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』(京都市水道局, 1990.4) p.199
- 9) 前掲『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』 p.25
- 10) 「京都市實地測量地図」(『慶長昭和京都地図集成』大塚隆, 柏書房, 1994.6 19A-B)
- 11) 前掲『琵琶湖水の100年』 pp.283-288
- 12) 矢ヶ崎善太郎「南禅寺下河原／京都 近代の京都に花開いた庭園文化と数寄の空間」(『近代日本の郊外住宅地』, 鹿島出版会, 2000.3) pp.261-276
- 13) 同上
- 14) 山田圭二郎ら「疏水の遣水的利用に関する研究」(『環境システム研究—全文審査部門論文— Vol.27』, 1999.10, pp.255-265)
- 15) 『京都近傍図』(陸地測量部, 京都大学附属図書館蔵, 1925.10)
- 16) 『石堀小路町並み調査報告』(京都市計画局, 1994) pp.24-26
- 17) 石田潤一郎「北白川・下鴨／京都 京都の近代が求めた居住空間」(『近代京都の郊外住宅地』, 鹿島出版会, 2000.3) p.253
- 18) 「学区界町名入り京都市街図」(前掲『慶長昭和京都地図集成』 22A-B)
- 19) 下絵は, 1922年と1935年の「京都3千分の1地図」(都市計画京都地方委員会)
- 20) カトリーヌ・グルー『都市空間の芸術 パブリックアートの現在』(鹿島出版会, 1997.10) p.13
- 21) オギュスタン・ベルク『空間の日本文化』(ちくま学芸文庫, 1994.7) p.85
- 22) 中村良夫『風景学入門』(中公新書, 1982.5) p.92-100
- 23) 林屋辰三郎ら『江戸時代図誌 京都1』(筑摩書房, 1975.11) pp.78-79
- 24) 『安永八年京都細見之図』(京都大学総合図書館蔵, 1779)
- 25) 『一度は歩いてみたい京都の散歩道 2004年版』(K&Bパブリッシャーズ, 2003.5) p.75
- 26) 晴翁木村明啓『花洛名勝図会』(須原屋茂兵衛, 1862.9) 東山一ノ五-七
- 27) 矢守一彦・大塚隆『日本の古地図④京都』(凸版印刷株式会社, 1976.11) 裏表紙
- 28) 中村良夫『風景学・実践編』(中公新書, 2001.5) p.24
- 29) 下絵は, 1/25,000地形図「京都東北部」と「東南部」(国土地理院, 2000.3と1998.8)
- 30) 矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」(『日本建築学会計画系論文集第507号』, 1998.5) pp.213-219 他
- 31) 高橋康夫「京都大学キャンパスと建築の百年」(『京都大学百年史 総説編』京都大学後援会, 1998.6) p.797
- 32) 同上

第 3 章

丘陵地開発のデザイン — 神楽岡

本章以下の3つの章では、前章に基づくケーススタディを行う。まず本章で対象地とする神楽岡領域（吉田山・紫雲山）は、どちらも東山連峰の一つに数えられるが、現在は市街地に囲まれて孤立する小高い二つの丘陵地である。ここには吉田神社、真如堂（真正極楽寺）、黒谷（金戒光明寺）を核とする宗教文化的な領域が発達してきた。近代に入ると山麓部分が住宅地化される一方で、丘陵上の一部が数寄の空間として開発された。特に吉田山では景観に大きな変化が起こり、その結果現在では大部分が都市公園になっている他、茶会や展覧会など様々な文化的活動の行われる領域が成立している。これらの文化的領域の発展は、丘陵地形の景観条件、つまり起伏に富んでいる事や自然が豊かである事を活かし、極めて特異な空間的構成を築き上げた事に起因していると考えられる。

そこで本研究は、このような吉田山・紫雲山で構成される領域を対象にして、近代以降、景観条件に依拠して新たに造営されたランドスケープの創意工夫と、それが利用者のどのような経験へ帰着しているのかを明らかにすることを目的とする。

従って、本章は以下の手順（図3-1）で議論を進める。すなわち、地形を利用し、あるいは操作して創られた敷地と視点場の関係、そしてそこからの視界を分析するし、志向された利用者の経験と、変化した環境の認識が議論の中心となる。

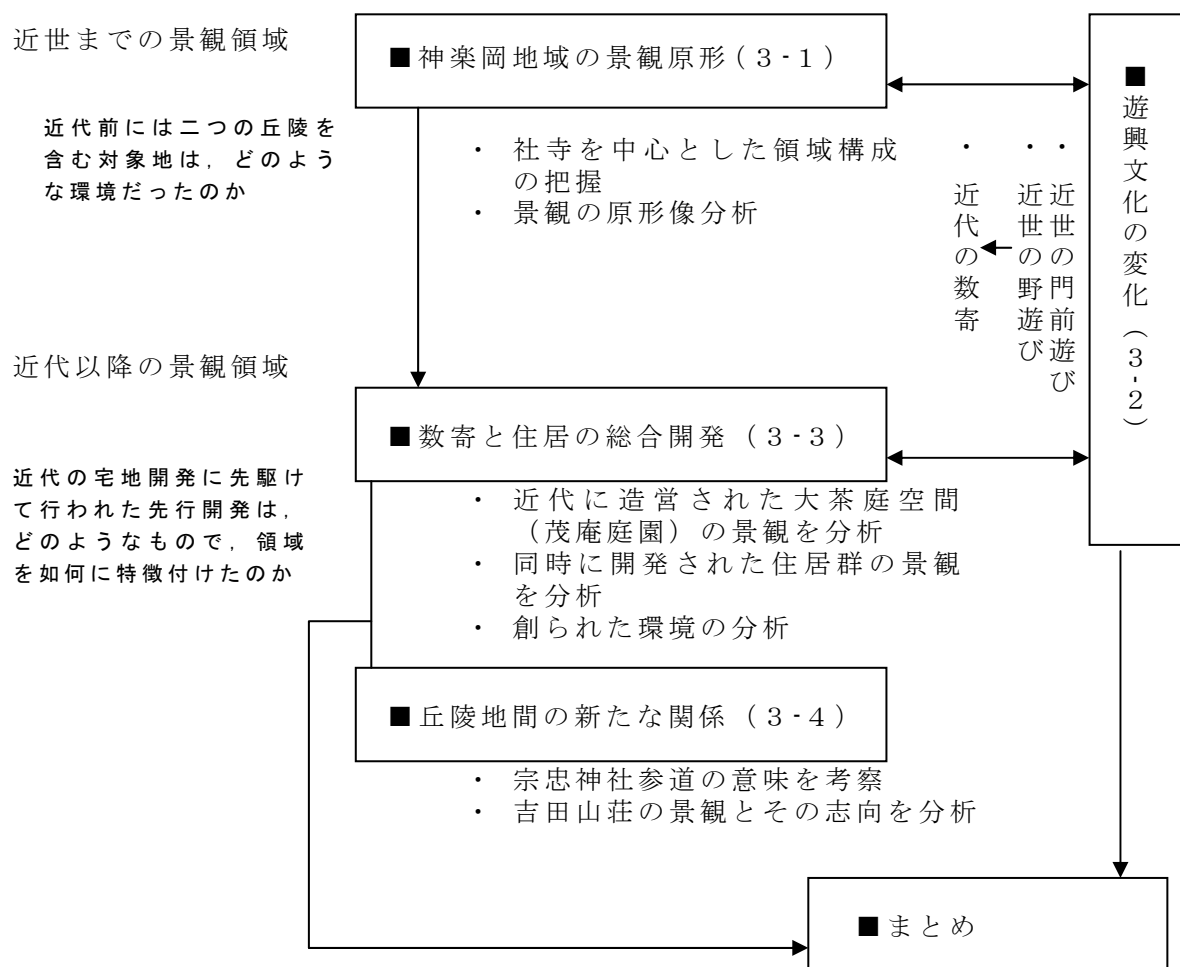


図3-1 本章における議論の流れ

3-1 神楽岡地域における敷地と参道の構成

神楽岡地域を構成する吉田山と紫雲山には、どちらも平安期以前まで遡る歴史があり、歴史とともに空間的な変遷を遂げてきた。また現在においても、この場所が都市の中に存在する孤立丘陵地であるという地理的条件より、周辺との関わりにおける位置付けも独特である。本章は、これらの場所的背景である敷地と参道の構成を把握することを目的とし、以下の節における地域内のデザイン分析と考察の礎とする。

1 神楽岡（吉田山・紫雲山）の地理と地形

京都東山の一連の山並みから平安京へ向かって一步手前に独立した一対の丘陵地が、対象地の吉田山と紫雲山である（図3-2）。これらは西隣に京都大学、南に岡崎公園、北に北山と、比叡山、瓜生山が重なり、比叡山から南へ連なる東山に沿って東に大文字を望む位置にある。とりわけ東山の麓には、銀閣寺や法然院などの名所や琵琶湖疏水分線に沿って現在は観光名所となっている「哲学の道」を軸とした界限を有する。これらの地域の中にあって、現在の吉田山・紫雲山のイメージも、これらの地域の持つ文化的空気を持ち、この辺りは「京都人のよき散策路」として知られている¹⁾。

「神楽岡」と呼ばれ、平安京の北東の郊外に位置するこの丘陵地は、東山山の手の「野」の地形から突出した特異な孤立丘であり、また「神奈備山²⁾」的な地形・地理的条件にあると解釈される。とりわけ古代においては、葬送の地として選ばれ、あるいは数々の社寺領域が占地されてきた。

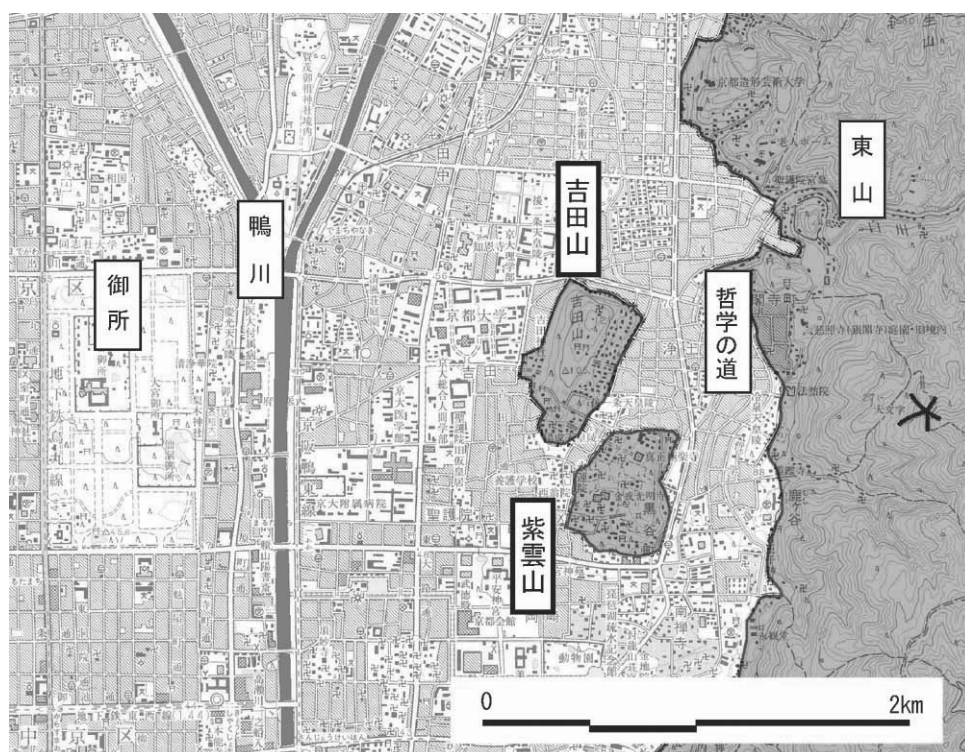


図3-2 吉田山周辺

両丘陵地において、近代に到るまでの間は、洛中に面する西側あるいは南側の斜面が主に利用されており、この方向にだけ意味を有したものである。図3-3にこの地域の地形を等高線で示すが、吉田山の西斜面は東側に比べて極めて急勾配であり、逆に紫雲山の西斜面はその東側に比べて極めて緩勾配である。紫雲山の南側にも急勾配が現れる地形である。

ここに方位を考慮すると、同じ急勾配利用であっても、西向きの参道は南向きの参道に比べて陰の深い時間帯が大きいという特徴が挙げられる。こういった地形や風土的特徴が社寺そのものの演出へ大きく関与していると考えられる。

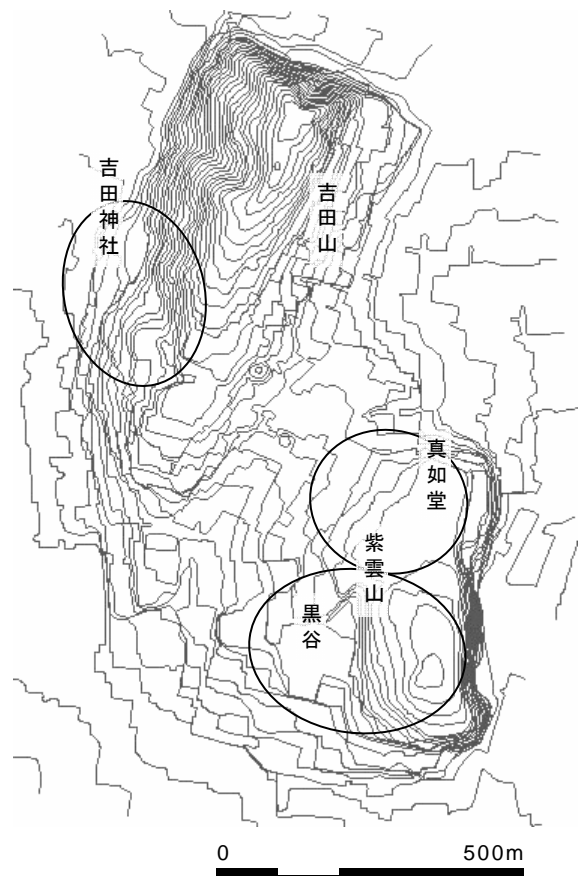


図3-3 吉田山と紫雲山の地形
(筆者作成、等高線は2m間隔)

2 主要社寺の沿革

ここでは、神楽岡領域に関係する主要社寺にまつわる縁起を紹介する。主に、『京都市の地名³⁾』、『寺院神社大事典 京都・山城⁴⁾』、あるいは『京都の歴史⁵⁾』を参考にした。これらの社寺に関する伝承によって、およそその社寺の性格は把握することができるものとする。

1) 吉田神社

社伝には貞観年中(856-877)の勧請とされるが、永延元年(987)に藤原山陰が勧請したとする説(『伊呂波字類抄』)もあり、また藤原山陰が氏神として祀っていたが、永延元年11月より官祭がはじめられるようになった(『日本書紀』986)ともいわれる⁷⁾。藤原氏の氏神としての性格をもち、また鎌倉時代には武家の崇敬も集めた。応仁の乱の戦禍を避けて数度場所を移ったが、文明年中(1469-87)に現在の社地へ移されたとされる⁸⁾。室町期に吉田神道が興り、斎場所が設けられると、宗教的に強大な地位を獲得した⁹⁾。これ以後吉田信仰は一般に広まり、斎場所は神社界に封建的主従関係のような体制を作り上げる拠点となった¹⁰⁾。江戸時代には朱印地五九〇石を受け(『京都御役所向大概覚書』)ており、八百万神を集めた「八角建」の大元宮(『京大絵図』1696)が庶民の信仰を集めた¹¹⁾。近代には社領を縮小し、官幣中社となった。

2) 真如堂（真正極楽寺）

天台宗で鈴声山と号する。永観2年（984）、比叡山の戒算が一条天皇の母東三条女院（藤原詮子）の御願により、もと延暦寺常行堂に安置されていた阿弥陀如来像を神楽岡の東にあった女院の離宮に移し、正暦3年（992）一字の堂を営んだのが起こりといわれる（『真如堂縁起』）。同5年（994）一条天皇は母後の離宮を寄付して勅願所とし、往時は堂塔伽藍巍々として、壮麗をきわめたが、応仁の乱で荒廃し、浄土宗へ転宗して幾度か寺地を変えた後、元禄6年（1693）京極今出川から旧地の西南にあたる現在の場所へ再建されて（『続史愚抄』）、天台宗へ改宗した¹¹⁾。このとき四軒寺と呼ばれる迎称寺・大興寺・極楽寺・東北院の諸寺がともに移り、真如堂の北西に収まっている。

3) 黒谷（金戒光明寺）

黒谷の地はもと栗原岡といい、叡山の社領で白川禅房の旧地と伝えられる。法然は師の叡空よりこの禅房を譲られて、1175年（承安5）に叡山西塔黒谷よりこの地にうつり、念仏道場としたのが寺の草創であるとされ、比叡山黒谷に対し新黒谷とよばれた（『東北歴覧之記』）¹³⁾。法然の没後、五世恵尋の代に至って初めて仏殿・御影堂を建立し紫雲山光明寺と称し、ついで八世運空の時、後公厳天皇に円頓戒を授けて、金戒の二字を賜り、金戒光明寺とよぶに至った（『寺伝』）¹⁴⁾。応仁の乱に罹災し、さらにその後の数回の火災によって堂舎を焼失したが、その都度公武の庇護によって再建されて現在の所に建ち続けているという。

4) その他

慶長5年（1600）に、豊臣秀次の母である瑞竜院日秀尼が自刃した秀次を弔うために嵯峨二尊院に創建した善正寺が、日鋭上人を請じて開山とし、現在の地に移された。寛永元年（1624）には、日蓮宗の学室を設立し、山城国六壇林の一つとしたことから、多くの学僧が集まり、宗風は大いに興った。花時に来山する人々のために数日間法談を行い、「さくら談義」としてもてはやされたという¹⁵⁾。

さらに文久2年（1862）には幕末の新興民衆宗教黒住教の教祖黒住宗忠の門人赤木忠春が宗忠を南に天照大神を北に二社並べて祀った宗忠神社を吉田山南丘陵上に創建した。慶応2年（1866）には孝明天皇の勅願所となっている¹⁶⁾

以上、社寺の沿革を略記した。起源が古代であっても、それぞれ時代とともに変遷を重ねてきた事が分かる。本論では、近代に入る前の典型として、近世末までに変遷を重ねた結果至った形と、そこから近代以降に起こった変容に着目する。

3 社寺領域内の参道

1) 吉田神社

以上の沿革を概観すると、現在の吉田神社境内構成の骨格が形作られたのは、斎場所が現在の地にできた室町期から江戸期であることが分かる。明治42-45年(1909-1912)の大修理¹⁷⁾の際に大元宮周辺の堀、門、石垣などがなくなり縮小化したものの、図3-4¹⁸⁾に見られる近世における境内敷地構成は現状と概ね一致する。

これらの社は吉田山の南西部にすべて密集している。密集してはいるが、ただ並んでいくというわけではなく、立体的に多層の構成をなしている。すなわち、本宮の春日社へ至る表参道と斎場所大元宮へ至る南参道の二つの主要な参道があり、表参道から今宮社を含む一番低い平場、本宮を含むやや高い平場、大元宮を含む一番高い平場の主要な3つの平場が石段やスロープによって接続されている(図3-5)。3つの平場の配置は、山の上方へ直線的な配置ではなく、横へそれる折線的な配置である。このような配置を選択することで、比較的小さな丘陵地である吉田山の山頂付近まで境内を広げて、稜線上の開明性を神社に持ち込むことを免れているといえる。つまり、主要な敷地全てにおいて、さらに高いところから覆い被せられるような感覚を獲得している。

春日社、大元宮はともに正面を南側とし、鳥居あるいは門で結界を重ねる。この主要な敷地から派生して幾つかの摂社、末社が敷地を構えている構造になっている。

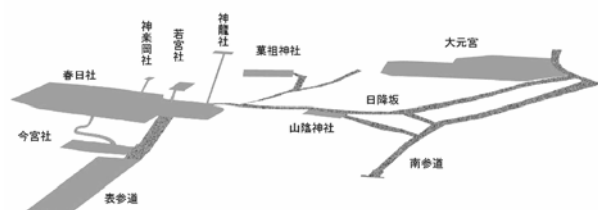


図3-5 吉田神社の敷地構成模式図
(筆者作成)

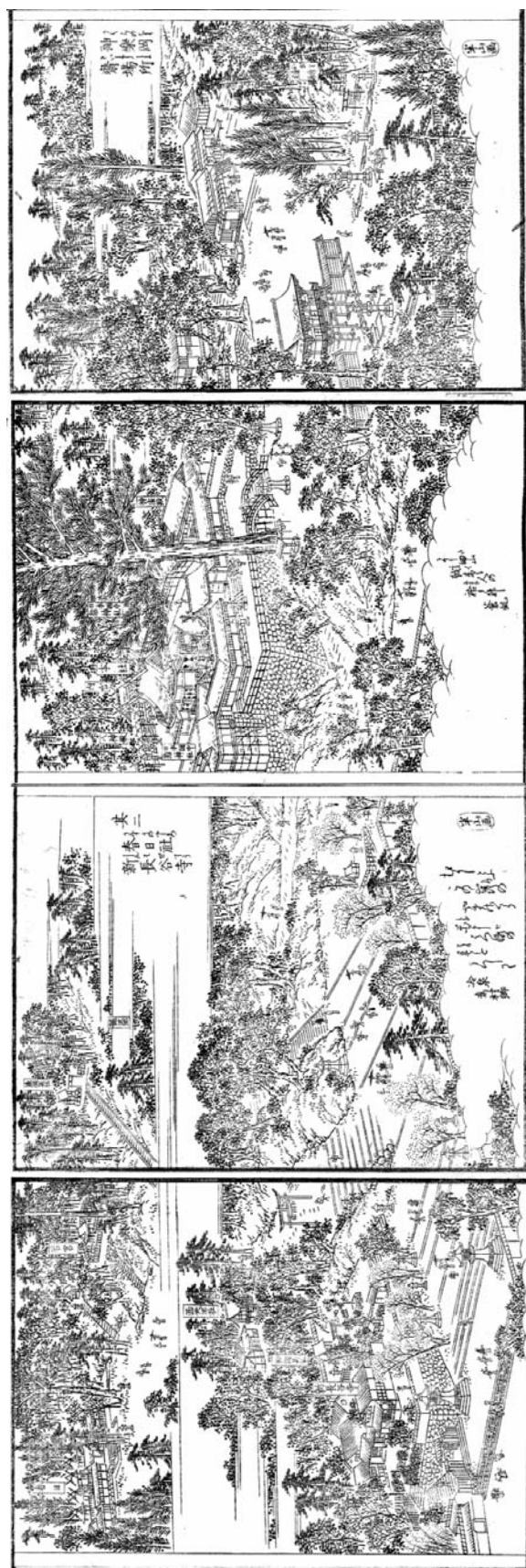


図3-4 近世の吉田神社境内

明治初期の上知以前の吉田神社境内は、「東ハ神楽岡東山麓道路ヲ限り、西ハ（中略）馬場先道路ヲ限り、南ハ岡崎村聖護院村境ヲ限り、北ハ神楽岡北麓道路ヲ限り、全ク除地境内地ト¹⁹⁾」され、吉田山全体を境内としていたが、近代に入ると図3-6²⁰⁾のように、境内地を限られ、山地の多くが官有となる（吉田神社は後に山地の多くを取り戻す²¹⁾）。この図は明治初期（明治5年頃）に測量されたものであるが、当時の吉田山の麓は、社家の敷地が開発されていた一方で、他は周辺へ向けて特に拡張はしなかった²²⁾。吉田山と紫雲山が、直接に視覚的つながりを持ち始めたのは、このすぐ後に宗忠神社の東側に大きな参道が設けられたのが始まりであったと思われる。

参道が密に設けられたのは吉田山の南西部分であり、南西の麓まで届く参道は、そのまま延長して街路となっている。この部分には吉田社家町が発達しており、参道の延長はこの街路網の幾何学的方向を決定する軸となっている。

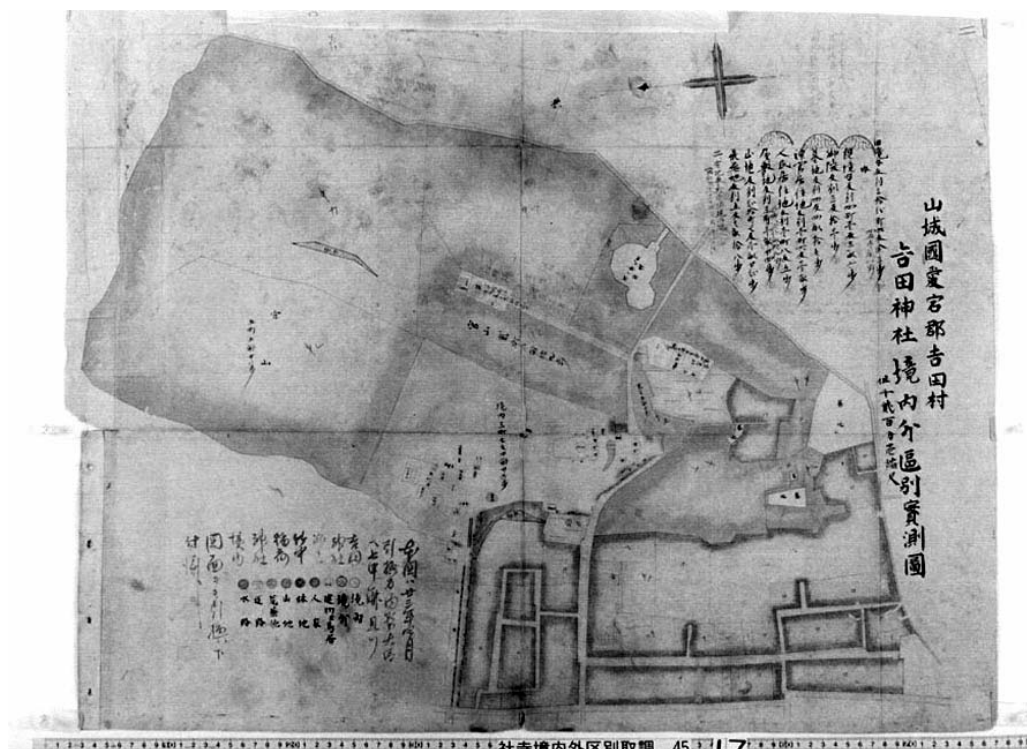


図3-6 明治初期の吉田神社境内境外図

吉田神社社領であった吉田山の北半分は、図3-6をみれば「山地」で塗り分けられており、特に参道はみられない。現在はこの山中に「吉田神社北参道」とされる遊歩道ができているが、これはジョギングコースとして京都市公園課と京都大学により舗装されたものであるといわれる²³⁾。この道の原形は、昭和4年（1929）までの地形図には見られず、図3-7²⁴⁾の昭和10年（1935）の地形図にはじめて表されていることから、昭和期



図3-7 昭和10年（1935）地形図にみる山道

に改めて道として認識されたと考えられる．それまでは，植生が比較的疎らであって，尾根周辺全体を大きな広場と認識できたものと考えられる．

2) 真如堂

真如堂の境内は、『都名所図会』（図 3-8²⁵⁾）に見られるように，紫雲山の西側に広がる緩斜面を利用した，現在にも見られる東西に直線的な参道が，近世には既に成立していた．先の祇園社の考察と同様に，80 年ほど後の『花洛名勝図会』（図 3-9²⁶⁾）と見比べると，この間に多宝塔が建立された事がわかる．しかし，その他の敷地内の構成は殆ど変わらない．『都名所図会』にみられる参道は，舗装までしっかり描かれているとは考えられないので，参道のテクスチャまでは確認できないが，参道の傾斜の構成は概ね一致しており，これを近世中・後期の姿であるとする，それは現在のものとは幾分異なる．すなわち参道を行き，門を潜った先にある一つ目の十字路の手前に数段の石段があったものが，現在ではなくなっている．現在は境内に車交通が想定されているため，この部分の参道上

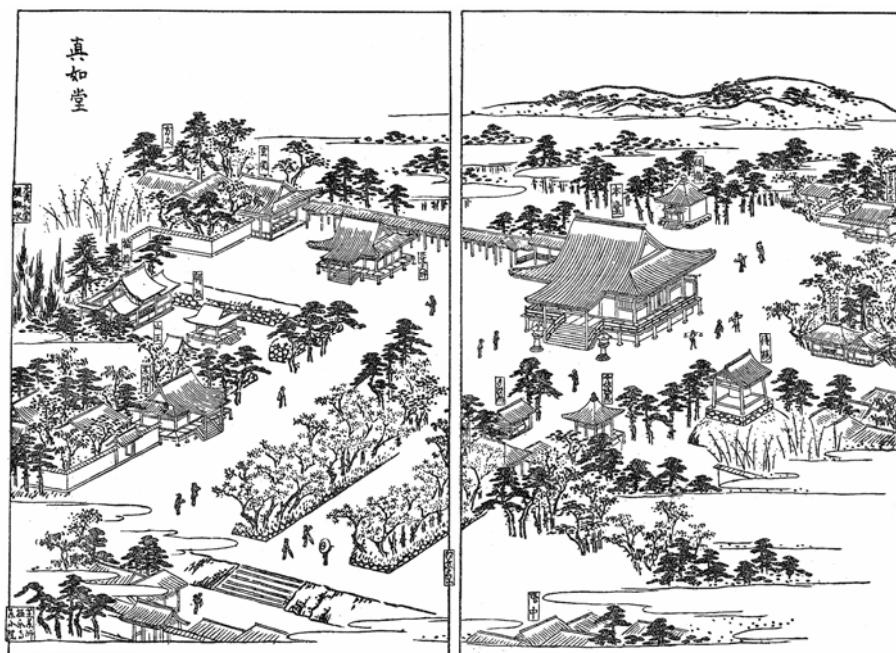


図 3-8 『都名所図会』の真如堂

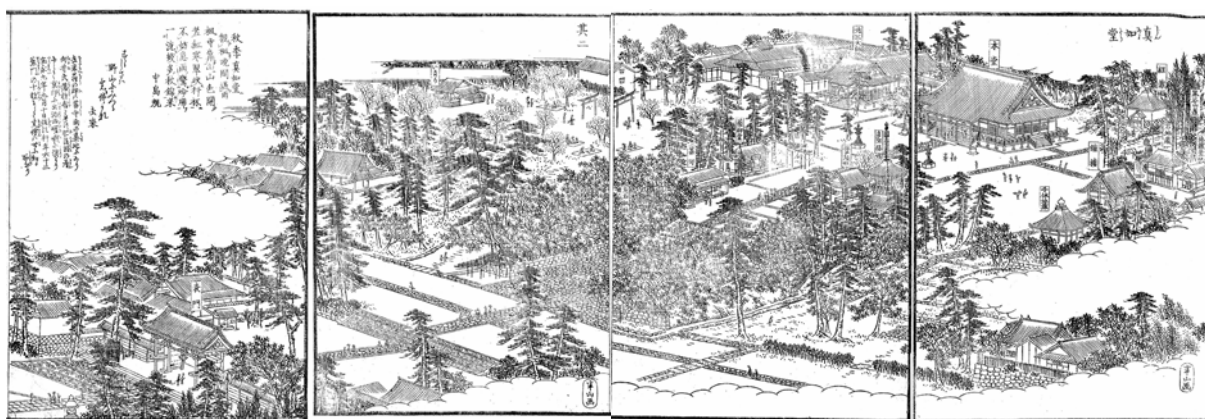


図 3-9 『花洛名勝図会』の真如堂

の地形的ギャップを埋めてなだらかな傾斜にされた事による。しかし、この他は概ね参道と堂宇の配置は現在のものから推定できる。

現在の地形は図 3-10 に表すように、全体的には穏やかな傾斜であるが、参道は3段階の傾斜変化を加えて本堂まで至る。門前の茶店のあった道から表門に至る 40m 程の間に 3% 程の緩くとも明らかな傾斜をもち、門の手前から 7 パーセントほどの傾斜になり、門を越えたところで 5% になり、境内の十字路に至る（近世においては、門を潜ったあともしばらく 3% ほどの傾斜が続き、十字路の手前で石段によって地形を上げていた）。東西方向の道（南側の塔頭と、北側の塔頭あるいはいなりや方丈を結ぶ）を越えた所から、踏み面が広く蹴上の低い石段が、傾斜 12% ほどで迫り上がり、この石段で 40m ほど進むと、本堂前の 1～4% ほどの緩斜面になっている。

本堂の南脇から「黒谷山道」に入る道が『花洛名勝図会』には描かれており、これは天明元禄 14 年（1701）の「実測大絵図」（図 3-11²⁷⁾）ですでに描かれている、真如堂と黒谷を繋ぐ道のことであろう。これも現在の道とほぼ一致する。



図 3-10 真如堂参道の地形
（筆者作成）

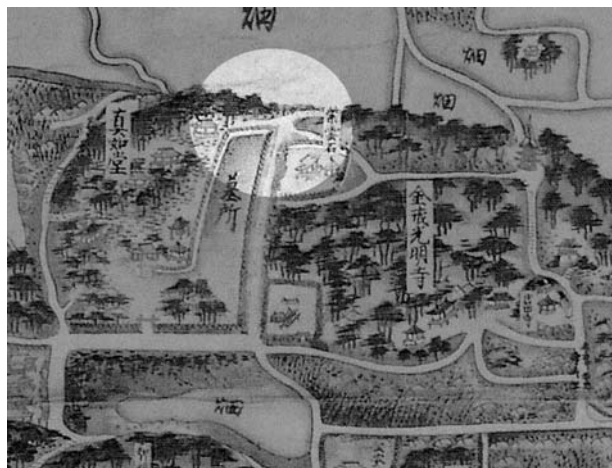


図 3-11 真如堂と黒谷をつなぐ道
（元禄 14 年）

ところが、現在の様子とくらべ、門前は大きく変わっている。後に述べる事になるが、現在では参道がそのまま延びた形で公道が続くが（続いて吉田山の宗忠神社参道とつながる）、近世では参道とT字をなす道があるのみであり、その広めにとられた道には茶店が並んでいた。

3) 黒谷（金戒光明寺）

同様に絵画史料を用いて、近代より前の敷地と参道の構成と、近代以降のその姿を検証すると以下ようになる。

この境内は、紫雲山の南西部分に占地され、伽藍は南向きである。この領域の地形は、紫雲山の中でも褶曲の激しい部分であり、傾斜の緩急に変化が著しい。その中で、近世から現在まで、黒谷は本堂、方丈の伽藍配置の基本形には変化がなく、大きくとられた中腹の平場に並ぶ。そこから東へ急傾斜が始まり、山頂までは広大な墓地になっており、山頂には三重の文殊塔が建つ。

『都名所図会』（図3-12²⁸⁾）と『花洛名勝図会』（次頁図3-13²⁹⁾）を比較すると、顕著な違いは「山門」の有無であり、『花洛名勝図会』には「山門 南向 本堂の正面石段の下にあり 近世建営さる所なり」と記されていることから、江戸の後期に建てられたことがわかる。山門の有無と同時に、敷地内の構成に変化があったものと考えられる。すなわち、元禄14年の『実測大絵図』（次頁図3-14³⁰⁾）によれば、『都名所図会』と同様に、山門は描かれておらず、その上現在山門の建つ中段（では「浴室」の描かれている平場）より下には参道が存在しない。

同図を観察すると、現在の春日通りの東突き当たり手前に門らしき物が描かれている。しかし上に見たように、この道の先に経路は存在せず、藪の中へ消えている。「上岡崎村」の角を北（図中左）に曲がると、右手に金戒光明寺の参道らしき道があり、その入り口付近にさらに門がある。道のつながりだけをトポロジカルに解釈すれば、図3-12にみる「浴

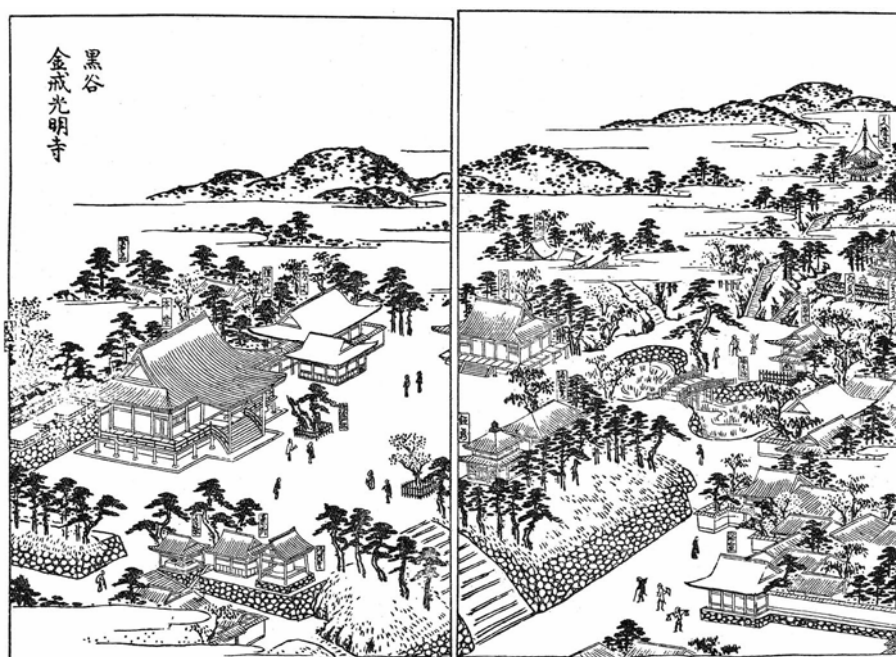


図3-12 江戸中期の黒谷金戒光明寺

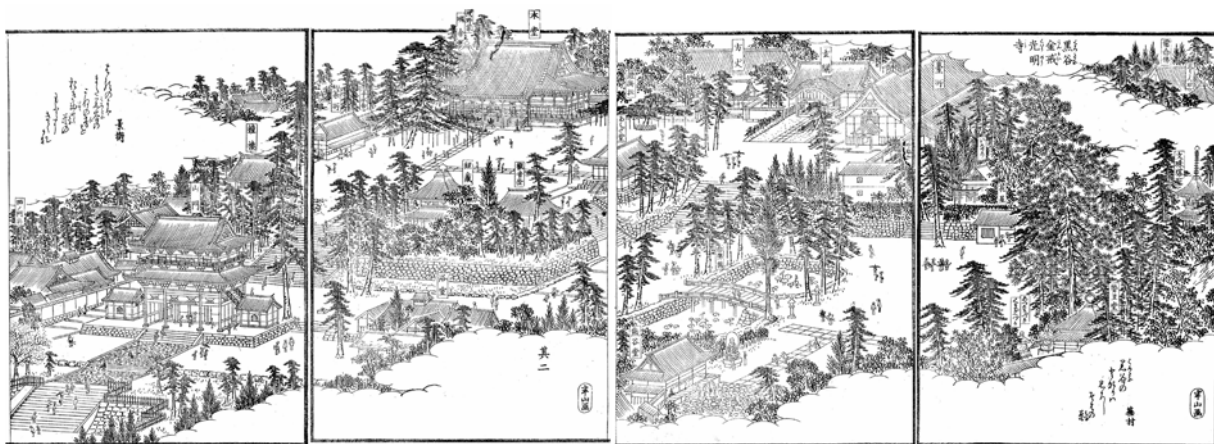


図 3-13 江戸後期の黒谷金戒光明寺

室」の乗る平場に通じる参道であると推定される。山門落成後の慶応4年(1868)発行の「改正京都御絵図細見大成」(図3-15³¹⁾)によれば、「黒谷」の門が春日通の突き当たりに描かれ、もう一つの門は省略されている。山門によって、黒谷参道が大きく南へ迂回し、伽藍への導入が強化された。

この後、敷地内の構成は概ね現在のものと同一のものとなった。すなわち、現在の最下段の参道敷地があり、そこから62%の石段で6mほどの高低差を上がった一段上に浴室あるいは山門がのる敷地、そこからさらに27%ほどの石段で10m程の高低差を上がったところに本堂がのる平場敷地がある。また山門の乗る中段には上段を東へ回り込んだところに平場と、そこから紫雲山山頂の文殊塔までひたすら登る石段を持っている。



図 3-14 江戸初期の黒谷門前(元禄14年)



図 3-15 黒谷の門(慶応4年)

現在の観察から、この石段は次頁の図3-16のように傾斜を部分的に変えている事がわかる。特に登りはじめは42%と途轍もない急傾斜で始まり、次第に調節して緩くなり、文殊塔の手前で再び38%もの急傾斜になっている。これらの傾斜は明らかに自然傾斜の作り替えであり、文殊塔までの道を厳しく遠く見せる演出であると思われる。

平面構成については、明治初年に京都府に提出された「金戒光明寺境内外区別実測図」(次頁図3-17³²⁾)によって、その全貌が把握できる。これによれば、春日通り突き当たり

の門が、北隣の門（この門は昭和9年（1934）に焼失して今は残っていない³³⁾）に比べて大きく造られている。この図からは石垣の位置や地形が分からないが、現在の地形（ただし現在では車のためのスロープが設けられており、それを考慮して修正した）と、『花洛名勝図会』の構成を参考に、等高線と石垣を加えて作図したものが次頁の図3-18である。

この図から、春日通の門から始まる広幅の参道が、直角に北向きに曲がり、巨大な山門を含む石段を登り詰めて伽藍の並ぶ平場に至るといふ、重厚に畳み掛けて設けられた聖地への演出が明らかになる。しかし、経路はこの参道を軸として、境内に編み目を巡らしており、境外の経路と同質の街路網に似た構造をしている。例えば、本堂の西側には、塔頭群が並び、それらの間に道を構成していた事がわかる。これらの道は、近代化以前に形成されていたものとして確定できることは明らかである。

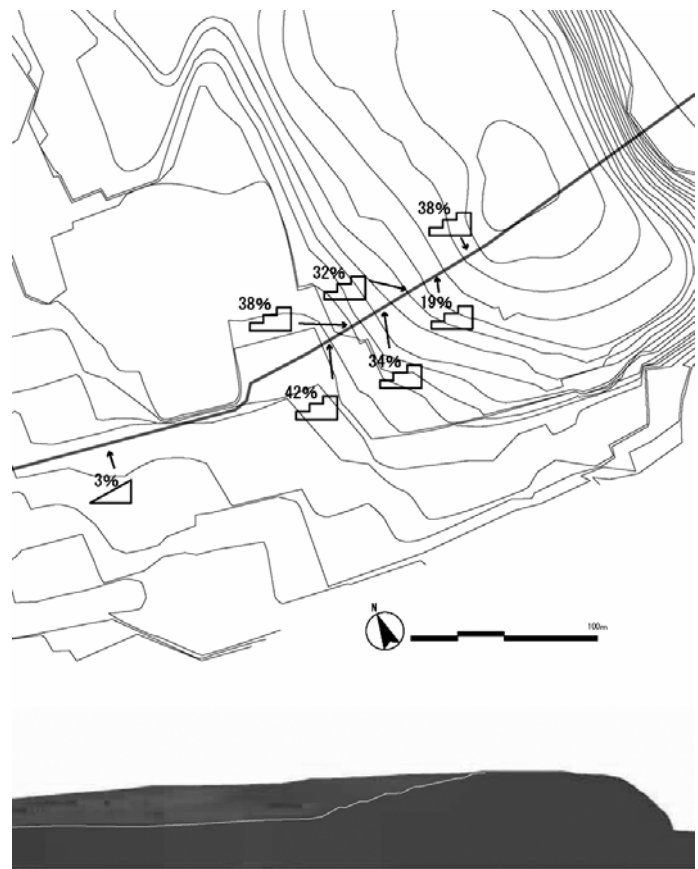


図3-16 多宝塔への石段と地形（筆者作成）

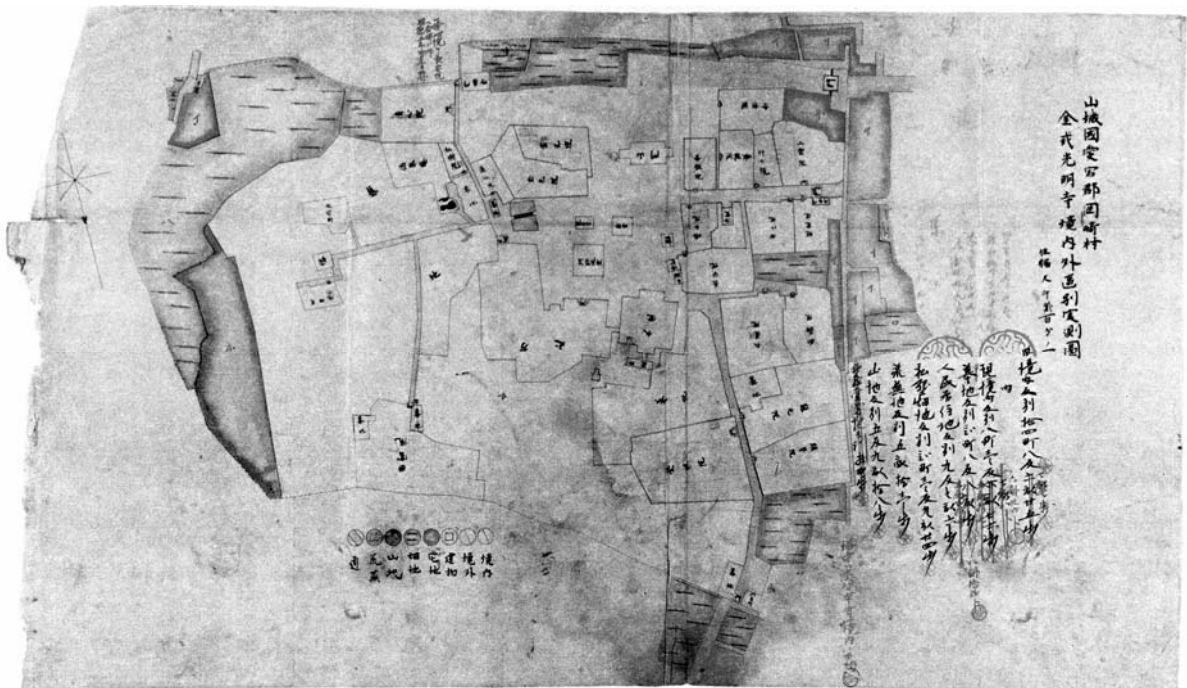


図3-17 金戒光明寺境内外区別実測図



図 3-18 金戒光明寺平面図（筆者作成）等高線は 2 m 間隔

4 絵図からみる道の原形

丘陵地が並ぶ事によって生じる微地形の多様性は、各所の地形性格毎に空間を決定していたのであろうが、この全域の景観を形成する原理は、結局真葛ヶ原で見たような、大きな斜面によって景観の一体感を得るメカニズムとは異なるはずである。ここでは、景観を捉える人自身が領域内を歩き回る際に視覚像の決定的条件となる経路に着目した。

近代化の文脈でこの地域の空間構造が大きく変化する前、つまり近世以前には、この地域の全体像はどのように形づくられていたのだろうか。ここでは、現在の道の骨格が出来上がりつつあった近世から、現在に至るまでの地図あるいは洛中洛外図や名所図会などの絵画史料から、得られる情報を分析し、近世に存在した道を地形構造の中で復元して、この領域の空間構成原理を探る。

1) 街路網の原形

前項では前近代における境内の参道構成を把握することができた。蒐集した地図の中から、道の構成が分かりやすいものを取り上げて、それぞれに描かれている道が、実際にはどのような構成であったのかを、時代毎に相互比較して、推定した。方法は蒐集した各種絵図のなかで、トポロジカルに道のつながり方に着目して一致する物を採用する。絵図の中に現れる頻度を道毎にカウントして、頻度の高い道のみを選定する。こうして抽出された幾つかの主要な道のうち、現在の地形から考えて無理のない物を採用した（図3-19、使用した絵地図・地図は章末の参考文献参照³⁴⁾）。ただし、吉田神社門前の社家町の街路網構成は、既往研究の成果³⁵⁾を参考にした。この結果、この地域の道の原形として存在したと考えられる道は、図3-20のような構成であることが分かった。

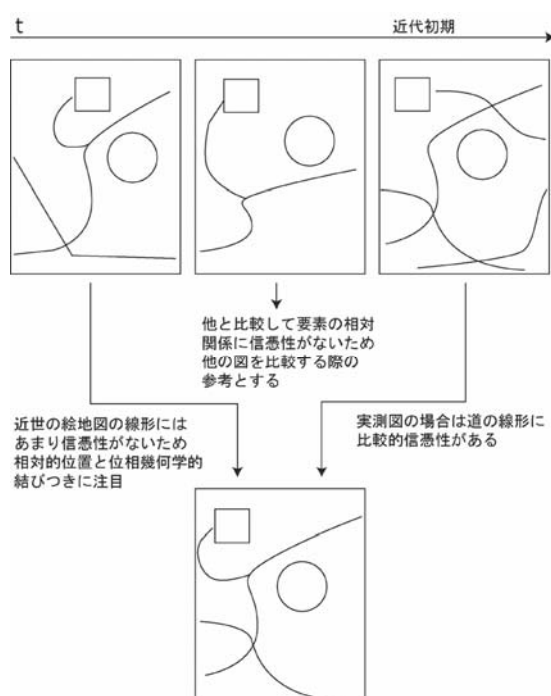


図3-19 作図の指針

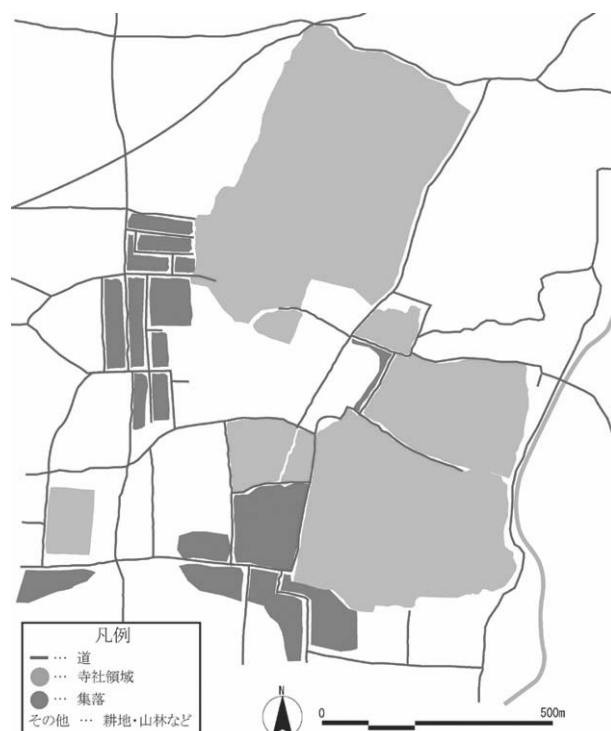


図3-20 神楽岡地域道の原形（筆者作成）

2) 参道の延長としてある街路

これらの街路網は、上記の図3-20より、社家町における町の意識とも考えられるようなグリッドパターンを除けば、全ての経路は、各部で周囲の宗教的領域へ導入されている事が明らかになった。先に分析した近世の境内参道をこれに書き込むと次頁の図3-21のようになる。前項で明らかにした参道と、その他の主要街路網を併せて見てみると、社寺領域においては経路の折れ曲がりや分かれが多いというように、線形変化の密度に差はあるけれども、概ね全域を通して連続性を持っていることがわかる。つまり、近世においてこの地域の核をなしていたものが宗教文化領域（境内境外地）であり、参道、あるいは境内を結ぶ道が、この領域一帯の主要な経路であったと考えられる。街路にも参道的な機能が、参道にも交通の機能が備わっており、この区別は道の線形に於いて曖昧であったと言える。

ここに線形を明らかにされた経路網は、丘陵地を核とするこの地域において、どのように地形と関わっているのだろうか。地形と道の線形との関わりを判断するために、まず地形 3Dモデルを作成し、そこに先の経路網を重ねた（図 3-22）。これにより、一つ一つの道が、地形の中でどの部分を走っているのかを明らかにすることが出来た。すなわち、道は谷間に集中し、谷線に沿って走り、参道の機能を持つ道は、この流れと辻を作り、谷から山へ、平地から傾斜地へと、高低が変化する方向へ走っている。

またこの図 3-22 により、これらの経路網は丘陵の南西側に偏っている事が明確に示されている。それは、社寺の門前がこちら側に発達した事と関係するものと思われる。これは端的に経路網が社寺空間に依存していたことを表しており、洛中から見て丘陵地の裏側にあたる部分には、町が形成されず、明治期に撮られたと推定される写真（次頁図 3-23³⁶⁾）に示す通り、水田、耕地が展開する所であった。

丘陵地形に支配されたこの地域において、道に沿って移り変わる景観は、まさに多様であると言え

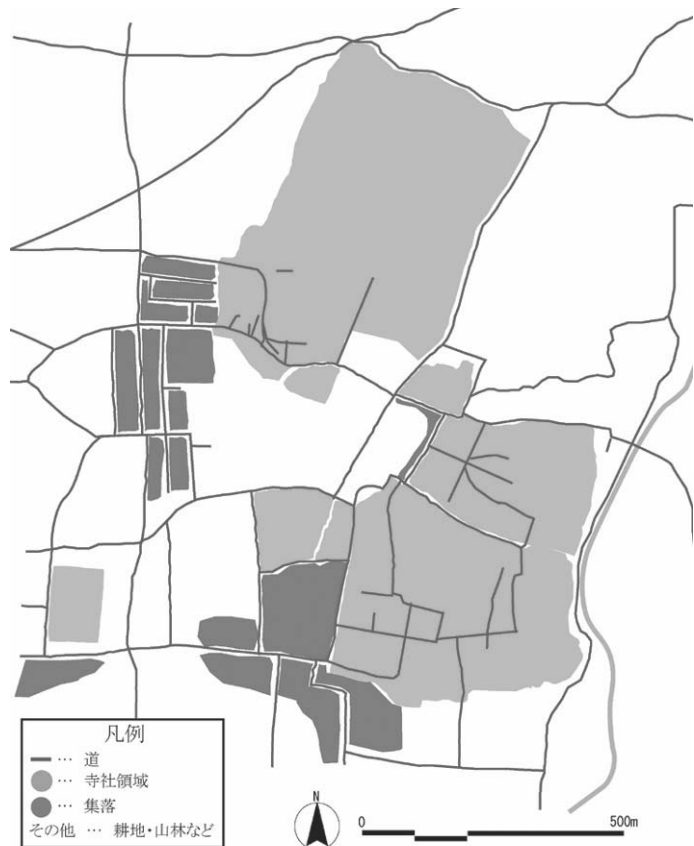


図 3-21 社寺領域を含めた神楽岡地域道の原形（筆者作成）

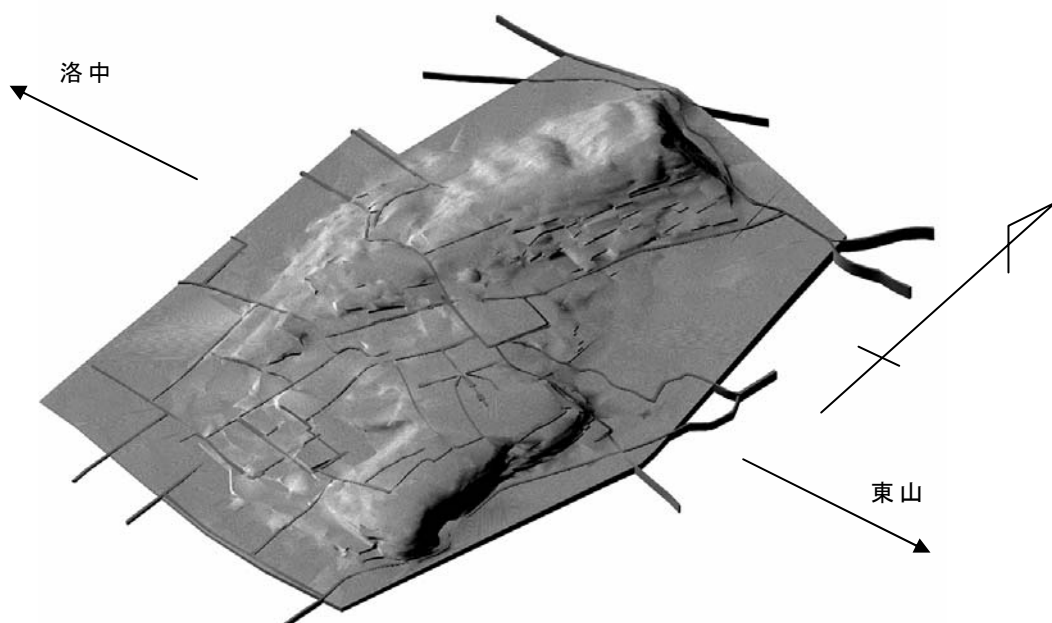


図 3-22 地形と道の原形の 3D 表現（筆者作成，地形は現在）

るが、それでもこの地域は、低地の町と丘の上の宗教領域をつなぐ参道という対比的配置の判りやすさによって、そしてそれが一側面西側に集中していた事によって、社寺要素の集中する複合景観域であるとして捉えやすいまとまりであったと思われる。

つまり、都市との関係において、洛中から鴨川の向こうを眺めると、広い農地の中で、東山連峰より一歩手前に位置した神楽岡領域の、社寺とその門前町が、(敷地内の向きはともかくとして) ちょうど

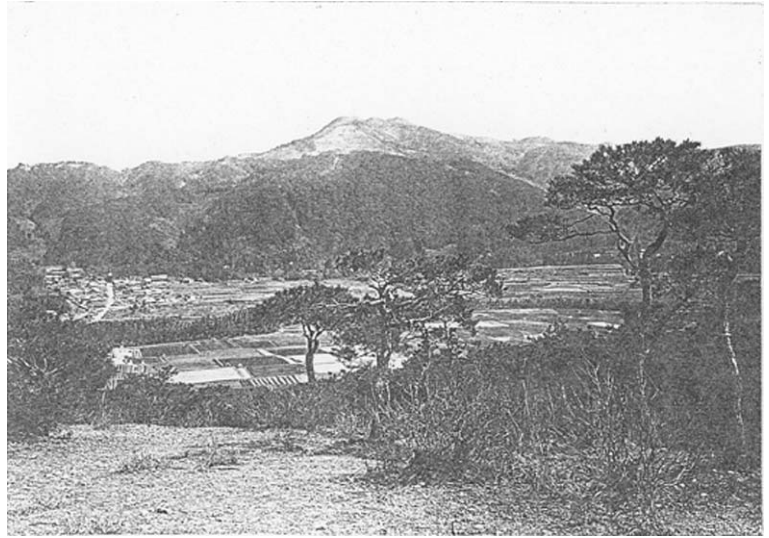


図 3-23 明治期の吉田山東の風景

こちらと向き合うように潜んでいた。これらは、近世の絵地図で平面の中に描かれた、手前一面のみを見せる立体としての山に描ききれるものであった(例えば、図 3-15, 16)。一方で、その裏側(東面)はまさに、裏側であって描かれなかった。

5 結語

以上の道と地形の分析によって、周囲の宗教文化によって決定された経路の幾何構造は、まさにこれらの宗教文化領域の敷地を決定した主要要素の一つであった地形によって、決定されていた事が判った。地域全体はこれらの経路構成によって性格付けがされていた。

吉田神社境内の構成は、山そのものをデザイン基盤としており、その中に点在する平場を結ぶ参道で構成されていた。参道は山の中で地形に従い石段、スロープなどによって造られ、西の麓へ届く参道はそのまま街路となって社家町の町並構成の軸となった。東へ向かう道はただ一本、真如堂の方へ向かう道のみだった。

真如堂境内は、なだらかに東へ上がる紫雲山の広い斜面を利用して、大作りに展開していた。参道は直線的に門から本堂までの間を、三段階の傾斜変化を経て貫く。この参道を中心に左右にも経路が巡り、南側経路は山の上で黒谷と繋がっていた。

黒谷境内は、紫雲山の南西の褶曲する斜面に立地し、中腹の大きくとられた平場に伽藍が並び、最上部に文殊塔が建つ。参道は南西から西へ入り、直角に曲がって南向きの伽藍に対して正面を向く主要な道が、上昇する地形と巨大な山門を組み合わせで演出され、その他の経路がこれを軸に網目状に広がっている。

これらの参道は、それぞれ境外にまで延長しており、全ては地域に繋がる道になっていた。この経路構成は、吉田山、黒谷の南西部に集中し、北東部には発達しなかった。近代以降、この地域に発達した集落は、基本的にこの経路構成に合わせて発達しており、今日に至っても独特の地域性を創出しているものと考えられる。

3-2 神楽岡地域における遊興文化

1 近世の遊興空間

1) 経路に沿う遊び場

前節で明らかにしたように、近世の神楽岡地域全体は、参道で特徴づけられる道の構成によって成り立っていたわけであるが、当時この経路は、人々の遊びにどのように関わっていたのだろうか。

『花洛名勝図会』（図3-24³⁷⁾）にみられるように、近世後期の吉田神社から真如堂の間には、茶店がずらりと並んでいた。この様子は多くの京都見聞記に記されるところである。

…紫雲山より北へひとまち又折て、よし田の山後へ一町寺立つゝけ、片かわは⁽⁷⁷⁾道と茶屋つらなれり。…[谷重遠『東遊草³⁸⁾』，宝永元年（1704）]

…（真如堂の門前に）両家の茶屋あり。食事によろしきなれども…

[清川八郎『西遊草³⁹⁾』，安政2年（1855）]

…（真如堂）門前に茶屋多し遊人たえず。

[貝原益軒『京城勝覧⁴⁰⁾』，享保3年（1718）]

寺が続けて建てられているのは、四軒寺と呼ばれた寺々の事であり、その向かいに茶屋が並ぶという『花洛名勝図会』の構図と一致する。また、真如堂門前あたりは茶屋街として賑わっていたことが伺える。その構図としては、茶屋と寺が道を挟んで向かい合い、それが屈曲する道に沿って連続していた。ここではこの連続性に特徴があるが、それは視覚的に果てまで見通せるようなビスタの連続性ではなく、集合している社寺を線で繋いだ屈曲した連続であった。こうして得た社寺の連続性に沿って茶屋が並び発達したものと思われる。このようにして、この近辺では、先に見た参道の延長としての道を中心にアクティビティが繰り広げられていたことが分かる。

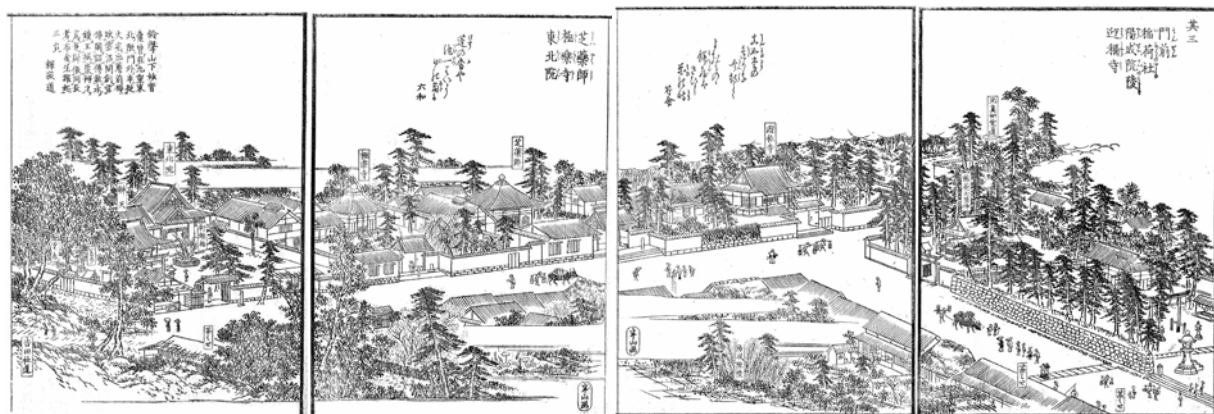


図3-24 江戸後期の吉田神社と真如堂門前の間

2) 経路外への遊び場の展開

一方、これらの社寺を中心とした道のネットワークから外れた部分、具体的には社寺背景の林地においても、特徴的な遊び場が培われた。

吉田神社は名所「神楽岡」としても認められ、近世には大元宮を中心として図3-25⁴¹⁾のように『都名所図会』にも登場してその賑わいを記される。この境内に参拝する人々の賑わいも特記すべき事ではあるが、その背後の山林に描かれている、床机を出して遊ぶ人々こそ、ここでは注目すべきところである。

近世には吉田山の植生はアカマツが主流であった。昭和7年(1932)発行の『大京都誌』の「神楽岡」紹介に「全山鬱々たる松樹に囲まれ⁴²⁾」ている事が記され、また大正初期の写真に残る植生を見ても明らかである(次頁図3-26⁴³⁾)。現在自然に任せて充実した吉田山の植生の中で、松の多くは失われていることから分かるように、これらの松は生活の必要性から人の手によって培われた林であった。赤松林には松茸が育ち、当時の東山一帯⁴⁴⁾と同様、この地においても秋の松茸狩りは盛況になった(次頁図3-27⁴⁵⁾)。花洛名勝図会や都林泉名勝図会に描写されていたように、吉田神社より北東の領域周辺は、比較的なだらかな傾斜と十分な広さを持ち、

老幼婦女子といえども遊び戯ふるに心を労さず。殊に神社仏閣の構えなく僅に竹中稲荷官神この社あるのみ。もとより四方の風景よく春は桜つゝし咲きみたれて都下の貴賤童など引具し割子さゝえをひらき遅日を倦まずして興に乗す。又長月の末木の葉の錦する折からは此地に来つて秋の月の短きを惜む者多かり。又茸狩にハ男女打むれつゝここかしこの樹下をあさり索めて得たり顔にげゝめくはいと興あり⁴⁶⁾

と書かれたように、境内のみならず山全体で人々が活動していたことが判る。



図3-25 大元宮とその背後の賑わい(都名所図会)

こういった野遊びは、祇園林における花見席を代表とする林中の遊び（5章参照）と共通するところが多い。すなわち、仮設的な店を建て、木々の間に幕を張り、床机を置く、あるいは蓐座を敷くなどして簡易な座敷をつくった。そして飲食の支度を持ち込みその場で宴を催すのである。郊外の山地における一つの典型的な遊び方であったと思われるが、それが一つの固有性となる程、ここでは盛んに行われた。



図 3-26
明治初期の吉田山の植生



図 3-27 吉田山遊宴

2 近代以降の遊興－谷川茂庵の数寄

近代に市域が拡大すると、吉田山は市内へと含まれて、西麓の吉田村が文教地区として都市化の先駆けとなった。また、先に述べたように、吉田山の多くの領域は近代になって吉田神社の所有ではなくなり、近世における神社の裏山は一度官有になった後、一部民間に払い下げられた。

それでも、この領域が純然とした郊外であった頃には未だ、近世に頻繁に行われた茸狩りなどの野遊びは受け継がれた。大正4年（1915）に発行された京都坊目誌には、「四時遊覧の所とす。就中秋日には、採蕈の為め来集するもの多し⁴⁷⁾」と記されている。しかし大正末期には、吉田山周囲の宅地化が急速に進められることになり、それ以降野遊びの傾向は見られなくなったと思われる。

ただし、宅地開発によってその全てが失われた訳ではなかった。次節に示すように、吉田山全体の開発に先駆けて行われた北東部の開発は、新たな文化と自然に対する規律を保証するものであった。この大きな領域の所有権は、移転を繰り返したのち、大正10-15年（1922-1927）の間に谷川茂次郎（谷川茂庵）の所有となり⁴⁸⁾、敷地運営を始める。谷川茂次郎は、『角川茶道大辞典』の「谷川茂庵（もあん）」の項目によれば、「近代の数寄者。今日庵老分。・・・中略・・・成功ののち、吉田山に明治閣を建設して、たびたび茶会を催した。⁴⁹⁾」とあるように、裏千家の老分という茶道界においても重要な存在であった。

谷川茂庵はこの領域において、質の高い住宅群を中腹に開発したのと同時に、その上部に数寄の別荘地「吉田山荘」を造営した。数寄屋大工の岡田永斎が主に手掛け昭和2年（1927）に完成した茶苑であり⁵⁰⁾、八席の茶室と苑路で構成される広大な庭であった。茶道月報⁵¹⁾は大正15年（1926）「吉田山荘の茶」の記事を掲載し、以後昭和六年頃まで頻繁に催された茶会を伝えている。大正15年（1926）の秋には茸狩の茶会を催し⁵²⁾（「昨年茸狩の茶に際して・・・」と記事中にある為、大正14年（1925）には既に使用していたことが分かる）、昭和2年（1927）晩秋には月見の茶会を催している⁵³⁾。この頃は麓の「風雅な茶店風の」茶亭と「中腹の一亭」、山上の本席と待合があっただけのようだが、茶会を重ねるごとに次第に茶席が増え、昭和2年（1927）11月吉田山荘全体が竣工し、「吉田山荘席開⁵⁴⁾」の茶会を開いている。吉田山山頂付近には明治記念閣と呼ばれた木造銅板葺二階建の建築を設け、二階には明治天皇の御真影を飾り、明治節を始め折々の期に献茶の儀式を行い、それとあわせて庭園全体に散在する茶席で茶会を催した（図3-28⁵⁵⁾）。

茶道月報から、この茶庭によってどのような茶会が行われていたのかを知ることができる。茶会は、概ね幾つかの茶席を一



図3-28 谷川茂庵の茶会

度に設け、招かれた人々は一日、あるいは半日かけて山中を巡りながらこれらの席を自由に廻った。その様子が描かれている記事を、茶会の性格毎に一つずつ選び紹介する。

1) 「吉田山の茸狩⁵⁶⁾」

期間は大正 15 年 (1926) 10 月 22 日から 25 日までの 4 日間。記者が辿った建築は順に、「中腹の一亭」(休憩所)、「東山一帯を眼下にする待合」(待合)、「薄茶席」,「樹間に設けられた大テント」。参加者 50 余名。薄茶席のあと、各々が草履と籠を借りて山へ分け入り、松茸狩りを愉しみ、その後一同に会して大テントの下で鳥鍋をしている。

2) 「山荘に一日を⁵⁷⁾」

昭和 3 年 (1928) 9 月 14 日一日中。記者が辿った建築は順に、「銀閣地道に面した山麓の待合席」,「腰掛」,「茂庵の席」,「廣間の席」,「立禮の席」,「腰掛」,「中腹の四畳半席」,「二畳の侘席」。参加者は裏千家今日庵における夏期茶道講習会の受講会員。茂庵の席は濃茶席, 広間の席は吸物縁高の饗, 立禮の席は薄茶席であった。また, 四畳半は応援の薄茶席, 侘席は「勝手に這入って勝手に點前をして茶を呑」むという型破りな席であった。

3) 「明治閣の献茶⁵⁸⁾」

昭和 5 年 (1930) 11 月 3 日正午から午後 4 時まで。午前中に「明治閣」において裏千家家元、千淡々斎が献茶式を執行。正午から「大食堂」を開き、同時に園内各所の席が開いた。用いられた建築は、「本席」,「松雲亭(銀閣寺方面の眺望を一眸に聚め得る景勝の地)」,「立禮の席」,「土足席」,「傳衣室(大徳寺管長)の一席」,「茂庵氏の気儘庵」。全席は同時に開き、客はこれらを巡った。本席の若夫人、松雲亭の今日庵家元、傳衣室、傳衣室、茂庵などとそれぞれに主人を設けて行われたが、土足席のように、籤を引かせて主人、客などを決めてその役通りに進められるという、独創的な茶席もあった。このアイデアは、茶室を手がけた数寄屋大工の岡田永斎によるものだという。また、気儘庵は、茂庵の気が向いた時間にだけ開かれた。

このように、茂庵の独創性により、吉田山の地の利や自然を活かした遊びが行われ、またそのように庭園がデザインされた。庭園は徐々に造られており、全てが竣工する以前から大いに活用されていた。

3 結語

以上のように、神楽岡地域において近世にも近代にも、ある種の遊びの場としての空間が出現してきたのであるが、その具体的な場所の性質や、遊びの内容に大きな変化がみられた。

すなわち、近世においては参道や街路などの経路に沿った茶店空間の賑わいがあったのと同時に、経路から外れた山林を舞台に、床机や幕などの簡易なセットを用いた野遊びが盛んに行われた。しかしこうした舞台となった社寺領域の山林が、近代になると新たに開発される潜在的なターゲットとなった。

しかし、いち早く大規模に開発された北東斜面には、谷川茂次郎（茂庵）により、広大な茶庭が造営されて、数寄の空間が展開された。そのスタイルは、茸狩りを加えたり、山林中を散策しながら茶室を回遊したりと、茶の湯の文化に野遊びの要素が加味されたものであったといえる。

こうして、培われた茶の湯と風土による文化は、吉田山に形として残されることとなった。谷川茂庵の没後は、この広大な敷地が使われなくなるが、次節に示されるように、近代に造られた空間の構成は、同時に造られた住宅地に佳良な景観を提供した。また、近年再び整備され、開かれた庭園の敷地は、そのまま公共空間として非常に特異で魅力的な空間となった。これは次節で明らかにされる内容である。

3-3 近代の数寄と住居の総合的開発

2章で述べたように、近代以降の鴨東地区におこった都市化は、神楽岡地域の空間構成に相当な変化をもたらした。図3-29⁵⁹⁾は大正元年（1912）測量の地図であり、図3-30⁶⁰⁾は昭和26年（1951）測量の地図である。両者を比較すると、この間の住宅地の増加、街路の発達の一著しさは明らかである。このような中で、山辺の開発も盛んに行われた。

しかし、吉田山の西斜面の大部分は森として保存された。先に述べたように、この神楽岡地域の発展は、明治22年（1889）以降の第三高等学校と明治30年（1897）京都帝国大学の開校と無関係ではないが、吉田山の西斜面は明治35年（1902）に吉田神社の「境内へ復旧⁶¹⁾」しており、この急斜面の開発は免れた。本章のはじめに述べたように、この西斜面の傾斜は非常に大きくなっているが、そのふもとで急速に緩傾斜に変わる。下の地図からも把握されるように、京都帝国大学が設立されたのは、この吉田山のふもとに広がる大きな野であった。この地には、近世末期に「尾張屋敷」が造営された⁶²⁾。この大きな敷地の尾張藩邸、第三高等学校、京都帝国大学と続く占有は、山辺の景観域を構成する上で非常に影響力を持つと考えられる。この敷地内部における空間構成にはその点で重要な責任があり、キャンパス計画等においては、この観点からの考慮が望まれる。

一方、下の地図で確認できるように、吉田山の東側の開発は爆発的に進んだ。開発の嚆矢は、吉田山のすぐふもとの緩斜面と、黒谷のすぐふもとの部分であることが確認できる。そして、次第に白川の川筋まで（東山側からの開発については次章で述べる）居住地化がすすみ、それまでは田畑耕地であった吉田山と黒谷に囲われた北東部の緩斜面は、この時期に大きくその景観を変えることになった。

また特に、さきに明らかにしたように野遊びの場として使われていた吉田山東斜面の領域においては、この時期になされた大々的な開発が、自然と町が接触する部分としての重要な景観変容を経験することになった。

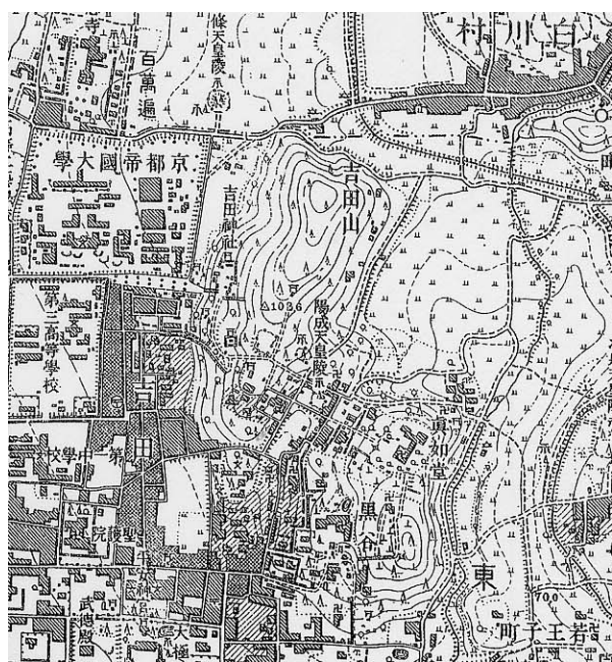


図3-29 大正元年（1912）の吉田山周辺

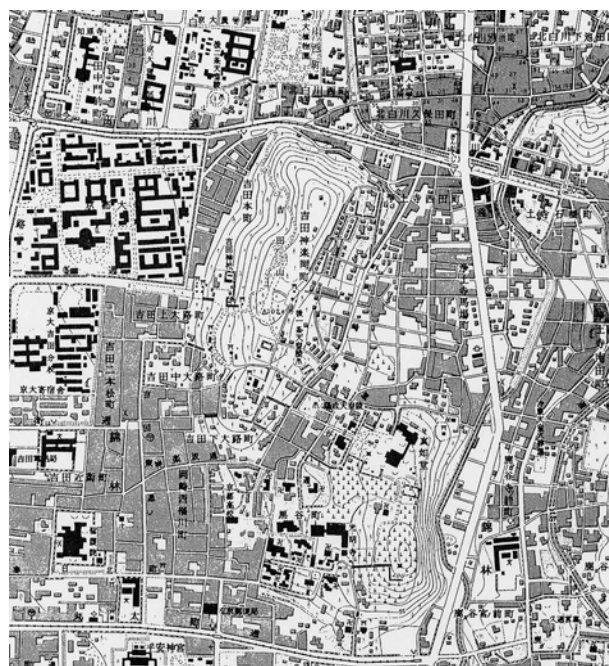


図3-30 昭和26年（1951）の吉田山周辺

1 対象地の敷地

研究で対象とするのは、図 3-31 に示す吉田山の北東部分で、かつて谷川茂庵によって開発された領域である。ここは丘陵尾根から中腹に展開する広大な茶庭と、中腹から麓にかけて広がる端整な住宅地の二つの領域から成る（図 3-32）。

「吉田山山荘」と呼ばれ大正末から昭和初期の茶道月報を賑わせた⁶³⁾茂庵の庭園は、吉田山北半面の尾根から東側の広大な敷地であった（以下「茂庵庭園」と表記する）。現在は図 3-32 に枠で示す部分のみが残されているが、その他は公園敷地へ転用された。しかし旧庭園内の苑路は公園内にそのまま残されており、当時の空間基盤を概ね知ることができる。すなわち、北部の傾斜地は 50% 前後の急傾斜であるが、大部分は東西に約 75m、南北に約 240m の矩形で東西の傾斜が 20% ほどの広い斜面である。この斜面は大文字山の正面と 1 km ほどの距離で向き合う。造営当時、疎らな松林であったこの地は至る所に東山を望む視点場を備えていた。西側の都市の中心部に背を向けて、東山を望むこの位置は、市中の山居を求める茶の湯の空間としてしつらえられた。



図 3-31 吉田山の中の対象領域



図 3-32 吉田山北東斜面平面図

同じ時期、吉田山以東では現在の町並みの原型となる宅地開発が急速に進んだ。それに先駆けて谷川茂次郎は、図 3-32 にみるように、茂庵庭園から東に下る中腹斜面に借家群を造営した（以下、これを谷川住宅とする）。これらは概ね二階建ての木造銅板葺で家並みの整った家屋であり、敷地の石垣や石段にまで配慮の行き届いたデザインがされている。

庭園と住宅の二つの領域は互いに隣接するが、空間の用途及び構成の手法は互いに異なる。特に地形の作り方にその根本的な特徴が現れていると考え、ここでは、それぞれの領域について、傾斜地形に対して加えられた微地形操作を主眼に、それらによる景観的特性を分析する。

2 茂庵庭園の地形操作と空間構成

先に述べたように、旧茂庵庭園の領域は、尾根筋から東中腹に大きく広がっていた。現在も庭園と公園部分に、石畳の苑路と建築あるいは建築の土台となった平場が残されており、苑路を中心とした庭園と建築の構成を敷地地形の中で分析できる。

1) 自然地形を活かした苑路の工夫

茶庭全域には概ね自然地形が残されている。この大斜面に石畳と石垣で普請された苑路は、図 3-33 のように配されている。要所に茶室などの建築が乗る平場（図中の灰色部）が設けられている。

苑路の幅は概ね 1 m 程で、そのテクスチャは傾斜と方向による一定のパターンに従っているが（次頁図 3-34）、ルートそのものは地形との関わりから決定され、次のように設定されている。すなわち、庭園の上部と下部に 2 本の苑路が、概ね直線状で平坦、あるいは緩やかな傾斜で斜面に対して横向きに走り、その間を点在する茶室を結びながら円環する苑路で構成されている。これは、広い斜面上に単調に続く道を廃して、斜面上を上り下りして散策する愉しみが得るための設計であることが見てとれる。庭園内の苑路の多くは等高線に対して斜めに走り断面勾配が緩くされている。また等高線に垂直に交わる道には、短い石段が設けられた。

このように、自然地形を残しつつ、茶庭の周遊を愉しみながら茶会を愉しむことができるように、道の勾配、スケールが設定されている。



図 3-33 茂庵庭園の地形（等高線 1 m 間隔）と苑路と平場の模式図（筆者作成）

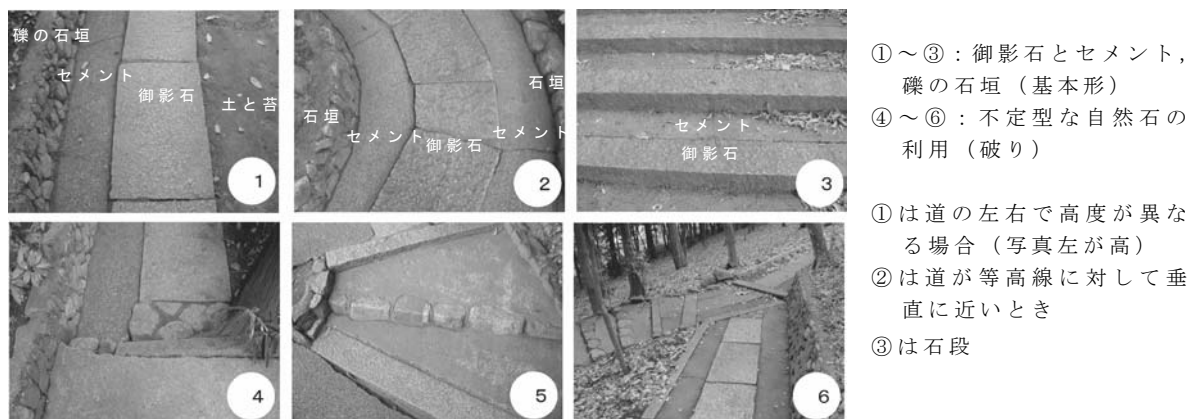


図 3-34 茂庵庭園の苑路のテクスチャ

2) 茶庭全域と茶室周辺の関係

実測により作成した縦と横に切る現在の断面図を，図 3-35，36 に示す．かつては苑路からも東山を望む眺望が得られたほど疎らであった植生は，現在では全域を覆う森になっており，樹木の枝葉によって上部に出来る幕が地形に倣って傾くため，実際の景観体験としては，高さ 4～6 m 程の空間が斜面にそって斜めに続き独特の圍繞感を持つ．この中を行き交う苑路の至る要所には，先に示した小さな平場が，主に石組みされた土台で作られており，その上に茶室や待合などの建築が配置された．

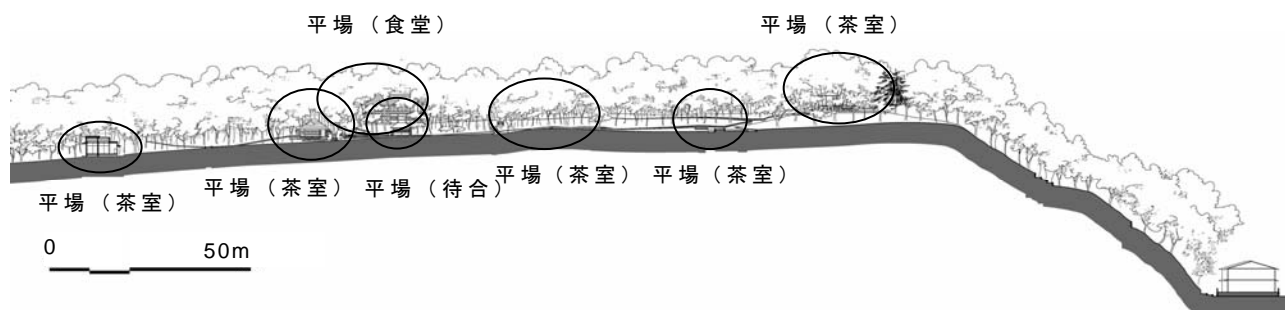


図 3-35 茂庵庭園南北方向断面図(筆者作成, 切口は図 5)

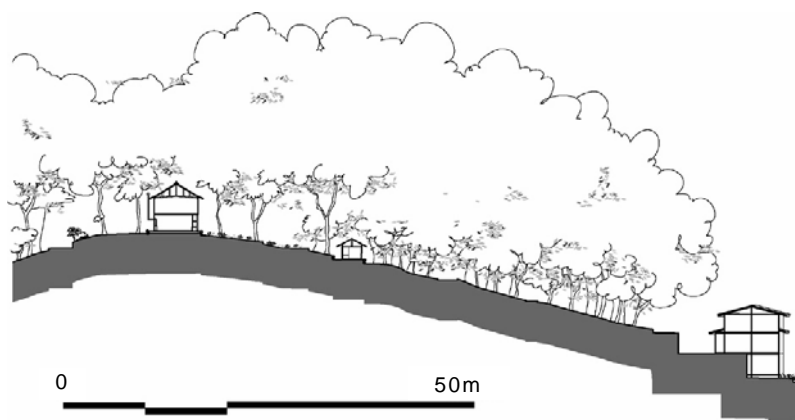


図 3-36 茂庵庭園東西方向断面図(筆者作成, 切口は図 5)

このように茂庵庭園は、全域が主に天を覆う林と苑路で構成された斜めに広い空間であり、そのいわば内部空間に要所となるデザイン密度の高い建築周りの庭園が詰め込まれている。現在では建築（平場）周辺のみが領域外へ向かう視線をもつ視点場となっている。

3) 密に景観が操作される茶室周辺

茂庵庭園では、要所に配された平場を中心として、作り込まれた空間が特徴的である。現存する建築のうち、代表的景観として田舎席茶室周辺を分析する。

作成した平面、断面図(図3-37)に示されるように、茶室のみが独立した存在ではなく、その近傍の地形から空間づくりをはじめている。断面の詳細は図3-38(次頁)に示すが、傾斜に対して水平に盛った土台に茶室が乗り、この土台の石垣を利用して下部空間が創られている。すなわち、斜面を切り込んで1mほどの石垣を3段に分けて設え、それぞれのレベルにおいて、下から井戸端・待合い・茶席の機能が備えられている。井戸端は下部の石垣に丸く囲われて造られ、その上の石垣は一部茶室へ接近するように窪められ、出来た空間に待合いと小径が配置された。三段目の石垣は、意匠的な調整である。これらの層の一・二段目に足を取り、最上部から付き出した舞台が待合いを覆うように設けられた。

このように田舎席茶室の前面(下部)空間の、3次元的に重ね合わさり、凝縮された多様な機能は、基本的に全てこの石垣の構成によって生み出されているといえる。それらをつなぐ一連の道程は、茶席周辺において刻々と移り変わる豊かなストーリー性を持つに至っている。

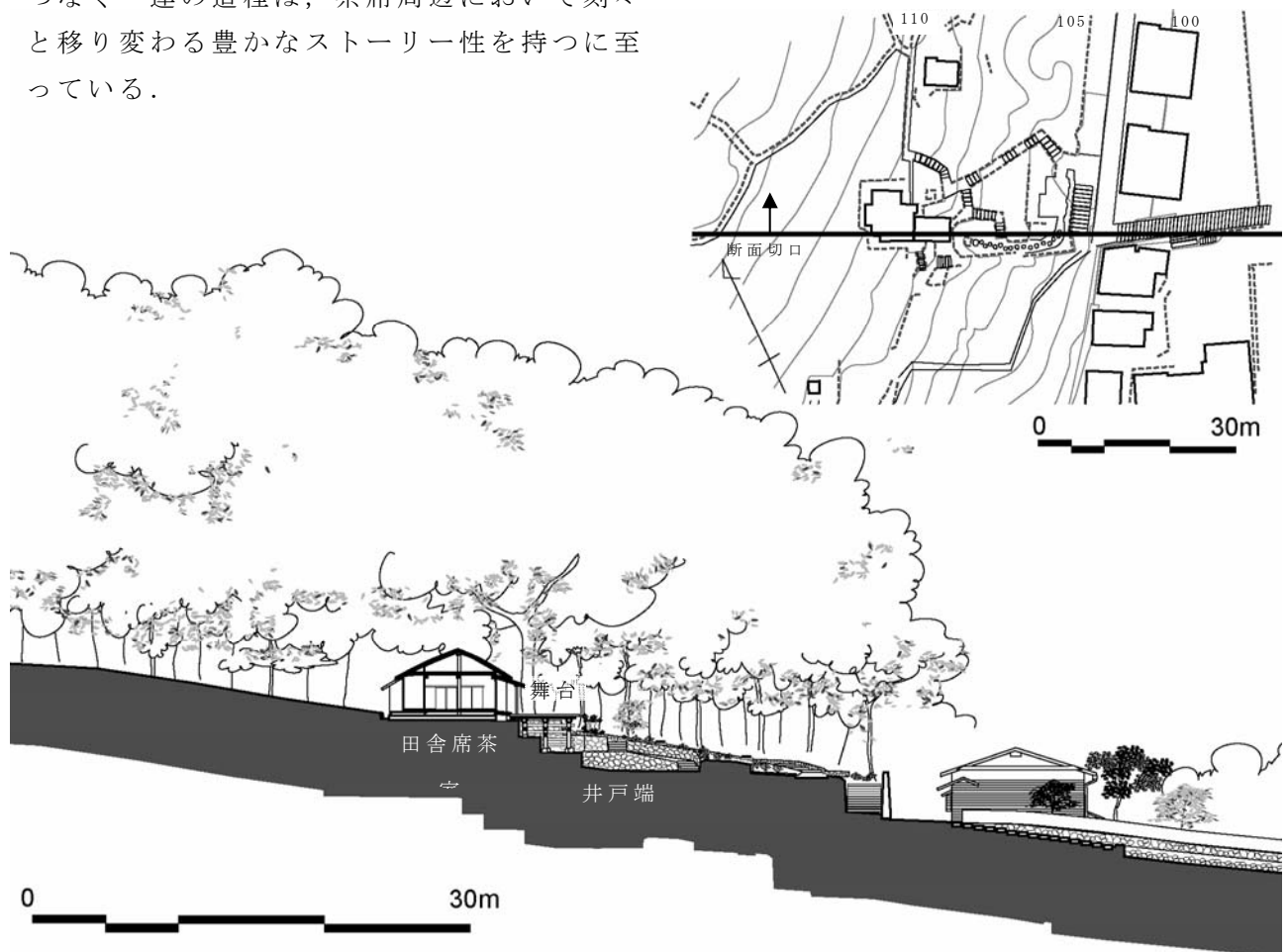


図3-37 田舎席周辺の平面断面図(筆者作成)

そして茶室東側の障子戸を開け放つと，茶席内から舞台に誘導される視線が東山，大文字へ導かれる（図 3-38 の左上写真）．この演出は，舞台と，その先 25m の敷地内にある植栽の高さをコントロールすることによって二重の見切り線が設けられ，借景としての大文字を切り取ることで成立している．

同様に周辺の地形を操作して，斜面から張り出し東向きの眺望を志向するデザインの茶室が，茂庵庭園に多く造られた．現存する三つの茶室は，どれもこの構成に依っている．

茶道では，通常茶室は内向きの世界であり，座敷に至っては積極的に眺望を求めることはされない．しかし茂庵庭園では，こういった慣習に囚われない谷川茂庵の創意工夫によって，進んで眺望を求め，この場所そのものの臨場感を愉しむことを最優先したものと考えられる．



図 3-38 田舎席茶室周辺に造成された地形の詳細と空間の立体的構成（筆者作成）

3 谷川住宅の地形操作と空間構成

谷川住宅の構成は、谷を挟んで1kmほど先に向き合う大文字山，西上に隣接する茂庵庭園を意識したものであることは容易に推測される．ただ居住地としての生活風景の中に，いかにこれらを取り込み構成するのが要点であり，このための創意工夫がこの領域全体に見られる．

1) 段地上に構成された9つのブロック

図3-39は谷川住宅上部の敷地平面図である．実際現地を歩くと複雑な構成で成り立っている印象を受けるが，実際には，9つのブロックを南から3つ，3つ，2つ，1つと，単純に並べた構成になっている．

図3-40の断面図は，実測により谷川住宅敷地を東西に切ったものである．このように，住居と路地の組み合わせが段地の上に乗る構成である．段上では，一部例外を除いて，歩行者のための路地よりも建築が手前（東側）に配置され，図3-41（次頁）のように各建築の二階部分に大きく東側へ開けられた窓から必ず大文字を独占出来るようになっている．

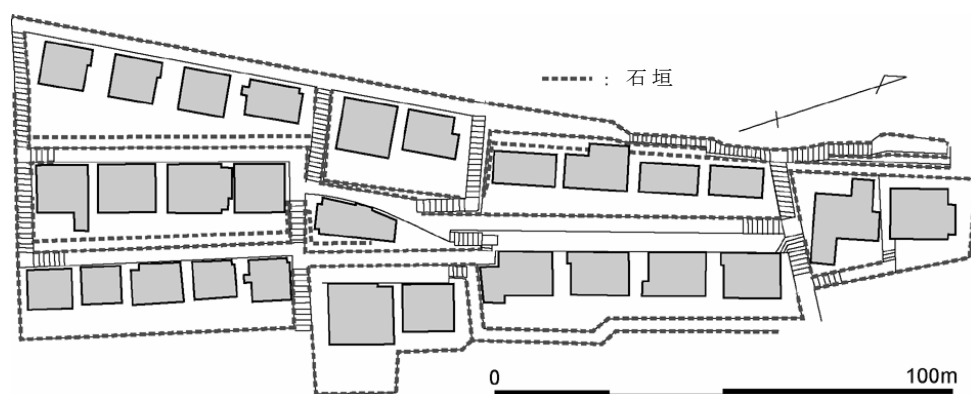


図3-39 谷川住宅上部の敷地構成図（筆者作成）

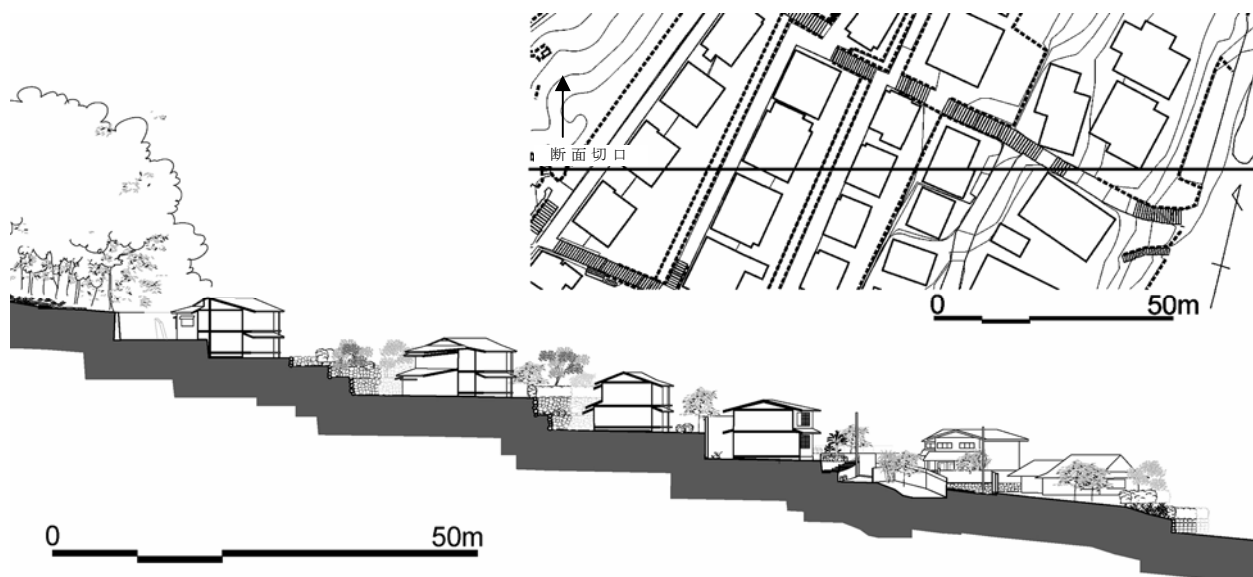


図3-40 谷川住宅平面断面図（筆者作成）

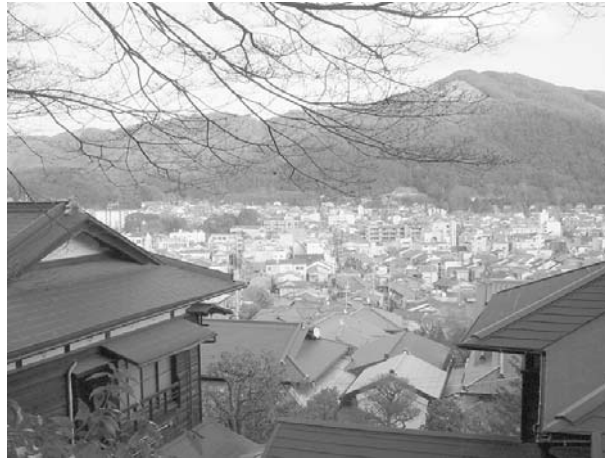


図 3-41 前に並ぶ屋根越しに望む眺望

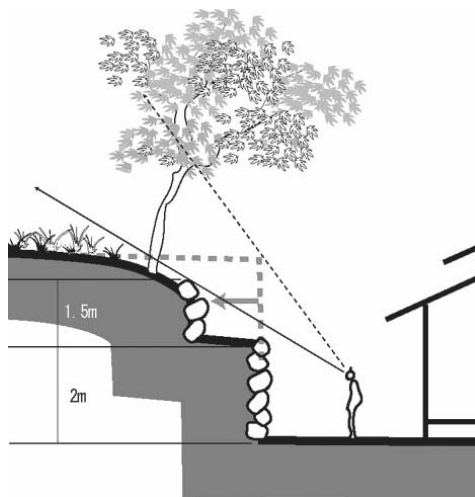


図 3-42 段差のある石垣の効果
模式図（左）とその景観（右）

路地は崖（石垣）と建築に囲まれた落ち着いた空間になっている。東西 20%程の傾斜地を段式にするため出来る各 3 m 以上あるギャップによる圧迫感は、図 3-42 のように、石垣を数段に分け、隙間に刈り込んだ植栽を施すことによって解消することが図られている。これは圧迫感の解決のみならず、同時に住居前に小さな庭のような穏やかな風景を獲得し、住環境の向上へとつながっている。

単純な平面構成で成り立っていることを先に見たが、ブロックを地形に沿わせるため、規則的な並びから、幾らかずらす調整を加えた部分が存在する（次頁の図 3-43 のマークした部分）。ここは上記の地形の基本構造が無法化し重ね合わさる場所になっている。この部分が、石段、石垣、通路の屈曲の組み合わせによって、丁寧に処理されている事により、この領域を歩く人にとっては、不規則に石垣と庭と建築が立ち現れ、思わぬ通路や石段に出会い、景観が急速に移り変わる、大きな視覚的効果を生み出されることになる。

このような人工地形の造りによって生まれた一つ一つの景観が重ね合わさり、次に挙げるような幾つの特徴的な景観を創出することに成功していると考えられる。

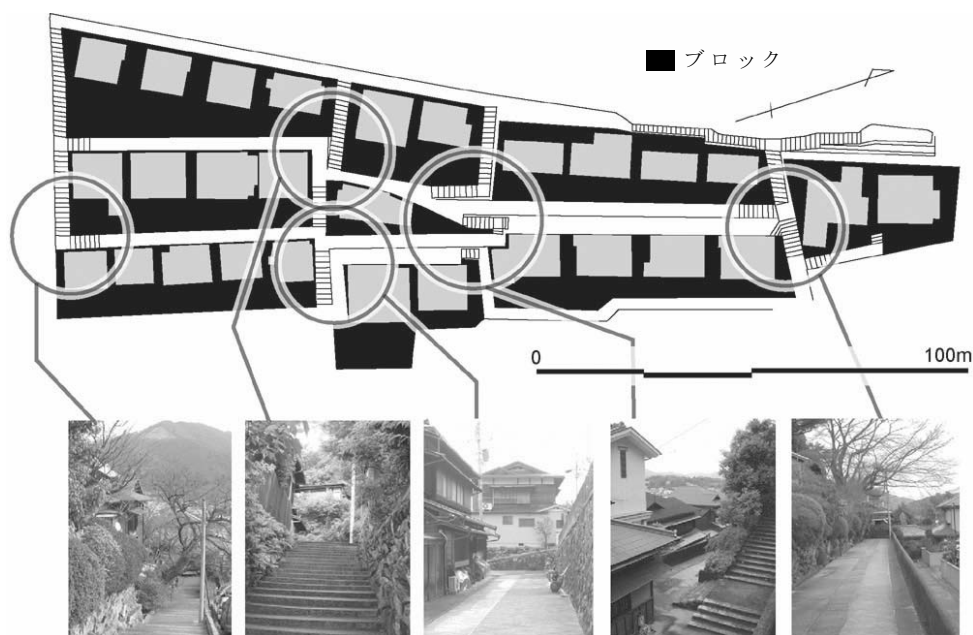


図 3-43
ブロックの不整形
な接続部における
多様な景観処理

2) 丘陵地形に収まる建築の景観

谷川住宅は、麓の神楽岡通から長く続く石段を登った中腹にある。整然と並ぶ家並みの全貌を捉えることは、前面の建築や植栽で遮られて不可能であるが、石段沿いに屋根を重ねる家々の姿を垣間見せる（図 3-44）。谷川住宅の敷地へ至ると、背景には茂庵庭園の森が迫り、その森と調和を見せる戸別に手入れされた庭の植栽に囲まれて木造銅板葺屋根の建築が並ぶ。

先に述べたように、整然と並ぶ区画構成の中の小さなずれが効果的であり、上る石段がまっすぐ森まで続かずに上段の建築とその土台の石垣で突き当たることで、景観に変化が生まれている。また、先に述べたように建築は、どれも東向き眺望を意識して建てられているため、下から見上げると概ね正面向きに揃っている。そして、建築の東側手前には庭が造られている。これは家屋の中からみる眺望に近景を足しあわせる景色の工夫であるのと同時に、またこのように見上げた時に、背景の森と調和する意図も読みとることができる（図 3-45）。



図 3-44 神楽岡通から見上げた谷川住宅



図 3-45 石垣、庭、森に挟まれた谷川住宅

3) 石段からの眺望

段地の構成と家屋の並びに所以して、谷川住宅の領域において、代表的な視対象であるといえる大文字への眺望が動的に移り変わる連続する視点場は、銅板葺屋根と焦げ茶の板壁が特徴的な建築をなめて大文字へ視線を投げかける石段上である。

図3-46は石段から東向きに得られる景観である。地形が大きく下り、そして街を挟んで大きくせり上がって大文字に至るため、通路が示す先の明確な対象物として大文字が演出される。この対象物へ視線が届く間に近景を構成する家並みが、実際の景観演出を左右していると考えられるので、この特徴を明確にする必要がある。

そこで、先の景観と図3-47に示す谷川住宅と隣接する住宅地の景観とを比較する。後者は、東山をより広い視野で捉えて谷間の街も見渡す景観である。この比較は優劣を示すよりも、谷川住宅の景観における近景の構成を明らかにするものである。すなわち、谷川住宅は車によるアクセスを考慮に入っていないために比較的幅の狭い通路を形成していること、そのため住宅の壁面や植栽が迫り、また石段の通路が区画の結節点毎に屈曲しているため、降りる先は半ば隠されていること、さらにこの両者はほぼ同じ傾斜の元地形をもつものであるが（勾配約15%）石段で構成した谷川住宅の通路部分は部分毎により大きな勾配を多様に（25%～45%）作り出していることがあげられる。



図3-46 谷川住宅石段からの眺望



図3-47
周辺宅地からの眺望（図3-46と比較）

4 二つの領域

1) 両者比較による相違点と共通点

以上、茂庵庭園と谷川住宅について、地形操作を主眼に、これに基づく景観上の効果を議論した。ここで、両者を比較することにより、それぞれの特徴を明らかにしたい。

地形の活用の仕方について比較すれば、茂庵庭園においては自然地形を根本として構成されていたのに対して、谷川住宅は区画を造成するための人工的な段地形を根本としてい

た．茂庵庭園における傾斜の操作は，茶室周辺では土地の造成を伴い積極的に行われていたが，全域に関しては，ルートを選択によって体感する傾斜を調節するものであった．対する谷川住宅の傾斜（主に石段部分）は，平場と石段の踏面によって調節され，自由に操作され，これによる視覚的効果が大きかった．

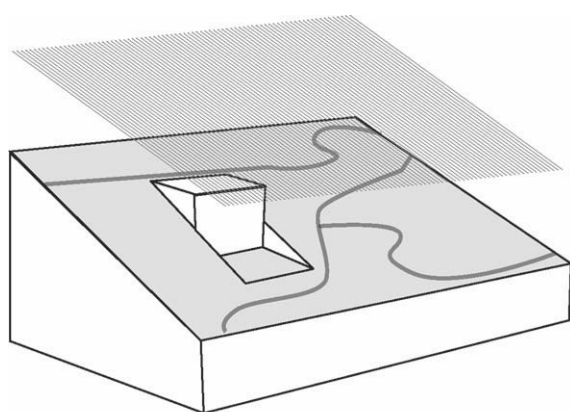
先に見たように，谷川住宅には，地形としての石垣のみならず，建築の壁面が空間を特徴付ける要素になっており，これらの壁面の構成が，眺望を始めとした景観の見えに大きく影響していると言えるが，茂庵庭園においては，概ね地盤の影響によって景観が決定されている．こうした中で，視点場のつくられ方も，茂庵庭園では地盤の構成によって作られ，谷川住宅では区画と壁面の関係から構成されている．

共通点は，二つの領域の経路の意匠に多く見いだすことができる．概ね共通して石畳とセメント，そして石垣によって構成されており，そのデザイン，技術において共通，あるいは連続するデザインが用いられている（図 3-48）．そして，どちらも最も頻繁に用いられる眺望の視対象を「大文字」として，眺望性の高いデザインをしている．こういった共通点が，二つの領域の間に景観的な連続性を創出している．

以上をまとめ，図 3-49 のようなモデルで表すことができる．

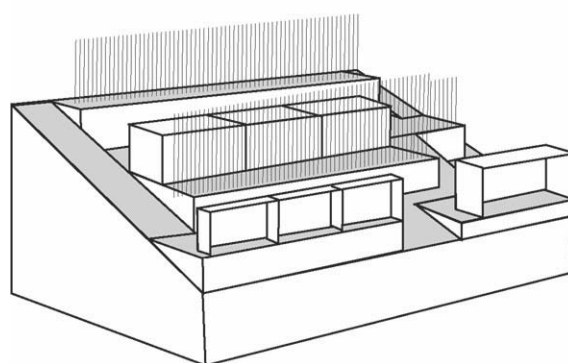


図 3-48 2 領域にわたる意匠・素材の共通性，連続性



茂庵庭園

自然地形（傾斜地）のまま
急傾斜を避けるルート選択された回遊式苑路
斜面上の立場が景観を決定



谷川住宅

人工地形（段地形）に改変
ブロックの合間を縫う路地と石段
壁面（石垣，建築）の組み合わせが景観を決定

図 3-49 茂庵庭園と谷川住宅の基本構成比較

2) 茂庵庭園と谷川住宅の都市環境的位置づけ

こうした比較から明らかにされる各領域の特徴を、これらの位置の関係として考察する(図3-50)。

茂庵庭園は、吉田山の稜線から東側の中腹までを占める領域であり、その大部分は自然地形に任せている領域であった。そして、その中に部分的に存在する山居が設けられていた。これが都市の中では最も山深くに位置し、日常から離れた山の演出となる。

谷川住宅は、人工的に造成された都市的な立場ではあるが、深山の茂庵庭園と同じ自然素材とパターンのデザインが多用され、また各敷地内の庭園からあふれた植栽により、自然の表現が立面として現れ、都市と山の間間的演出がされている。

茂庵庭園の領域から谷川住宅を見れば、整然とした屋根の連なりが都市的印象を与え、茂庵庭園の視点場を相対的に山中に感じさせる。谷川住宅の領域から茂庵庭園を眺めると、上空の樹木によって覆われた姿は、谷川住宅に迫る森として映る。このように谷川住宅と茂庵庭園の間に設けられた3m程度の擁壁により、二つの領域は、断絶よりもむしろ接続の関係を持つ。

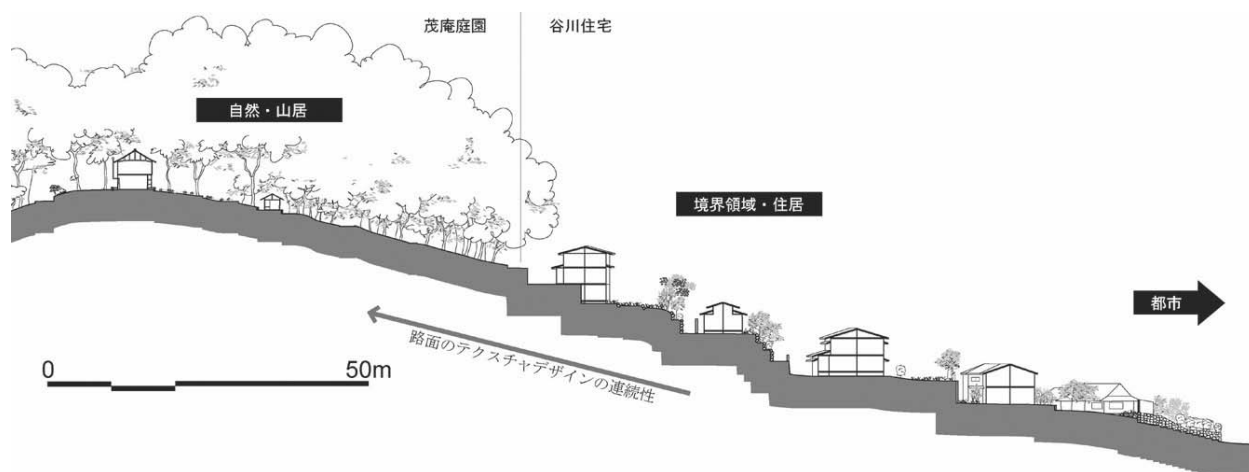


図3-50 吉田山北東部斜面における自然・都市系の立場

5 結語

以上より，吉田山北東部斜面開発における地形操作を元にした空間デザインの創意工夫が明らかになった．

二つの領域における地形の傾斜は同程度であるが，その活用の仕方が異なっていた．地形が卓越する茂庵庭園と，作られた立面が卓越する谷川住宅の対比が明らかになり，また二つの領域に連続性を与えるのは，共通する意匠のデザインと，共通する視対象，すなわち谷を挟んで先に望む「大文字」であったことが明らかになった．伝統を踏まえた茶室の空間にさえ，このグランドデザインとも言える大景観への志向があり，地形的好条件を活かして視点場を設け，それぞれの秩序で近景を整えることで実現されていることが明らかとなった．

これら二つの領域の関係は，吉田山に自然から都市的景観へ至る階層をなしていた．大正末期の都市計画に則り，吉田山以東に初めて住宅開発が始まったが，先駆けとしてなされたこれらの領域の開発が，吉田山の自然から都市へ連続する一つの秩序を形成した事は意義深い．

この秩序の中でこそ，最も自然的な領域に自由闊達な数寄の文化を根付かせ，さらに中腹に続けて演出的な自然を持つ居住領域には文人の文化を育ませた（京都大学教官のための借家とした事実がある）谷川茂庵の計画意図は十分に繁栄されたといえるのではないだろうか．このようにして形作られた，自然と人為を程よく馴染ませた構成は，その後にここを利用する人々に，文化的意識を持たせるに至り，現在でも諸活動の舞台として活用されている．

3-4 向かい合う丘陵地間のデザイン

1 対象地の敷地

先にも述べたように、神楽岡地域の近代において、新しい丘陵地の景観創造として、前節に述べた北東部開発よりも以前に、しかも印象的につくられたのは、宗忠神社の東参道ではなかっただろうか。図3-51⁶⁴⁾の写真は、この参道が造られる以前のこの地を東向きに撮影したものである。この風景はそれだけで、岡の向かい合う谷の地形上に広がる牧歌的な農園と、坂を登ったところに大きな堂塔が岡の木立の中に収まっており、一つの特性景を成していると思われる。これだけの景観的なポテンシャルをもつ場所に、直線的な参道を設けたことにより、少なくともこの地形が作る特殊な景観とその方向が強く印象づけられることになった。たとえば、昭和7年に発行された『大京都誌』において、

…山上には「宗忠神社」があり、社前の石階は頗る高く、真如堂の多寶塔は眼下に聳え、その風向は實に描けるが如くである。石階を下れば、陽成天皇の「神楽岡東陵」がある。…⁶⁵⁾

と、「名勝舊蹟 神楽岡」の紹介文5行中2行を裂いて記述されている。

第2章で述べたように、大正末期には宅地開発がこの吉田山の裏側でも始まり、この谷間は次第に宅地で埋められていった。その中で、昭和7年(1932)に東伏見宮家の別荘として「吉田山荘」が、宗忠神社参道に並べて造営された。この山荘は、その外部からも、敷地内の植栽や建築が印象的な風景を創ることになった。

この吉田山南東部斜面から紫雲山に至る領域の敷地割及び道は、現在では次頁図3-52のような構成になっている。先に示した原形としての道は、新しくできた参道と、ほぼ並行に走っている。かつてはこの原形としての道が図中の太線で示すように、吉田神社から

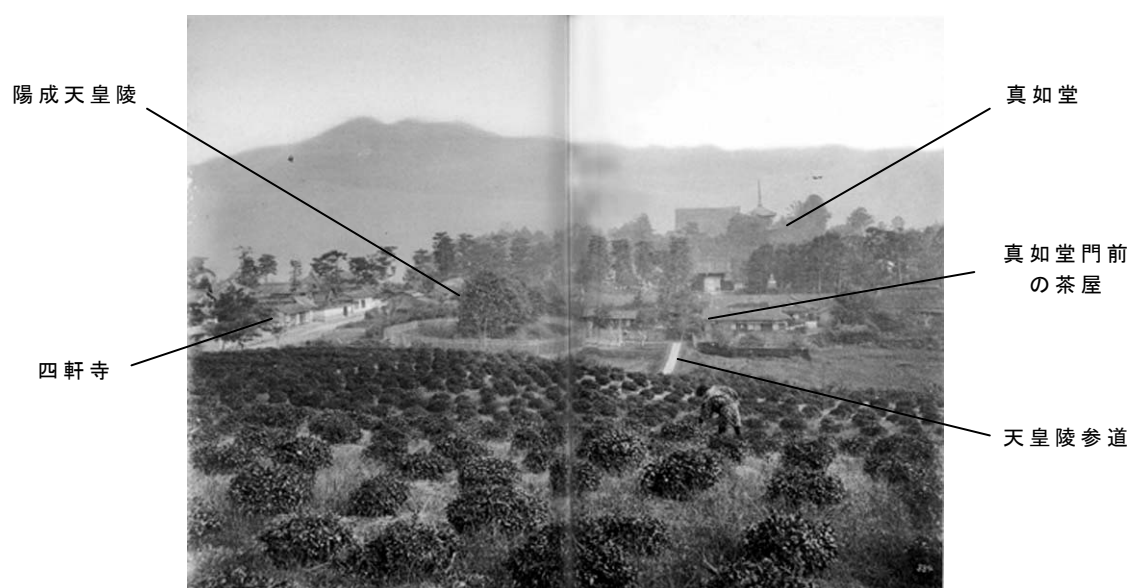


図3-51 明治初期の吉田山から南東を向く景観

後一条天皇陵の脇を東へ降り，麓に並ぶ茶屋と四軒寺の門前から，南へ直角に折れて真如堂の門前の茶屋町へ至っていた。

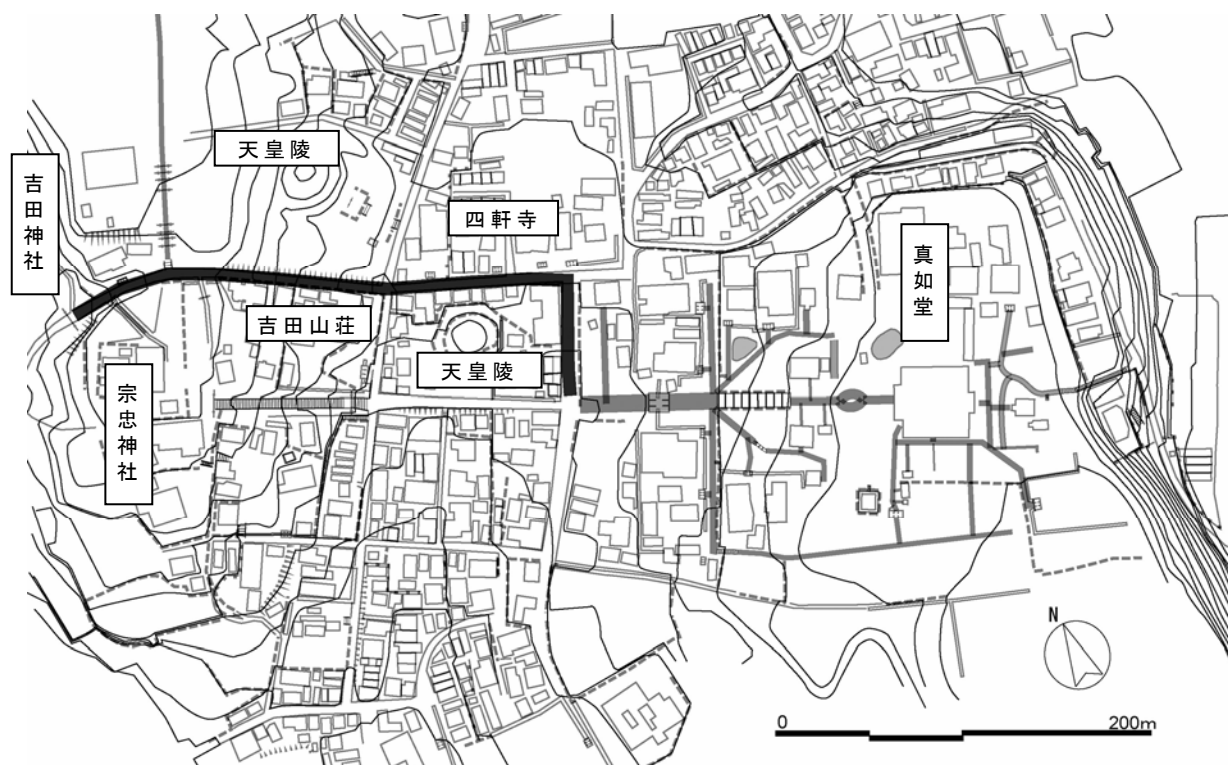


図 3-52 吉田山と紫雲山の間の領域（筆者作成）

2 宗忠神社参道の形成

本章の始めに記したように，宗忠神社は幕末文久2年（1862）の建立である．吉田山南東の東西十三間，南北三十八間の敷地を吉田神社から金百両で永借されたものである．当時は図 3-53⁶⁶⁾（次頁）にみるように，北側に門があり，堂宇も限られていた．先に示した図 3-51 の景観はこの頃のものである．この境内の社殿は，正面を真東に向けてはおらず，南東を向いていた．日拝を重要とする黒住教の社殿であるにも関わらず，この地において特有の方向を重んじたと考えざるを得ない．すなわち，吉田山の丘陵地形は，南部を西側に振る形をしている．そのため南半分で尾根は北東－南西の軸となり，例えば吉田山中腹の竹中稲荷の長い参道はこの軸に沿って走っている．これを一つの規律とすれば，もう一つの軸はこれと直行する南東－北西の軸となり，矩形の堂宇を収まりよく配置するならば，この向きは理に適っている．このように地形に従い社殿の向く先には，紫雲山をなだらかに上がる傾斜と真如堂の伽藍が象徴的に存在した．なれば宗忠神社の建立の際に，教義の真東向きを徹底することよりも，あえてこの方向の景観美を選択したことは明らかである．

宗忠神社は建立から 50 年を経た明治 45 年（1912）に，「社殿腐朽破損シ修理ニモ堪エザルニ至リシカバ崇敬者ハ境内隣接民有地ニ新ニ社殿ヲ建築寄附シタルニヨリ神社官有境内地交換並社殿移轉ノ許可ヲ得テ⁶⁷⁾」，大改築を実施した．図 3-54⁶⁸⁾（次頁）により拡張・

た．ただし，ここには陽成天皇陵があり，南に正面をむける陵墓へ回り込むために吉田山の麓から陵の前まで延びる里道があったことが，先の図 3-51 の写真から推察できる．明治初期の真如堂門前には，建築が立ち並んでいた．しかし，宗忠神社の参道が東へ延びたと同時期に，それは陽成天皇陵前の里道と接続し，さらに真如堂の門前まで延びた．明治 28 年（1895）の地図に初めてそれが記されている（図 3-55⁷¹⁾）．

こうして形成された宗忠神社の東参道は，真如堂の参道へ下弦の弧を描いて続く．この地理的特徴が作る景観は，宗忠神社境内から東へ降りる時に，図 3-56 のように直線の道上でダイナミックに視対象（真如堂の門，本堂と三重の塔）との関係を転換する愉しみを備え，吉田山が紫雲山と向き合う南東方向を改めて象徴的に示した．

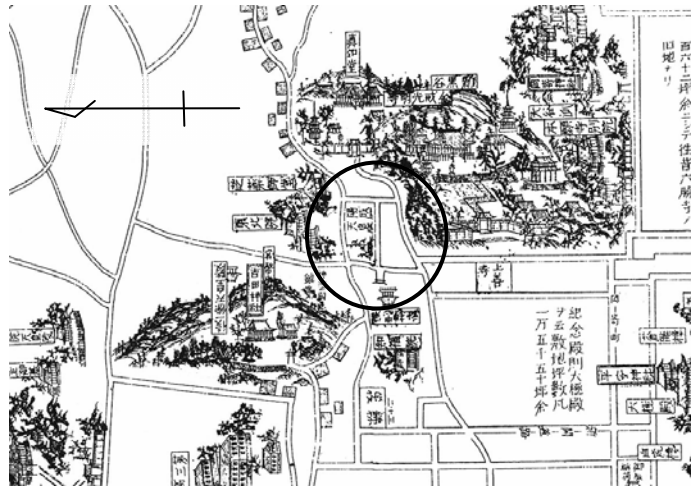


図 3-55 明治 28 年（1895）の地図に現れた宗忠神社参道と続く道



図 3-56 宗忠神社参道から真如堂へ向かう方向の動的景観

3 吉田山荘の景観デザイン

宗忠神社に東参道が設けられ、石段と桜並木が付加されると、真如堂へむけての強力な軸線が生まれたが、周囲においてもこの方向の景観が求められるようになった。昭和7年（1932）宗忠神社の東、後一条天皇陵の南隣に建設された東伏見宮の別邸は、その最たるものであり、かつ極めて質の高い例であると言えよう。

東伏見宮家は昭和22年（1947）に廃止となり、その翌年の昭和23年（1948）に東伏見宮別邸は、敷地内の構成をそのままに料理旅館「吉田山荘」として生まれ変わり、現在にもその経営が続いている。このため、現在の吉田山荘を観察する事で、竣工当時の景観の構成を概ね知ることができる。

1) 建築と庭園の配置

吉田山荘全体の構成は図3-57のようになっている。敷地の概形は長方形であるが、既存の道、つまり吉田神社東参道と宗忠神社参道に規定されて、東西南北に四つ角を向けている。

主要な建築（以下本館とよぶ）は北側半分を占め、南側の庭園と対峙している。本館は敷地に合わせて矩形の角を東西南北にそれぞれ向けており、南東面を正面玄関にし、南西面を庭園へ向けている。

庭園の地形は離れの建つ東角が最も高く、西へ向かって下る傾斜であるが、本館部分の地形はほぼ傾斜のない平場である。

平場は大規模な土地造成によって造られており、最下部から4mほどを石垣によって立ち上げられた位置にあり、眺望性が高い。

アプローチは車道として大きく造られ、本館の平場に至るまでに4mほどの高低差を上げるため、敷地全体の1/4弱ほどの面積を占めている。

吉田山荘において感じられる文化の雰囲気は、広大な庭園に囲まれた空間で寛とした時間を過ごす体験によるところが大きいと思われるが、上記のようにアプローチによって庭園が大きく後退した敷地構成からは、実際に体験する空間的な広がりが見えきれない。これは、この敷地を最大限に活用した、視線操作による演出が平面構成を凌駕しているからに他ならない。そもそも吉田山荘の領域では、建築と庭園、そしてアプローチが一体的に構成されている。以下において、その構成のデザインを分析する。

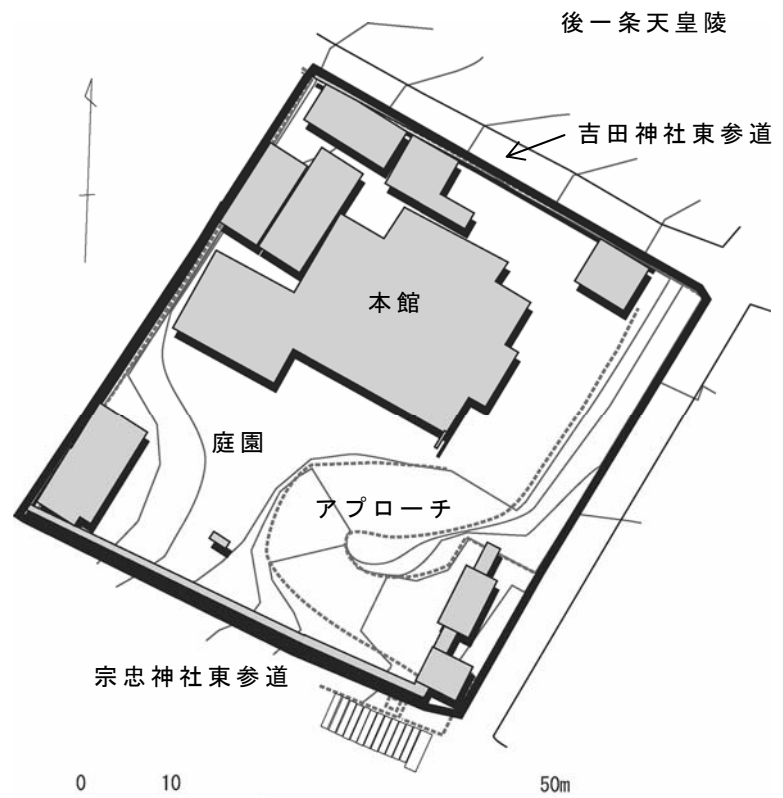


図3-57 吉田山荘の平面構成（筆者作成）

2) 内部への導入

吉田山荘のアプローチは(図3-58)、法隆寺宮大工棟梁の西岡常一によって造られたという大きな唐門に始まり(a)、奥に控える深い森を想像させる滑らかに上へ繋がる植栽(b)がされた道なりに大きく廻ると、本館の姿が現れ(c)、東側の植樹の隙間から東山の稜線があらわれる(d)。やがて道は東向きの本館入口前の広場に続く(e)。このようなアプローチ空間の景観構成は、道を大きく曲げる事による「見え隠れ」と、植栽によって遠景を想像させる演出を孕みつつ、山荘の内部へと誘うものである。導かれて到達すると、一挙に外部景観へ向かう視界を得る事になる。

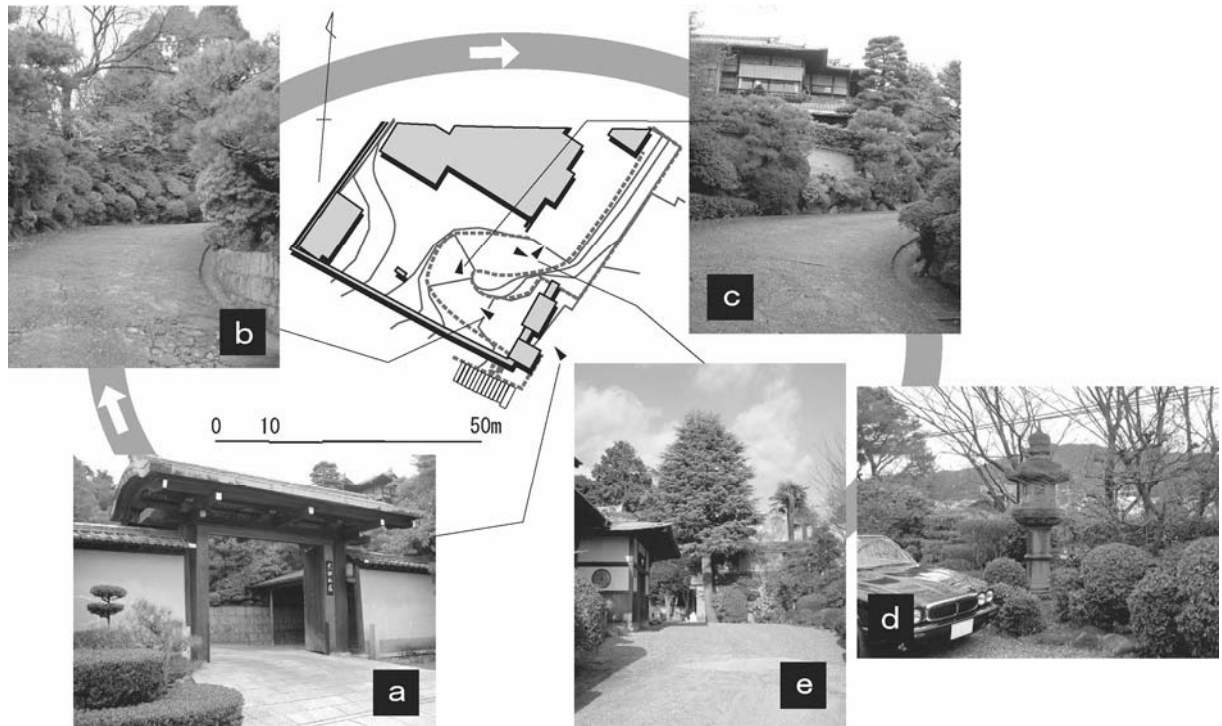


図3-58 吉田山荘のアプローチ景観(筆者作成)

実際の庭園の形は、先に見たようにアプローチのスロープが張り出す事によって、大きく決まっている。このため、本館南の庭園面積がかなり制限されているが、ここでは、この凹型の空間を、逆に凸型に張り出す自然の要素として演出する図3-59のような工夫がみられる。すなわちスロープと庭園の境界部の植栽を厚く植え、それらの丈を背後の土塀をやや越える程度に揃えて刈り込む。土塀の背後(アプローチ内側)の樹木の植栽がその上に続く。これらの陰に隠れて見えないスロープの上を、庭園に立つ人の視線は走る。こうして庭園の開放感が得られるのみならず、紫雲山、さらには東山までを含む大景観が、意図的に創られている。

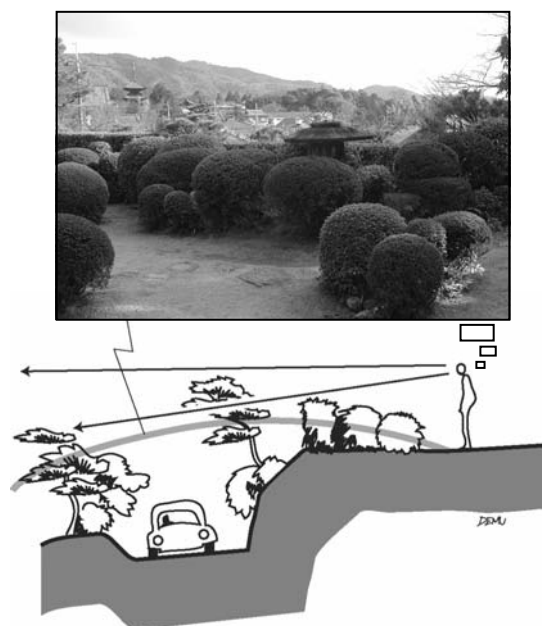


図3-59 植栽による視線誘導(筆者作成)

3) 志向された眺望

吉田山荘敷地内の景観には、大きく3つの方向がある。

一つは堂々たる宮廷建築の本館へ集中する視線である。これは敷地内のあらゆる場所から向けられるものであり、これらの視線に対して本館は、揺るぎのない緊張感を持っている。縦横のラインで構成され、またディテールに至っては昭和初期の時代を現すアールデコ調のシンプルかつ力強いデザインもこの規律に従っている。これらを覆う瓦屋根と大きな銅板葺きの庇は本館のシルエットを重量感あるものになっている(図3-60)。



図3-60 庭園から眺める吉田山荘本館

二つめは庭園そのものへ向かう視線である。園内の視線は概ね西向き、つまり傾斜を見上げる方向が主とされる。庭園の入口は、東の先端であり、図3-61のように袖垣横の飛石に誘導されて、袖垣を迂回して入る。袖垣に隠されていた庭の景観が、このとき目の前に突如として現れる(図3-62)。つまり、左手は先に述べたように外への広がりをもつ剪定された植樹によって、右手は本館の壁によって挟まれて、視線が誘導されるこの正面には、庭園内の剪定された樹木が、視点場からの距離が増すほど斜面によってしだいに高い場所に配置され、そして樹木自身の丈も高くなり、敷地境界周辺では仰角30°ほどの高木がそびえる。杉の高木は、この西上にあたる宗忠神社周辺にも育っており、庭園内の高木に敷地の高低差を加えてさらに上方へそびえて、苑内の高木と連続性を持って見えるため、庭園の境界を無限に遠くへ感じさせている。このように視線は上へと誘導され、平面的な奥行きに、高さを加えた3次元的な距離を庭の広さとして受け止める(次頁図3-63)。これが広大な庭園の立ち現れる仕組みである。



図3-61 庭園入口の袖垣



図3-62 突如として現れる広大な庭園

そして三つめの最重要とされる視線は、

東向きから南向きに亘り，敷地外部へむかう眺望である．それは庭園内から見せる真如堂への眺望と，座して眺める建築からのものがある．

園内から真如堂へ向かう眺望は，先に見たような視線対象へむかう方向に連続性を想像させる見切り（図 3-59）によって成立するものである．また，園内奥の離れに向かい千鳥打ち飛び石の小径を巡ると，再び眺望が立ち現れる．この小径は視線の方向を変える装置として働き，先の見切りの上に，さらに中高木や潜ってきた中門で見切りをつくり，東側へ誘導された視線の先に，斜に構えた大文字が現れるのである（図 3-64）．

建築の構造が細い柱を多用したものである為，建築 1 階から見る庭園の風景は，部屋の中において庭園の臨場感が極めて高く，壁面を開け放つと庭園と一体の空間を演出でき，実際に現在行われているようにコンサートなどの催しの雰囲気が高める．

建築 2 階の視点場では，東向きに東山の稜線が続き，南向きは岡崎公園を抜けて京都駅まで視界が届く．建築と庭園の配置からして，庭園は西へ展開する為，庭園と眺望を見る向きは異なるが，この視点場では左右にその両方を楽しむことができる．さらに庭園の範囲の敷地周囲やアプローチの袖，さらには宗忠神社参道などにおける豊富な植栽が，眺望に重ねられている（図 3-65）．

以上のように，吉田山荘では建築と庭園が一体に造られ，さらに庭園外にも豊富な植栽でデザインされている．そしてこの地の地形特性を的確に把握して，別荘を建設したらしく，主として向かう眺望として紫雲山へ向けてのもの，あるいは紫雲山を透かして東山を望むものが強烈にアピールされた．

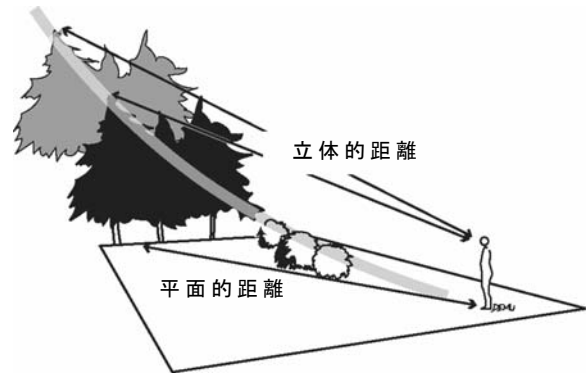


図 3-63 連続する自然を庭園へ取り込む

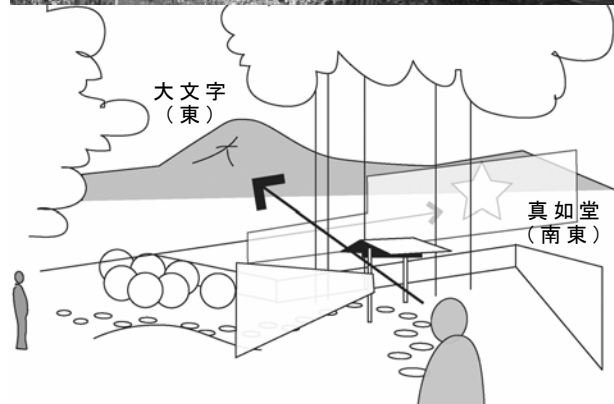


図 3-64 東へ誘導される視線とその景観



図 3-65 本館二階からの眺望へ重ねられる近景

4 結語

以上本節では、この領域の特性景を形成した宗忠神社参道、吉田山荘について、その景観を形づくる物理的構成、そして意識された方向を分析した。

近代になされた吉田山南東部の斜面における開発は、宗忠神社参道とその前の道の敷設にはじまり、この参道の北隣の敷地に東伏見宮別邸が造営されて、東へ向かう景観を大きく変容させるものであった。それは、3-1で確認したように、独立する二つの丘陵地が道によって間接的につながっていた近世の状態から、直接視覚的に結びつけられていく過程であった。

すなわち、宗忠神社がその構成の方向だけでなく、参道を真如堂へダイレクトにつなぐ事を選択して以降、吉田山と紫雲山の間に視覚的な直接的関係ができた。東伏見宮別邸（吉田山荘）の造営は、眺望を志向する敷地の造成、建築の配置、庭園・植栽の創造によって、この新しく方向付けられた景観を丁寧に築き上げた。

都市化の波が押し寄せる中、この山辺に公共の庭園ともいえる参道がつくられ、新たな風景美が生まれ、全く時を同じくして同じ景観の方向を重視する吉田山荘の庭園美が培われたことは興味深い。吉田山と紫雲山、あるいは吉田山と東山の向き合う谷間の地が、こうして一つの景観域として認識されるようになり、その山辺の安寧によって宅地化の混乱から守られたのではないだろうか。

3-5 まとめ

以上の分析，考察における主要な成果は以下の通りである．

第一に，神楽岡地域における敷地割と道の構成の原形を把握するために，地形及び社寺領域における空間構成を，地形資料や絵図，文献史料を用いて分析した．その結果，地域内の丘陵上に分布する社寺領域の参道と，その延長として地域を巡る道には，関連が強く，地域全体がこれらの社寺領域を中心に成り立っていた事を明らかにした．また，そこから街路網の原形を見出した．

続いて，この地域における人の営為，主に遊びの場について，近世におけるスタイルと近代以降のスタイルをそれぞれ，文献史料やヒアリング調査によって分析して整理した．その結果，近世には参道としての性格を強く持つ経路周辺に展開した茶屋からなる遊び場と，その経路から外れる林地などの領域において，簡易な装置を用いた野遊びが頻繁に行われていた事を明らかにした．近代には遊びの場と性格が大きく変容し，数寄空間を設えての遊びが行われたことと，それでも継承された野遊びの要素を明らかにした．

そして，近代以降に大きく変容した部分について，その新たな特性景となった二つの領域について，文献資料の収集，現地踏査を行い，必要箇所の現地実測，空間を表す図面の作成により，その空間構成を分析した．その結果，吉田山北東部斜面では，その宅地開発がデザインの的に意識の高い優れたものであり，その上部に造営された大規模な回遊式の数寄空間と併せて計画されたものであったことが明らかにされた．さらに，これらの構成は東向きに主眼をおいており，改めてデザインされた大文字山へ向かう眺望が得られる視点場が，要所に配置された．そして，この統一したテーマの中に，場所に応じた構成上の工夫がされていたことを明らかにした．すなわち，上部の広域な茶庭においては，自然地形を極力活かした回遊式の空間を創り，その下部の住宅地は人為的に段地形に造成した敷地に石垣，路地，建築を配置した壁面の際立つ空間を創ることで，それぞれの丘陵地上の立場が秩序付けられ，山頂から麓までの自然域を，段階的に都市へ近づける事に成功していた．

吉田山南東部斜面では，宗忠神社の参道が造られたこと，吉田山荘が造営されたことが，真如堂やその背景の東山連峰へ向きあう新たな景観創造の契機となったことを明らかにした．この景観が周辺の宅地造成期に先駆けて行われ，この谷間の近代の景観を決定づけたことが分かった．

かつて社寺領域が空間を決定していたこの地域において，上記のように近代に行われた広域で良質な空間造りによって，山辺の風景は一変したが，第2章でみたように，この背景には都市化の文脈があり，宅地開発がこの近辺で盛んに行われるようになって急激に起こった変容であった．それは，かつては社寺領域として保証されており，野遊びなどの場ともなった広い斜面地に，目の利く開発者が場所を押さえて，場に調和するためにデザイン上の工夫を凝らした結果であった．そのために，急激な変化ではあったが，即席に拵えたものではなく，数寄の文化や伝統に基づきながら，施主の自由な発想がデザインに現れたものであった．

こうして，近世においては社寺領域内外の参道を軸として構成された地域にあって，門前の茶屋や経路外の林地において，非日常を堪能する場であった神楽岡地域は，近代にな

された開発，とりわけ茶室などの数寄空間を始めとする，山辺における調和のデザインの試み，場所の新たな解釈によって，良質の景観が日常的な場に還元されて，丘陵地を含む地域ごと再構成された．

◇第3章 参考文献

- 1) 「サライ」編集部『私のとおきおきの京都』（小学館，1998.4） p. 82
- 2) 樋口忠彦『日本の景観』（ちくま学芸文庫，1993.1） p. 140
- 3) 『京都市の地名』（平凡社，1979.9）
- 4) 『寺院神社大事典 京都・山城』（平凡社，1997.2）
- 5) 『京都の歴史』全十巻（京都市，1979.1-1980.3）
- 7) 前掲『京都市の地名』 p. 142
- 8) 同上
- 9) 『京都の歴史 第7巻』（京都市，1979.10） p. 342-344
- 10) 『京都の歴史 第3巻』（京都市，1979.4） p. 182
- 11) 前掲『京都市の地名』 p. 142
- 11) 同書 pp. 147-148
- 13) 前掲『寺院神社大事典 京都・山城』 p. 266
- 14) 前掲『京都市の地名』 p. 159
- 15) 晴翁木村明啓『花洛名勝図会』（笹屋成兵衛，1862.9） 東山二ノ三十一
- 16) 前掲『京都の歴史 第7巻』 p. 345
- 17) 橋本順行『吉田神社志』（吉田神社社務所，1913.3） p. 82
- 18) 前掲『花洛名勝図会』 東山二ノ五十一-五十二
- 19) 前掲『吉田神社志』 p. 34
- 20) 「吉田神社境内外区別実測図」（『京都府庁文書』京都府立総合資料館所蔵） 社寺境内外区別取調 45
- 21) 中嶋節子「近代京都における「神苑」の創出 京都の都市環境と緑地に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集 第493号』1997.3，p. 238）
- 22) 藤田勝也「吉田村社家町ならびに社家住宅の史的考察」（京都大学工学部卒業論文，1982.3） p. 44
- 23) 鈴鹿隆男『吉田探訪誌』（ナカニシヤ出版，2000.12） p. 190
- 24) 「京都3千分の1地形図 吉田」（都市計画京都地方委員会，1935）
- 25) 今井貴久『日本名所図会全集 都名所図会全』（名著普及会，1975.5） pp. 262-263
- 26) 前掲『花洛名勝図会』 東山二ノ三十五-三十六
- 27) 「元禄十四年實測大絵図」（『慶長昭和京都地図集成』大塚隆，柏書房，1994.6 10-B）
- 28) 前掲『都名所図会』 pp. 260-261
- 29) 前掲『花洛名勝図会』 東山二ノ三十九-四十一
- 30) 前掲「元禄十四年實測大絵図」
- 31) 「改正京都御絵図細見大成」（前掲『慶長昭和京都地図集成』 15-B）
- 32) 「金戒光明寺境内外区別実測図」（『京都府庁文書』京都府立総合資料館蔵 社寺境内外区別取調 45）
- 33) 前掲『京都市の地名』 p. 160
- 34) 前掲『慶長昭和京都地図集成』／都市計画京都地方委員会「京都3千分1地形図」1922-1929／大日本帝国陸地測量部「地形図 大文字山」1940-1951／京都市参事会「京都市地図」1895／参謀本部陸地測量部「地形図 京都」1889 他
- 35) 藤田勝也「吉田村社家町ならびに社家住宅の史的考察」（京都大学工学部建築学科卒業論文，1982.3）
- 36) 『吉田山写真帖』（京都府立総合資料館蔵，詳細年月不明）
- 37) 前掲『花洛名勝図会』 東山二ノ四十一と四十七
- 38) 谷重遠『東遊草』（『史料京都見聞記一』駒敏郎ら，法蔵館，1991.9） p. 248
- 39) 清川八郎『西遊草』（『史料京都見聞記三』駒敏郎ら，法蔵館，1991.11） p. 315
- 40) 貝原益軒『京城勝覧』（『京都叢書第15巻 京城勝覧・都名所車』，1915） p. 8
- 41) 前掲『都名所図会』 pp. 264-265
- 42) 野中凡童『大京都誌』（東亞通信社，1933.6） p. 691
- 43) 前掲『吉田山写真帖』
- 44) 高橋康夫「京都と山並み」（『図集日本都市史』東京大学出版会，1997.7） p. 301
- 45) 井口洋『都林泉名勝図会』（柳原書店，1975.6） pp. 174-175
- 46) 前掲『花洛名勝図会』 東山二ノ四十九

-
- 47) 碓井小三郎『京都坊目誌 上京之部 坤』(『京都叢書第十六卷』京都叢書発行会, 1935.1) p.366
- 48) 中川等「近代京都における住宅の発展に関する考察 吉田神楽岡町を事例として」(京都大学工学部卒業論文, 1980.3) pp.9-10
- 49) 『角川茶道大事典 第2巻』(角川書店, 1990.5) p.839
- 50) 重森三玲『茶室茶庭辞典』(誠文堂新光社, 1973.6) p.622
- 51) 今日庵『茶道月報大正十五年八月号』1926.8 pp.74-75
- 52) 今日庵『茶道月報大正十五年十二月号』1926.12 p.55
- 53) 今日庵『茶道月報昭和二年十一月号』1926.11 p.63
- 54) 今日庵『茶道月報昭和三年二月号』1928.2 pp.41-43
- 55) 今日庵『茶道月報昭和三年一月号』1928.1 附図
- 56) 今日庵『茶道月報大正十五年十二月号』1926.12 p.55
- 57) 今日庵『茶道月報昭和三年十二月号』1928.12 pp.51-52
- 58) 今日庵『茶道月報昭和六年十二月号』1931.1 pp.72-74
- 59) 大日本帝國陸地測量部「二万分一地形圖京都近傍十二號京都北部」1912.8
- 60) 地理調査所「1:10,000 地形圖京都近傍2號大文字山」1955.1
- 61) 「吉田神社境内外区別実測図」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調3)
- 62) 「改正京町御絵図細見大成」(前掲『慶長昭和京都地図集成』15-B) に敷地が示される
- 63) 今日庵『茶道月報大正15年8月号～昭和3年12月号』1926-1928
- 64) 吉田光邦『京都百年パノラマ写真館』(淡交社, 1992) pp.56-57
- 65) 前掲『大京都誌』 p.691
- 66) 「愛宕郡吉田山宗忠神社境内」(前掲『京都府庁文書』 社寺明細帳2)
- 67) 前掲『京都府庁文書』 社寺明細帳附録36
- 68) 同上
- 69) 宗忠神社『御両社並境内大改築寄附簿』(宗忠神社蔵, 1894)
- 70) 2003年7月15日の筆者による宗忠神社ヒアリング調査
- 71) 「新撰京都古今全図」(前掲『慶長昭和京都地図集成』) 18-A

第4章

疏水周辺のデザイン — 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子

前章の分析より、山辺を占地した社寺境内を中心として人の行楽の拠点となる空間構成が近世までに成熟し、近代になって場所の利を活かした新たな空間創造に成功した特異な構図が明らかになった。この近代に再形成された景観は、都市化の文脈の中で、近世までとは異なる構築によって形成されたものであった。続けて本章で行うケーススタディの対象は、本来は典型的な郊外名所地であった場所が、近代以降に急速に進む都市化の中に、時を得て形成された複合景観域である。

本章では、大文字山の麓にあたる浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の領域、すなわち北は慈照寺より、南を若王子神社に至る、背景の緩やかな山並みと白川の間に囲まれた領域を対象とする（図4-1）。この領域は、洛中との間に吉田山や紫雲山が障壁の働きをしたために、東山の並びの中でも一層奥地にあたり、それ故に葬送の地や隠遁の地、あるいは宗教世界を培う地などとして非日常的な世界が創造されてきた。しかし、近代に登場した最重要な都市インフラストラクチャーの一つである琵琶湖疏水の支線がこの領域を縦断し、空間構成の変容が始まった。その後、疏水沿いに出来た「哲学の道」を中心として人の出入りが多くなり、同時に都市化、観光化の波も押し寄せた。

ここではこれらの疏水縁を軸とした浄土寺・鹿ヶ谷・若王子を対象として、絵図その他の史料と実際の地形から本景域の原形を探る。続いて近代化を通して現在に至る新たな景域形成の過程を把握し、この領域に成立した空間構成とその意味を明らかにする。従って議論は以下の手順（図4-2）で進められる。

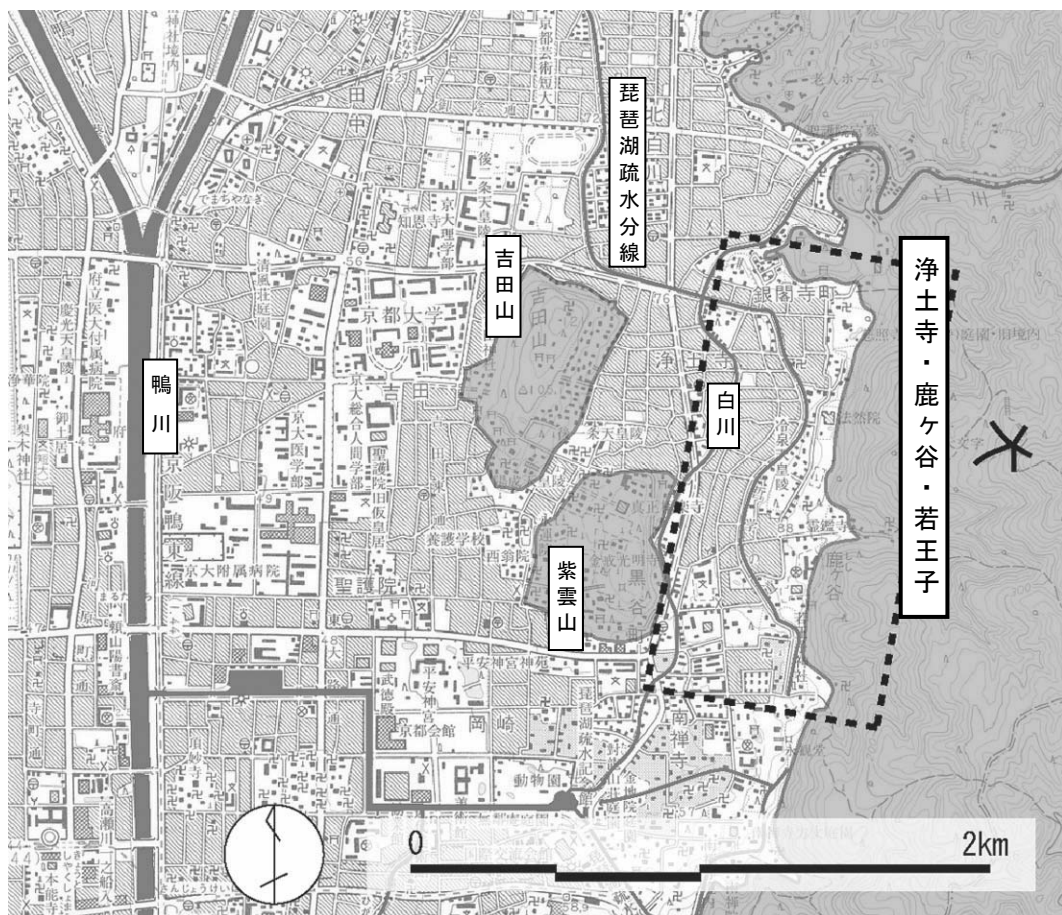


図4-1 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の位置

近世までの景観領域

近代前に名所が連なっていた対象地域は、実際どのような景観だったのか

■ 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の景観原形（４・１）

- ・ 社寺の配置と境内の空間構成を把握
- ・ 山辺全体の平面構成を把握
- ・ 景観的な志向を考察

近代以降の景観領域

近代の宅地開発に先駆けて行われた先行開発は、どのようなもので、領域を如何に特徴付けたのか

■ 琵琶湖疏水分線建設の概要（４・２）

- ・ 近代における琵琶湖疏水分線建設の用途、目的の把握
- ・ 疏水分線のルートと形状の把握
- ・ 周囲の景観への影響を分析

■ 文人界限の形成（４・３）

- ・ 同時期の都市計画的視点からの考察
- ・ 初期開発を分析
- ・ つづく爆発的住居開発と文人の関わりを考察

現代の景観領域

■ 戦後の遊歩道整備（４・４）

- ・ 住人による事後的努力の把握
- ・ 新たな遊歩道「哲学の道」のデザイン

■ まとめ

図４－２ 本章における議論の流れ

4-1 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域における名所の原形

この領域は古くから社寺や山荘地のあった場所であり、歴史とともにこれらの敷地利用は変遷を重ねてきた。例えば後に慈照寺となった義政の別荘東山殿は、浄土寺の敷地に義政が隠棲し、風流の遊興、清雅の韻事につとめ、東山文化を築き上げたものである。平安時代には、冷泉天皇や後一条天皇中宮威子(藤原道長三女)等の皇族の墓が建てられ、また保元の乱を起こした俊寛僧都の別荘が築かれた。その他、鎌倉時代には現在の安楽寺付近に法然の説法道場が建てられるなど、この地に占地された旧蹟は数多い。

この山麓部には8つの社寺が集積している。本節では、近代の前に築かれたこの地域の名所の原形とはどのようなものであったのかの考察をする。このため、近代に入る前からこの領域全体に対して何らかの影響をもつ存在であったと思われる8つの寺社の周辺について、地形モデルと名所図会などの絵画資料の分析を行い、近代に琵琶湖疏水分線を軸とした景域が形成される以前には、この領域にある種の景観域が既に成立していたのか、していたとすればどのような構造であったのかを明らかにする。

1 社寺由緒

浄土寺、鹿ヶ谷、若王子は後に示すように、それぞれ山並みの中の谷を形成している部分を中心としており、谷筋をつくる水源毎に、それぞれ社が築かれている(図4-3)。それらは周囲との意味的な関係を変えながらも、古代から延々と存在してきた八神社、大豊神社、若王子神社であり、それぞれは各領域の産土神として祀られてきた。ここでは主に近世までの諸社寺にまつわる由緒を簡単にまとめる。

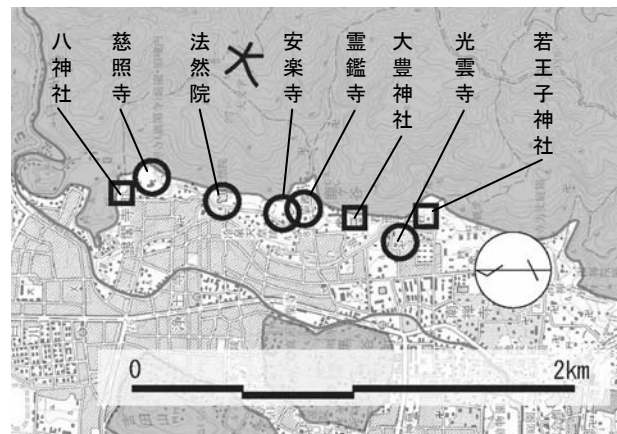


図4-3 対象地における社寺の配置

1) 八神社系

八神社は、近世には「山王十禅師」と称された。平安期に開かれたといわれる浄土寺は、この八神社を鎮守社とした。浄土寺は足利義政が文明14年(1482)に山荘を営むにおよんで、相国寺西へ移転した¹⁾。八神社は現在、浄土寺の地主神である。

足利義政の山荘、東山殿は、浄土寺の区画や建築物を生かして構成されたといわれている²⁾。始めに常御所が完成した後、義政はここに移徙し(『御湯殿上日記』)、住みながら西指庵・超然亭・浴室・持仏堂(東求堂)・会所・泉殿・観音殿(銀閣)などを建築していった(『蔭涼軒日録』)³⁾。庭園は西芳寺庭園を模したもので、足利義政自身が指導をして、善阿弥が造園したといわれる。

よく知られているように、慈照寺はこの東山山荘が、義政の没後に、相国寺の末寺に改

められたものである。その後一時期近衛前久〔天文5年（1536）－慶長17年（1612）〕の別業となったが、前久の死後、臨済宗相国寺に安堵され、再び旧観を取り戻すための大々的な工事がなされたという⁴⁾。庭は元和年間（1615-24）に改修されており、砂の盛られた銀沙灘は、会所のあった場所を方丈の前庭として、江戸時代に逐次できあがったものである⁵⁾。

2) 大豊神社系

大豊神社は、元は本殿背後の如意山椿ヶ峰の山中にあり、椿峰天神とよばれたが、寛仁年中（1017-21）に山麓の現在地に移り、大豊神社と号したといわれる。また大宝明神として円城寺の鎮守社でもあり、応仁の乱までの社域は広大であった⁶⁾。円城寺とは右大臣藤原氏宗の山荘地であった処に、真言僧益信を別当として創建した寺であった。この寺は応仁元年（1467）に兵火に見舞われた後廃寺になったが、大豊神社は残り、近世には鹿ヶ谷村の産土神とされている⁷⁾。

慶長17年（1612）、妙法院宮堯然法親王の母で後陽成院女房大納言典侍が、妙法院門跡領の一部を譲り受けて屋敷を設けた。正保元年（1644）典侍が没した跡、その遺志により後水尾院が皇女多利宮を開山として霊鑑寺を創立した。承応3年（1654）には、前述のように、かつてこの地にあった円城寺に因んで円成山霊鑑寺と称することを勅許された。元は天台宗であったが、のちに臨済宗に改宗している。谷の御所と現在でも呼ばれるが、初めは寺地が現在地の南隣で、大豊神社の方へ流れる溪流に沿っていたといわれる⁸⁾。

この扇状地の北に法然院と安楽寺がある。どちらも法然の門徒である住蓮と安楽の道場跡であるといわれ、専修念仏・六時礼讃の禁圧による「法然受難」の舞台とされている。いずれも法然没後は荒廃するが、近世になって俄に知恩院の僧が旧跡を探り、念仏道場の跡として延宝8年（1680）法然院が建立された。翌年二僧（住蓮、安楽）の菩提を弔うために安楽寺が建立された⁹⁾。

3) 若王子系

若王子神社は正式には熊野若王子神社と号し、永暦元年（1160）に後白河上皇が熊野那智権現を勧請したものであるといわれる。中世には武家の崇敬厚く、また花の名所として知られた。足利義政も寛正6年（1465）に花見の宴を催した。江戸時代には聖護院門跡院家であった。

若王子神社の麓の扇状地には、南に禅林寺（永観堂）があり、北の大豊神社系扇状地との間に光雲寺がある。若王子神社は禅林寺の鎮守社ともいわれている。

光雲寺は、南禅寺を開いた大明国師の法孫が住持したが応仁の乱により廃絶した安国光雲寺が、南禅寺天授庵英仲禅師により再興されたものである¹⁰⁾。

2 社寺の景観特性

先に少し触れたように、特に近世が終わるまでのこの領域は、洛中から見て、吉田山や紫雲山のさらに背後にあたる郊外の奥地であった。そのため、この領域では専ら俗世から離れる志向の環境がデザインされていたものと考えられる。ここでは、それら全てが共通して山の懷に並び、傾斜の緩急が大きく変わるところに作られているというに注目したい。そこには、境内からの眺望を見せる事よりも、山の懷へ自らを収める意図があったのではないだろうか。

1) 社寺の配置と構成

この界限に並ぶ社寺の背景となる地形を把握するために、図4-4のような現在の1/2500地形図をデータとして地形のCGを作成した。この地域は三つの扇状地で構成されているといえる。一つは北東から流れ入る浄土寺地域の扇状地、一つは、談合谷と呼ばれる谷から流れ出る鹿ヶ谷の扇状地であり、そして若王子神社が収まる谷による若王子の扇状地である。この地形の麓の部分に、近代には琵琶湖疏水筋が挿入される事になるが、これに示される八神社、慈照寺、法然院、安楽寺、靈鑑寺、大豊神社、光雲寺、若王子神社の配置や山並みとの関係は各社寺が建立されて以来大きく変わらないものであると考える。以下、それぞれの社寺境内敷地における地形と建築と庭園などの関係をまとめる。

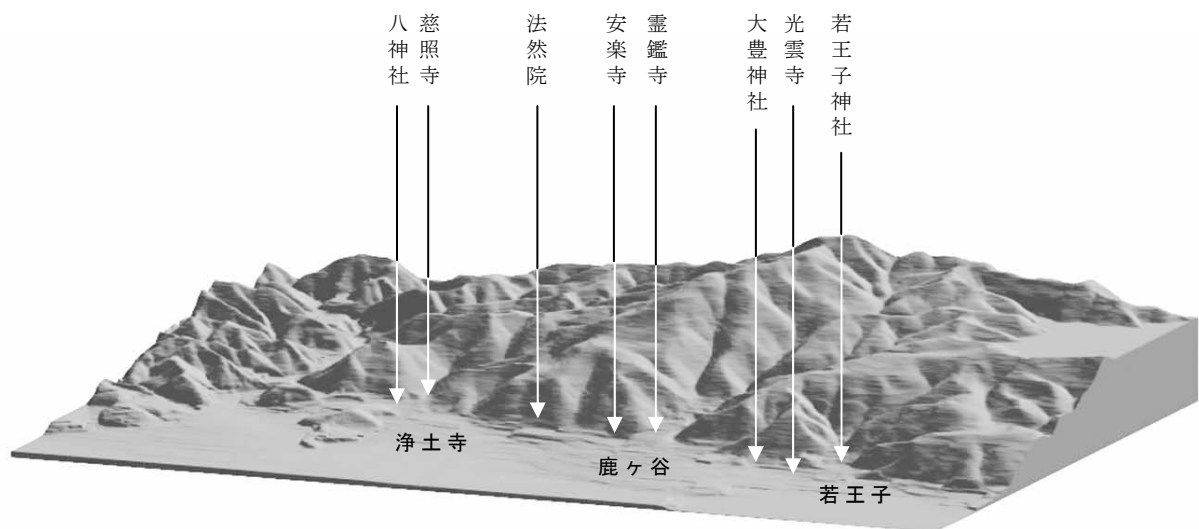


図4-4 浄土寺・鹿ヶ谷地域の地形と山裾に並ぶ社寺領域（筆者作成）

a) 八神社

敷地周辺の地形パースペクティブと南北断面は図4-5, 6のように表現される。境内は図4-7¹¹⁾のように南側に入口があり、北に本社が位置する。その背後には標高126m程の国有林で覆われた丘陵である。

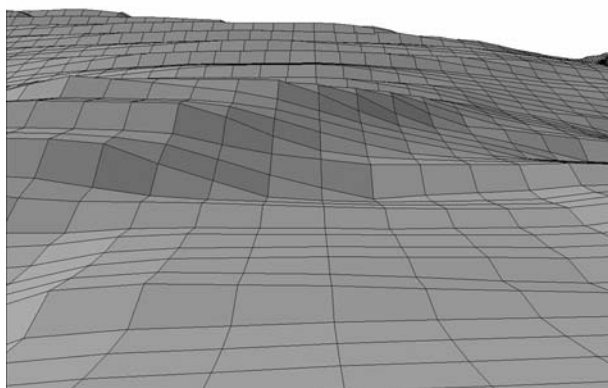


図4-5 八神社境内を参道から北に向けた地形のパース、メッシュは2m間隔

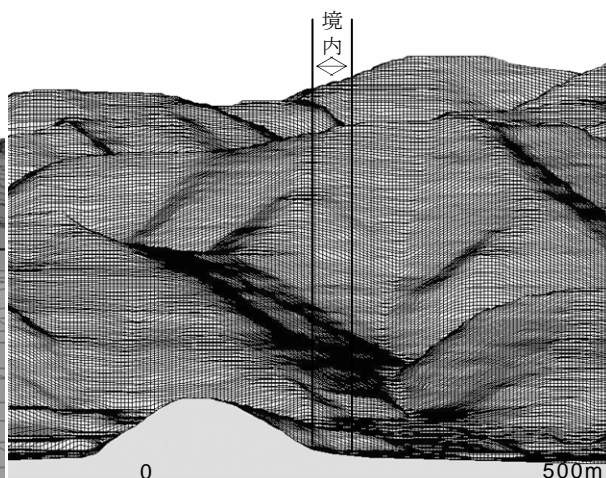


図4-6 八神社を含む南北断面（東向き、縦横同縮尺）

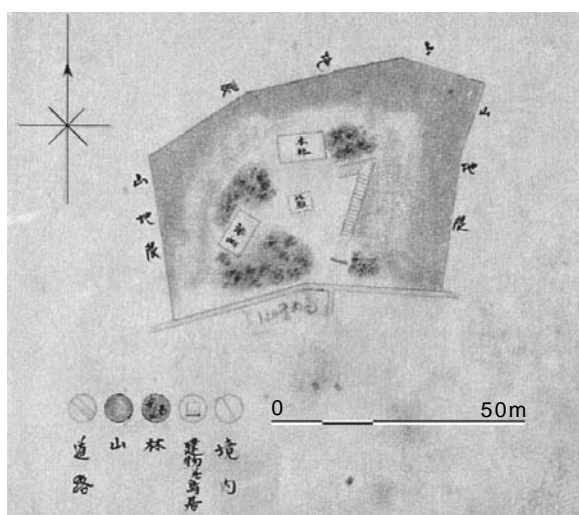


図4-7 八神社周辺配置図（スケールは筆者記入）

b) 慈照寺

敷地周辺の地形パースペクティブと東西断面は図4-8, 9（次頁）のように表現される。境内敷地は急斜面の山裾の最下部と、これに近接して傾斜が緩やかにとられた大きな平場である。これは先に示したような比較的規模の大きな扇状地であり、山から湧く水も得られる地である。配置図（次頁図4-10¹²⁾）のように、東求堂や方丈、銀閣など主要な建築を北隅から東隅に配置し、平場と斜面に低層で広い林泉が作り込まれた。

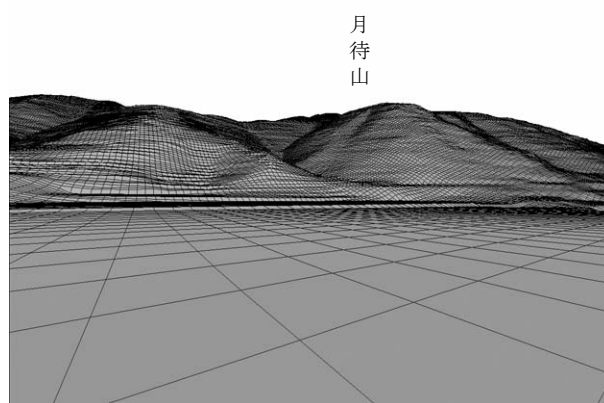


図4-8 慈照寺境内から南東に向いた地形のパース、メッシュは2m間隔

山並みの谷部にあたる立地の為に得られる水を用いて、滝が作られ、池が作られた。この地形の中に苑路を廻し、西芳寺と同様の回遊式、すなわち池泉の周りの地形起伏の中を周遊する林泉が作られている。小径は斜面を登り、建築を見下ろしその屋根と垣を越えて吉田山まで視線が届く高見も創られている。

しかし、こういった周遊の背景にある場所的な特徴は、背後の山並みを、とりわけ南東に見える「月待山」と名付けた峰を、主要な景観要素としていることである(図4-11¹³⁾)。先の高見の視点場は見る側と見られる側の逆転に魅力があると捉えられる。

概して池を中心に創られた豊かな林泉によって、主要な建築部と山容との間を隔て、これらの建築内部の重要な視点場において、背景の山並みが程よく見えるように構成されている。

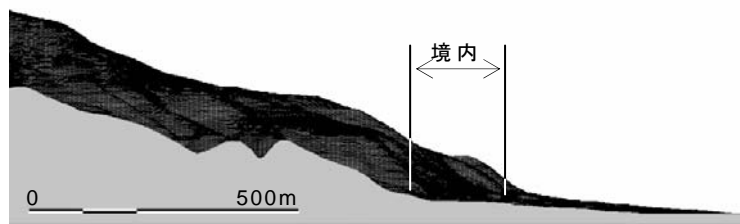


図4-9 慈照寺を含む東西断面
(南向き、縦横同縮尺)

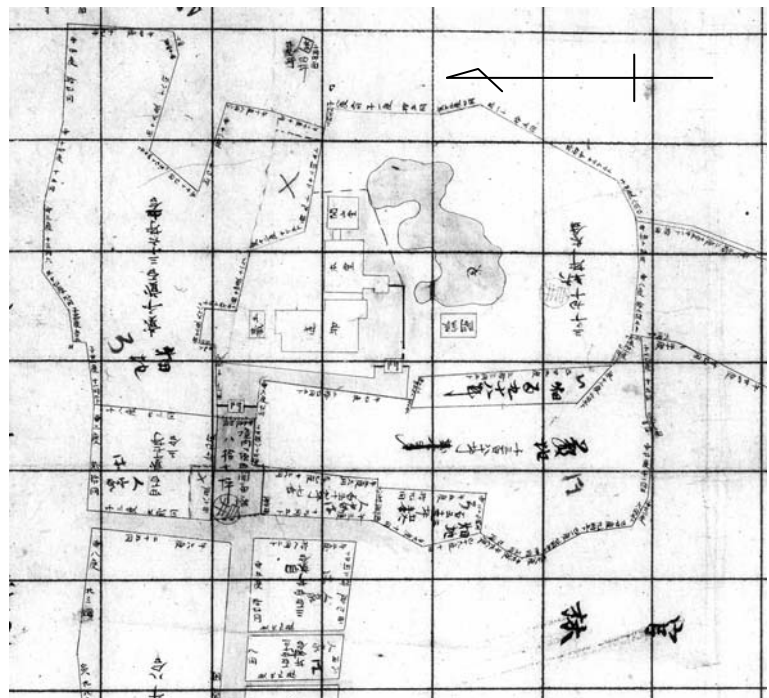


図4-10 慈照寺の配置図、
メッシュは東西南北に20間(約36m)



図4-11 慈照寺の景観・見る対象としての月待山

c) 法然院

敷地周辺の地形東西断面とパースペクティブは図4-12, 13のように表現される。つまり東側に急斜面が境内へ近接して迫りせり上がっている。ただし, 図4-14¹⁴⁾の平面図から分かるように, 境内は南面しており, 参道の入り口を東向きに入るとすぐに北へ屈曲し, 北へ進む参道を行けば南面する茅葺きの重量感のある門が現れ, その先は南向きに庭園が造られている。この空間構成はさらに敷地西側の急斜面と建築(本堂)で囲まれた部分をつくり, そこへ向かって庭園から道を接近させて正面に建つ建築物を迂回する道へ導く。『花洛名勝図会』には, この構成を山側から見下ろすアングルで描かれている(図4-15¹⁵⁾)。全ては一つの平場の上でありながら, 奥へ進むと, 東の急傾斜へ主要な堂宇を接近しているために, その狭間に深遠さ, 静寂さなどが感じられるほど非常な圍繞感を与えているといえる(次頁図4-16)。境内全体が南向きであるために, 東西にコントラストができており, 急斜面側の東が奥になっている。

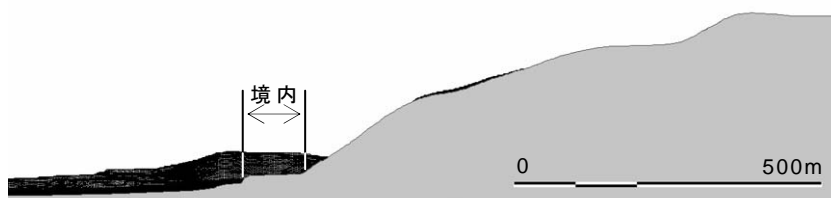


図4-12 法然院を含む東西断面(北向き, 縦横同縮尺)

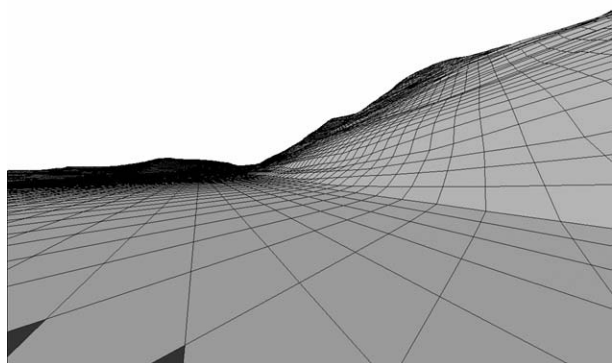


図4-13 法然院境内を北東に向けた地形のパース, メッシュは2m間隔

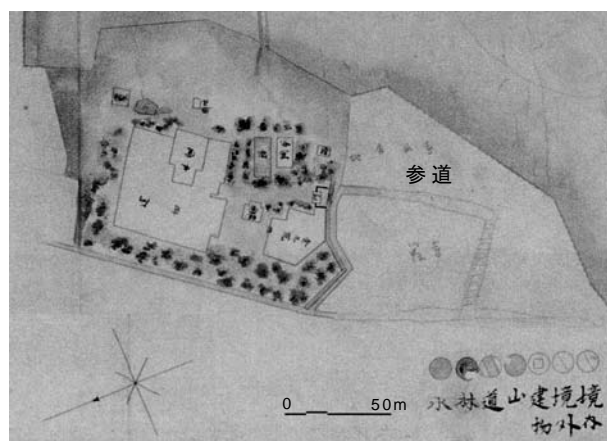


図4-14 法然院境内配置図



図4-15 法然院境内を東山から見下ろす鳥瞰図



図 4-16 法然院本堂前へ続く小径

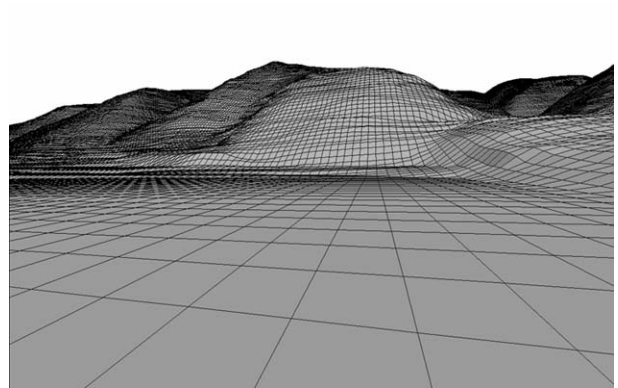


図 4-17 安楽寺境内を東に向けた地形の
パース、メッシュは2 m間隔

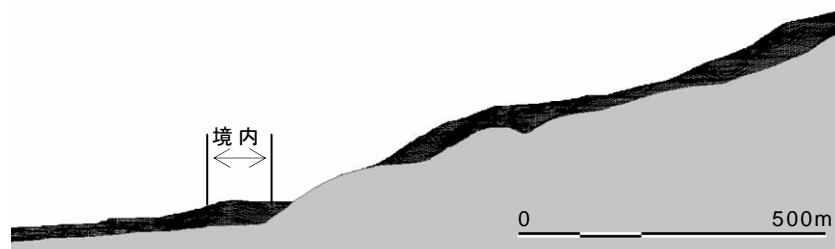


図 4-18 安楽寺を含む東西断面図（北向き，縦横同縮尺）

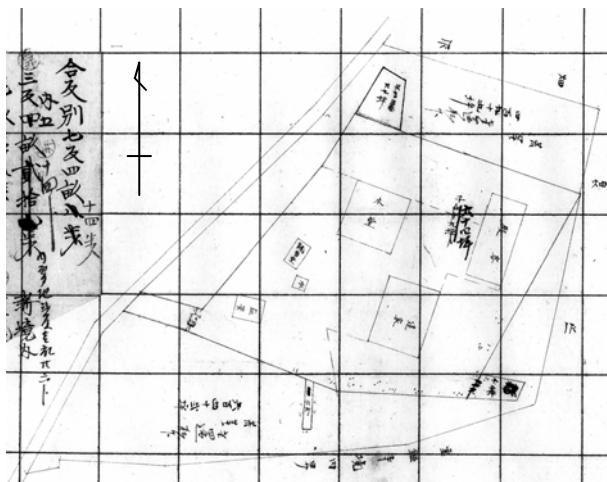


図 4-19 安楽寺境内の配置図
メッシュは一辺 10 間（約 18m）



図 4-20 安楽寺境内の景観
門をいって北東を見る

d) 安楽寺

敷地周辺の地形パースペクティブと東西断面は図 4-17, 18 のように表現される．この境内の構成も，概ね南向きが基本となっており，門は西面しているが境内に入ると参道が北へ屈曲し，南面する本堂へ導かれる（図 4-19¹⁶⁾）．安楽寺は堂宇が敷地の北側に多く配置されており，北東へ向かって空間に奥をつくっている．しかし，そこに満たされる手入れされた植栽がそのまま東山へと続くような，景観の開放性に特徴がある（図 4-20）．

ここで慈照寺，法然院，安楽寺の東西方向断面を比較して，東に近接する急斜面の傾斜角に注目すると，慈照寺は約 23° であるのに対し，法然院は約 33° ，安楽寺に到っては約 44° であり，これら念仏道場が起源の寺院では，急傾斜面を片側に持つことで，特に山容の迫る，山の深くへ入り込んだと感じさせる演出を志向している事がよく分かる．

e) 霊鑑寺

敷地周辺の地形パースペクティブと東西断面は図4-21, 22のように表現される。霊鑑寺の敷地は、談合谷と呼ばれる谷の間を流れる水流によって形成された鹿ヶ谷の扇状地上に乗っている。細かくは東西に3段の地形構成をしており（図4-23¹⁷⁾）、参道の階段を上がって門を潜って至る1段目が広く（東西約30m）、東奥に2断面（東西約12m）と3段目（東西約13m）が東部に集中する。この段の集中する部分に建築も集中し、地形の行程の変化に併せて重なる建築が建てられた。段部の傾斜を利用した庭園が造られており、最上部の本堂へ至る小径からの景観は、地形と植栽と建築、そして背景の山並みによって構成されている（図4-24）。

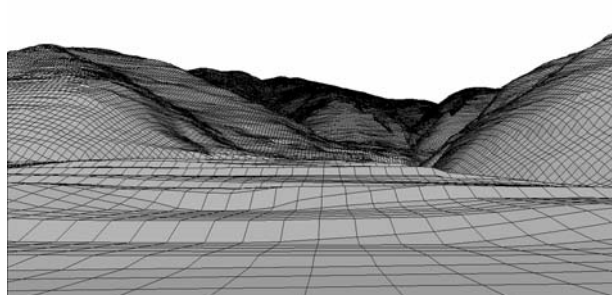


図4-21 霊鑑寺境内を東に向けた地形の
パース、メッシュは2m間隔

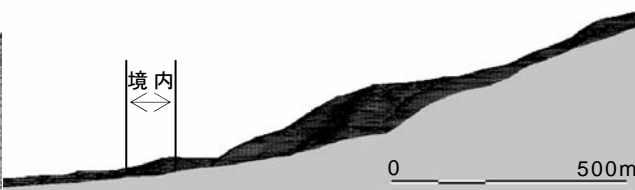


図4-22 霊鑑寺を含む東西断面
（北向き、縦横同縮尺）

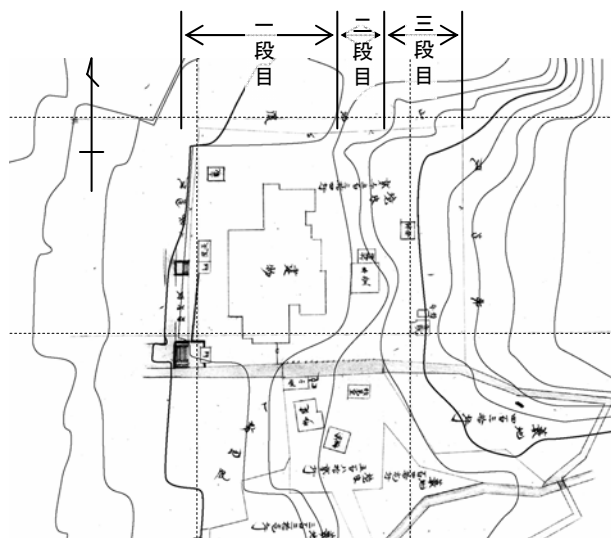


図4-23 霊鑑寺配置図（破線メッシュは一边20間、
2m間隔の等高線を筆者記入）



図4-24 山に融和する霊鑑寺景観

f) 大豊神社

図4-25（次頁）は大豊神社の敷地周辺の地形パースペクティブである。図4-26（次頁）のように本殿の背後には急斜面が切り立ってそのまま背景の峰へとつながっている。境内は、西（平地側）から山へ向かって伸びる参道の先に配置され、正面を西北西へ向けている（次頁図4-27）。参道を行けば、山の稜線が目前に迫るが、境内に入る鳥居を越えた処で稜線は仰角で約31°もあり、山を対象として見るぎりぎりの場所であることを知らされる。鳥居をくぐり境内に入れば、山の懐へ入ったような強烈な圍繞感が演出される敷地構成である。

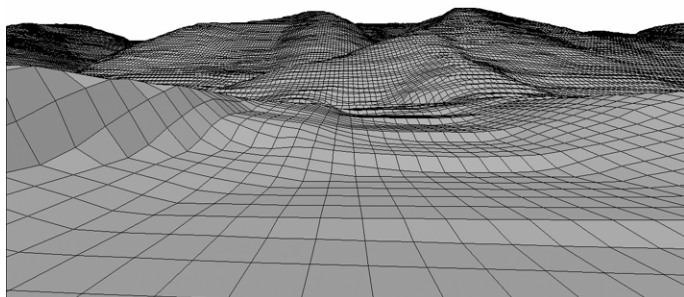


図 4-25 大豊神社参道から東に向いた地形のパス（メッシュは2 m間隔）



図 4-26 大豊神社の背景に迫る急斜面

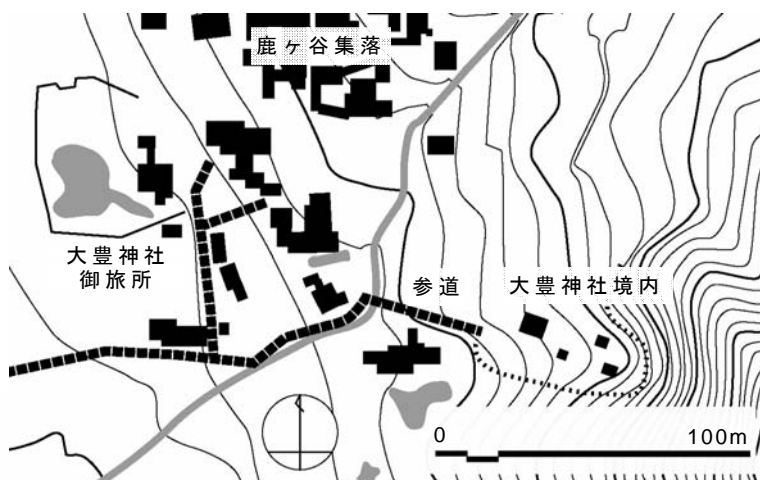


図 4-27
大豊神社境内と周辺の配置図
（筆者作成，大正11年の都市計画図を参考，疏水未記入）

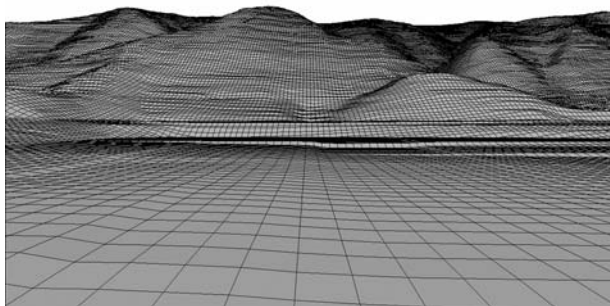


図 4-28 光雲寺境内から東に向いた地形のパス（メッシュは2 m間隔）

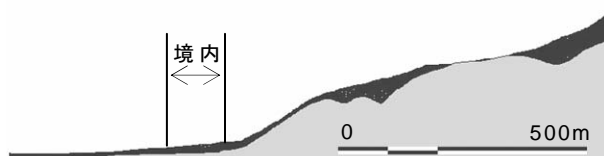


図 4-29 光雲寺を含む東西断面
（北向き，縦横同縮尺）

g) 光雲寺

敷地周辺の地形パースペクティブと東西断面は図 4-28, 29 のように表現される。光雲寺は東の山容の急傾斜地から西側へ少し退いた，比較的なだらかな地形の上にいる。近世までの光雲寺はここより東側の次第に急傾斜に変わる部分を境内裏の林地としていた（次頁図 4-30¹⁸⁾）。この時代の光雲寺における遣り水庭園の風景が『都林泉名勝図会』に掲載されている（次頁図 4-31¹⁹⁾）。この林泉が境内のどこに位置していたのかは不明であるが，当時の東山の稜線にむかって建築が建てられている配置の構図は把握できる。さきに林地として境内東に示された場所の可能性が高い。現在はここに小川治兵衛が造園した遣り水庭園が出来ており，その東に疏水が通っている。

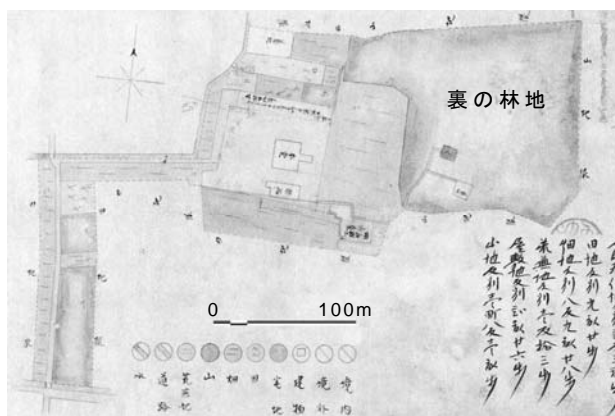


図 4-30 光雲寺境内の配置図
(スケール等筆者記入)



図 4-31 光雲寺の遺水庭園

h) 若王子神社

敷地周辺の地形パースペクティブと東西断面は図 4-32, 33 のように表現される．若王子神社の位置は，やはり水流を有する東山の谷間である．本社は南向きであり，摂社末社は谷地形に沿って配置されている（図 4-34²⁰⁾）．『花洛名勝図会』（次頁図 4-35²¹⁾）がこの奥行きをよく表しているように，境内は本社以降，この水流に従って山の奥へと続いている．

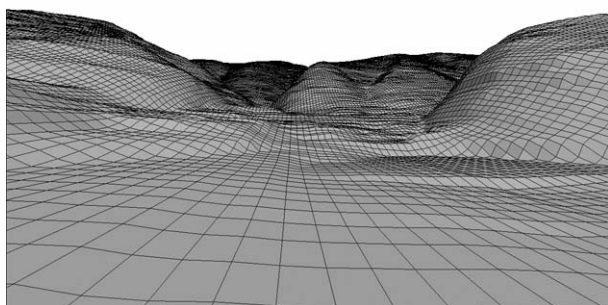


図 4-32 若王子神社境内から東に向けた地形のパース（メッシュは 2 m 間隔）

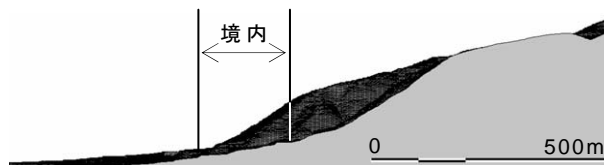


図 4-33 若王子神社を含む東西断面
(北向き，縦横同縮尺)

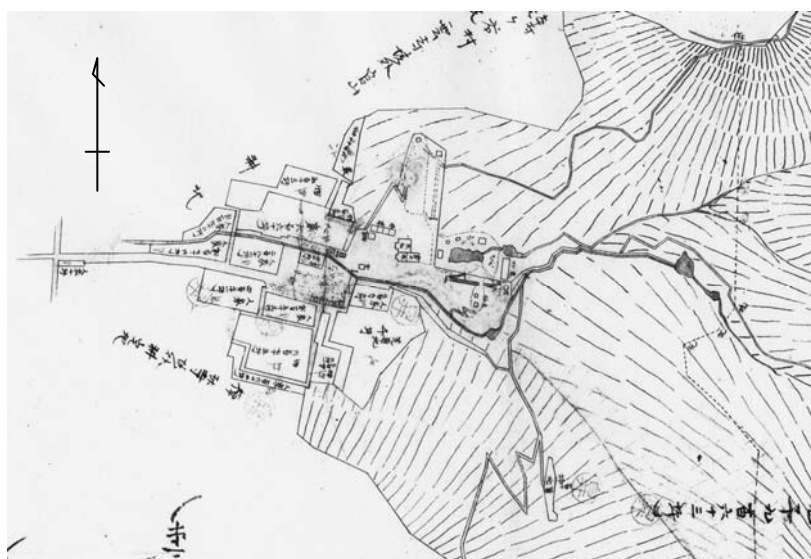


図 4-34 若王子神社境内の配置図

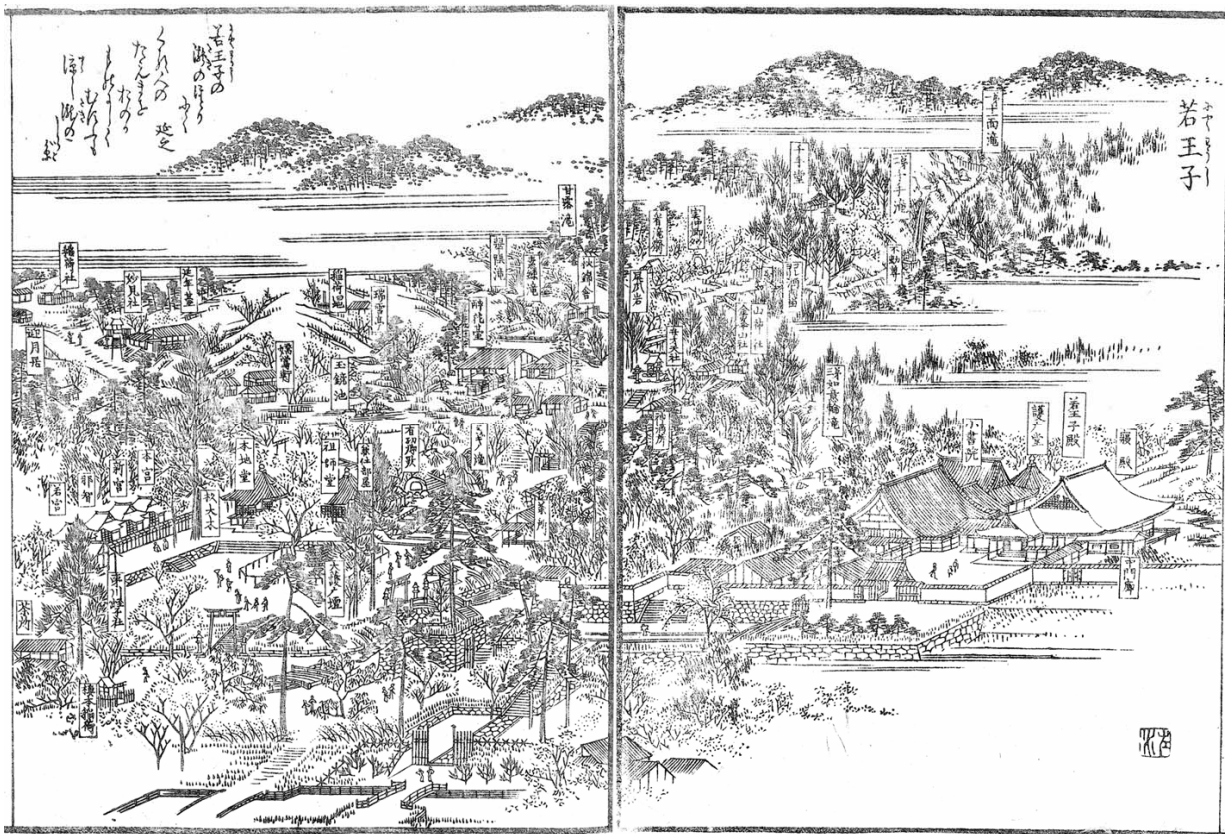


図 4-35 谷に沿って収まった若王子神社境内の様子

2) 構成に見る景観志向

以上で見てきたように、8つの社寺の構成において、西側の低地部への眺望を得ようとする努力がほとんど見られない。これらの社寺の配置は、比較的高い標高を持ち、扇状地の上であったりして、寧ろ基本的に見晴らしが良くて日当たりのよい場所を創造することは、それほど難しい事ではないはずであるにも関わらず、その志向性は非常に弱い。慈照

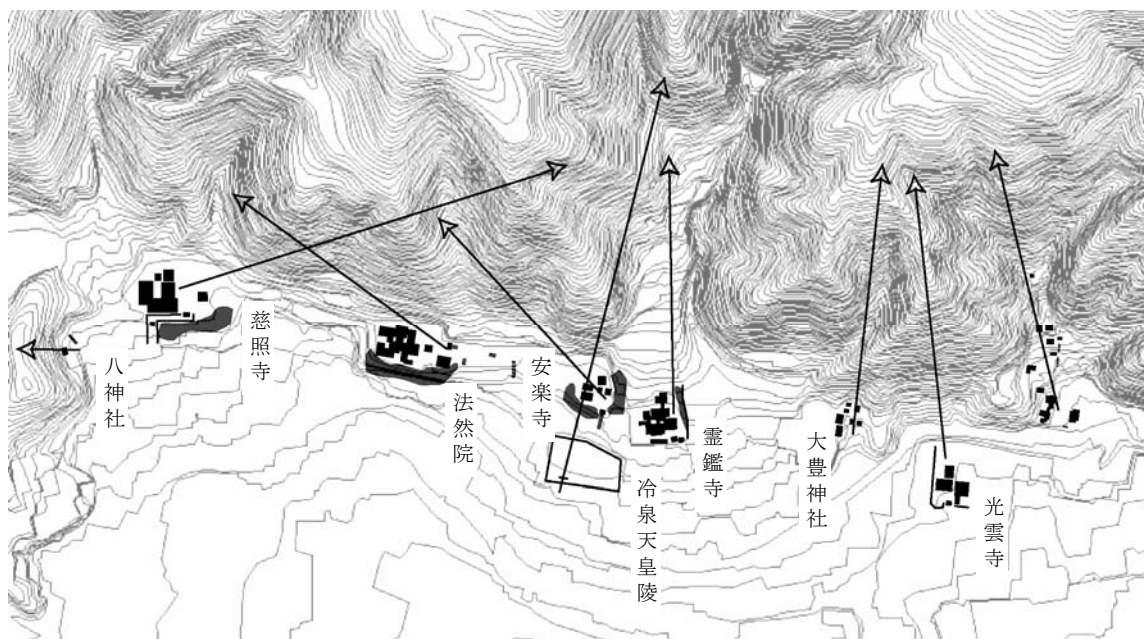


図 4-36 山辺地形における社寺の配置と景観の主方向（筆者作成、等高線は2m間隔）

寺に設けられた展望所においては、例外的に見晴らしが求められたが、これは敷地内全域が山への志向性を持っており、この志向性を敷地奥で転換する場として設けられたものと考えられる。ここで、先に明らかにした社寺の構成から、強く志向されている景観の方向をそれぞれ抽出して図4-36(前頁)にまとめた。ただし、社寺のみならず、突出した景観要素となっている冷泉天皇陵桜本陵も考察に加えた。

景観の方向は、ここに示した以外にも多方向に考えられるが、敷地外へ向けられた視線は、確実に山の方へ向けられていると言ってよい。この地域では押し並べて、西の低地に向かう方向ではなく、敢えて東山の自然の中へ目をむける努力が著しく行われた。すなわち、山並みをベースにしたデザイン、あるいは深山へ入り込んだようなデザインが主流であり、麓への眺望を得るよりは、むしろ山の内へ溶け込む志向が強い。

例えば、慈照寺の境内では、北側と西側に集中する室内空間から、南側と東側に迫り上がる山との間に、静寂な自然を表現した庭園を造って、背景の山まで連続的に見せている。また、各神社においても、国見をするような見晴らしのよい場所は意識的には創られておらず、寧ろ参道に沿って奥へと導かれる。これらは全て、山への志向である(図4-37)。

これらの山への志向は、それぞれの境内において行われ、それぞれは独立しているといえる。見ている、あるいは感じさせる対象は、同じ山・自然であるが、各々はその山の懐へひっそりと個々の世界観を培って潜んでいた。

こういった社寺構成の志向は、次章でみる円山安養寺塔頭群のそれと比べると、より特徴が明らかになるだろう。つまり、安養寺においては、山辺の傾斜地形に出来るだけ眺望が得られるような工夫して造成が加えられていた(第5章5-1の3参照)。比較して双林寺の場合は展望が得られるほどの傾斜を持たないことから、山を借景にした造園が志向された(5-1の4参照)。浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の社寺においては、地形から考察すれば十分に眺望を得ることは可能な立地である。しかし、基本的にこの地域では、敢えてそういった眺望を主目的にせず、それとは逆向き、つまり山へ開く景観を志向して社寺が構成されたと考えられる。



図4-37 それぞれの敷地内に造られた
独自の世界としての景観
左：慈照寺，右：若王子神社

3 社寺・集落・道の構成

以上のように、それぞれの社寺にまつわる思想を越えて非常に総括的な結論ではあるが、山裾に複数の社寺が各々背後の山の方へ向かって独自の世界を培いながら並び収まっていた。それらは広い山辺の中でも傾斜が大きく変わる一帯に分布していた。

そこから続く麓の風景はどのようなものであったのだろうか。蒐集した近世の地図を分析すれば、その周辺における当時の道の構成が明らかになる。そこで、前章において神楽岡周辺の道の原形を明らかにしたのと同様の方法（図4-38、使用した絵地図・地図は章末の参考文献参照²²⁾）で、蒐集した地図を比較検討した。その結果、これらの社寺一帯の周辺（手前）は畑地であり、社寺間にはそれぞれの門前を結ぶ道と農村集落が存在していたことがわかった（次頁図4-39）。すなわち、慈照寺門前あたりに浄土寺村が、霊鑑寺の南

西から大豊神社前にかけては鹿ヶ谷村が、そして若王子神社の門前に集落があり、それらを通り洛中へ向かう3つの主要な道が出来ているのみだった。これらの農村集落は、先の地形の分析で見たように、扇状地に立地していることが分かる。また、鹿ヶ谷から西へ延びる道は金戒光明寺へもつながっていた。（『花洛名勝図会』によれば、東へ入ると三井寺（滋賀県）につながっていた²³⁾。）集落、畑地の間に成立したこれらの道は、地形と社寺の配置を条件に自然発生的に出来上がった曲線であり、これが現在のこの領域を形成する要素の骨格になっている道の原形であると思われる。

近世における数々の紀行文では、この一帯を一連の名所巡りの行程の中に捉えている例が多く見られる。たとえば、次のようなものである。

〔十国巡覧記〕（南禅寺から）此上に傍ふて北すれば鹿ヶ谷、銀閣寺等にいたる。南禅寺の北の門を出て黒谷に向ふ。町家を離れて田畑の細道を経、少し西して原上に兀然たる山あり。是を黒谷とす²⁴⁾…（以下略）

〔東遊草〕浄土寺村より南へ出、鹿か谷万無寺（法然院）に詣。…（中略）…西南一望の中に有。霊鑑寺、後陽成帝の女房、持明院基久卿息女尼と成て此寺也、女三宮様此山に葬となん。若王子、此在所に柳原大学殿住居、暫語申候。²⁵⁾…（以下略）

この地域全体が、限られた道でつながる複合景観域である事は、これらの紀行文が証明するところである。名所旧蹟の間を結ぶ道は、東山巡りをする旅客たちの通り道として存

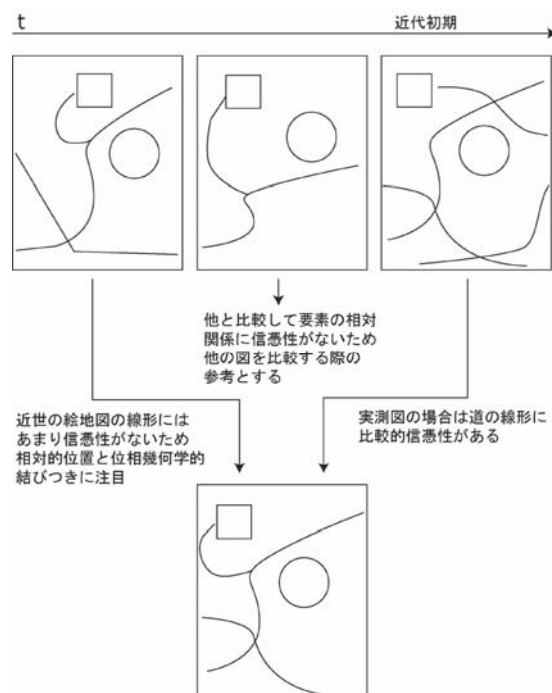


図4-38 作図の指針

在し，田畑の中を行く趣や，山辺の高い場所から見下ろす眺望が，社寺巡りをする参拝者によって，ごく自然な形で愉しまれたものと思われる．この道は現在までその痕跡を留めているが，後の近代には，ここにおける，ひとつの貴重な空間としての価値が再発見される事になる．

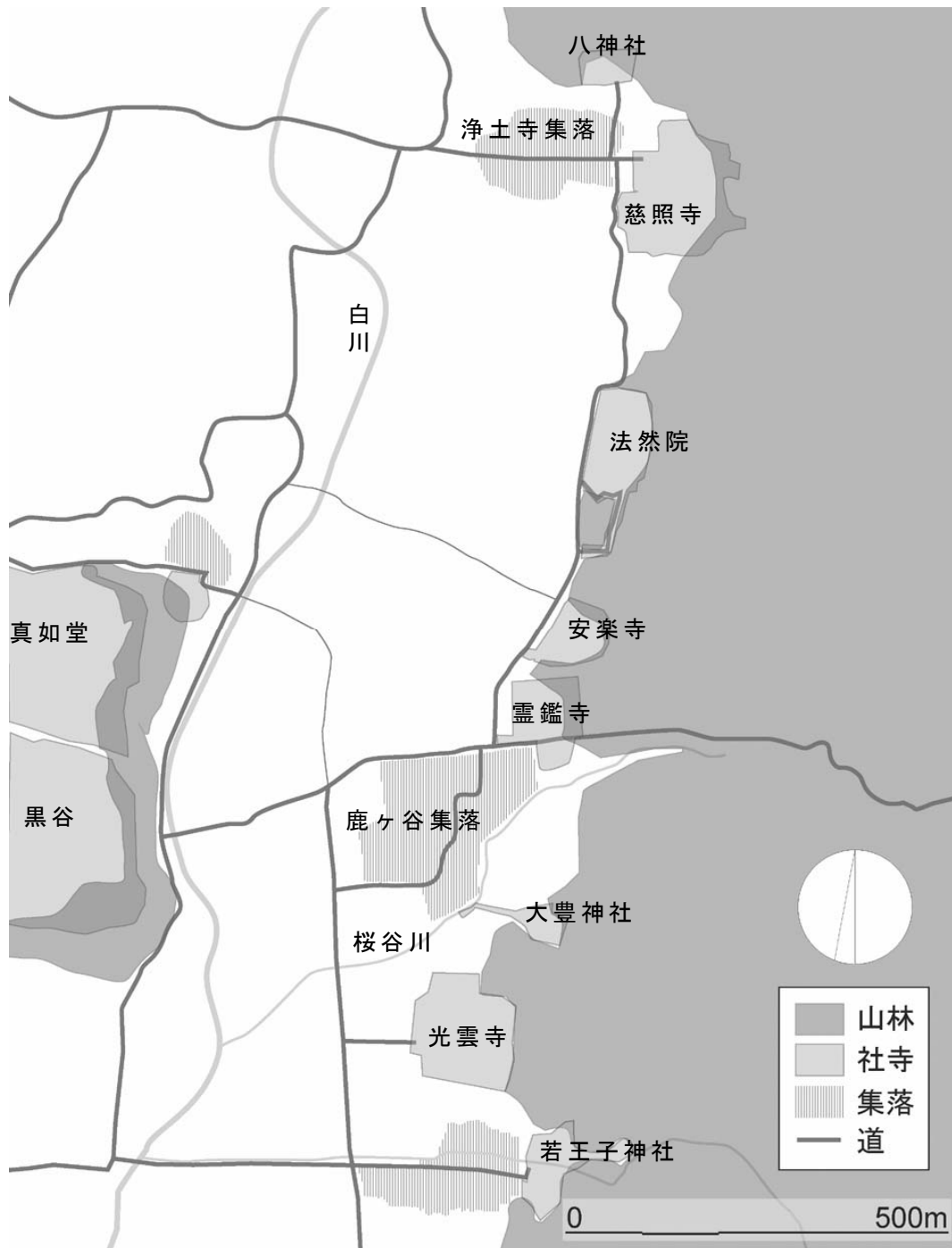


図 4 -39 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の原形的構成（筆者作成）

4 結語

以上、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の前近代における景観の原形を探るべく、その地形を把握し、特性景となる社寺の景観特性を分析し、全域においてどのようにそれらが構成されていたのかを明らかにした。

結論は先の図4-39に要約される。つまり、山裾に社寺が並び、その西側に集落と簡易な道がつながっており、残りは農村の耕作地であったことが明らかになった。道は東西に三本で足りており、南北の道は、白川より東には、山裾のただ一本であり、これが全ての社寺の門前をつないでいた。

この山辺の構成の中で、地形の傾斜が大きく変わる一帯に点在する社寺の構成に共通する特徴があった事が見出された。それは、それぞれの社寺が、各々に背景の山の景観を志向し、そちらへ向かって庭園や建築を配置した事である。すなわち、参拝者が巡る道からすると、全ては囲いの内側へ閉じており、それぞれが独自の精神世界の入口だけを正面に構えていた。

近代にこの地域も著しい景観変容を起こす事になるが、現在でも有る程度この原形の構成が想像できるように、社寺の構成や並び、門前の集落などはその骨格になっていると考えられる。近代には、これに近接してさらにもう一つの強力な骨格が挿入された。都市化が起こる過程で、こういった骨格に対してそれらの性質を把握し、どのように協調していくのが、ひとつの課題である事は明らかである。

4-2 琵琶湖疏水分線の建設

前節では、名所の景観の原形である山麓部の地形と社寺の空間構成について言及した。近世の終わりまでに以上のように形づくられた原形の景観域は、近代に新たな展開を見せる。第2章で考察したように、「復興期」の京都において、疲弊した京都市全体の救世主的なインフラストラクチャーとして琵琶湖疏水が建設されたが、この疏水の分線が上述の名所の領域に近接して建設されたのである。機が熟すと、これを含む周辺に新たな景観域の形成が始まるが、本節ではこの疏水分線が出現した当時にもたらされた空間構造の変化を記述する。

1 復興期の京都と琵琶湖疏水

東京遷都後の近代京都は、都市の中核を失い一時期衰退を極めた。しかし、明治4年（1881）に、榎村正直が府政の実権を握ると、積極的に文明開化・京都復興が押し進められる。この時の京都府政は「榎村時代」[明治4年（1871）～明治14年（1881）]と呼ばれ、続く府知事の北垣国道による「北垣時代」[明治14年（1881）～明治25年（1892）]が終わるまでに、京都は著しい産業発展を遂げた。

榎村が具体的に示した「前途ノ目的」の内容は次の五つの項目だった²⁶⁾。

- 一 水車器械に動力により織物・漆器・陶器・銅鉄器・染物等を精巧化し海外輸出する。
 - 二 旧藩邸・寺院神社などの空地に茶・桑を植えて茶業・養蚕を発達させる。
 - 三 淀川から鴨川五条大橋下まで鉄鋼蒸気船を開通する。堀川に通船する。越前・若狭方面鉄道あるいは馬車道の優先的建設による北海と南海の物産流通を図る。
 - 四 府下約二千六百人の遊女・芸妓・男芸者に養蚕・製茶・紡績などの職業を教える。
 - 五 商工業に関する海外の文献の訳文を各小学校に配分し一般人民の研究の資とする。
- 榎村時代には、このうち第二・第四および第五を実現したが、残りは財政・技術水準からして、当時には不可能であった。したがって、続く北垣時代にこれらは受け継がれることになった。

財政面で打開策を見出していた北垣は、着任するとすぐに琵琶湖疏水建設を唱え、実地調査を始めた。明治18年（1885）6月に起工式をあげた琵琶湖疏水の起工趣意書には、次のよう書かれている。

寂寥として年を経ること茲に十數年一般の人情自ら東京に傾向し日用の物品亦東京の風尚に倣ふもの多し今に於て京都維新の策を按ぜざれば彼の奈良の舊都是れ其殷鑒に非ずや（中略）夫れ京都の繁盛を維持せんと欲せば其策亦少なからざるべし然ども風俗地理に因て之を考ふれば工藝を精巧にして以て物産を振興し水利を開通して以て運輸を便にするを第一とす幸にして近接の地方にして其高低の位置を得たる近江國琵琶湖水の疎通すべきものあり是我京都全區を潤澤せしむる一大元素と謂はざる可からず²⁷⁾

すなわち、京都を復興するには、琵琶湖から引水し、産業・運輸を振興させるのが最良の手であると主張された。建設の目的としては、①製造機械（水車利用）、②運輸、③田畑の灌漑、④精米水車、⑤防火、⑥井泉、⑦衛生が挙げられた。同様の主張が、起工前の勸業諮問会、総合区会などにおける討議において、どちらも満場一致で賛成された²⁸⁾ように、琵琶湖疏水建設は市民のコンセンサスを得ることに成功し、それ故に財政問題を産業基金によって解決することが出来、一大事業が竣工した。

2 琵琶湖疏水分線のルートと断面

琵琶湖疏水のルートとして1883年（明治16）11月の起工伺計画案²⁹⁾では、「…第2トンネル出口から南禅寺村を経て、大きく北に迂回し高野川へ達した後…」（図4-40³⁰⁾）というように、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子界隈を貫いて京都市街地を北へ迂回するルートが選択された。これは、水路勾配を緩くとり閘門などを設置せずにすむ上に舟航の便がよいことや、洛北の灌漑用水を確保できることが理由であると勸業諮問会などで説明されている³¹⁾。

その後計画ルートは数度変更されて、結局、明治23年（1890）に完成した琵琶湖疏水は、蹴上で舟運及び水力発電を目的とした幹線路（鴨東運河）と、灌漑及び御所用水を目的とした分線が鹿ヶ谷ルートの二つに分岐する案が採られた³²⁾（次頁図4-41³³⁾）。ここで重要であるのは、先に示したように、北方へ緩やかに下るこの水路が、東山の裾の形（等高線）に沿って徐々に高度を下けているため、山裾の等高線をほぼ体現し、緩やかな曲線を描くことになった点である。

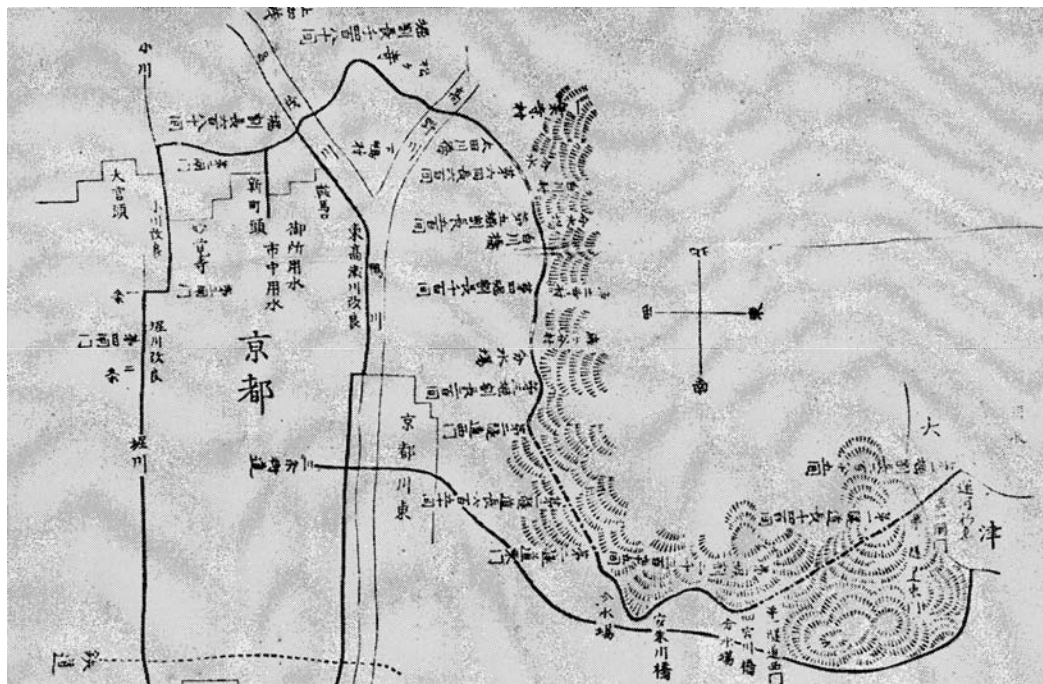


図4-40 明治16年（1883）に定められた疏水ルート



図 4-41 山裾の形に沿って北へ水を運ぶ路線

また竣工当時の琵琶湖疏水分線の景観に関して、明治 19 年（1886）にフェノロサが入浴して以来、風致美観を意識した琵琶湖疏水のデザインがされるようになったといわれ³⁴⁾、トンネルの出口入口や、水路閣など、疏水施設の要所において意匠の工夫がされたが、分線路自体のデザインは、図 4-42³⁵⁾のような非常にシンプルなものであった。

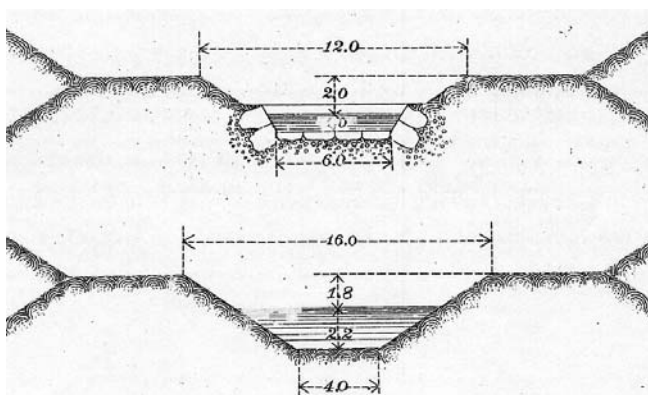


図 4-42 琵琶湖疏水分線の断面図

3 疏水分線建設による環境変化

このようにして、山裾を横に貫く形で建設された規模の大きな都市基盤施設は、大なり小なり周辺の環境に対してインパクトを与えたのではないと思われる。しかし、当時の地図（次頁図 4-43³⁶⁾）からうかがい知ることが出来るように、明治 23 年（1890）の琵琶湖疏水竣工から 30 年ほどの間は、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の景観は、未だ田畑が多くを占めており、前述の二つの在所としての集落を除いては、民家は存在しなかった。疏水分線による景観の変化によって直接的な影響を受けた人々は、ごく限られていたものと考えられる。

その理由の一つは、琵琶湖疏水分線建設中における使用目的の変更に求めることができる。琵琶湖疏水建設中の明治 21 年（1888）に渡米した田邊らは、日本で最初の水力発電を疏水建設に加えた。その結果、既に建設されたインクライン横に蹴上発電所が設置され、当初の水車水路は廃案となった³⁷⁾。この水力発電により市内への電力供給が可能となり、蹴上以北の疏水分線が通る地域において、必ずしも工業地域としての発展を見込まなくてもよい結果となった。蹴上以北の疏水分線は、田畑用水がその主要目的となり、疏水分線周辺の農地は良好な水源を得て、そのまま存続していた。

さらに、例えば、大正 4 年（1915）発刊の『京都名勝記³⁸⁾』においては、蹴上のインク

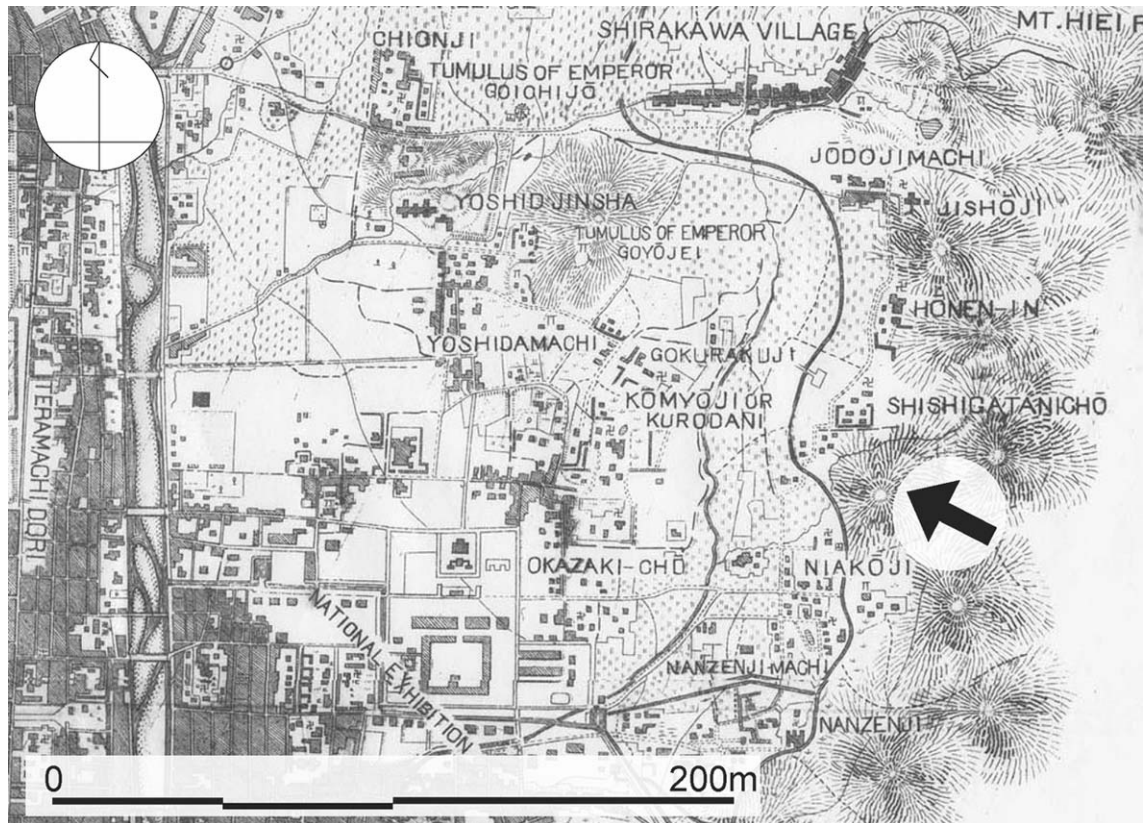


図 4 -43 明治 28 年頃の琵琶湖疏水分線周辺

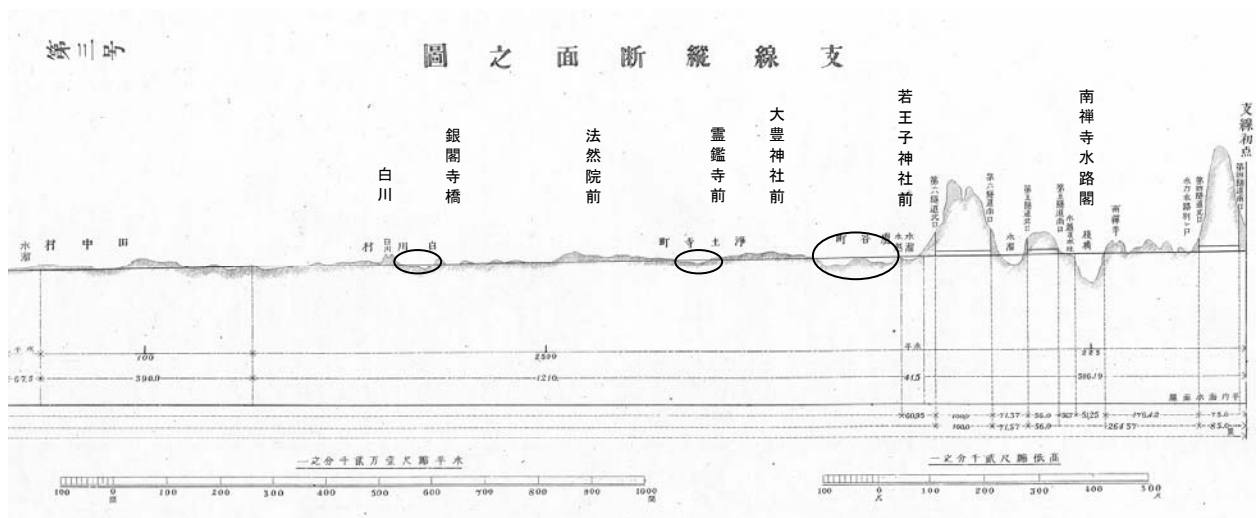


図 4 -44 琵琶湖疏水分線の縦断面図 概ね地表高に合致している

ラインや南禅寺に登場した水路閣などが、新しい名所として、近代化の象徴のように取り上げられているなかで、疏水分線の景観は殆ど無視されているように、琵琶湖疏水分線が通されたことは、竣工からしばらくの間、市民にとっては意に介すほどの空間変容ではなかった可能性がある。

先に見たような、単純な断面形状を持ち、地形に抗せず収まる溝としての疏水分線は、その形態自体が際だって自己主張する存在ではなかった。また、図 4 -44³⁹⁾の縦断面之図に記されているように、水路は部分的に地表面より高いところを通ってはいるが、それも南

禅寺周辺のように水路閣の建設が必要なほど大規模なものでもなく、概ね地表面の高さを保っている。そのため、画家の村上華岳がその画題に選んだ山辺の牧歌的風景の中に、収まりのよいラインとして現され、横一文字にアクセントとなった竹藪のラインに景観的な優位を譲っている（図 4 -45⁴⁰⁾）。因みにこの絵画は明治 44 年（1911）と制作年が明確であり、この時期の景観を知る貴重な資料でもある。これより、確かに農地が吉田山から東山にかけてのなだらかな凹地を埋めていたことが知られる。そして、その先の山の懷に社寺が隠れて集積していた近世的な景観が、明治末まで依然として続いていたことを確認できる。

また、若王子神社付近においては、やや地表面より高め（図 4 -44 から読みとれば 16 尺、4.8m）を通るが、ここは図 4 -43 の地図からも分かるように、東に直に迫る山の急斜面と、西に古くからの集落あるいは光雲寺の境内が近接しているため、他から見られる場合には密集する家屋に紛れるものだったであろう。

以上の事から判断して、疏水分線による景観の変化は、非常にしなやかに風景に溶け込み、それまでの風景を一変させるようなものではなく、少なくとも違和感を与えるものではなかったものと考えられる。



図 4 -45 明治 44 年（1911）頃の浄土寺風景
（村上華岳による京都市立絵画専門学校卒業制作）

4 結語

明治 23 年 (1890) に琵琶湖から京都へ水を送る琵琶湖疏水が竣工した。琵琶湖疏水の建設は京都市を挙げての一大事業であり、この後の産業発展、生活向上を直接的に約束するものであった。

浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の地域には、その支線であり洛北まで水を送る「琵琶湖疏水分線」が通された。そのルートは、山辺の地形に沿わせて曲線を描く線形をして、断面デザインはシンプルな台形断面であった。

地形に合わせて工夫されたルートと、その簡素な構造のデザインは、従来の山辺の景観を大きく作り替えてしまうものではなかった。それは、郊外の長閑な風景に、同種の一面を加えただけのものであったのかも知れない。竣工以来約 30 年間、殆ど近世からの景観を受け継いでいた事が確認できた。

この点で、重要な都市基盤施設たる疏水（分線）の実態は、南禅寺に質の高い意匠の水路閣を建設したように直接的に景観を創った一面はよく知られるが、極めて謙虚に環境を気遣ったデザインでもあったと言えよう。

4-3 文人界隈の形成

1 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の都市計画

以下の議論は、この地域における市街地化の過程を把握することを基礎とする。2章でも見たように、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域は、明治21年（1888）6月、琵琶湖疏水完成に伴う工場進出を見込んで京都市上京区へ編入⁴¹⁾された。しかし、琵琶湖疏水分線が通された後も30年程は殆ど市街地化が進まなかったのである。この地域の本格的な市街地化は、歴史的事実の流れでは、大正8年（1919）に制定された都市計画法に基づき、また東京市区改正条例を準用する形で、大正11年（1922）に京都都市計画区域として決定された後の事だった。

大正11年（1922）8月2日に内閣の認可を受けた京都都市計画区域では、市域が「住宅地域」「工業地域」「商業地域」「未指定地域」に分けられ、対象地一帯の「高燥なる地域」は「住居地域」の部に属しており、都心の人口増加を軽減するための用地として位置づけられた。この住宅地域とは、「土地概ネ高燥風物快適ニシテ、土地ノ現状亦主トシテ住居ノ用ニ供セラレ陵墓社寺名勝舊蹟モ亦多ク之ニ介在スル」地域として定められたものであり、計画は社寺の領域に接する所まで住居区を拡大するものであった⁴²⁾。一方で次のように説明されている。

一見徒ラニ尨大ナル山地ヲ編入スルノ感ナキニアラサルモ、京都ノ特色タル風光ハ主トシテ、是等山地ニ依リ發揮セラレ、名勝舊蹟亦此ノ裡ニソソザイスルノ多キヲ以テ、一面商工業發展ヲ期スルト共ニ、他ノ一面ニ於テ公園都市タルノ特徴ヲ益々發揮セシムルノ施設ヲ爲スノ緊要ナルモノアルヲ認メ、行政区劃又ハ河川道路等顯著ナル地物ヲ限界トシ、山地ヲモ計劃區域ニ編入シタリ⁴³⁾。

すなわち当局には、名勝旧跡を積極的に都市計画の中に含めて活かし、「公園都市」を実現しようとする意図があった。その文脈では、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の地域から、かつて期待されていたような工業進出の地としての可能性を完全に払拭したものであったが、計画区域は、住居は名勝旧跡などと同居できるものとしての短絡的確信の上に成り立っていた。実際の住居地域の空間は、開発者や住人の手によらなければ、画一的な道路で区画されてしまう取り決めであったといえる。

そして、実際次頁の図4-46のように、都市計画に基づく交通網が建設された。すなわち、大正8年12月27日に京都市区改正設計として内閣の認可を受けた都市計画路線のうち第四号線（現在の白川通、今出川通を含む）が、昭和2年（1927）2月1日に住宅地域内の街路計画としての都市計画街路のうち二等大路第三類として第十号線（現在の鹿ヶ谷通）、第十二号線、第十三号線（慈照寺門前）が、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域内に敷設された⁴⁴⁾。第四号線には、現在の今出川通に昭和4年（1929）、現在の丸太町通に昭和5年（1930）に電気軌道が敷設され、交通網の発達も著しかった。戦後の昭和29年（1954）には、現在の白川通にも電気軌道が開通した⁴⁵⁾。

上記の都市計画の実施によって、浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の市街地化は爆発的に進むこととなった。図4-47⁴⁶⁾は、大正11年(1922)、昭和4年(1929)、昭和10年(1935)の対象地における住宅地利用の変遷を示したものである。これがよく示すように、はじめ近世からの小さな集落周辺にしかなかった住宅地は、大正11年から昭和4年の間に著しく増加し、前述の都市計画通りに対象地の開発が進んだことがわかる。昭和4年から昭和10年の間には、都市計画道路も整備され、宅地の間を縫うようにして新たな開発が進み住宅密度が増している。

都市計画地域指定は、高燥で静閑な地域に良質の住環境を設える上で、非常に意味のある政策ではあった。しかし、如何に良質に領域をデザインするかという問題は、追いつかなかったものと思われ、計画地域指定後数年の間に、一帯は平凡な住宅地になってしまったように見える。この領域には、名勝旧跡と調和する優れた住環境が求められたはずであるにも関わらず、車交通の利便性に基づく都市計画道路や、さらにそれを基準とした直線状の道が、領域の大部分に張り巡らされた。

それでもその時に、名所旧蹟が新しい街の中へ埋もれるに至らなかった事は注目すべきである。ここに我々は、ある文化的な界限が、同時に形成されていた事を見出す。

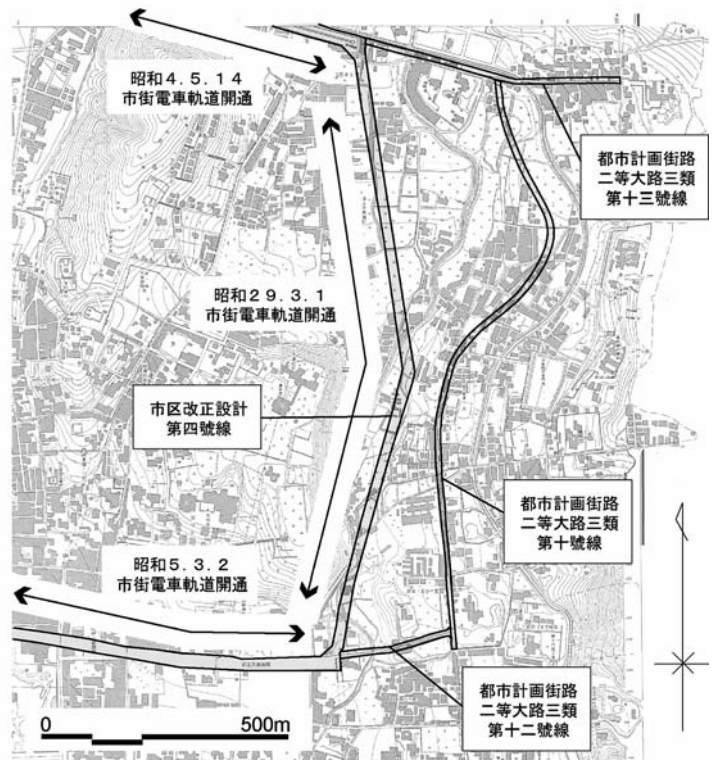
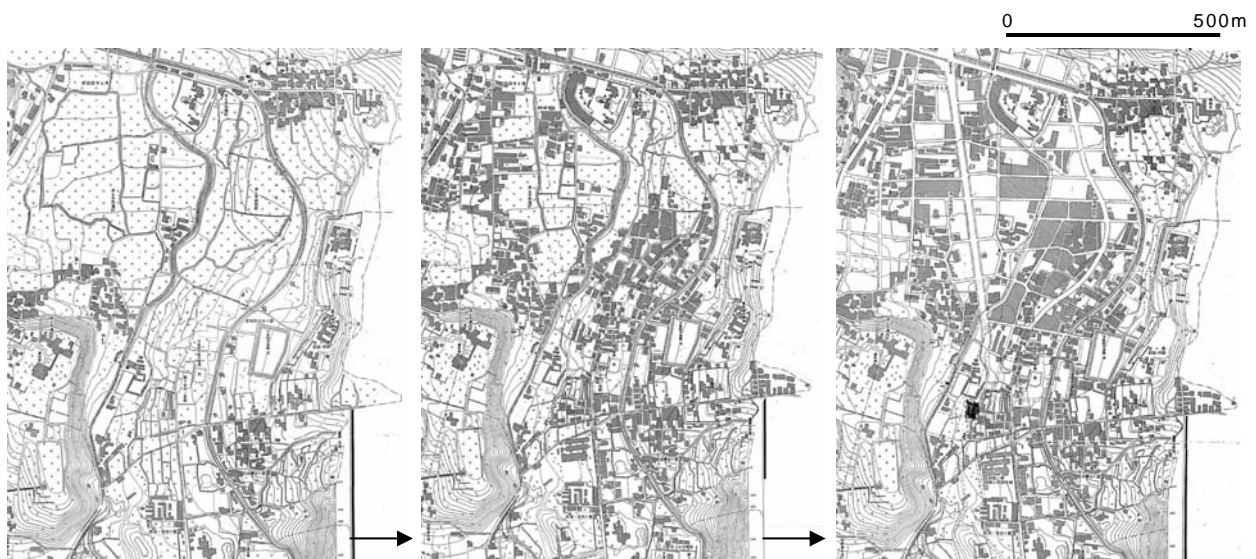


図4-46 都市計画道路と電気軌道
(筆者作成、下敷は昭和4年の都市計画図)



左から大正11年(1922)、昭和4年(1929)、昭和10年(1935)

図4-47 短期間に増加する住宅地、都市計画道路の開通

2 はじめの開発者による地域的设计

以上において、都市計画法以降の浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域における宅地開発の過程を確認してきた。それでは、琵琶湖疏水分線が挿入されている山辺の田園地帯に、どのように住居空間が重ねて創られていったのかであろうか。

この実態を掴むためには、宅地開発の動きに先駆けて、山辺にできた新しい水辺の利がいち早く発見されている事に注目する必要がある。この発見は、日本画家の橋本関雪と実業家で数寄者の住友友純（号は春翠）に依って行われたといえる。

大正5年（1916）橋本関雪は、浄土寺の疏水縁に敷地をとり、住居を構えた（図4-48）。彼により、敷地内にアトリエと、広大な庭園を徐々に造られていった。「白沙村荘」と名付けられたこの住居は、琵琶湖疏水分線から水を引いた遣り水庭園であった（次頁図4-49）。この庭園に湛えられた遣り水の水面は、アトリエから見て東山の大文字が映るように構成されているが、南北に延びるように配置された住居とアトリエは、いずれも東山の方へ開口部を大にとり、自らの庭園の中に周囲の大景観を取り込もうとした事が分かる（次頁図4-50）。関雪自身「東山に杯を上げる」事を創作後の愉しみとしたという。

橋本関雪による空間創造は、白沙村荘の敷地内に限られなかった。大正10年（1921）、橋本関雪の妻、よねが、疏水に沿って300本のソメイヨシノを京都市に寄付して植樹した。植えられた当初は浄土寺石橋町～鹿ヶ谷桜谷町の区間であった⁴⁷⁾が、その後補植が重ねられ、「関雪桜」と知られる並木に成長した。

「当時なんの風情もなかった疏水の堤防に桜を植える事を考えて、それを実行に移したものだ」とであったと、橋本夫妻の先見性について、橋本節哉（洋画家：橋本関雪の息子）は語っている⁴⁸⁾。関雪夫妻が生前、非常にこの桜並木を愛し、熱心に培ったことは『思凡亭随想』によく示されている。

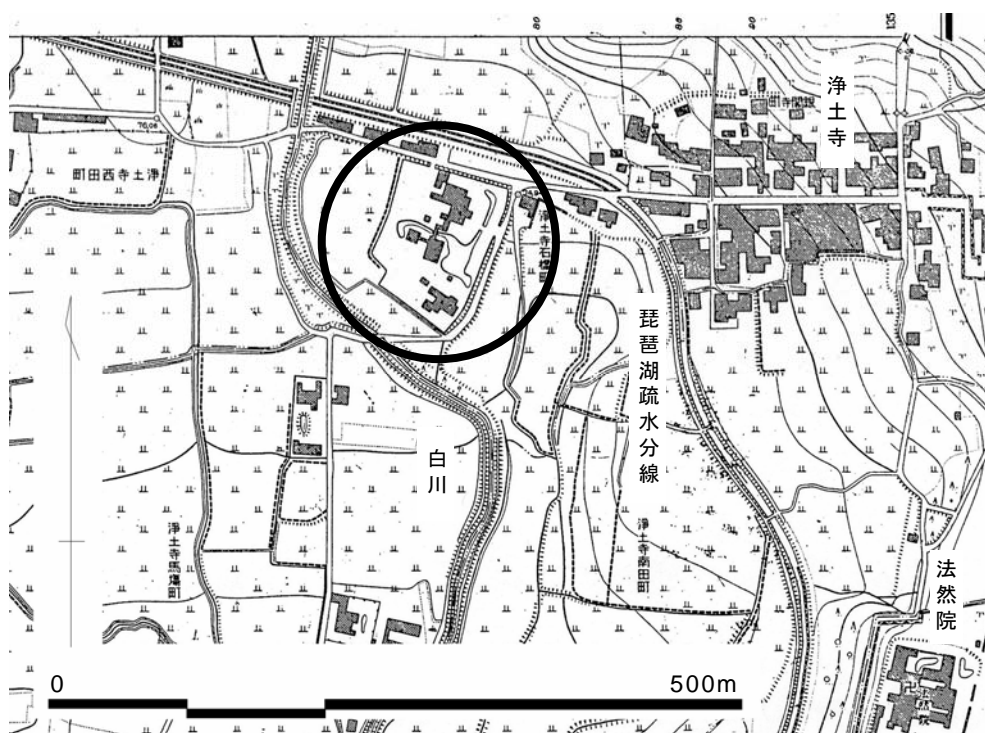


図4-48 大正11年（1922）の地図に見られる橋本関雪邸（白沙村荘）



図 4-49 琵琶湖疏水の水を用いた
白砂村荘の景観



図 4-50 大きく東へ開いたアトリエ
と前面の庭

夕ごとの散歩には必ずといってよいほど、この道を歩き、桜の成長を見ては喜び、そしてようやく枝をはろうとする若い桜の枝を折り、皮をはぐ人の絶えぬのを見つけては悲しんでいた。時とすると、そそくさと帰ってきて納屋からなわを持ち出し、折られた枝にあわせて包帯をしに出かける父の姿が見受けられたりしたものである⁴⁹⁾。

このように、彩りを添えられた琵琶湖疏水分線縁の空間は、はじめは山辺の田園風景の中にあったが、その後、先に示したような市街地化の中で周辺との関係を変えていく。重要であるのは、数年の内に周囲に住人が増え、「疏水縁」がその市民の間で親しまれるところとなった事である。現在では、この頃の疏水縁の風景が、こうした住人たちにとっての原風景として記憶されている。

住友春翠の別邸は、大正2年（1913）鹿ヶ谷の光雲寺北東に、疏水縁から40-50mほど退いて8200坪にもわたる敷地をとり造営された（次頁図4-51）。実業家であり数寄者であった住友春翠は、西園寺公望の弟であり、西園寺公望のために百万遍近くに清風荘を造営したのはこの春翠である。春翠はまた、小川治兵衛（植治）と親しく、大阪茶臼山の本邸や西園寺公望の別邸などを任せていた。この鹿ヶ谷別邸の造園もまた任せられると、植治は無隣庵と並び称されるような名庭を創り上げた。実は「元々この土地については早くより治兵衛はよく知っており、私財を投じて、そのあたりそこばくの土地を所有し⁵⁰⁾」ていたのを、植治が春翠に勧めたものであった。つまり、疏水が近く、背後に適切な距離の山並みを持つ広い扇状地の上であり、植治の造園によって奥深い山水が創造できる適地であった。植治の造園は、次章の円山公園の例で見るように、「あるがままの自然」の表現に徹し、流れる水の造形を取り入れるところに特徴がある。春翠の理解と財力が、この一大造園を可能にした（次頁図4-52⁵¹⁾）。

橋本関雪の例と同様に、広く敷地をとった庭園は、周辺環境に大きな影響を与えたものと思われる。とりわけ疏水縁から見下ろす先に、庭園の森があり、また周囲の敷地においても、可能であるところは植治の造園を取り入れ始めた。疏水縁に近接する小川邸や光雲寺境内において、疏水からある程度見下ろすことの出来る庭園の雰囲気は、この周辺（鹿ヶ谷と若王子の間）の景観の一面を特徴付けた（次頁図4-53）。

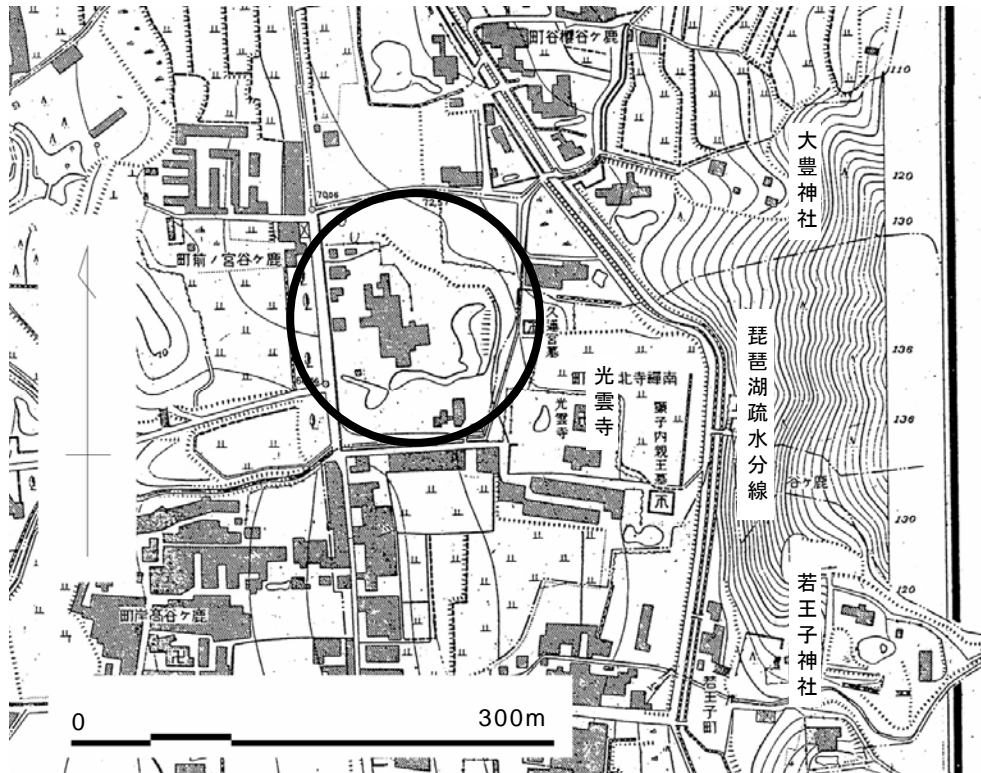


図 4 -51 大正 11 年（1922）の地図に見られる住友春翠別邸



図 4 -52 鹿ヶ谷邸庭園の景観



図 4 -53 疏水縁から西側へ緑が連続する現在の景観

3 文人と住居地域の発達

1) 居住した文人達

この地域一帯は、見てきたようにもともと住居が殆どなかった事から、住人はそもそも志向してここへ移り住んだことは明らかであり、どのような人々によって志向されたのかを知ることは、その後の界隈を性格付けた一つの要因を分析する事になる。

一帯に居住地域を形づくり、あるいは生活を営みはじめた人々の多くは、芸術家、あるいは学者といった、いわゆる文人であったことは注目に値する。つまり、この地を開き環境を変えていく力は、この時には京都復興の為の産業ではなくて、少なくとも文化によって環境をつくろうとする人々であった。例えば次の錚々たる文化人が挙げられる⁵²⁾。

明治 35 年 (1902) ⁵³⁾	田能村直入 (日本画家: 1814-1907)
大正 5 年 (1916) ⁵⁴⁾	橋本関雪 (日本画家: 1883-1945)
大正 9 年 (1920) ⁵⁵⁾	住友春翠 (実業家・数寄者: 1865-1926)
大正 9 年 (1920) 頃 ⁵⁶⁾	野長瀬晩花 (日本画家: 1889-1964)
大正 13 年 (1924) ⁵⁷⁾	西谷啓治 (宗教哲学者: 1900-1990)
大正 14 年 (1925) ⁵⁸⁾	和辻哲郎 (哲学者: 1889-1960)
大正 15 年 (1926) ⁵⁹⁾	西川一草亭 (華道家: 1878-1938)
大正末年か ⁶⁰⁾	桑田善備 (植物学者: 1882-1981)
昭和初期か	登内微笑 (日本画家: 1891-1964)
昭和 11 年 (1936) か ⁶¹⁾	石崎光瑤 (日本画家: 1884-1947)
昭和 25 年 (1950) ⁶²⁾	吉井勇 (歌人・劇作家: 1886-1960)
昭和 27 年 (1952) ⁶³⁾	田中美知太郎 (哲学者: 1902-1985)

これらの人物の住まった場所を図 4-54⁶⁴⁾に示す。上の列記は年代順に並べたので、橋本関雪、住友春翠らによる先行開発がよく分かる。彼らは鋭い先見の目を持ち、文人の内でも財力のある者として、続く人々に方向を示したものと位置付けられる。



図 4-54 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域にあった文人の家 (筆者調査・作成)

そして例に挙げた文人達の住处選びは、鹿ヶ谷を東西に貫く道を境に、南北で二つの傾向に分かれている事が把握できる。つまり、南部（鹿ヶ谷－若王子）はこの時期に至るまでに、境界の構造的基礎が出来上がっており、また北部（鹿ヶ谷－浄土寺）は疏水周辺の大部分がこの後の開発によってその空間的構成が全く作り替えられたといえる。

2) 南部地域（鹿ヶ谷－若王子）

図4-55⁶⁵⁾は大正期以降に急速に開発が進む以前の若王子あたりを描いた絵画である。その後の開発によって、このような牧歌的な風景が新築の家によって埋め尽くされたが、それでも上記の例の文人に注目すると、ここでは概ね近

世より存在した集落、あるいは上記の先行開発付近を好んで住んだ傾向が見られる。特に多能村直入が「画神堂」と呼ばれる家屋を建てた敷地⁶⁶⁾や、和辻哲郎が移り住んだ敷地は、若王子の社家であった。

和辻哲朗は主著の一つである『古寺巡礼』⁶⁷⁾で、住处であった若王子の風景を次のように表現した。

空が美しく晴れて楓の若葉が鮮やかに輝いているなかに、まるで緑に浸ったようになって、F氏の茶がかった家が隠れていた。…樹の種類異なるに従って、少しずつ色の違うさまざまの若葉が、地からむくむくと湧きあがって来たように見え、まるで烈しい交響楽のように我々の感覚を圧倒してしまう。だから五分間もそれを眺めていると、人間の世界から遠く遠く離れてきたという心持ちになる。

そもそも近世までは、郊外の僻地であるこの地域において、名所旧蹟などが敷地まわりを囲って山へ向かって開き、町と比較的にありながら遠く離れたような空間づくりが主とされてきたが、ここで再び志向されるのは、同様に、己を自然と対峙させて思索に耽ることができる環境であったことがわかる。

南部一帯を占める住宅敷地は、どれも大きな敷地を持っているため、疏水と接する部分においては、広い範囲で統一的なデザインが可能であった。生け垣や斜め方向に透ける板塀を用いるなどと協調のための工夫が、現在でも確認できる（図4-56）。住友春翠やその

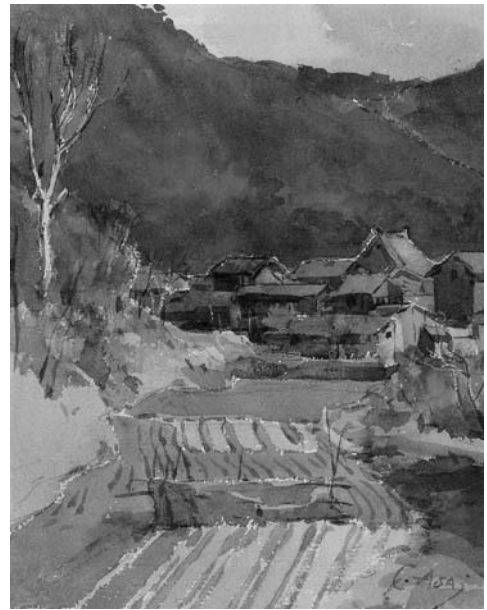


図4-55 明治40年（1907）の若王子風景（浅井忠画）



図4-56 生け垣と板塀に囲われる敷地
左に疏水が流れる

周囲の家によって広い敷地を造形され、残る部分は古い集落や、神社の社家、光雲寺の境内等、そもそも歴史の中で開発されてきた領域であり、そういった中で文人達が好んで身を潜め、あるいは自然の中へ精神を開いた。出来た空間は図4-57のように、疏水分線の東側に迫り上がる山の急斜面があり、切り込むように通された疏水と、それに沿う桜の並木、周囲の古い集落や光雲寺境内と新しい住友春翠の鹿ヶ谷邸の庭園で構成された。水辺に森と並木が覆い被さるように影を落として、落ち着いた疏水縁は、田中美知太郎が特に「(疏水に沿って) 若王子の前へと歩くことが多く、」ひとり歩きするのには、しずかであった」と言っている⁶⁸⁾のをはじめ、多くの文人に散策路として好まれた。

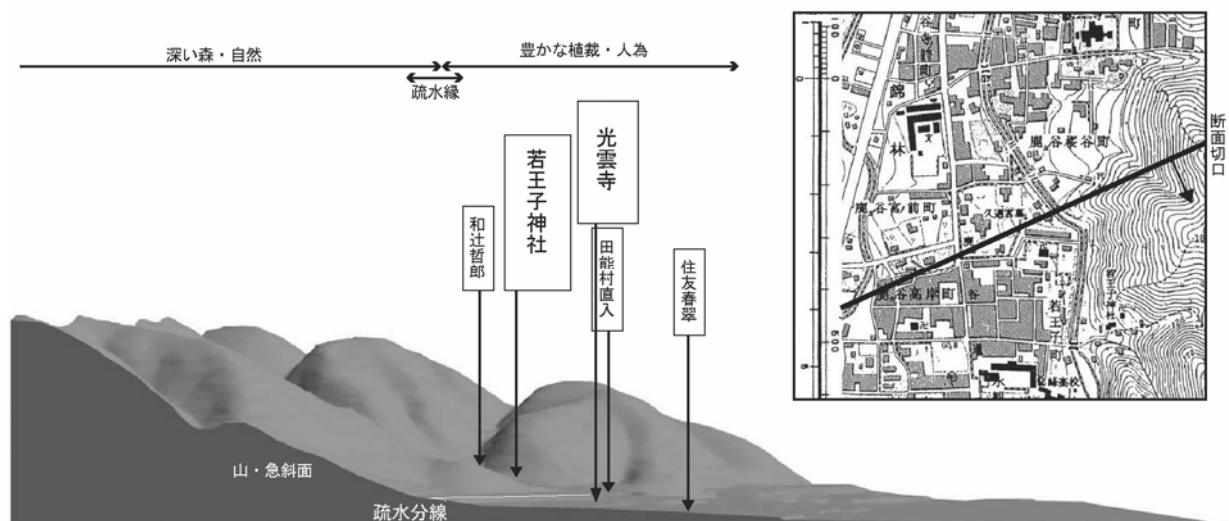


図4-57 南部地域の空間構成（筆者作成）

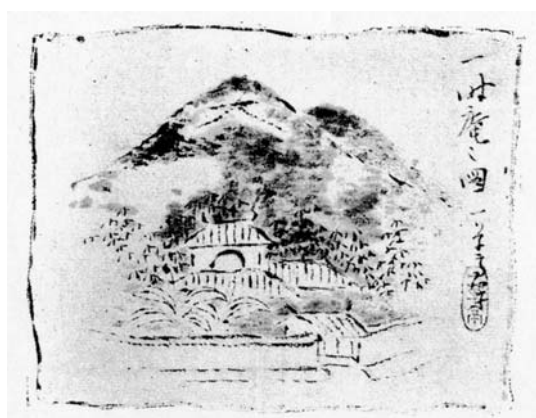


図4-58 大文字山と去風洞

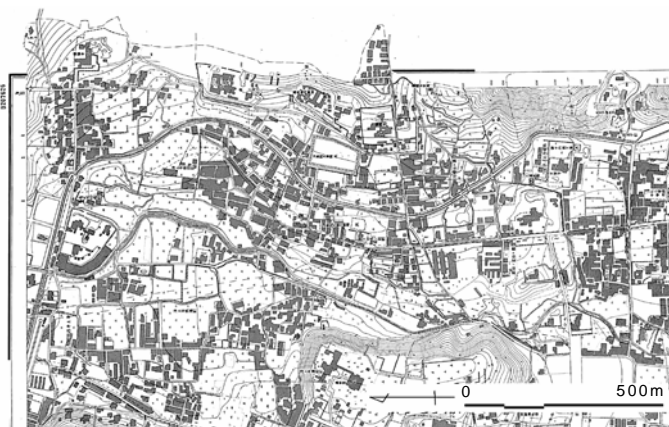


図4-59 昭和4年（1929）の地勢

3) 北部地域（鹿ヶ谷－浄土寺）と散策路の形成

一方、北部にあたる鹿ヶ谷－浄土寺の領域では、橋本関雪の白沙村荘が住居の先駆であった。上の例では続いて野長瀬晩花が、見晴らしが良く静かな場所を選んで家を建て⁶⁹⁾、西川一草亭も現地を歩いている時に田の中の去風洞の敷地を即買した⁷⁰⁾。つまり、彼らは大文字山の麓に広がる田園の風景の中に浸ることができる土地を選んでいる(図4-58⁷¹⁾)。

先に見た地図上の変遷をもう一度詳しく見ることによって、拡大期の住居が上記の志向でどのように作られていったのかを把握することができる。図4-59⁷²⁾において、住居が集中している箇所と疎らな場所が明確に現れていることに注目すると、初めの開発は、白川

と疏水分線に挟まれた領域において、さらには鹿ヶ谷集落から北に接する部分において最も顕著である。しかも、この開発は白川に直に接する場所では行われず、疏水分線の方に接するように行われた。疏水との関係においては、この範囲が断面的連続性をもって疏水と接している部分であった。たとえば、浄土寺集落の南にあたるある範囲では、先の疏水縦断面で見たように、疏水とその西側の地面との間に 2m 程のギャップ（疏水が高い）があり、この時期にはまだ宅地化されていない。

自然の水の流れと家屋を連続的に配置する事は、水害の危険に晒されることを意味する為、自然河川の白川沿線を避けることや、穏やかな流れの疏水にしても堤の直下である事を感覚的に避ける事は容易に想像がつく。この傾向で、名所を隠す山裾に近く、二つの水辺も遠くないこの狭間の領域が初めに選好されたと考えられるが、それだけではなく、疏水には寧ろ接近する傾向にあったのは、その環境的、景観的志向によるものであったものと思われる。つまり疏水縁において、かつては見るほどの物ではなかった景観が、橋本関雪夫妻による並木が出来ると、一挙に居住適地と判断されたのである。

この時期（大正末期から昭和初期）には、図中でも特に住宅密集が激しい鹿ヶ谷南田町で盛んに開発が行われている。同時期に鹿ヶ谷に住んだ京都大学教授の黒正巖によれば、「南田町邊は某大画伯の所有地が多く」、黒正の借家主も「その画伯」であった⁷³⁾。大画伯とは、橋本関雪に他ならない。現在でも橋本家の借家は続いており（図 4-60）、疏水からの見られる景観にも気遣っているデザインが見てとれる。すなわち、吉田山の山頂方向（前章で見たように、ここもほぼ同じ時期に「銅御殿（あかがねごてん）」と呼ばれた銅板葺屋根の借家群が造営された）へ向かって、木造建築の水平と垂直に走るラインを基調とした壁面と装飾ぶった入母屋の瓦屋根といった当世風の意匠と、その前庭のボリュームのある植栽が連続していく。疏水側に廻ると生け垣になっていて、疏水縁の並木とよく適合している。このように、意識のある施主は、疏水縁に培われ始めていた静かな小径としての雰囲気を含み取って、デザインを重ねていったものと思われる。

さて、こうして形成されてきた住宅地に住む文人たちは、どのようにこの景観をみていたのだろうか。昭和 26 年（1951）に吉井勇は、越してきた住処の環境を次のように表現している。



図 4-60 大正末期から昭和初期に建てられた疏水縁の借家群

（浄土寺の家の）門の前には南禅寺の方から流れて来る疎水^{マツ}があつて、その兩岸は橋本関雪が植えたという桜並木になっている。（中略）ようやくここを永住の地としようとする心持ちになっていた時だったから、こうして日ごろから願っている隠棲という言葉にふさわしい家を得たことは、私にとってかなり大きな喜びだった⁷⁴⁾。

ここに記された疎水の景観は、ほぼ同時期の図4-61⁷⁵⁾の写真から分かるように、成長した桜の並木が水面に枝を投げかけ、また疎水縁全体を覆って落ち着いた雰囲気^{マツ}が創り出されている。昭和8年（1933）発行の『大京都誌』は、名所案内を多分に含む京都市の地誌であるが、そこには「幹線と分岐せる支線⁷⁶⁾」と書かれているだけで、現在のように散策路として公に認識されていなかった。しかし、周辺に住む文人たちにとって、疎水縁は桜並木と静かな水の流れにより格好の散歩道となっており、再び黒正巖によれば、昭和4年（1929）に次のように記している。



図4-61 昭和36年（1961）頃の疎水縁
橋本関雪、吉井勇邸の前あたり

疎水のほとりはよく散歩したものだ。私達はこれをフィロゾーフエン・ウエヒ（哲学者道）と呼んだ。ハイデルベルヒの哲学者道以上によい道だ（以下略）⁷⁷⁾

「哲学の道」の名の由来には、西田幾多郎によるというものや、京都大学の学生によるというものなど異説は多くあるが、この頃には「哲学（者）の道」の名で呼ぶ人々がいたことは確かである。ドイツロマン主義哲学の中心地であったハイデルベルクに留学する京都大学の研究者ら、あるいは彼らから伝え聞く人々による、当地の魅力的な「哲学の道」へのオマージュであったと考えられる。

また、西谷啓治は随筆『京都感想』に、次のような記述している。

殊に鹿ヶ谷に住んでからは、暗い夜空に黒々と浮かぶ東山のシルエットを眺め、せせらぎの音を聞いてみると、よく法然上人のことが想ひ出されて来た。といふよりはむしろ、今自分が見聞きしてゐるこの同じ山や水音を上人も見たり聞いたりされたであらうといふ想念から、あたかも自分が現に上人と同じ時代にあり、この山景水音がその時代の現在であるかのやうな幻想が生じたのである。特に法然上人だけが思い出されたのは、土地が上人に因縁の深い土地であるといふこともあったであらうが、一つには静寂な夜の神秘が、最もよく上人の表象と結びつきえたせゐるもあつたらう⁷⁸⁾。

この随筆で西谷は、西田幾多郎の「歴史的な身体」について考察しており、それは「我々の表象が外景に触れて発生し、また相互に結合する時、その発生や結合はその意識以前のなところで起こる」ものであつて、意識以前には、「身体と環境との間の意識以前の感応・

交流の産物である」としている。歴史性は単に意識の上だけで理解されるだけでなく、「現身的なファンタジーを動かすまでに」深化すべきであり、西谷は上記のように鹿ヶ谷周辺の雰囲気の中でそれを体験したという。しかし、ここに登場する「せせらぎ」は疏水と考えるよりは、慈照寺の方から湧き流れている小水路が妥当である。ここでもまた依然として近世から受け継ぐ景観の特徴が賛美される。

桜並木によって、その散策路としての適性を見出されたのみならず、西谷が話題にした法然院縁の道が散策路として意識されていた事は、西田幾多郎や田中美知太郎などが散歩していたことから分かる。田中はこう述べている。

日課としての散歩には、一つ上の法然院の前の通りを歩く。特別美しい道でもないが、西の空が夕焼けして美しいことがある。あるいは夕方銀閣寺近くへ行くと、水の流れる音が聞えて、かえって静寂を感じることもある⁷⁹⁾。

この地域の断面形状（図4-62）を確認しながらまとめよう。ここでは、断面上に挙がる要素の位置関係が重要である。東の高いところに法然院とその周辺の「歴史的身体的」に感応する領域が潜伏していた。この浄土宗寺院は先に近世までの構成で確認できたように、慈照寺や霊鑑寺などのような、そもそも桒に集落を持たなかった。その西へ下る間、疏水に至るまでは、桒から寺院を隠す林（花畑でもあった）であり、疏水縁の桜並木へ繋がっていた。疏水を挟んでさらに下る領域に、開発された家屋が建ち並び、少しの農地を挟んで白川へ至る構成である。その先は再び隆起して吉田山へ向かう。このとき、断面上で疏水の位置、つまり法然院、安楽寺との間に緩衝を置き、谷底までに距離があり、さらに地面の傾斜を断絶させないこの位置が重要である。この山（山に隠れた寺）から谷底の河川

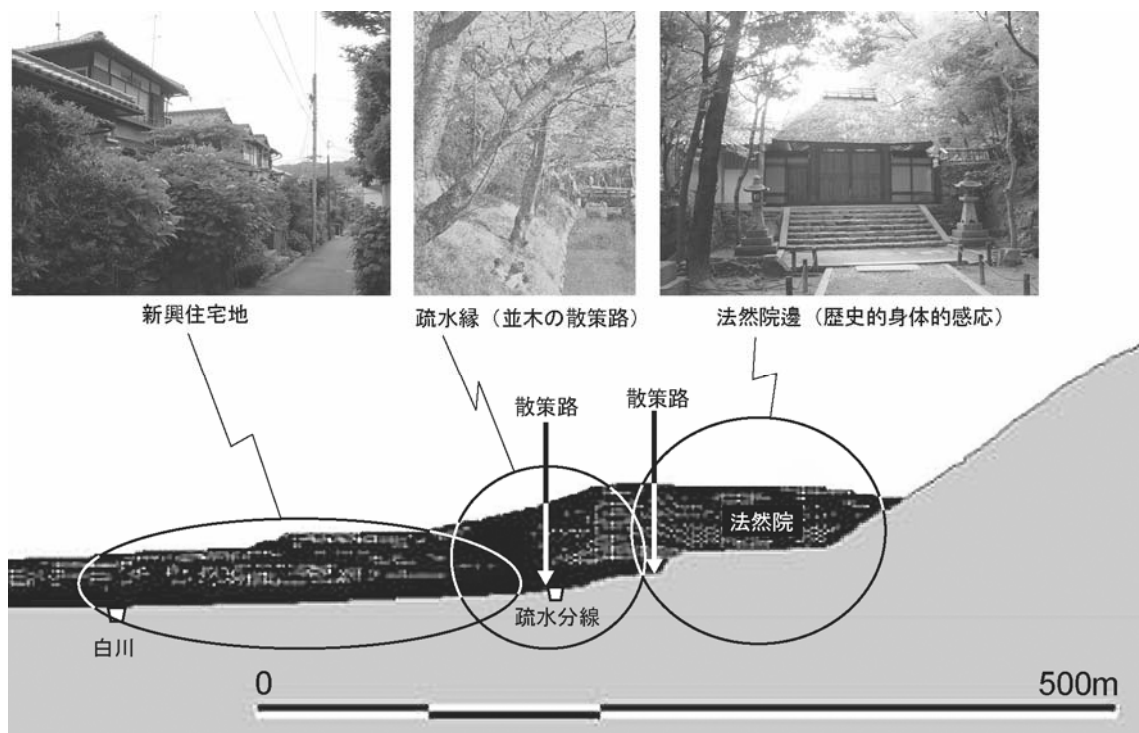


図4-62 法然院を含む東西断面上のエリア構成（筆者作成）

までの状況の移り変わりの中で、非常に自然に近くに存在して、桜並木をたくわえた穏やかな流れの疏水が持つ、人為と自然の融合を見逃さない人々が居たのである。

哲学者たちは、疏水縁のみならず、もう一つ東のルートを散歩道に選んでいた。これは、先に見たように、近世から存在する社寺同士をつなぐ道であった。疏水よりも標高が高く、西へ向かって眺望も得られる道であった。ここに、新しく形成された疏水縁の道と、近世から原形としてある社寺とつなぎの道による、二層の構図が萌芽していた。

4 西田幾多郎と散策路

周知の通り、哲学者の西田幾多郎は、明治43年（1910）に京都帝国大学文学部哲学科に赴任し、爾来京都帝国大学独自の学風の基礎を築いた⁸⁰⁾人物である。当初は現在の左京区吉田近衛町に住居を構えており、大正元年（1912）12月23日に左京区田中飛鳥井町へ引越しをしている。そして昭和4年（1929）に京都帝国大学を退官し、晩年は鎌倉の新居と往復しながらの生活になる⁸¹⁾。京都帝国大学に赴任するとすぐに、西田は浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の景観の良さを気に入って歩いた。「此頃は毎日銀閣寺の邊を散歩する 此邊の景色は實によい⁸²⁾」という、その頃の彼の手紙の文面がその事をよく示している。

また、彼自身の日記⁸³⁾の中に、次のように散歩の記録が頻繁に記されており、彼の足取りを知ることができる。

- ・ 明治43年10月2日「…午後桑原君と東山の邊を散歩す。法然院，安樂寺，若王子，永觀堂を見る。…」
- ・ 明治43年10月16日「午前法然院邊まで散歩す。」
- ・ 明治44年2月10日「午後銀閣寺邊を散歩し，…」
- ・ 明治44年4月5日「…午後やよひ，敏子つれて南禅寺より銀閣寺まで廻る。」
- ・ 明治44年5月2日「午後母を伴うて銀閣寺など見る。…」
- ・ 明治44年9月7日「…夜，此夜は芋名月といふので家内と東山の邊を散歩。」
- ・ 明治44年11月3日「午後法然院の近邊を散歩す。」
- ・ 明治45年6月29日「午後法然院まで散歩。」
- ・ 大正元年9月28日「…午後久しぶりにて東山の方を散歩す。」
- ・ 昭和11年6月14日「徳光，下村と銀閣寺の庭を見る。」
- ・ 昭和13年1月7日「疏水近邊散歩。…」
- ・ 昭和13年1月18日「疏水邊散歩。」
- ・ 昭和14年4月11日「午後疏水散歩。…」
- ・ 昭和15年4月15日「銀閣寺川邊散歩，櫻満開。…」

ここで注目すべきは、次頁の図4-63⁸⁴⁾に示すように、京都帝国大学に赴任していた頃、すなわちここでは大正元年までの記録では、琵琶湖疏水が全く意識されていないのに対して、昭和11年以降の散歩は「疏水散歩」「銀閣寺川邊散歩」などと、水辺を歩くことが強

く意識されていることである。もともと「此邊の景色は實によい」と散策を繰り返していたのは、前節で示した近世までに法然院、慈照寺などの山辺深くに形成されてきた道だったのだろう。この前後における事態の大きな違いは、今見てきた文人達による景観の変化そのものなのである。

琵琶湖疏水竣工当時の景観は、先に見たように人々の意識の上では、山際の農村に水路が通っただけのものであったと思われ、この時点では、近世から培われた社寺が山辺に潜む場所性と、新しい水路との関係は、極めて薄いものであった。しかし、見てきたように橋本閑雪夫妻・住友春翠らの関わりや、次第に拡大した文人達の集合によって、水辺そのものが一つの景観として価値を持つようになると、西田幾多郎のようなそこに住まない文人たちにとっても「散歩道」としての価値が発見されていったのだといえる。このように、西田幾多郎の足跡を辿ることで、この地域の景観域が、山辺の個々の名所から大きく広げられたことが把握できる。

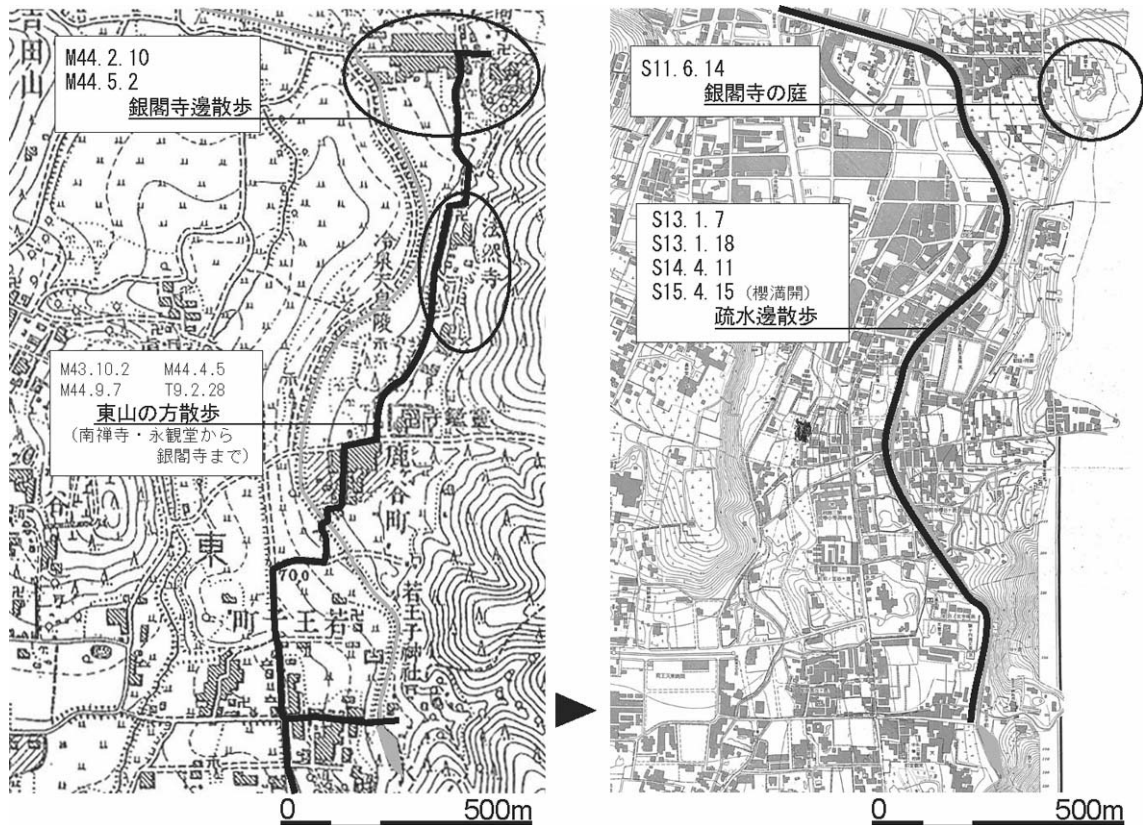


図 4-63 桜並木設置・市街地化前後の西田幾多郎の散歩道の変化
下図は左：大正元年（1912）地形図，右：昭和 10 年（1935）地形図

5 結語

山辺深くに特性景としての社寺空間を並べていたこの地域に、近代インフラストラクチャーとして都市への必要性から琵琶湖疏水分線が通された。この時、疏水分線自体は、そのまま田園風景に溶け込み、それ自身は特に関心を寄せられることなく従来の景観を維持した。

しかし、京都市における住居地域の拡大が進むと、疏水周囲の農村の風景は失われ、新たな生活地域がこの疏水周辺に出来ることになった。大正 11 年（1922）の都市計画区域決定では、「住居地域」に指定され、産業や工業のための地域となる可能性はなくなり、その後住宅地域となることが約束された。

実際の市街地化においては、この計画区域決定にも先立って、佳良な先行開発が行われていた。それは農村であった地域の地勢と琵琶湖疏水分線の可能性をいち早く発見して着手した、日本画家の橋本関雪と実業家で数寄者の住友春翠といった十分な財力をもつ文人によるものであった。彼らの住居、あるいは別邸の建設は、敷地内の造形もさることながら、周囲に対してもデザインの調和が図られた。特に、橋本関雪が白沙村荘の内部だけに留まらず、橋本よねとともに疏水分線に直接働きかけ、桜並木を設え培ったことは、地域一帯にとって非常に意味が大きかった。

その後に浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の地域は爆発的に住居開発が進んだ。その中には、多くの文人が移り住み、各々に環境を評価し、また地域の風景を愉しんだ。彼らの往来は、疏水縁や、従来から道としては存在した法然院縁の道の散策性を見出した。こうして、界限的な広がりをもつ山辺に潜む社寺の領域から、水辺のある住宅地域の方へ拡張した。

1 「哲学の道」成立の顛末

戦後の疏水縁は依然として図4-64⁸⁵⁾のように、家々の前がそのまま小径（あるいは幅員の広くない道路）になっていて桜並木が空を覆う、簡素ではあるが落ち着いた情景であったようだ。しかし、次第に環境や水質の悪化が嘆かれるようになっていた。

遡って昭和2年（1927）に、京都市の拡大と成長のため急増した上水道の給水人口に対処すべく、京都市水道の第2浄水場として建設された松ヶ崎浄水場の給水が開始した。この浄水場へ導水した水路こそ、疏水分線であった（実際は、疏水分線が浄土寺から白川地区へ北上したところで分水されて、管渠で松ヶ崎まで送られた）⁸⁶⁾。つまり、この時から疏水分線そのものが、開渠の生水導水路として使用されたのである。

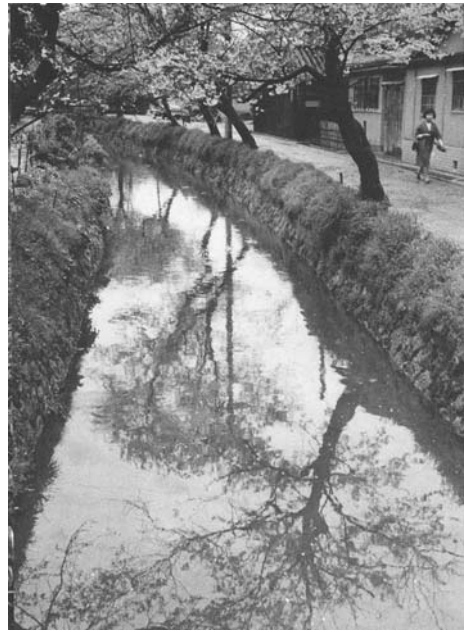


図4-64 昭和30年代の疏水縁

しかし、人家が密集するに伴い、汚物や土砂などの流入が増加して、水質の悪化を免れなかった。この問題は、早くも京都市水道施設の第2期拡張事業において、つまり昭和7年（1932）頃には議論されており、疏水分線を導水管として使用していたところの2888mを鉄管による輸送に改めることが決定されている。これが昭和24年（1949）から翌年にかけて実施され、口径1350mmの铸铁管の導水管が疏水分線に沿って敷設された⁸⁷⁾。

その頃の疏水縁の実態は、「車の往来でこわされて歩きにくく、両岸の桜の樹も枯れるにまかされ、ごみの投下によって疏水の水も濁り汚れて行くばかりだった⁸⁸⁾」といわれるほどだった。汚れて行く疏水分線については、昭和36年（1961）に出版された『跡 続・カメラある記』でも批判されている。

疏水も汚くなった。モが生い茂り、魚をとる子供たちが静かな流れをひっかき回してゆく。夜になるとこっそりゴミを捨てにくる連中もあるらしい。朽ちゆく並木に節哉氏も「身の細る思い」だそうだが…⁸⁹⁾（以下略）

当の橋本節哉も、疏水分線が上水用に用いられていたのが直接鉄管で浄水場へ送られるようになってからは、以前ほど疏水を美しくするための取り締まりがなくなった事を指摘しつつ「心ない人々の投げ込むゴミのせい」であると嘆いている⁹⁰⁾。

昭和43年（1968）から松ヶ崎浄水場への給水能力をさらに増強するために、水道局で導水管の増設計画が持ち上がった。当時の市会議委員の多谷岩佐によれば、当初この新しい導水管は、若王子神社から西へ行って、鹿ヶ谷通りを北へあがり、銀閣寺交差点へ通す

という計画だった。当時の疏水分線を「きたないドブ川」と捉える人々も現れ、これを埋めて道路にするという動きもあった中、疏水分線水路に沿わせて導水管を増設してその上に散策路を設けようと地域住人が運動を起こし⁹¹⁾、結局昭和44年(1969)に、口径1800mmの導水管を疏水縁に埋設する工事が行われたという⁹²⁾。疏水縁を「昔のような散策道」にしたいという地元住民が「哲学の道保勝会」を立ち上げ陳情したものだ。工事は2期に分けられ、昭和47年(1972)に竣工した⁹³⁾。

この時、同時に歩行者のための散策路とするために、車交通の締め出しが議論になり、地域住民を二分する大激論になった。この結果、車は疏水縁の道路に進入禁止が決定され、「本格的な人間尊重道路」が実現した(図4-65⁹⁴⁾)。



図4-65 新聞に報道された「哲学の道」の車論争

2 「哲学の道」のデザイン

整備工事計画の図面（次頁図4-66⁹⁵⁾）によると、導水管を埋設するために、水面幅で1 m程縮小し、水路左岸の法勾配を一律に急にして、土手を水面に接近させたことが分かる。水面に対する人のアクセスをほぼ断ち切る形ではあるが、散策路としては水をより近く感じることをのける設計になったといえる（図4-67⁹⁶⁾）。この工事は、桜並木をそのままに（工事の為の植え直しはあったものの）、並木と水路の間に人の歩くことの出来るスペースを設けたものであった。

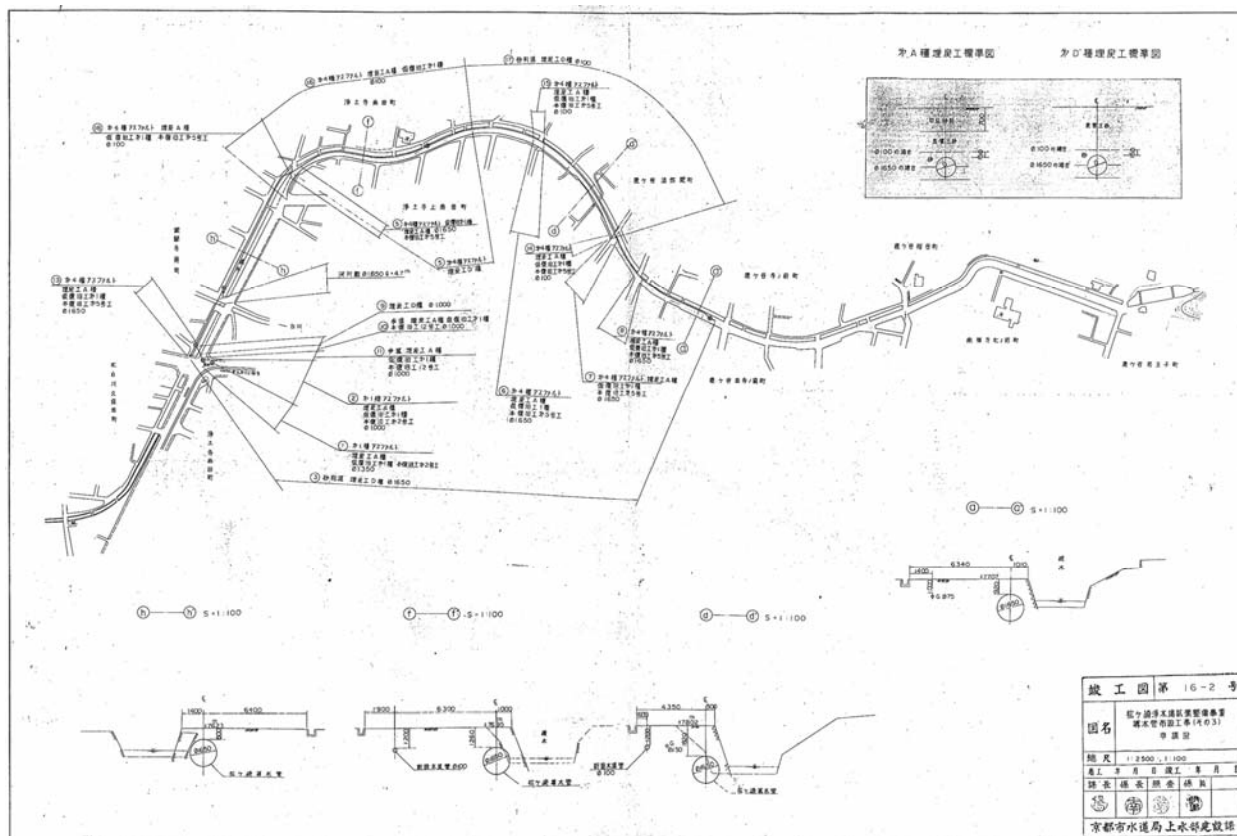


図4-66 松ヶ崎浄水場導水管布設工事の平面・断面図

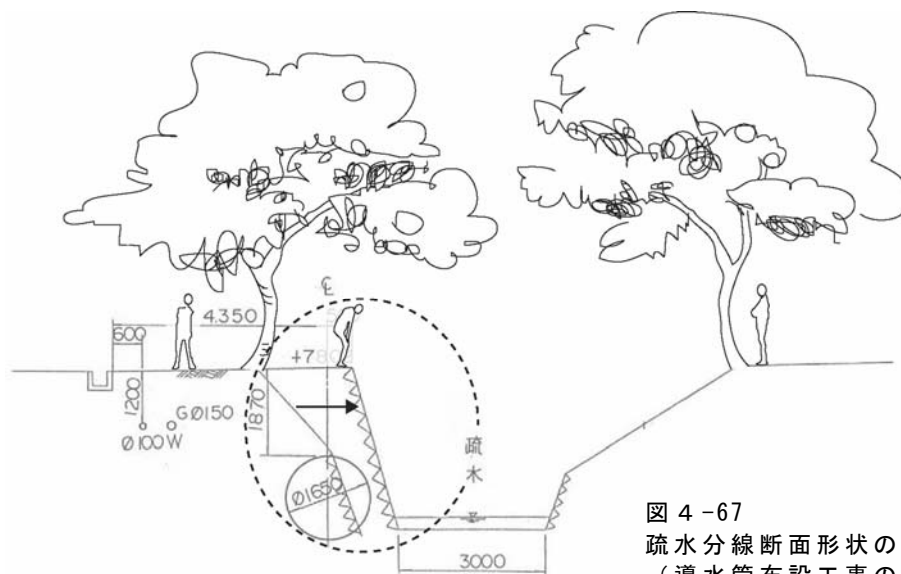


図4-67
疏水分線断面形状の変更と遊歩道
（導水管布設工事の断面図に筆者加筆）

この散策路は、水路の断面形状の変更により、散策者を水面に対して視覚的に接近させた。こうして出来上がった散策路には、はじめて公に「哲学の道」と名付けられた。

山辺地形の中を緩やかに流れるような線形設計の琵琶湖疏水分線に、先駆的住人であった橋本夫妻の善意で桜並木が加わり、さらに、文人たちが往来する住宅地域が形成されて後、静かな歴史的名所を含む思索に適した小径としての性格を帯びるようになった。これに意識的な整備が加えられ、現在に至る「哲学の道」が出来上がったといえる。こうして明確化した散策路としての目的が、住宅地に囲まれた小径に付加されて、山辺を横につなぐ一本の人の流れが改めて生まれる事となった。その結果、背景にある山裾の旧蹟と住宅地域との結びつきが、空間的に創出された。山辺の道と水辺の道が接近して存在する、二層構造の貴重な景観域は、このようにして住宅地域に成立した（図4-68）。

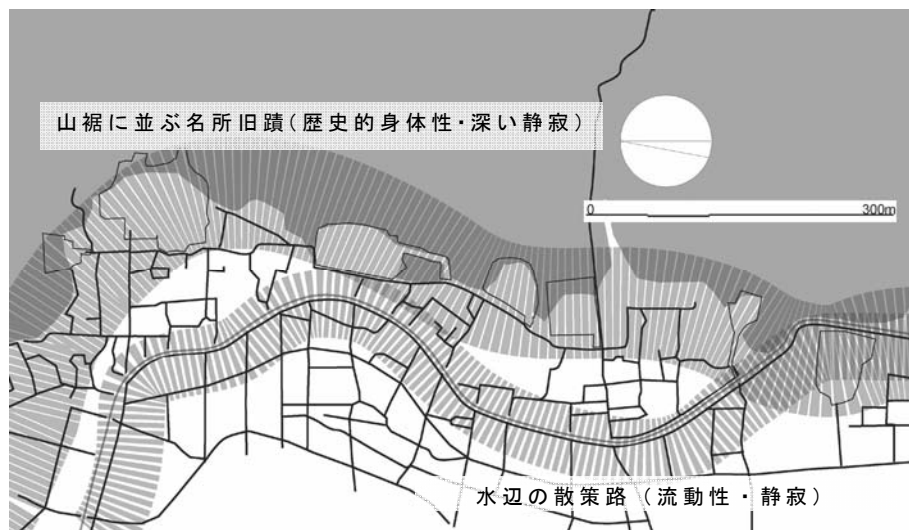


図4-68 浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域の2層構造（筆者作成）

住民の運動による「哲学の道」の誕生は、新聞などによる報道も手伝って当時の話題となり、もともと幾らかの本等によって紹介されたような哲学者が往来する静寂な疏水縁の散策路は、一躍知名度の高い散策路となった。それは、背後の名所旧蹟の領域と結びつくことによって、界隈の住人にとってのみならず、観光の対象としても十分な魅力をもつ地域に発達していた。

例えば、散策路「哲学の道」の整備と「車の締め出し」以降、周辺は、店の立地に好都合になっていた。すなわち、路肩に店を建てれば、店の前は遊歩道であり、桜並木にまで続き、店舗の内から外へ滑らかな空間的質の移り変わりになっている。店舗の内部から、プロムナード空間へつながり、その先は下に水の流れ、上に桜並木があり、並木はそのまま背景の東山まで視線を連続的に誘導している。そのため、店舗は疏水縁に年々増加し、それらは遊歩道としての「哲学の道」の雰囲気をつくる一役を担っているとも言える。

この周辺に現在存在する掛茶屋的な店舗は、概ね自ら参加して創っている空間のテーマをよく認識していると思われるが、「哲学の道」における空間のテーマは、以上で見てきたような、疏水の静かな流れと並木の中に、文人達の往来した文化的雰囲気であろう。この歩道整備の後では、観光に対する取り組みが、一つの重要な視点となると思われるが、本論における議論からは若干外れる為に、さらなる考察は又の機会としたい。

3 結語

本節では、比較的新しい時代における疏水縁の変容と、役割を考察した。疏水設計当初には、基本的な風景の構成が地形に沿った緩やかな曲線状に形づくられ、後に関雪桜の植樹によって特異性を培われていた。そして最終的な現在に至る形を作ったのは、昭和 45 年（1970）以降の散策路整備工事であった。

前節においては、この地域に親しんだ文人の認識から、地域が二層構造になって結びついている事が判断できたが、整備工事の後には二層のうちの一つ、「哲学の道」が具体的な歩行者道にされて、この新しく形成された疏水縁の道と、近世から原形としてある社寺とつながりの道による、静寂の深度の異なる二層が、明確な形で出来上がり、山辺深くの社寺の雰囲気はそのままに、西手前の疏水縁散策路が全体を一つの景観域としてまとめた。すなわち、それは住宅地と共存して界限としてのポテンシャルも高く、社寺をつなぐ歴史的な回廊としての役割も担うことになった疏水分線の有効な景観的活用によるものだった。

4-5 まとめ

以上の分析，考察における主要な成果は以下の通りである．

まず，対象地域の景観の原形像を把握するために，近世から続く社寺空間の配置，地形及び景観特性を，絵図や地形資料を用いて視覚的に分析した．その結果，特性景として3つの扇状地に対して占地された8つの社寺空間において，背景の山並み自体が，庭園や建築に対する主要な視対象として特化され，山並みとの距離や位置，あるいは山並みの形状を強く意識したものであった．これらはこの地域の最も奥に位置し，西側の平地部分との関係を絶ち，独自の世界観を庭園に表現する，現代にも続く傾向を持つことがわかった．

慈照寺と浄土寺集落を結ぶ道と，談合谷から鹿ヶ谷集落，金戒光明寺を結ぶ道が，山方向への東西に走る2つの主要な道であることがわかった．その周囲はほとんど耕作地であり，それらの社寺を南北に結ぶ道が山麓に存在した．

続いて，近代インフラストラクチャーとして都市への必要性から通された琵琶湖疏水分線が，地域にとってどのようなものであったのかについて検証した．疏水分線のルートは，山辺の地形に沿った緩やかな曲線を描く物であり，また断面上の視覚的断絶は大きな物ではなかった．このように水平に立ち上がる物体でもなく，また周囲が農村であり，疏水分線によって阻害される主要な道は僅かであったために，疏水建設における地域への景観的影響は殆ど問題にならなかった事が明らかになった．

そして，この地域が市街地化する時期に焦点をあてて，疏水分線周辺に形成された住宅地域の特性を分析した．市街地化の契機となったのは，同時代の都市計画地域決定であった．計画地域決定によって「住居地域」とされたこの地域には，さらに都市計画道路が敷設され，本格的な市街地化にてこ入れがされている．しかし，その最中に文人等によって，場所の価値が発見されていた．都市計画にも先だって，橋本閑雪夫妻や住友春翠らによる先行開発は，景観的な美的価値を地域に付加する有効な庭園を造成し，また疏水分線には桜並木を付加した．それに続いて多くの著名な芸術家，哲学者が移り住み，地域は文人界限の装いを持ち始めた．同時に，桜並木によって特異性を孕んだ疏水縁の道をはじめ，界限の小径は多くの文人の往来するところとなり，その道の構成から地域は二層構造になって，山辺深くの社寺の雰囲気はそのままに，西手前の疏水縁散策路が全体を一つの景観域として強く結びつけたことを示した．

さらに，この小径の散策性を明確にした昭和45年(1970)に始まる「哲学の道」整備は，以上の構成を公なものとし，守るための住人の動きであった事を明らかにした．

本章が対象とした浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域は，近世には農耕地の牧歌的風景の中に名高い宗教的要素が潜む地域であり，名所巡りに訪れる人々は，それぞれの社寺空間に展開する自然へ開いた独自の世界を渡り歩いた．この地域に近代化の最後の過程において，俄に住宅地と化す劇的な変異があった．しかしその中で，場所の利を好んで住まった文人達の働きかけによって，緑が培われ，散策路が見出された．特に歴史的回廊として見出された桜並木は，裸で横たわっていた疏水分線の有効な景観的活用によるものだった．それは，短期的な観光地政策が成功して出現した観光エリアとは異なり，自然と景観の豊かな社寺空間の集積，インフラストラクチャーを公共的な空間として積極的な関わりを持った文人がいたこと，そして都市化の中で，あるいはそれに先駆けて，時期を得た景観整備が

あったことなど、時代ごとに積み重ねられてきた地域への自主的かつ積極的なかわりが背景にあったことを示すものである。

- 1) 『京都市の地名』(平凡社, 1979.9) pp.144-145
- 2) 「浄土寺の上に東山殿石列 文献の記録, 発掘で初確認」(「京都新聞」2003年7月30日)
- 3) 前掲『京都市の地名』 p.145
- 4) 『寺院神社大事典 京都・山城』(平凡社, 1997.2) p.306
- 5) 前掲『京都の地名』 p.146
- 6) 同書 p.150
- 7) 前掲『寺院神社大事典 京都・山城』 p.120, 134
- 8) 同書 p.728
- 9) 同書 p.63, 625
- 10) 晴翁木村明啓『再撰花洛名勝図会』(笹屋成兵衛, 1862.9) 東山二ノ八
- 11) 「八神社」(『京都府庁文書』京都府立総合資料館蔵 社寺境内外区別取調45)
- 12) 「慈照寺」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調3)
- 13) 井口洋『都林泉名勝図会』(柳原書店, 1975.6) pp.152-154
- 14) 「慈照寺」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調45)
- 15) 前掲『再撰花洛名勝図会』 東山二ノ六十五-六十六
- 16) 「安楽寺」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調3)
- 17) 「靈鑑寺」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調3)
- 18) 「光雲寺」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調45)
- 19) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.178-179
- 20) 「若王子神社」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調3)
- 21) 前掲『再撰花洛名勝図会』 東山二ノ六
- 22) 『慶長昭和京都地図集成』(大塚隆, 柏書房, 1994.6) / 「京都3千分1地形図」(都市計画京都地方委員会, 1922-1929) / 「地形図 大文字山」(大日本帝国陸地測量部, 1940-1951) / 「京都市地図」(京都市参事会, 1895) / 「地形図 京都」(参謀本部陸地測量部, 1889) 他
- 23) 前掲『再撰花洛名勝図会』 東山二ノ七十一
- 24) 『十国巡覧記』(『史料京都見聞記三』駒敏郎ら, 法蔵館, 1991.11) p.135
- 25) 谷重遠『東遊草』(『史料京都見聞記一』駒敏郎ら, 法蔵館, 1991.9) p.249
- 26) 『京都の歴史 第八卷』(京都市, 1980.1) p.44
- 27) 田邊朔郎『琵琶湖疏水誌』(丸善株式会社, 1920.10) pp.17-18
- 28) 同書 p.19
- 29) 京都市参事会『訂正琵琶湖疏水要旨(全)』(村上勘兵衛, 1896.7) pp.24-25
- 30) 「疏水線路計画付図」(『琵琶湖疏水及水力使用事業』京都市電気局, 1940.3)
- 31) 田中尚人「水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究」(京都大学博士論文, 2001.10) p.88
- 32) 前掲『琵琶湖疏水誌』 pp.22-26
- 33) 同書 巻頭附図
- 34) 『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』(京都市水道局, 1990.4) p.197
- 35) 田邊朔郎『琵琶湖疏水工事圖譜』(京都大学土木資料館蔵, 1891.11)
- 36) 「京都市地図」(京都市参事会, 京都府立総合資料館蔵, 1895)
- 37) 前掲「水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究」 p.90
- 38) 『新撰京都名勝誌』(京都市役所, 1915.10)
- 39) 前掲『琵琶湖疏水工事圖譜』
- 40) 『京洛の四季 近代名画100選』(京都新聞社, 1995.11) p.31
- 41) 前掲『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』 p.25
- 42) 『京都都市計画小誌』(京都市土木局, 1929.3) pp.55-56
- 43) 前掲『京都都市計画小誌』 p.6
- 44) 同書 pp.75-99
- 45) 前掲『京都の歴史 第八卷』 p.461
- 46) 大正11年, 昭和4年, 10年の「3千分の1地形図 吉田」(都市計画京都地方委員会, 1922-1935)
- 47) 前掲『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』 p.557
- 48) 橋本節哉『思凡亭随想』(白沙村荘, 1966.10) p.446
- 49) 同書 p.329
- 50) 山根徳太郎『小川治兵衛』(小川金三, 1965.11) p.17
- 51) 『住友春翠』(住友春翠編集委員会, 1955.3) p.638
- 52) 生没年は次の各書を参考にした。『講談社日本人辞典』(講談社, 2001.12) / 『京都市姓氏

-
- 歴史人物大事典』(角川書店, 1997.9) / 『近代日本美術事典』(河北倫明, 講談社, 1989.9) /
『20世紀物故日本画家事典』(油井一人, 美術年鑑社, 1998.10)
- 53) 前久夫『京が残す先賢の住まい』(京都新聞社, 1990.6) p. 53
- 54) 前掲『思凡亭随想』 p. 28
- 55) 前掲『住友春翠』 p. 634
- 56) 岩井武俊『京ところどころ』(金尾文淵堂, 1928.11) p. 160
- 57) 西谷啓治『西谷啓治著作集第二十卷』(創文社, 1990.8) p. 203 / 同書第26巻(1995.8) p. 345
- 58) 和辻哲郎『和辻哲郎全集 第二十五巻』(岩波書店, 1992.1) p. 141
- 59) 熊倉功天『西川一草亭』(淡交社, 1993.3) p. 328
- 60) 前掲『京が残す先賢の住まい』 p. 61
- 61) 前掲『20世紀物故日本画家事典』 p. 32
- 62) 吉井勇『吉井勇全集第九巻』(番町書房, 1979.11) p. 371
- 63) 田中美知太郎『田中美知太郎全集第十七巻』(筑摩書房, 1990.6) p. 655
- 64) 下絵は「1:10,000 地形図京都近傍2号大文字山」(地形調査所, 1955.1)
- 65) 前掲『京洛の四季 近代名画100選』 p. 45
- 66) 前掲『京が残す先賢の住まい』 p. 53
- 67) 和辻哲郎『和辻哲郎全集 第二巻』(岩波書店, 1961.12) p. 20
- 68) 田中美知太郎『田中美知太郎全集第十五巻』(筑摩書房, 1988.2) p. 444
- 69) 前掲『京ところどころ』(金尾文淵堂, 1928.11) p. 158-161
- 70) 箭野浩三『京都新百景』(新時代社, 1930.4) p. 179
- 71) 同上
- 72) 「3千分の1地形図 吉田」(都市計画京都地方委員会, 1929)
- 73) 前掲『京都新百景』 p. 174
- 74) 前掲『吉井勇全集第九巻』 p. 371
- 75) 朝日新聞京都支局同人会編『跡 続・カメラある記』(淡交新社, 1961.3) p. 114-115
- 76) 野中凡童『大京都誌』(東亜通信社, 1933.6) p. 687
- 77) 前掲『京都新百景』 p. 175
- 78) 前掲『西谷啓治著作集第二十巻』 p. 207
- 79) 前掲『田中美知太郎全集第十五巻』 pp. 441-446
- 80) 前掲『京都の歴史 第八巻』 p. 497
- 81) 西田幾多郎『西田幾多郎全集第十九巻』(岩波書店, 1989.3) pp. 891-926
- 82) 西田幾多郎『西田幾多郎全集第十八巻』(岩波書店, 1989.3) pp. 142-143
- 83) 西田幾多郎『西田幾多郎全集第十七巻』(岩波書店, 1989.3)
- 84) 下絵は「二万分一地形圖京都近傍十二號京都北部」(大日本帝國陸地測量部, 1912)と「3千分の1地形図 吉田」(都市計画京都地方委員会, 1935)
- 85) 長谷川小太郎『京都二十景』(凸版印刷株式会社, 1967.7) p. 73
- 86) 前掲『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』 pp. 636-637
- 87) 同書 pp. 646
- 88) 前掲『田中美知太郎全集第十五巻』 p. 442
- 89) 前掲『跡 続・カメラある記』 p. 113
- 90) 前掲『思凡亭随想』 p. 330
- 91) 多谷岩佐『頑固でごめんやっしゃ』(機関誌共同出版, 1989.6) p. 164-167
- 92) 前掲『琵琶湖疏水の100年<叙述編>』 p. 558
- 93) 「“哲学の道”永遠に」(「京都新聞」1972年3月22日)
- 94) 「哲学の道 エスカレーターする車論争」(「京都新聞」1971.4.24), 「哲学の道よみがえる」(「京都新聞」1970.9)
- 95) 「松ヶ崎浄水場拡張整備事業導水管布設工事(その3)申請図」(京都市水道局, 竣工図第16-2号, 京都市疏水事務所蔵)
- 96) 「松ヶ崎浄水場拡張整備事業導水管布設工事(その3)平面図断面図」(京都市水道局, 竣工図第16-5号, 京都市疏水事務所蔵)

第5章

東山の近代公園デザイン — 円山・真葛ヶ原・祇園社

本章では、現在その全体が円山公園の敷地となっている円山・真葛ヶ原・祇園社の領域を分析する。この領域は近世より長樂寺、安養寺、双林寺、祇園社（八坂神社の前身）の社寺境内を含み、東山の広い山辺を形成している。かつ近世における麓の祇園新地の発達以来、都市の中心部とも近接し、社寺境内が占地した地形や自然条件に加えて、都市的位置における好環境を得て、全国でも固有な公共的空間としての特異性を持つ。

この領域についての研究は、丸山¹⁾により、主に近代に社寺境内が解体される中で公園用地が成立した経緯や、用地拡張時の行政的手段について論じられている。土井²⁾、荻谷³⁾は、それぞれ京都市の公園形成史と風致行政という文脈の中で、登場する円山公園の立場を考察している。しかし、近世の景観と近代の景観の両方を分析し、景観変容の詳細を分析した研究はされていない。

図5-1は『花洛名勝図会』（元治元年、1854）⁴⁾による東山全景の一部である。絵図左端中央より上の大きな建物が知恩院であり、ここより右側（南側）が円山界限である。この地域は真中の真葛ヶ原で大きく上部と下部の二つに分けられる。下部に祇園社（現在の八坂神社）があり、上部に時衆の安養寺、長樂寺、そして双林寺が見える。この円山界限周辺は北に青蓮院、知恩院、南に東大谷、高台寺、八坂の塔、正法寺、清水寺、西に祇園町、建仁寺、鴨川と、文化的要素に囲まれており、全体が東山の大きな山辺一面に展開している。

山辺であるが故に、本来この場所には空間的な多様性が備わっていたと考えられる。円山・真葛ヶ原・祇園社地域の東西高低差は約70mもあり、眺望による遠近のコントラストや、3次元的に変化するシーケンス景観など視覚を楽しませる空間構成を容易に作り出す土台があった。円山界限は図5-2のように地形の傾斜から山辺下部、中部、上部の3つに分けられ、この傾斜の違いが近世において多様を極めた活用法の違いに結びつくことになる。



図5-1 近世の円山・真葛ヶ原・祇園社景域

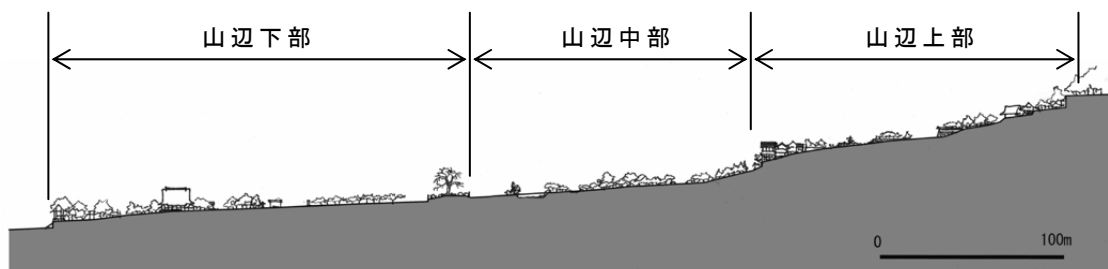


図5-2 円山公園東西断面図（筆者作成）

本章は，絵図や文献などの歴史的資料の分析と今日における現地調査をもとに，どのようにしてこの景観域の原形が形成され，それが近代以降にどのような都市的背景とデザインによって変容したのかを明らかにするために，以下の手順（図 5-3）で議論を進める．

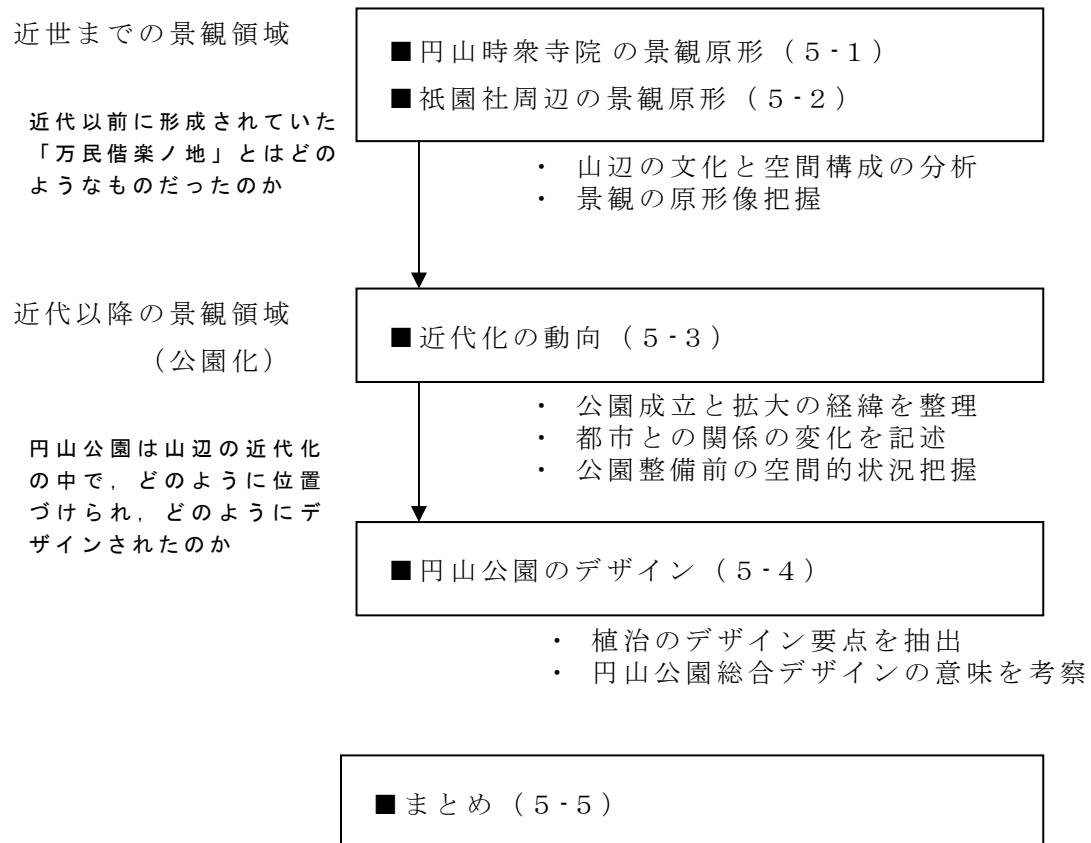


図 5-3 本章における議論の流れ

本節で対象とする時衆寺院とは、長楽寺、安養寺、双林寺であり、近世には特に賑わい名所地として名高かった。3つの時衆寺院は、長楽寺と安養寺が急斜面を特徴とする山辺上部に、双林寺が緩やかな斜面を特徴とする山辺中部にそれぞれ位置していた。

1 絵画史料の解題

本節において、近世の円山時衆寺院の空間構成を分析するために、主に3編の名所案内（名所図会）を史料として用いる。すなわち、『都名所図会』（1780）⁵⁾、『都林泉名勝図会』（1799）⁶⁾、『花洛名勝図会』（1862）⁷⁾である。これらに描かれる絵から読みとることのできる微地形や建築の配置、道の構成を、分析の対象とする訳であるが、その際には当然、これらの絵画表現における信憑性が問題となる。

『都名所図会』は、名所図会の先駆け的な存在である。前章でも触れたように、この名所図会は臥遊によって都めぐりが出来る優れたガイド本であり、鳥瞰的な視点から対象とする社寺境内などをそれぞれ一望している。ただし、端的に名所を図解するために、景観のうちで特徴のある要素（ランドマーク）が強調されて描かれている。それでも、描かれた行程に従って絵画の中を現地さながらに巡る仮想的体験を保証するために、要素間の相対的位置関係は的確に把握されているといえる。

『都林泉名勝図会』は、同様の名所図会として捉えられるが、さらに庭園などの林泉を専門的に扱っている。そのために『都名所図会』のように網羅的に名所を紹介するものではなく、名庭を持つ社寺境内の一部（主に塔頭）や、庭園的に捉えられる境界が掲載されている。ただし、円山時衆寺院に関しては、庭園を持つ塔頭一つ一つが丁寧に紹介され、庭園を含めた塔頭内部の景観や、さらにはその中で行われた遊興の行為などが細かく描かれている。ただし、描かれた景観は見た目の景観とやや異なることに気をつけねばならない。描かれた地形を現在の地形と比較すると、地形褶曲の相対的關係性はほぼ一致するが、場所によっては180°以上にわたる視界を一面に描いているために意識的とも思われる角度の操作が見られ（特に安養寺の左阿弥、也阿弥の描画において顕著）、実際以上に広い空間のように描かれている。

『花洛名勝図会』は、『都名所図会』と同趣旨の名所図会であると考えられるが、さらに詳細が描き込まれている。ここでは、『都名所図会』では無頓着であったスケール感に対する執着が見られ、『都名所図会』においては1枚に収められていた境内の絵が、2、3枚にわたって描かれている例もみられる。特に、安養寺については正面からの絵と、地形的に特徴のある参道の一部をクローズアップした絵が描かれており、後に見るように、描かれた地形は現在に遺された地形とよく適合し、これに基づく庭園・建築の配置そのものは、信頼できる情報であると考えられる。

これらの史料の特徴より、絵画表現にみられる要素の相対的關係と、地形の表現から当時の空間構成を把握する事は可能であると考えられる。

2 長楽寺の空間構成

1) 全域 一段階的に並ぶ平場とその接続

山辺の上部で最も急斜面（東西に約 30%の勾配）に位置する長楽寺は、図 5-4⁸⁾の『花洛名勝図会』によれば六つの平場を階段状に結んで形成されている。元地形に基づく平場の構成が、それらを結ぶ立体的な景観を決定しており、特に足利義政の代に相阿弥が造ったと伝えられる庭園⁹⁾は、2段目から4段目の平地と階段で囲まれた地形褶曲の集中する部分を利用している（図 5-5）。庭園は、池を基調に作られており、平場間の段差を利用した豊かな起伏に植栽が施され、段差を解消しながら水辺が彩られている。



図 5-4 近世の長楽寺鳥瞰図

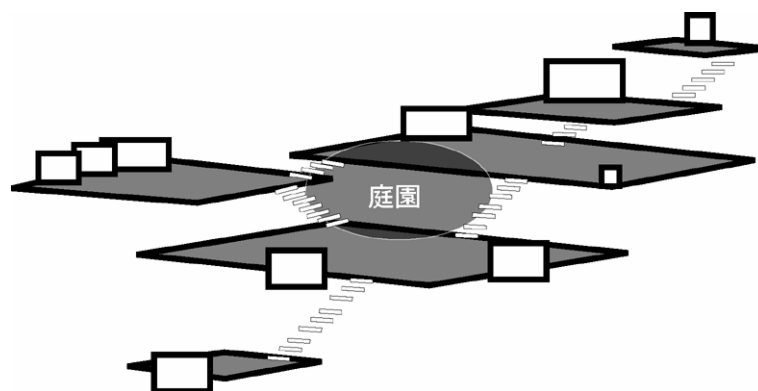


図 5-5 長楽寺を構成する平場と石段の模式図（筆者作成）

2) 平場における建築

長楽寺境内の建築物は、こうして造られた平場の隅に配置されている。急傾斜に造られた平場の隅は、必然的に高低の変化に富む部分になっており、幾つかの建築は好んで崖から飛び出すように造られた懸造になっている。また、『花洛名勝図会』には庭園の周辺に仮設的な建築物がみられる。例えば図5-6のような細い柱と最低限の屋根で内とも外ともつかない建築である。さらにはより簡易な方法で床机だけをおいてその上を座敷にしている様子もみられる。これらの仮設的な装置は、美しい景観の中に日常の飲食という行為を持ち込み、自ら景観と一体になる工夫であると思われる。

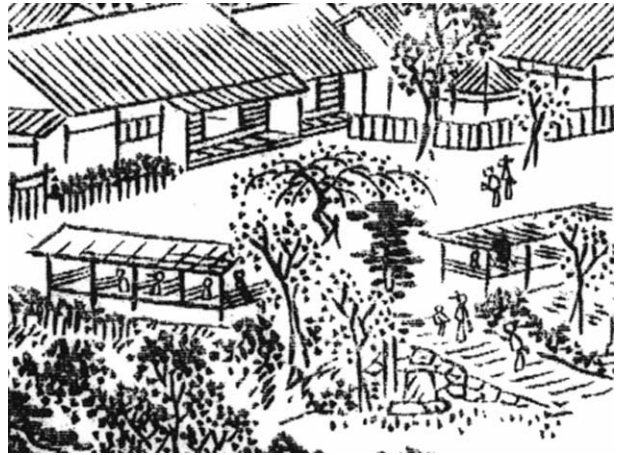


図5-6 境内に設置された簡易な建物
(先の図5-4の一部)

3 安養寺の空間構成

安養寺では江戸初期までに六阿弥（りくあみ）と呼ばれた六つの塔頭が出現し、以来庭園林泉を作られ、『都名所図会』には「庭中には石を畳ん飛泉を催し、池を掘ては舟をうかべ、緑樹芳草四季に花絶」えないと描写されている¹⁰⁾。『都林泉名勝図会』の「長寿院左阿弥」の絵に書き込まれた説明によれば、左阿弥の「林泉ハ織田道八作りシ」とされる¹¹⁾。織田道八（1582-1620）は、武士であったが剃髪して河内国の山際里に閉居してのち、「左阿弥」に移り住んだ。織田有楽の次男にあたり、有楽の茶道を祖述した数寄者として知られる¹²⁾。他の林泉についても、同様に数寄を追求してつくられたのではないだろうか。六阿弥一つ一つの景観は、『都林泉名勝図会』に詳細に描かれている。六阿弥の塔頭敷地構成については、『都名所図会』や『花洛名勝図会』など複数の名所図会に、それぞれ異なるアングル、趣向で描かれた多くの絵図が存在したことにより、六阿弥全域の空間構成の分析が可能である。さらに京都府庁文書に記載されている明治初期の境界図面¹³⁾や、現在の円山公園の観察と合わせて検証することにより、その裏付けが確認できる。

1) 全域 — 斜面に収まる塔頭群

安養寺境内全域の敷地構成および空間構成を把握するために、上記の資料をもとに近世を通して概ね共通した構成要素を抽出した。まず現在の地形と名所図会との比較によって、概ねの地形が合致することを確認した。主に全域の構成を知る上では次頁の『都名所図会』の図5-7¹⁴⁾と、『花洛名勝図会』の図5-8¹⁵⁾、9¹⁶⁾を用いる事で確認できる。同時に、明らかに改変された部分の地形を見出すこともできる。続いて、『都林泉名勝図会』に詳細が描かれている各塔頭敷地内の地形を現在の地形と比較して、描かれた地形の歪曲を修正して地形を推測し、さらに同じ絵から把握される建築の位置関係(ただし、



図 5-7 安養寺境内の鳥瞰図



図 5-8 六阿弥と参道の組み合わせ

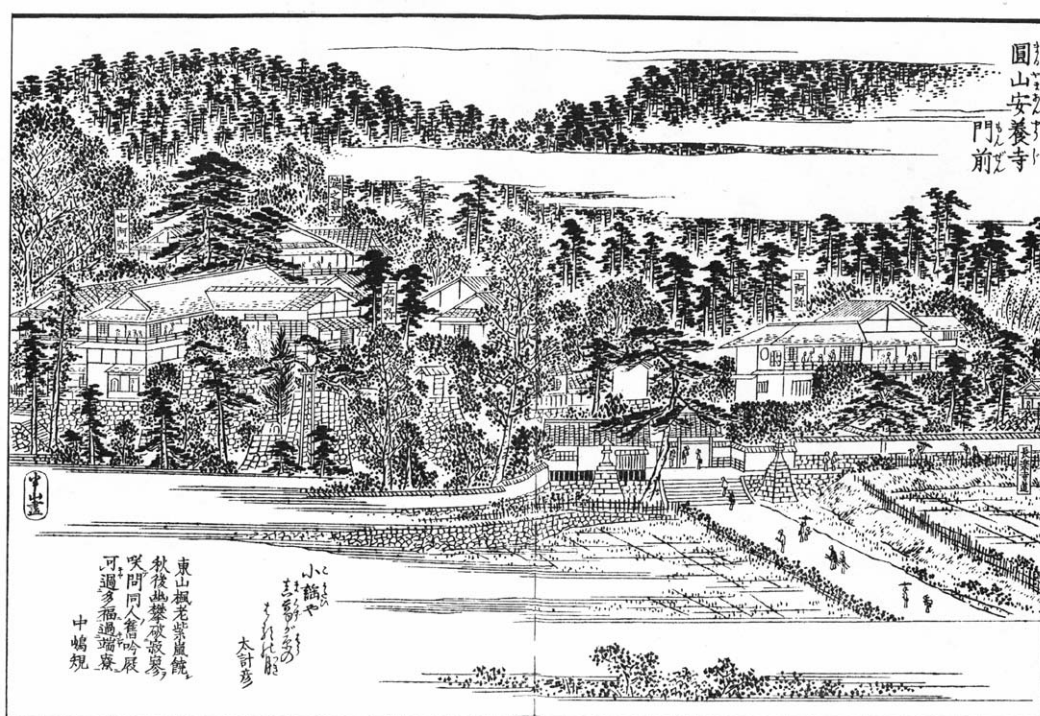


図 5-9 近世における安養寺正面の景観

絵中における距離と角度の大きさは信頼できないため、関係の抽出は位相的關係に留めた）と、それぞれの地形との関係を読みとり、同図面上に配置した。

このように諸図会から信頼できる箇所を抽出して、近世を全般に共通する安養寺境内の地形と建築と庭園の關係が明らかにされ、次頁の図 5-10 のように表される。作成した図面は、建築の形状や規模に関して絵図の表現につられて誤認する可能性は否定できないが、地形と庭園と建築の相對的關係と、塔頭間の相對的位置關係を概ね明らかにするものである。

6つの塔頭は互いに隣接しており、総門から本堂へ向かう屈折した参道の左右に展開したことが同図から分かる。西から、参道の南側に正阿弥、北側に左阿弥、その東に南から庭阿弥（端之寮）、也阿弥、連阿弥、そして参道と弁天堂を挟んで春阿弥と並んでいた。六阿弥敷地だけで東西の高低差は約 30m（約 25%）もあり、この傾斜を活かし利用

しながら庭を造り建築を納めていた。各塔頭の境界は、傾斜を解消し建築の足場を造るための石垣であったり、簡易な塀や柵のみであったりし、隣接する塔頭間に大きな視覚的断絶はない。また前掲の図5-9の絵のように、庭園の豊かな自然によって山辺に並ぶ建築群のシルエットがぼかされ、山の風景に対する違和感を抑えられていた。

また全体に関して、現在のこの地にはない水の流れていることが把握される。実際の水源は定かではないが、絵画史料の中の連続性から図5-10の平面図のように也阿弥と正阿弥が連続した水の流れていたと考えられる。六阿弥の中で一番高度の高い春阿弥において水が豊富に使われていることから、恐らくそこから他の塔頭へ配水していたのだろう。連阿弥を除いたそれぞれの塔頭において、このネットワークを用いて遣水を庭園に導入していたと推察できる。

また各塔頭が、それほど広くはない（道敷を含んで6つ併せて5000坪程度¹⁷⁾）敷地の中に豊富な起伏を備えており、その微地形条件に合わせて主要な塔頭建築と庭の構成がそれぞれ異なっていることが分かる。

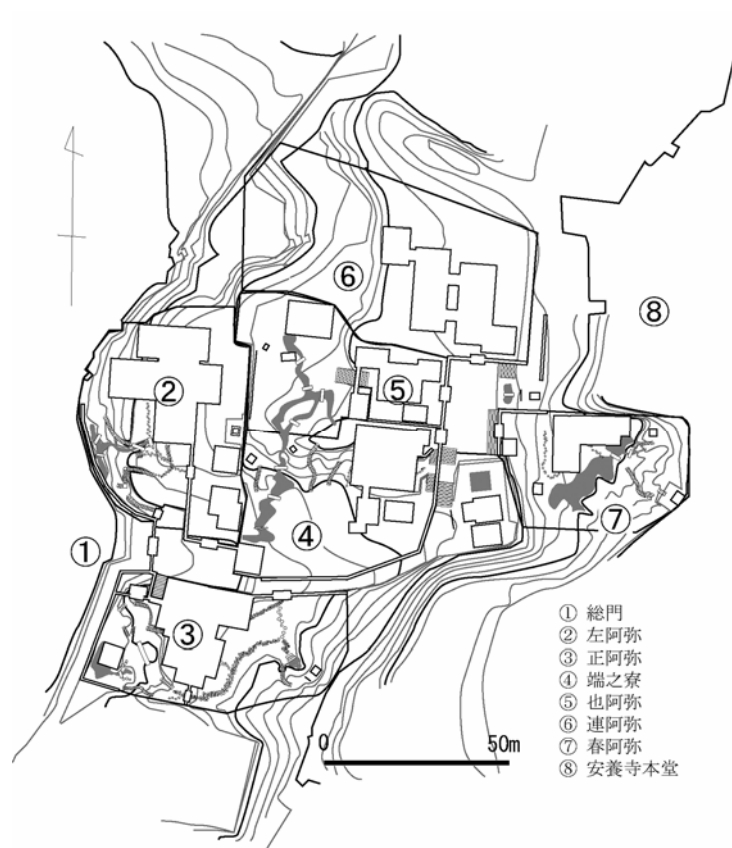


図5-10 安養寺境内の平面構成（筆者作成）

2) 各塔頭における庭園と建築の関係

このように、六阿弥の敷地内部におけるそれぞれの空間構成は、その位置における微地形と深く結びついており、建築の配置や造り、庭園の造りは互いに密な関係にあった。

a) 左阿弥

左阿弥は現在にその地形をほぼそのまま残しており『都林泉名勝図会』と併せて当時の空間構成を把握できる。図5-11は当時の空間構成を表した平面図と断面図である。先に述べたように、『都林泉名勝図会』は地形や建築の配置について、位相幾何学的な関係性のみが信頼できる情報であると考え、図5-9に示した『花洛名勝図会』に見られる建築の配置や枠組みも参考にしたが、現在に残る地形を最も信頼できる情報とした。図5-12¹⁸⁾にみられるような、確保した平場から突き出した大きな懸崖建築によって洛中への眺望を確保し、平場によって出来た高低差のギャップを懸造の建築の下へ向かって数段の石垣を用いて一気に開放することで、庭園内の地形に大きく変化をつけている。そこに水を流し階段を配して複数の視点場を設けることで、景観を豊かにしている。

b) 正阿弥

正阿弥については現在大きく地形が変わっていると考えられるが、一部残された石垣や地形改変される前の明治期の写真(例えば次頁図5-13¹⁹⁾)などにより概要を把握し、次頁図5-14、15²⁰⁾の『都林泉名勝図会』の情報を加えて作図したものが次頁の図5-16である。掛造りではなく石垣上の建築で眺望を確保しているが、左阿弥とほぼ同じ方法で下へ向かう庭園を造っている。それと同時に、建築の反対側(東側)では上へ向かう庭園も造っている。庭全体と洛中を見渡す事

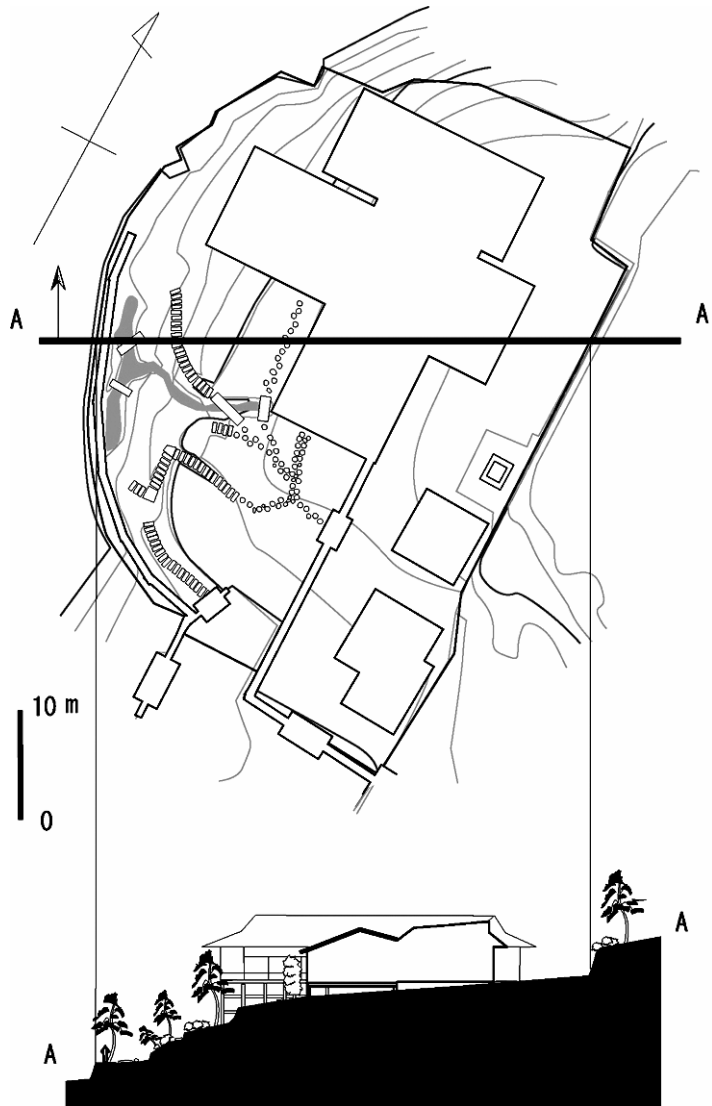


図5-11 近世の左阿弥平面断面図(筆者作成)

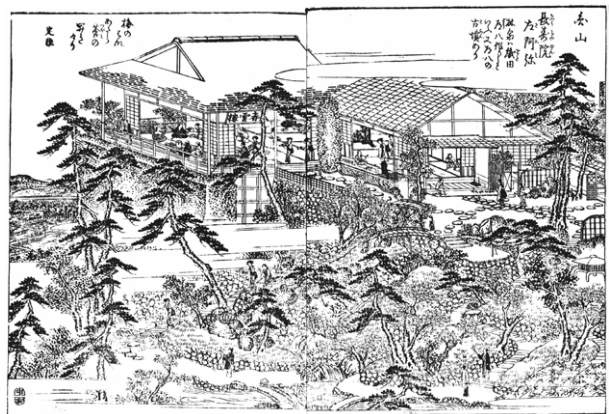


図5-12 近世の左阿弥景観

が出来る高いポイントに足場を設けることで新たな視点場を確保し、また建築から東山を眺める方向の景観にも変化を与えている。

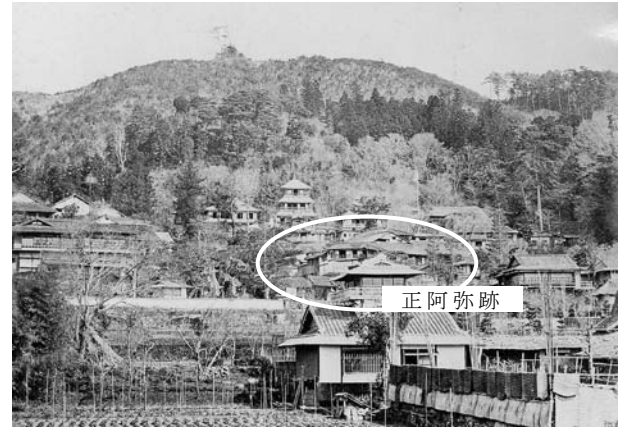


図 5-13 近代の六阿弥敷地



図 5-14 正阿弥西側



図 5-15 正阿弥東側



図 5-16 近世の正阿弥平面断面図（筆者作成）

c) 端之寮

端之寮は現在その敷地のほとんどを円山公園の苑路（あるいは車道）にとられているが、絵図や明治期の写真²¹⁾（図5-17）と見比べると、地形は概ね保存されていることが分かり、それらの情報をもとに図5-18を作成した。建築を北東部に集中させ、南西に向かって広く庭園を造っているが、庭園の南部は比較的なだらかな傾斜であり、山辺上部の急斜面においては無理がある。こうして出来た高低差のギャップを北側に集め、より急な斜面を造っていた。也阿弥より流れる水を滝で落とし、その周辺に細かな苑路を設けて多様な視点場を確保している。水の流れが確かに在った事は現在の公園内に残るかつての滝の跡（図5-19）などからうかがうことができる。

このような傾斜に埋め込むように造られた三階建ての建築（図5-20²²⁾）が北東隅にあり、西側の門は直接3階部分と同じレベルになっていた。その建築の3階西側は眼下に庭園と、さらにその向こうに一面に広がる京の町を一望できたと思われる。



図5-17 近代の端之寮敷地

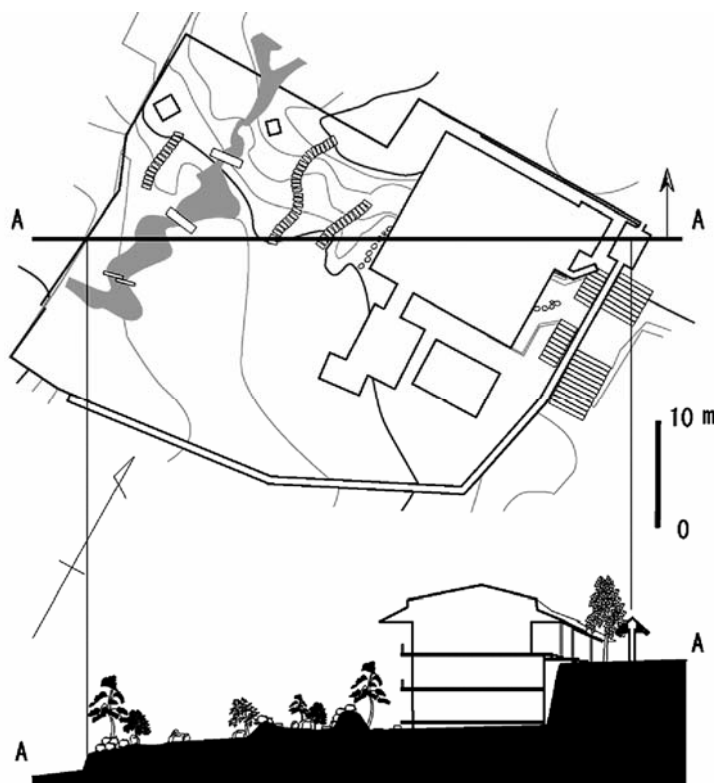


図5-18 近世の端之寮平面断面図（筆者作成）



図5-19 現在に残る端之寮庭園の遺構



図5-20 端之寮景観

d) 也阿弥

図5-21²³⁾のように『都林泉名勝図会』には也阿弥庭園の詳細がわかる絵が残っている一方で、直接的に建築の外観を描いた絵がなく、庭園の絵図の隅に描かれた段差の上に一部建築が見られるのみである。これは建築と庭園が明確な段差によって隔てられていた事を意味していると考え、現在の地形は中央で敷地を東西に分ける石垣で2段階になっていることと併せて、図5-22を作図した。周囲の地形と併せて考えても、地形に起伏は少なく、中央に配された水の流れを基調に作庭された。ただし西側が崖になっているため、建築内から西を向くと、見事な庭園とその向こうの洛中を眺めることが出来た。

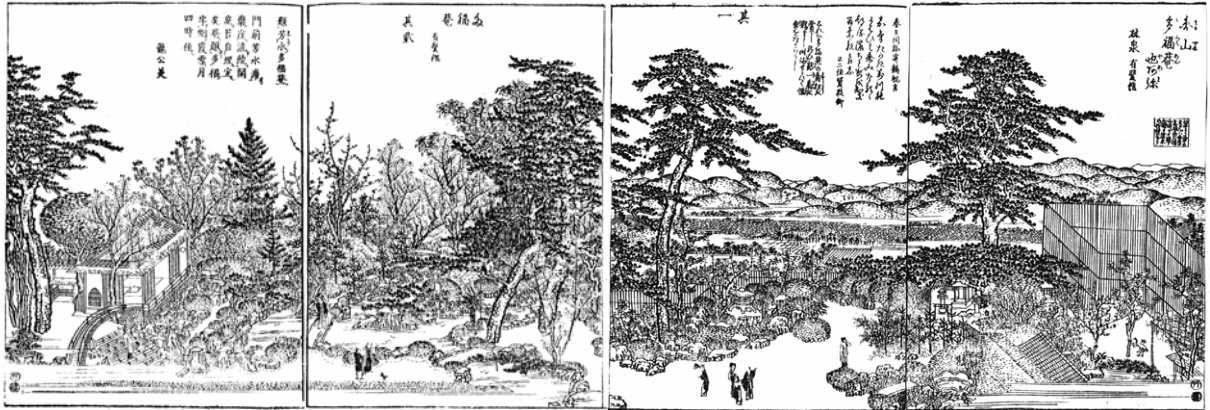


図5-21 近世の也阿弥景観



図5-22 近世の也阿弥平面断面図（筆者作成）

e) 連阿弥

連阿弥は六阿弥の中でも特に広い敷地をもち、上部に建築群を配置し、西へ下る急斜面をそのままの地形を使って単純に芝を敷いた松林にしていた。他の庭園に必ず描かれている遣水が連阿弥の絵図には確認できない。

f) 春阿弥

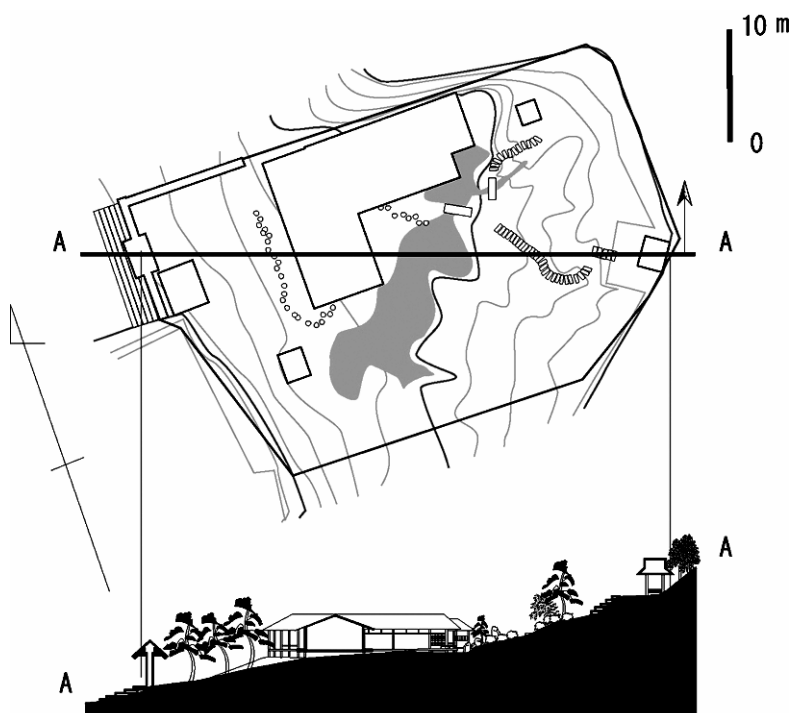
『都名所図会』によれば、春阿弥には相阿弥が造った庭園があったとされる²⁴⁾が、現在は全く残っていない。現在の周辺の地形と『都林泉名勝図会』の図5-23²⁵⁾のみから推定できる塔頭内の構成を作図したものが図5-24である。

建築東側の庭園は急斜面へさらに凹凸をつけ、見え隠れする苑路を配している。正阿弥と同様に、傾斜上部の高いポイントに視点場を設け、庭全体と建築、さらにはその背後の洛中への眺望を可能にしている。また、ここでは主要な建築が池にかぶさるように配置され、建築まです庭の一部に取り込む工夫がなされていた。



図5-23 近世の春阿弥景観

図5-24
近世の也阿弥平面断面図
(筆者作成)



こうした構成を意味のあるものにする重要な条件として、六阿弥すべてに共通して主要な視点場とされた建築の様式が挙げられる。すなわち、六阿弥塔頭の多くの建築が図5-25のような数寄屋建築であった。数寄屋建築の特徴の通り、内部と外部を隔てる壁は極力少なく、細い柱で用いられている。外部の景観を見せる部分ではほぼ全ての建築に共通して縁が設けられており、人は縁に出て景観を愉しむ事が可能であると同時に、障子戸を開け放って外部と一体化した空間を愉しむ事も出来る。このような建築が塔頭敷地内の微地形の中でどこへ配置されるかによって、見せる主要な風景が決定されたと考えられる。



図5-25
主に用いられた数寄屋風の建築
(図5-23の部分)

図 5-26 は地形と庭と建築の関係を図式化したものである。これによると、決定される主要な視線方向は、庭園を透かす方向になることが分かる。左阿弥型は下方へ、正阿弥型は上下方向へ向かう視線が主となるが、この 2 タイプを基本として、庭園と建築との距離により、近い順に端之寮型、春阿弥型、也阿弥型に分けられる。端之寮は建築を崖と盛土で囲み庭園と文字通り一体化している。また、その他の視線も多様に作られており、それらは諸名所案内に見られるように、立体的で重層的な庭から造られた多数の視点場により生み出された。

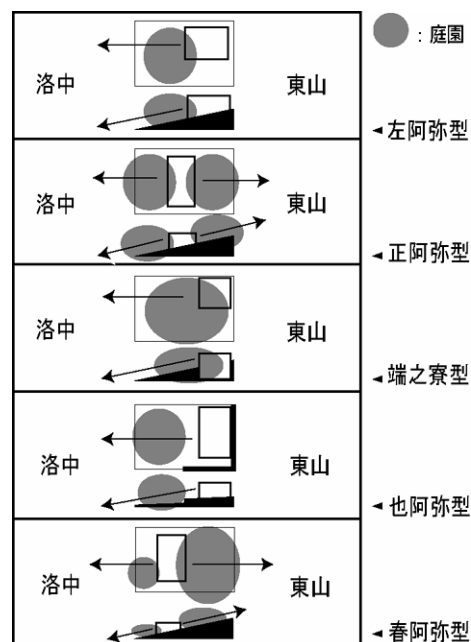


図 5-26 六阿弥の地形と庭と建築の関係 (筆者作成)

4 双林寺の空間構成

上記二つの寺院に対して、双林寺は山辺中部の比較的ゆるやかな斜面（約 7 %）の真葛ヶ原の中に位置し、山辺上部の空間構成とは異なる特徴を備えていたと思われる。

1) 全域 — 並列する塔頭群

現在の双林寺は本堂付近しか残っておらず、従来のほとんどの敷地が円山公園の音楽堂などに使われているが、近世の双林寺は安養寺と並ぶほど広い土地を占めていた。そのなかに数個の塔頭が並んでいたが、緩斜面であるため安養寺で見たような塔頭の間に大きな高低差はなく、ほぼ平面状に並んでいたと思われる（図 5-27²⁶⁾）。ただし東山へ近づくほど傾斜が比較的大きくなっていたことから、東奥の塔頭ほど変化に富んだ庭園をつくる可能性を持っていた。



図 5-27 近世の双林寺

2) 各塔頭における庭園と建築の関係

双林寺の空間構成に関する資料は『都林泉名勝図会』に文阿弥と長喜庵が描かれており、これを考察することができる。文阿弥は図5-28²⁷⁾のような構成になっていた。東山を借景にして庭の自然と重ね合わせている。長樂寺や安養寺のような西側の町への眺望は得られないが、緩斜面に築山を設けて起伏を豊かにし、また傾斜をつけた部分に懸造による建築を配置して、庭への眺望性を高めていた様子もうかがえる。

文阿弥の東隣、長喜庵では次第に東へ傾斜のつく斜面を利用して、この傾斜にさらに築山を設けて視点場を造るなど、景観を豊かにする工夫が見られる(図5-29²⁸⁾)。ここでも東山の稜線を積極的に借景として利用している。また、植生などの庭園の要素と建築の間を断絶せずに密につなぎ、主要な視点場となる建築内が庭園の一部であるかのような臨場感を楽しめるようになっている。建築の様式は安養寺で見たものと同様に、開放性の高い数寄屋である。

いずれの塔頭においても、起伏を最大限に活かし、または造成することで庭園の重層性を出す工夫をして、建築を庭園と一体化させている。

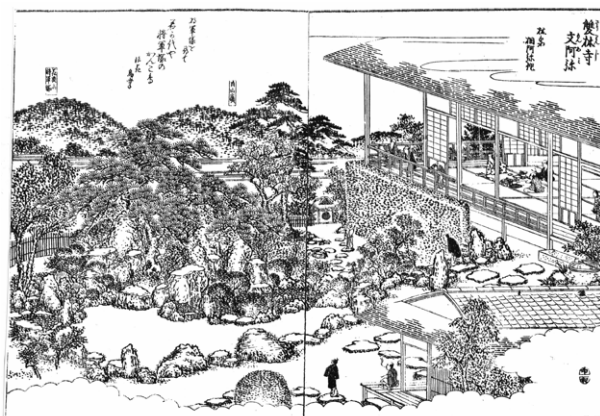


図5-28 文阿弥の景観



図5-29 長喜庵の景観

5 円山時衆寺院における文化的活動

これらの塔頭は、近世の多くの文献において登場する。享和2年（1802）には、滝沢馬琴が『羈旅漫録』に次のように記述している。

丸山の料理茶屋のあるじは、法師にて肉食妻帯なり。いづれも何阿弥と称す。座敷庭奇麗なり。料理もよし²⁹⁾。

ここから、参詣客に料理や酒などが出され、「料理茶屋」と認識される場をつくっていたことがうかがえる。また、本居宣長の『在京日記』には寶暦6年（1756）にこの地を訪れた記録がある。

長川子の月次の會、この月は、丸山の也阿彌にて、けふなんせられける、兼題は河
夕立なりけり、有賀氏の月次の會、年比二度にわけて、繼塵講、感生講といへる、
やつかれなとは、けいぢんかうの内なり、さるを此月は、両講の連中ひとつにせら
れければ、廿人あまりもありける、兼題の歌披講あり、いつの年も、此月はかゝる
となん、當座に霞中瀧をえてよみ侍る…³⁰⁾

このように文化的会合も盛んに行われていた事が把握できる。これらの講は、六阿弥に「貸座敷」を借りて行う江戸にはない催しであったという³¹⁾。文化的会合の例としては、書会、書画展、菊会、立花・生花会³²⁾、素謡会、演能³³⁾など多岐にわたる芸能が挙げられる。特に、寛政4年（1792）より明治初年まで70年間毎年春秋2回東山で開かれた「東山新書画展観」は、洛中の町人と画家との交流を図る画期的な催しであり、六阿弥の一つ、端の寮（庭阿弥）が清水寺と並んで会場となった³⁴⁾。また図5-30³⁵⁾は、正阿弥で行われた書会の様子である。この絵図において、書会の賑わう様子と庭園美が同時に描写されている事は、少なくともこれらの諸活動が一つの景観として魅力があったことを意味していると考えられる。

宴席も多く行われた。『都林泉名勝図会』の多くの絵から見出すことができるように、ここで特徴的だった事は、宴席の場に芸妓が出入りした事である（図5-31³⁶⁾）。この芸妓達は、「やまねこ」と呼ばれ、近接する下河



図5-30 正阿弥の書会

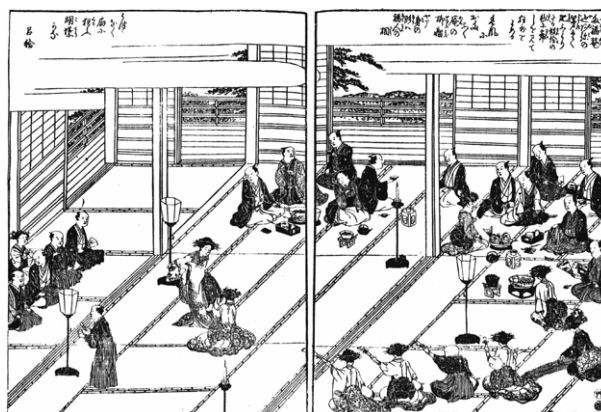


図5-31 也阿弥の宴席

原という地から出稼ぎ専門で通っていたと伝えられている³⁷⁾。遊興地と化した同地において、芸妓を呼んで宴席を持つといった愉しみが流行となった。

このように、江戸初期に設えられた特徴的な空間構成は、江戸中期には庶民に開かれ、利用されるようになった。優れた景観を備えた場が飲食、饗宴、催しの会場となることで、人々に臨場感のある景観体験として共有されることとなったといえる。

6 結語

以上より、近世円山界隈の時衆寺院における場所の特性と結びついた空間構成と、その上に新たな愉しみを追求した人々の行為が明らかにされた。すなわち、最上部にあって最も急傾斜である長樂寺では幾つかの平場を立体的に組み合わせて土地を造成し、平場の間で起伏の豊かな場所を使って庭園が造られた。次に傾斜の大きい安養寺では、敷地内に大きな起伏を持ったままの塔頭が立体的に組み合わせられ、卓越した眺望性を背景に、建築と庭の多様な位置関係によって見る風景が決定された。そして山辺中部にあり緩傾斜の双林寺では斜面上に平面的に並んだ塔頭で構成され、塔頭敷地内では立体的な空間構成を造るために築山や借景が用いられた（図5-32）。

総じて、景観の愉しみ方に一つのパタンを見出すことができる。すなわち、それぞれの空間の構成のされ方が、まず自然と一体なった、あるいは自然を強調する林泉が作られて、その庭園と連続的に室内空間や座敷がつくられた。この座敷と外部（自然）との関係性は、非常に直接的であり、用いられた数寄屋建築構造がよく適合していた。

このようにそれぞれ豊かにつくられた寺院敷地の空間は、江戸中期には開放されて席貸が行われ、飲食、宴席の他、展覧などの文化的な交流の場として利用された。本来特定の人の愉しみに基づいていた空間構成が、新たな人の活動を産み出し、さらに発展するという構図が明らかになった。

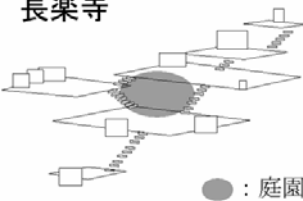
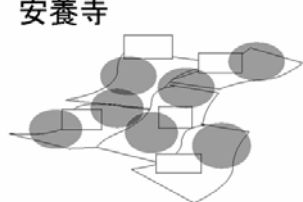
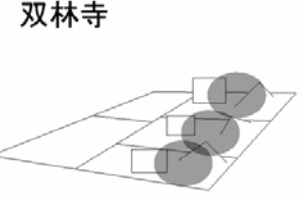
<p>長樂寺</p>  <p>●：庭園</p>	<p>●平場の重なり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・庭園が平場をつなぐ ・簡易な座敷の設置 ・平場隅の変化に富む部分に建築を配置
<p>安養寺</p> 	<p>●塔頭の立体的な重なり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・庭園間の水のネットワーク ・建築と庭の一体化、建築の配置の工夫 ・多様な視点場と視線の多方向性
<p>双林寺</p> 	<p>●塔頭の平面的並列</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建築と庭園の一体化 ・大きな築山などで起伏を演出 ・山を借景（展望が乏しい）

図5-32 近世の円山時衆寺院における空間構成

5-2 近世の祇園社

前節に見た山辺上部の円山時衆寺院の賑わいもさることながら、前近代の山辺下部では、大きな敷地を持つ祇園社の境内及び周辺において、多数の参拝客および観光客が集まり賑わっていたという。本節では、八坂神社の前身にあたる祇園感神院（祇園社）とその周辺を対象として、今日に残る名所図会をはじめとした絵画史料及び、八坂神社文書および当時の旅行記や随筆などの文献史料から、近世における周囲の街の形成と併せて培われた境内外の景観の構成と、その接続を明らかにし、近代以降の景観に対する原形を把握する事を目的とする。

1 祇園社の縁起と地理的特異性

『京都市の地名』³⁸⁾によれば、祇園社（今の八坂神社）の起源については諸説ある。天智天皇5年（666）10月、任那国加良人の乙相庵鄴が高麗国の進調大使として来朝、八坂郷に牛頭天王の神祠を建てたとする説（『感神院牛頭天王考』近世末成立）、斉明天皇2年（656）8月に朝鮮半島から渡来した調進使伊利之使主が、新羅国牛頭山に鎮座する須佐之雄尊の御魂をもたらして祀り、天智天皇6年（667）に、社号を感神院と定めたとする説（『八坂郷鎮座大神之記』祇園社家建内家伝来）、貞観18年（876）に南部の円如上人が東山山麓の祇園林に天神（天つ神）が垂迹したとして一堂を建立、薬師如来を祀ったとする説（『社家条々記録』鎌倉期成立）などが創立年代を古く取る³⁹⁾。

祇園社は古代より八坂郷（現在の下河原・八坂）の鎮守であり、社殿と正門は南面し、中世門前町の形成も下河原方面へ展開した形跡がある⁴⁰⁾。この軸上にあつて楼門前には二軒茶屋と総称された門前の掛茶屋は、後に述べるように、中世に端を発し近世を通じて独自の空間を創っていた。

一方でこの領域の位置は、改めて図 5-33 に見るように東山連峰の麓の中でも、とりわけ市街地の方へ突きだした崎にあたる。この洛中との地理的近接性から、洛中の四条

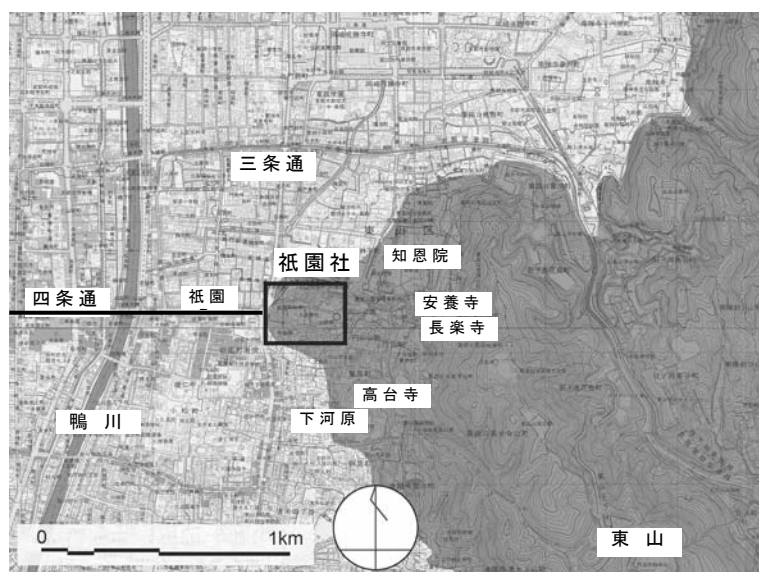


図 5-33
東山から市街地へ突きだした
崎にある祇園社（筆者作成）

大路が参詣道として鴨川を渡って東へ延び、西大門前が形成された。『一遍聖絵』に描かれている、四条橋とその東詰に鳥居は、鎌倉中期には既に参詣道が成立していたことを裏付ける⁴¹⁾。鴨川から東山へ続く断面（図5-34）は、山と町が接するところに存在した祇園社の地形的特徴を端的に示している。すなわち、鴨川から東は傾斜の緩い平らな地形が続き、にわかに傾斜が変化するところに祇園社の敷地がとられている。祇園社の東西断面における平均傾斜は5%程度で、さらに東の真葛ヶ原、円山安養寺へと登るにつれて傾斜は急になる。地形からみれば祇園社は、街と山の狭間に構えた境界領域であった。

このように、祇園社には南と西それぞれの方向からのアクセスに対する二つの門が存在し、それぞれが軸となる参詣路を持っている。従って祇園社の領域は概ね、二つの門前の領域と、これらの軸が交わる広い境内、そして境内の裏に当たる祇園林（北林）の3種の部分（図5-35⁴²⁾）と、その全体の東に位置する三院七坊の宿坊から成ると理解される。各部分がそれぞれ異種の特徴を持つ周囲へ連続しており、それゆえに場所の性格が異なっていた。

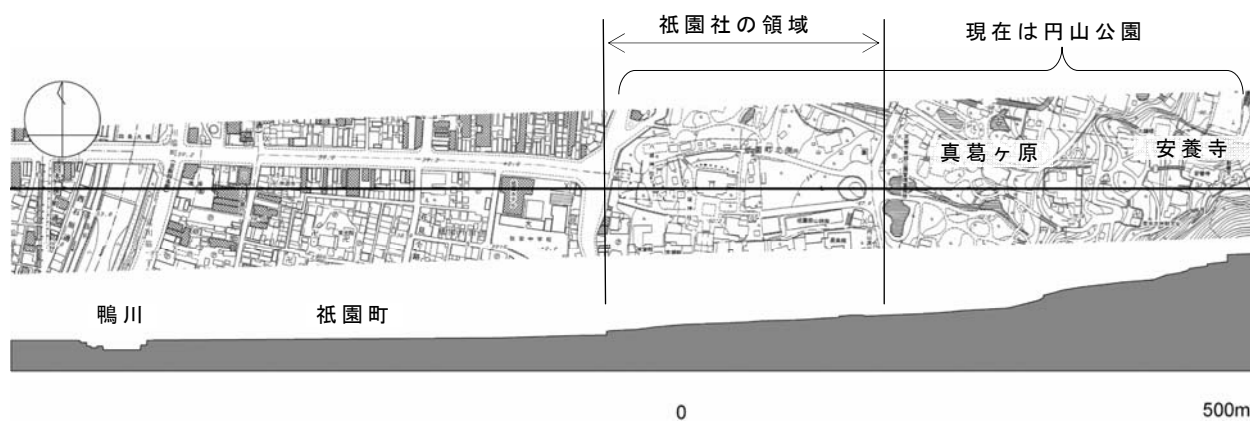


図5-34 祇園社周辺の地形断面（筆者作成，境内を通り東西の断面）



図5-35 祇園社の2つの門前・境内・祇園林

2 2つの門前：まちとのつながり

1) 祇園社楼門－二軒茶屋－下河原

前述のとおり，祇園社の正面は南向きであり，従って門前も南側に展開していた．祇園社楼門から南へ続く下河原道は，中世には「百度大路」，その後祇園社の表参道として「祇園大路」などと称された（『八坂神社文書』）⁴³⁾．この道沿いは，桃山時代に清水寺から祇園社までの行程のみを題材とした『東山遊楽図屏風』（高津家本）⁴⁴⁾が存在するように，古くから遊楽の地とされた．近世の始めには「遊女かましきもの」が商売をする遊興施設が点在しており⁴⁵⁾，続いて安永9年（1780）から天明元年（1781）にかけて祇園社の南に存在した南林が開発されて⁴⁶⁾，高台寺門前から祇園社門前までが，「下河原」と呼ばれる花街となった（図5-36⁴⁷⁾，37⁴⁸⁾）．この賑わいと連続して，祇園社南

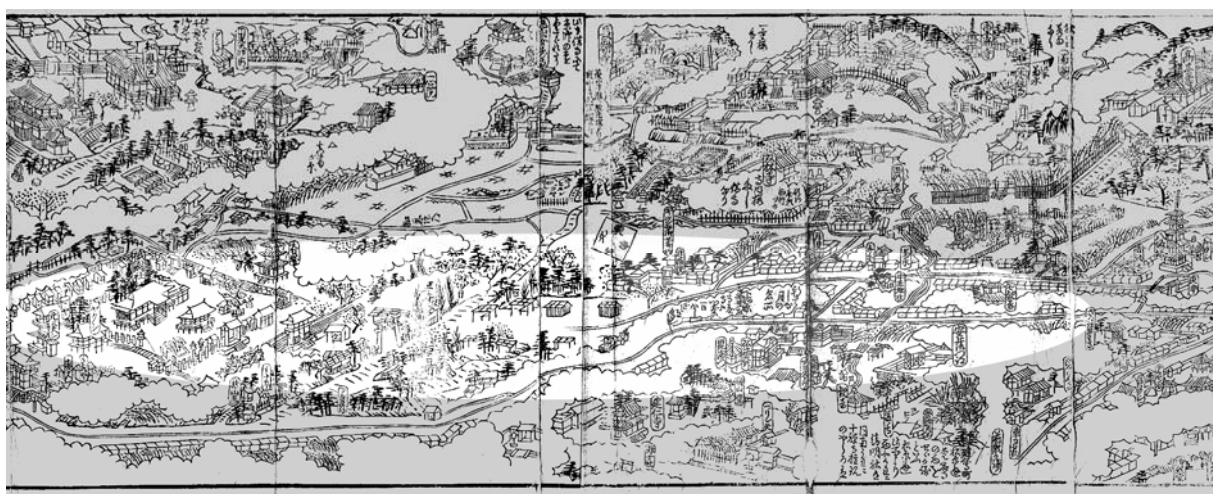


図5-36 安永8年（1779）の祇園社門前
石鳥居前にまだ南林が存在し，その中に掛茶屋が点在する

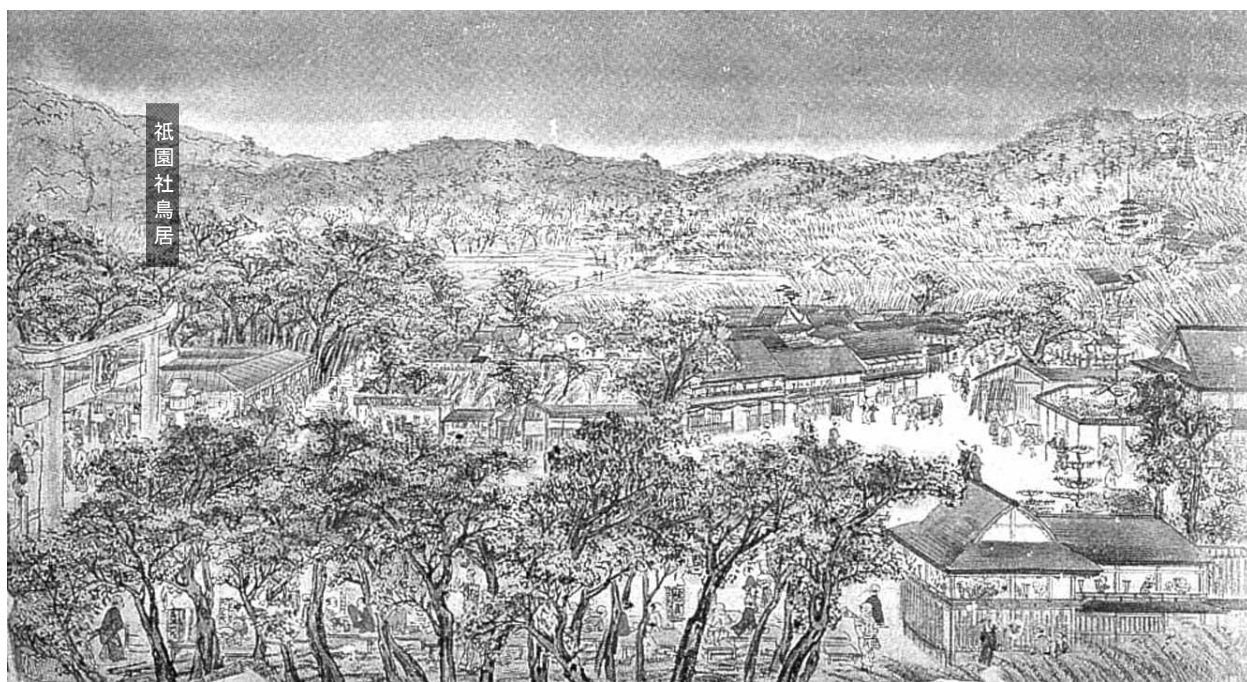


図5-37 門前から下河原にかけての夜景（円山応挙画）
南林の茶屋が軒を並べ，門前から続く遊興空間が発達している

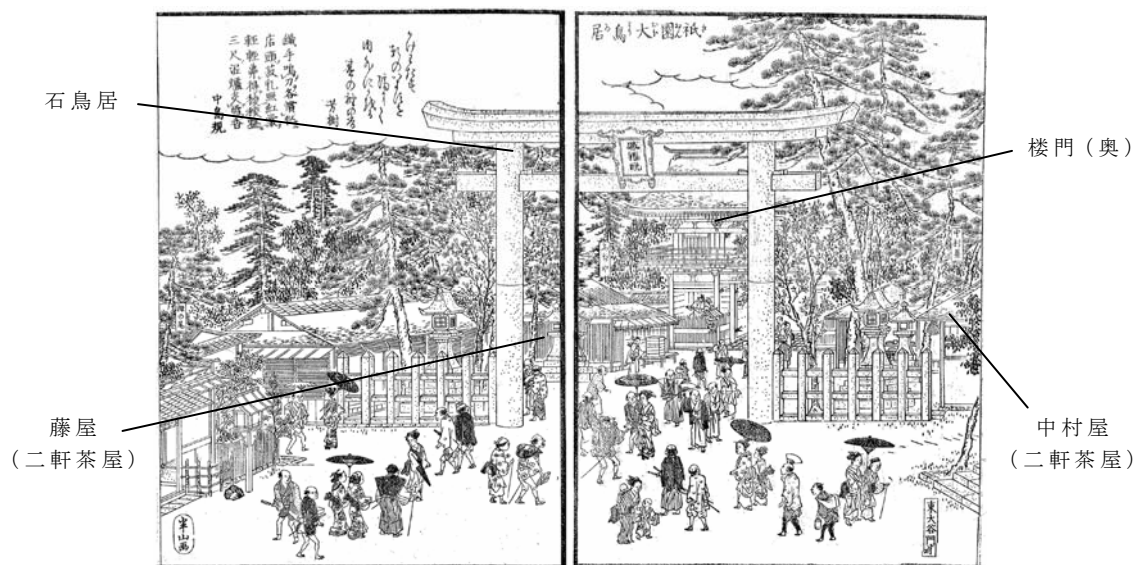


図 5-38 大鳥居の向こうに二軒茶屋



図 5-39 16 世紀の『洛中洛外図屏風』に確認される門前の茶屋

鳥居の内側（以下「門前空間」とする）が繁盛した。

近世においてこの「門前空間」を形づくる要素は、参道を挟み向かい合う建つ二軒の茶屋と、楼門と石鳥居である(図 5-38⁴⁹⁾). 西側の茶屋を藤屋、東側を中村屋といい、二つを総称して二軒茶屋と呼んでいた。この門前空間は中世には既に存在しており、16 世紀の『洛中洛外図屏風』に門前茶屋の姿を確認できる(図 5-39⁵⁰⁾). 近世初期になると、土佐光起(1617-1691)の絵にみるように盛況した(図 5-40⁵¹⁾)。



図 5-40 土佐光起に描かれた二軒茶屋



図 5-41 二軒茶屋によって演出された門前空間モデル（筆者作成）

この空間の基本的な構成は、現在の門前から推察できるように、四方を要素で囲む単純なものである。囲まれた空間は基本的には参道であるが、両側の店舗の内部空間が外へ開け放たれており、図 5-41 のように参道に広場的な働きを加えている。その規模は幅 6 間程度である。

二軒茶屋の名物は「祇園豆腐」といわれた豆腐の田楽であった。『拾遺都名所図会』には二軒茶屋の豆腐切りの様子が描かれ（図 5-42⁵²⁾）、豆腐切りについては、『十国巡覧記』に「豆腐名物也。彼麗婢紅前垂して田楽を勧め、旅人を牽。豆腐を剪に操刀の速なり。神妙実人に脅かす斗也⁵³⁾」と描かれているように、芸を見せて客引きをする事も行われていた事が分かる。

本居宣長の『在京日記』には、二軒茶屋に立ち寄った記述、あるいは人が多すぎて寄ることのできなかった記述などが多く書かれており⁵⁴⁾、また『花洛名勝図会』に描かれた祇園社境内に「秋知らぬうちわの音や二軒茶屋⁵⁵⁾」と門前の賑わいを描写した歌が添えられた。この門前空間そのものが、一つの名所として知られていた事が分かる。



図 5-42 二軒茶屋の豆腐切り

また、祇園祭の折には、掛茶屋と一体になったこの空間が、一つの見所にもなっていた。図5-42⁵⁶⁾は祇園祭の主役である神輿が洛中から祇園社に戻ってくる行事であるが、その通り道である門前空間の熱狂ぶりをよく伝えている。前述の本居宣長も二軒茶屋にてこれを経験している。

けふなんみこしあらひのねり物見に、八時過より出侍る…(中略)…祇園林に入り、二軒茶屋にて見はやと思ふ、ねり物とをり侍るすち、いつもいつも両かはにさんしきかけわたし、すき間もなく人居ならひて、今や來るとまちかねたるさま也、二軒茶屋のまへにも、しやうき多くすへならへてかし侍る、まつおくへ入て、酒のみなとして、しはしまち居たる、二軒茶屋のうち、にきはしきこといふもさらなりや、さてまつ程やゝ久しくして…(中略)…おくに酒のみたる人も、今わたるといふをきゝて、足をそらにはしり出て見侍る、まへの床几は、みなそれぞれにかりきりたる物から、多くの人の跡よりこみあかりて、足をつまたてて、のり上り見侍る⁵⁷⁾

絵図(図5-43)からも床机が出されて場所が確保されている様子が分かるが、これに腰掛けて通り過ぎる神輿を長い時間待ちながら飲食をして愉しむ行為が把握できる。門前空間は、このようなハレの空間を僅かな装置によって演出できるだけの、空間的ポテンシャルを持っていたといえる。

以上のように、実際の空間の構図は非常にシンプルなものであったが、門前は二軒の掛茶屋によって独特の賑わいを創出された事が明らかになった。



図5-43 門前の神輿洗い

2) 西門－祇園町

西門は、明応6年（1497）の再建以来、同じもの（重要文化財）である⁵⁸⁾。ただし、西門前の市街地化の歴史は非常に古く、久寿元年（1154）に「祇園橋供養」（『百鍊抄』）が記録されていることから、平安時代の末には架橋に伴って洛中から四条大路が延長し、参詣道としての「西大門大路」が形成されたと考えられている⁵⁹⁾。寛元元年（1243）には『百鍊抄』に「去夜、祇園西大門大路在家南北両面、払地焼亡、西及橋爪、東至今小路、南限綾小路末、及数百家」（傍点筆者）と記され、既に四条通が鴨川を越えて西門まで至り、その両側に数百家の人家が並んでいたことがうかがえる⁶⁰⁾。

江戸の初期にはまだ幅三間（5.5m程度）に満たない道であり、鴨川に架かる仮設の四条橋から祇園社南門前の二軒茶屋の灯が見通せるほど閑散としていたという⁶¹⁾。ここが大々的に市街化した時期は、鴨川の治水と関係があった。洪水の度に流路を変えていた鴨川に、寛文8年（1668）石垣護岸が築かれて、その後の治水が角倉了以に任されると、河川と町地との区別が明確になった⁶²⁾ものと思われる。寛文10年（1670）に鴨川東沿いに外六町が開かれ、やがて正徳3年（1713）には内六町が開かれて、図5-44⁶³⁾のパンフレット『祇園新地細見』に確認できるように、四条河原から祇園社までが一続きの遊興地として成立した⁶⁴⁾。

この「祇園新地」の領域は、四条河原の芝居街と、これに連続する広大な祇園社の社領（図5-45⁶⁵⁾）であった。すなわち新地の大部分は、領主である祇園社による都市計画、あるいは統制によって創られたものであると考えられる。例えば、祇園新地における家屋の普請について、「普請願主」と「北隣」とあわせて「祇園社代」の連名で、建築の図

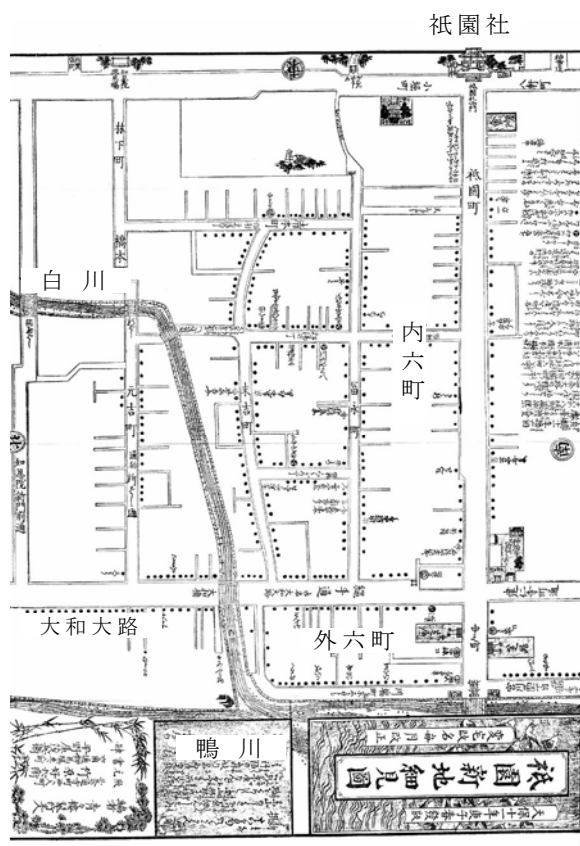


図5-44 天保11年（1840）の祇園新町案内



図5-45 江戸時代中期の『社領在家図』

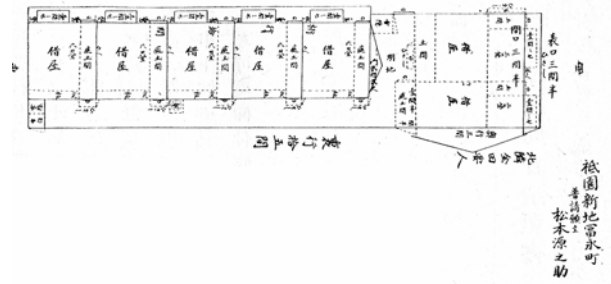


図 5-46 祇園新地の家屋普請願に添付された絵図

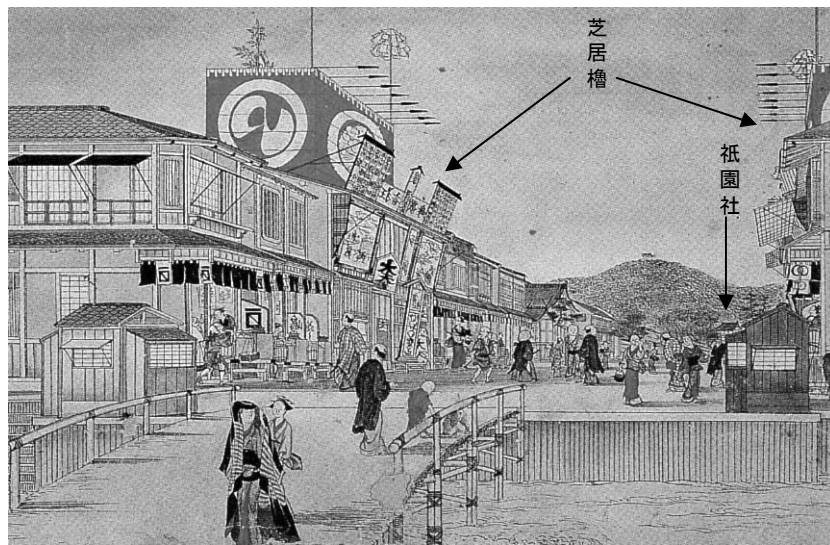


図 5-47 四条橋から東向きの景観（円山応挙画、反射式眼鏡絵のため左右逆に描かれている）

面を添えて、奉行へ届け出がされている（図 5-46）⁶⁶⁾。このような祇園新地の開発によって、西大門大路（四条大路）には、通りへ正面を向ける店が軒並みに建ち並び、人を魅了する要素の連続する奥に、背後に山が控える祇園社の西門がある、行樂的通景が成立した（図 5-47⁶⁷⁾）。

では、この花町と祇園社との直接的な接続部として、西門前の空間構成はどのようなものであっただろうか。西門の前は近代の市電開通に伴う道路拡張と同じ時期に改修工事がされて、新しい石段が造られているが、それ以前の景観は、近世末の構成を概ね残していたと思われる事から、近世絵図と、明治初期の資料をもとに分析できる。

『花洛名勝図会』に描かれた西門前の様子は図 5-48⁶⁸⁾（次頁）の通りである。明治初期に撮影された図 5-49⁶⁹⁾（次頁）の西門前の景観と比べると、その構成と描写力の信憑性を確認できる。これらの図から、境内は町から一段高く、西門は石垣の上に乗っていることが把握できる。石垣から降ろされた石段に特徴があり、西門のくぐり部分と同じ幅で手前に突きだしている。この石段の延長上に延びる通り（四条通）の幅は、図のように、現在の四条通に比べて非常に狭かった。また、西門と四条通りとの間に、すき間は殆どない事が見てとれる。先の図 5-44, 45 から分かるように、門前に南北へ走る道は存在するが、四条大路から見て西門との間を断絶する程の広さはない。これらの構成

により，四条大路における東向きの視線は西門へ集中し，通りは祇園社の参道として機能している．

西門自体は，現在のものと同じ形状ではあるが，当時の道幅はこの門の幅とほぼ同じであり，鴨川から近づくと，道の果てに収まりよく門があった⁷⁰⁾．町は祇園社西門との兼ね合いを意識して形成されたことが分かる．

通りに面した店舗は，いわゆる町家の形態をしていた．つまり，一階部分が店になっており，奥へ続く土間と，座敷で構成される．通りに対しては壁を取り払い，あるいは簾などを掛けて，図5-50⁷¹⁾に見られるように表の通りと空間を共有していた．

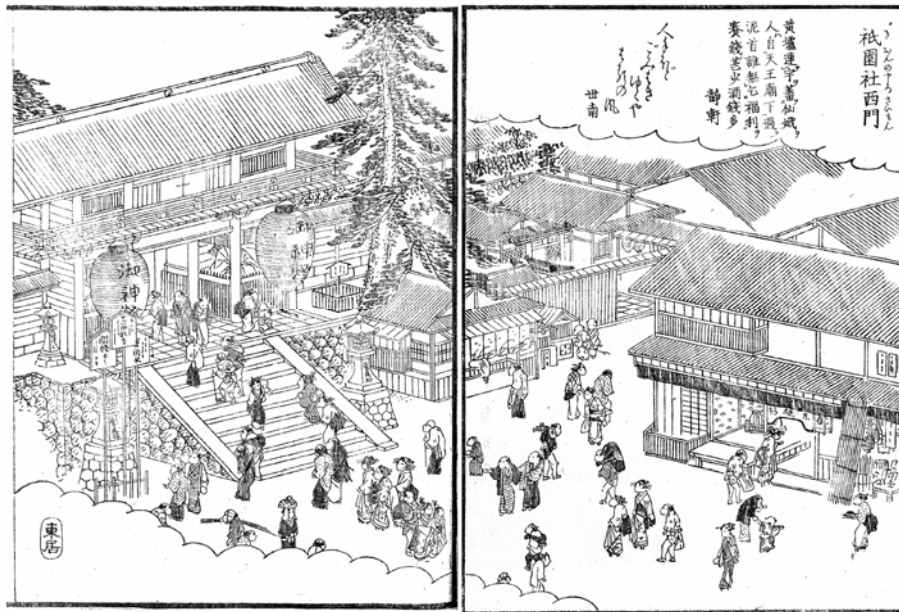


図5-48 祇園社西門の門前の様子



図5-49 明治初期の祇園社西門

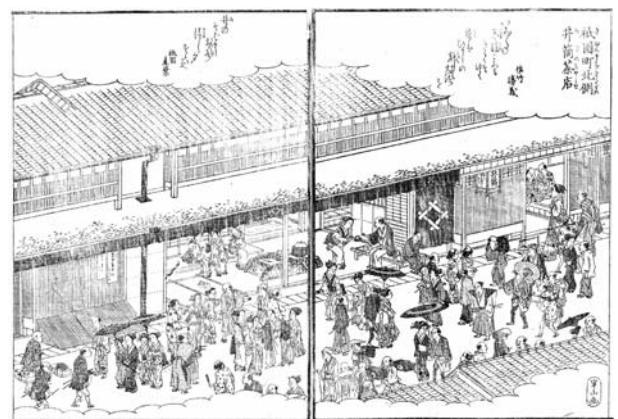


図5-50 四条通を挟む茶店

3 祇園社境内の賑わい

図5-51⁷²⁾は『都名所図会』に描かれた祇園社である。境内には大勢の人が参拝に来ている姿が描かれている。これには、ただ参詣客が集まるだけではなく、当時の江戸・大坂・京いずれの都市においても寺社境内は、階級的ゾーニングの系列の外であったために、都市に住む人々にとって封建的、身分的に秩序付けられ固定された枠組みをとりはらい自由な交流が可能な、重要な遊びの場であったという背景がある⁷³⁾。

本居宣長は境内の様子を『在京日記』に次のように記録している。

けふなん祇園へまふて侍る、いとさむき日にて、（社寺へ）まふつる人もすくなく
さひしきやうなれと、さすかにこの御社は人たえず、能なとも侍る、物まねやうの
者も侍りける⁷⁴⁾

この記述がされた宝暦7年（1757）には、祇園社の境内は能や物まねといった芸能を披露する場となっていた。十返舎一九も同様に、境内の賑わい振りを描写している。

参詣日日に群集し、茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く、歯磨うりの居合拔、売菓のい
ひたて、うき世のものまね能狂言、境内に所せきまでみちみちたり⁷⁵⁾

これは小説『東海道中膝栗毛』（刊行1802-1809）として幾分の誇張はあるとしても、ここから大方の様子が把握できる。文中の「茶店」は、『花洛名勝図会』（次頁図5-52⁷⁶⁾）

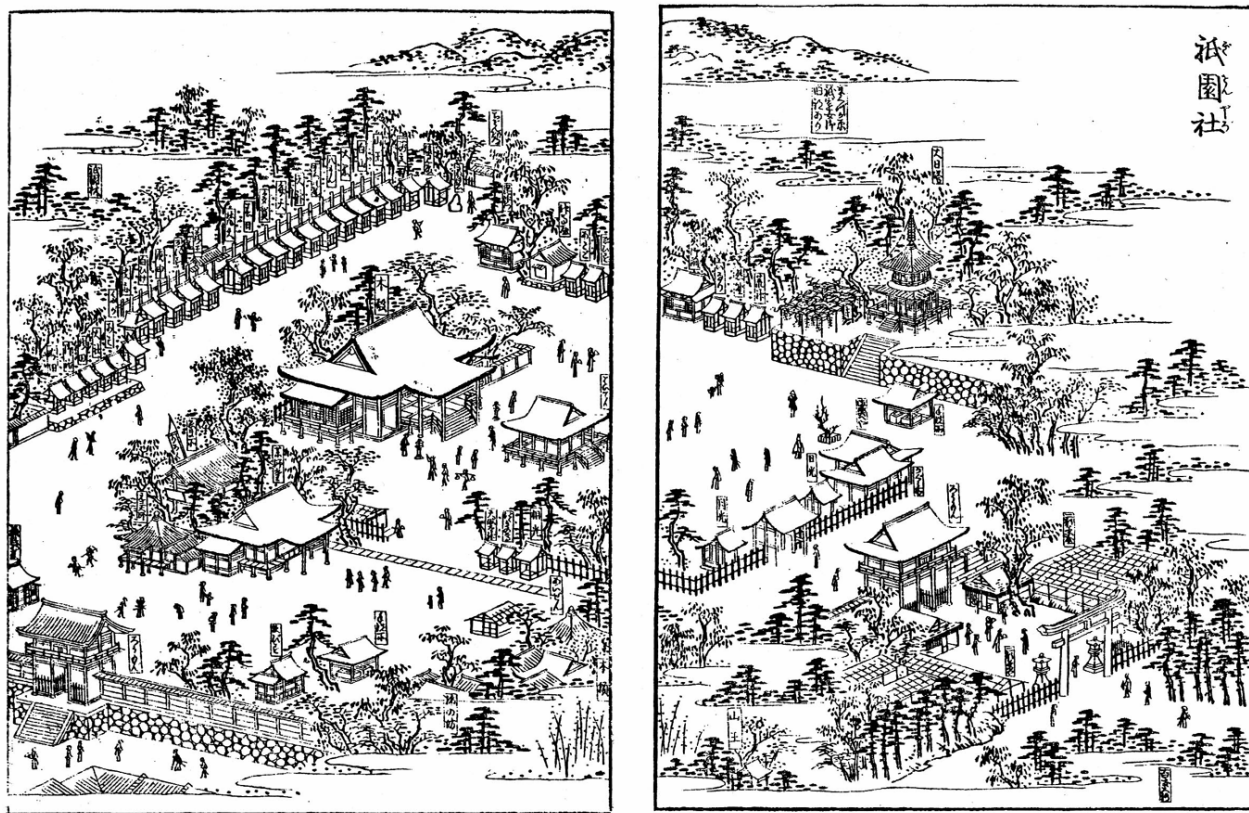


図5-51 江戸中期の祇園社境内

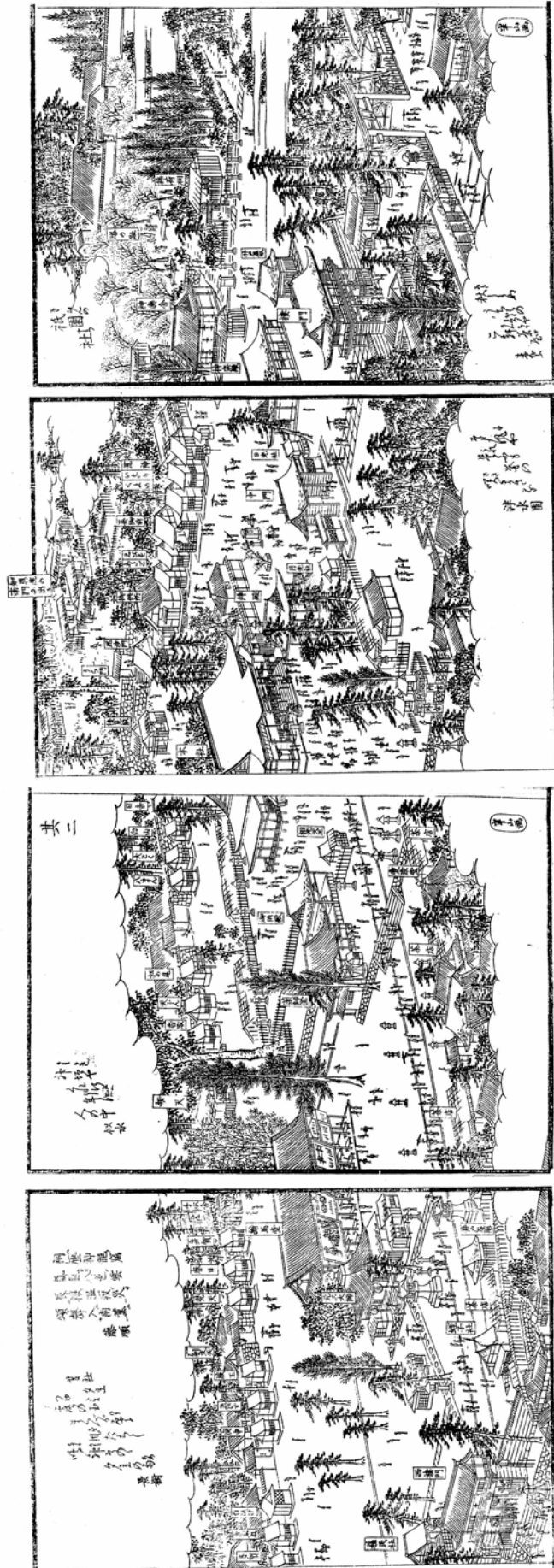


图 5-52 江戸後期の祇園社境内

の中にも、多数確認される。

この『花洛名勝図会』は1859年の発行であり、その約80年前の1780年に発行された『都名所図会』に描かれた図5-51と比べると、若干の配置の違いは絵師の間隔によるものとしても、無くなった建築や、新しく設けられた建築がいくつかある事に気がつく。無くなったものとしては、焼失した大日塔が見出される。次項に関連するが、この跡地には桜が植えられ、また床几などが置かれて、かえって人々に愉しみの場を提供する事になった。

新しくできたものとしては、「御供殿」「神楽舎」「稻荷祠」があるが、ここでは『花洛名勝図会』の境内に「茶店」が多数描かれていることに注目したい。これは『都名所図会』に描かれた境内には見出せない（可能性としては、二軒茶屋と類似の屋根を持つ小屋が、薬師堂の南に1軒のみ見られる）。先の『在京日記』に記述されたように、18世紀には様々な芸能が境内において繰り広げられていたが、さらに19世紀になるとこれらの遊興のために、茶店までもが建てられ、境内に門前のような領域が形成された。図5-52に見るように、これらの茶店は、境内の南西部に集中していた。

ここで、境内の平面構成や要素の配置は、以下のように捉えられる。

敷地は緩斜面上であるため、全体として5%程の地形の傾きがあるが、さらに全体は二段に分かれている。本殿を含む上段と、西門や絵馬堂を含む下段は、2m程のギャップを持つ石垣で分けられている。本殿や拝殿は、玉垣、中門などで囲われていた。

境内の主立った建造物は先に述べたように南向きを正面としている。本殿や拝殿は、石鳥居から始まり楼門を貫く直線状の参道で結ばれている。これが一つの軸となるが、これと交わり東西方向の軸も持つ。これは祇園町から続く軸で、先に見たように四条河原から真っ直ぐ通ってきた道である。しかし、境内ではこの軸は西門から南へ逸れて曲がり、拝殿の前を通り東へ抜ける。これら二つの軸を基準に、堂宇が建てられていた。少なくとも描かれた絵画はそのように構成されている。

そして、これらを取り巻いて、北と東側には細かな摂社末社が並び、西と南側の街とそれぞれつながる西門と楼門の間の領域に茶店などが並んだ。茶店のある場所は下段にあたり、下段は特に遊興空間の性格が強かったと考えられる。

これらの構成上の要点を図5-53にまとめる。

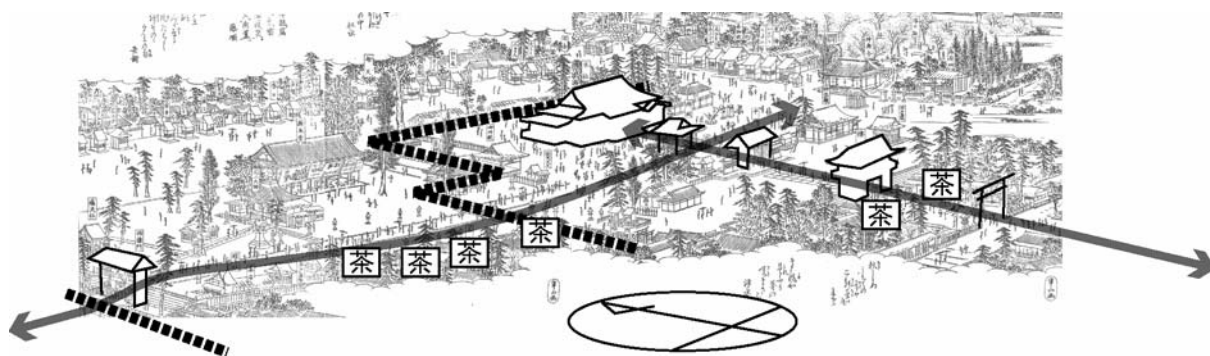


図5-53 祇園社境内の構成：二つの方向性と並ぶ茶屋

4 祇園林の景観

1) 祇園林と桜

祇園林とは、祇園社境内と周辺の森林の総称である。この森林では、古くから参詣者と遊樂者で賑わっていた。桃山時代のものであるといわれる「東山遊樂図屏風」

(図5-54)⁷⁷⁾や、江戸初期までに多く描かれた「祇園觀櫻図」(例えば図5-55⁷⁸⁾)には、門前および境内付近の森林に入って敷物を敷き、幕を張って座敷を作って遊びに興じる人々が描写されている。江戸時代には、北林・南林に分かれて(『上河原雄吉家文書』)⁷⁹⁾、先に述べたように南林は次第に開発されていった。



図5-54 門前の林内に設けられた宴席



図5-55 境内付近に設けられた宴席

一方、本居宣長の『在京日記』

によれば、宝暦3年(1754)「此の冬、祇園社の北地、林を開きて之を広げ、桜を植⁸⁰⁾」えたとされ、北林においても同様の愉しみのための工夫がされた事が分かる。祇園林の夜桜といわれた賑わいの様子が、図5-56⁸¹⁾の『花洛名勝図会』に描かれている。この祇園林は、北林であると思われる。絵図にみられる掛茶屋は、屋根とそれを支える柱のみからなる簡単なつくりの建築で、景色の中に透けて存在感を誇示し過ぎないものであった。これは、森林や桜の林の中に出来るだけ身を晒し、一体感を愉しむ方法であると考えられる。

このように祇園社の北林では、桜の名所たる森林という都市生活にとっては非日常の環境をそのまま愉しむために、仮設的な装置(簡易な茶店、敷物、宴席、飲食するもの)が持ち込まれていた。



図5-56 祇園林夜桜

2) 馬場, 射場, 貨食家, 相撲場

『花洛名勝図会』には祇園北林の賑わいが次のように記述されている。

社頭の北いにしへは雑木林なりしが、今は彼岸桜数株を植て花の頃は一しほ美観なり。この林中、借馬の馬場、大弓の射場、楊弓店、栗飯の貨食家（りょうりや）等あまたありて、遊客常に群集ひ暑寒をいとはず賑はし。又近年此所をひらき勸進大相撲を興行し大に流行せり。されば月下の風流より弓馬の調練、酒食の設けに至る迄調ひて、実に雅俗兼用して繁昌の地といふべし⁸²⁾

この勸進大相撲の場所は、明治初期の京都府庁文書（図5-57⁸³⁾）の中に確認でき、また図5-43の左から2屏目の右上には弓の射場が描かれている。従って上記の記述に従えば、この周辺に馬場、射的場、料理屋が並び、桜などの季節に関わりなく賑わっていたことになる。ここではどのような建物で構成されていたのかは記述されていないが、明治初期の『八坂神社境内外区別実測図』（図5-58⁸⁴⁾）には相撲場以外は林並藪という区分になっていることから、密度の高い林中に紛れて「祇園夜桜」に描かれたような簡易な建築物が雑多に展開する遊び場の境界が形成されていたものと推測される。

図5-57 明治五年の祇園社平面図
北部に「角力場」と書かれている

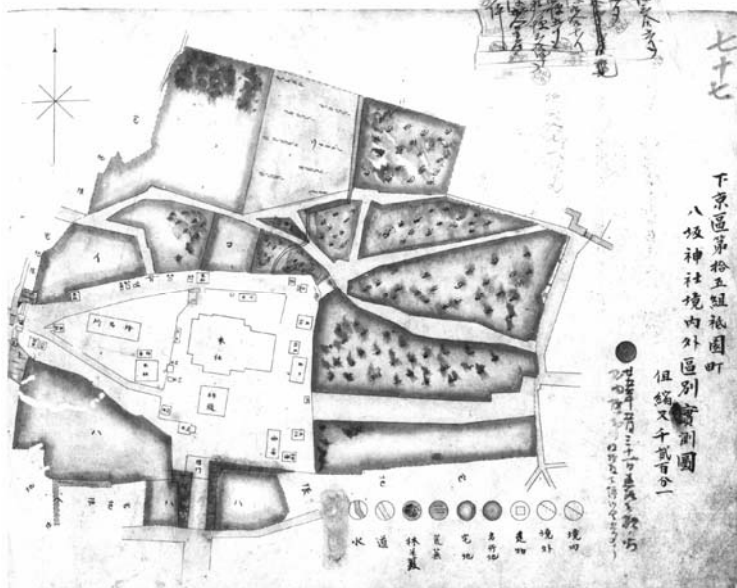
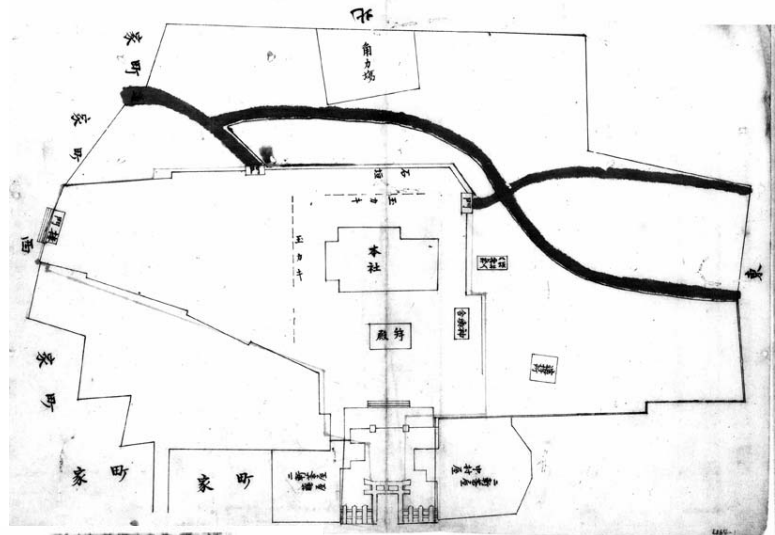


図5-58 祇園社境内外区別実測図

5 結語

1) 山辺における祇園社の位置づけ

以上のように、山辺下部を占める祇園社の領域は、各部で人を滞留させる装置を備えながら大きな遊興的空間が形成されていた。それは一方で宗教的な権威に支えられながら、他方で庶民的な芸能を堪能できる場所であった。

祇園社周辺の景観は、祇園社境内から始まる縦横の二つの参道を軸として、それぞれの門前に遊里を形成し、さらにその経路から外れて境内の北と東の奥には、林間に自由に広がる遊興空間が出来ていた。南北方向の参道は、南へ延びて山辺に点在する高台寺や清水寺などの社寺領域とつないでいた。すなわちこのルートは、社寺巡りの遊行・観光性が高く、それ自体が市街地から離れた場所を亘る非日常性を持っていた。一方東西方向の経路は、洛中から鴨川を渡り、緩やかな傾斜に従って山へ近づき、さらに山の懷へ入る、段階的に非日常へ至る経路であった。その過程には、芝居小屋、茶屋が連なり、祇園社までの奥行きを十分に演出していた。

これらの性格の異なる軸に沿って外から近づき、内に入り、核となる本殿を越えると、その裏の林は包容力のある遊び場であり、都市にとっては身近な自然の領域であった。その背後には、傾斜地に広い空地（真葛ヶ原）が存在し、山の稜線と山辺上部の遊興地を相対化して見せていた。つまり、山に対しては導入部にあたり、街に対しては鴨川東郊外に広がる遊里と一つながりのものとして認識されていた。

すなわち、四条河原から祇園社までの新地が、洛中の日常から自然の領域へ向かう第1の境界領域となり、そこから西門を越えた第2・第3の境界領域として祇園社の立場が確立した（図5-59）。

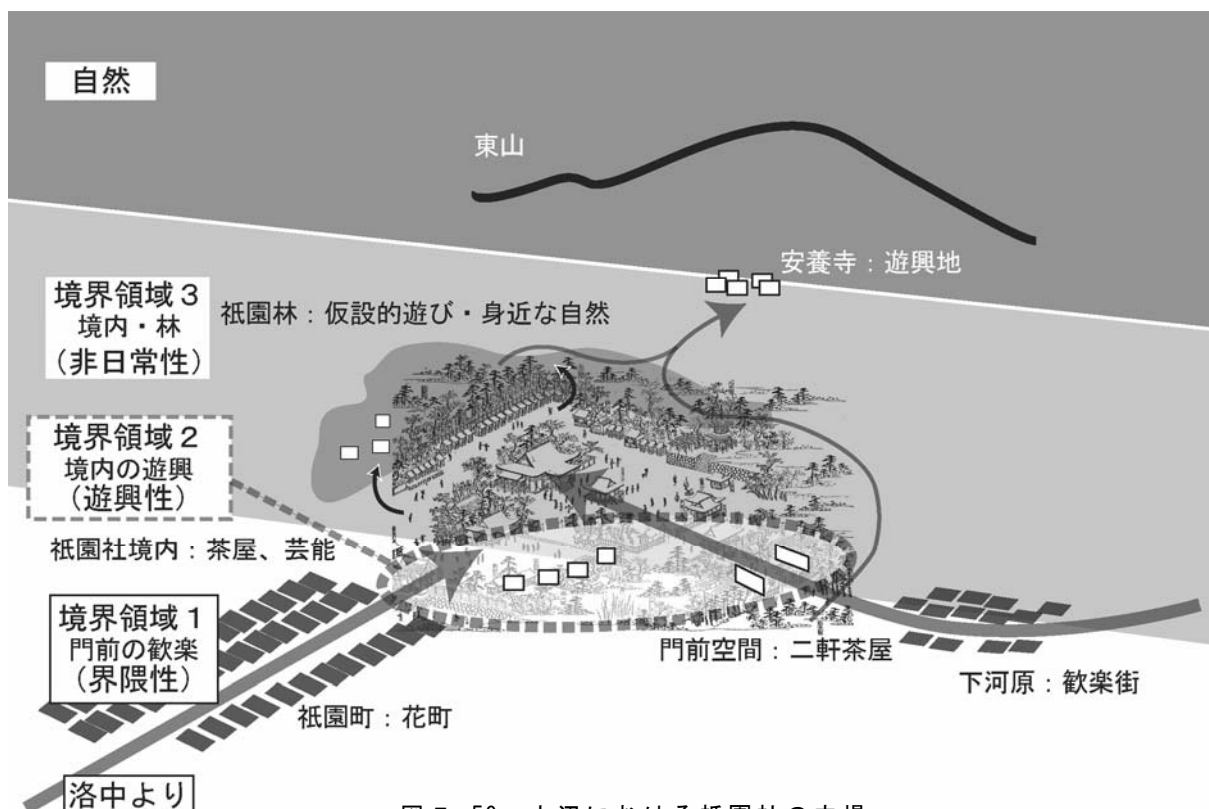


図5-59 山辺における祇園社の立場

2) 近世の円山・真葛ヶ原・祇園社

ここで、前節と合わせて、近世における円山・真葛ヶ原・祇園社全域の構成をまとめる。江戸期が終焉を迎えるころのこの地域は、東山の山辺という特徴に加えて、庶民による多様な文化的活動の拠点となっていた。

山辺の上部には、安養寺、長楽寺などの時衆寺が存在し、特に安養寺の境内において、急斜面を活かし変化に富んだ林泉美の庭園と建築をもつ六塔頭が建ち並び、それぞれにおいて民衆に席を貸す「席貸」を営み、卓越した眺望と庭園美を背景に宴や文化活動のできる名所として知られていた。そして山辺の下部は、大きな境内を持つ祇園社（現在の八坂神社）の領域が占めており、境内の大きな空間や周辺の林において、仮設的な茶屋などが並び、飲食・物売り・芸人・宴会など様々な活動が展開した。

その中間に位置する山辺中部では、南外れに時衆の双林寺が席貸を行ったが、大部分は真葛ヶ原という空地であった。ここは近世には農地となったが、風、月などを題材にして数々の歌に詠まれている⁸⁵⁾事から、その茫漠とした空間の広がりにかつて存在した原野のイメージを依然として受け継ぎ続けたと思われる。またここには江戸中期以降多くの文人が好んで住み、この領域の文化性が継承されてきた。

しかし、空間的な視点から考察すれば、山辺中部の最大の特徴は、山辺にほどよく間をとっていた事である。これにより、山辺下部からは上部の塔頭が正面を向く見事な連なりと遊ぶ人々を眺めることができ、上部からは都市との間に横たわる広大な森と社の賑わいを見下ろすことができ、それぞれ異なった景観を互いにひとつのまとまりの中に見せる役割を果たしていたと考えられる。

このように上中下部それぞれにおいて山辺の傾斜地形を利用した異なる空間が形成された。山辺下部は街と、山辺上部は背後の山（自然）とそれぞれ接続し、山辺中部の真葛ヶ原の存在により、それぞれが関係づけられ、山辺全体に一つの大きな複合景観域を形成していた（図5-60⁸⁶⁾）。

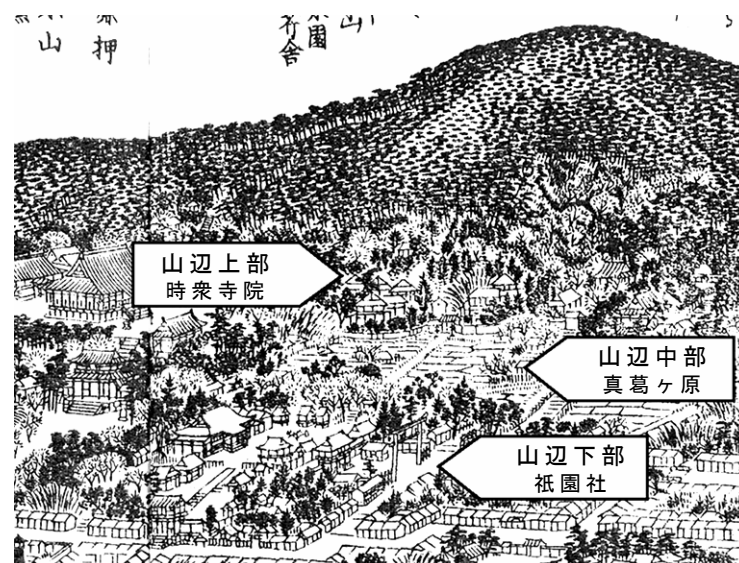


図5-60 近世の円山・真葛ヶ原・祇園社景域

5-3 山辺における近代化の受容

本節では、近代公園としての円山公園成立前後の空間変容を記述し、明治維新後すぐに始まった対象領域の新たな開発が、景観的な混乱を招くことになった事を明らかにする。そしてその要因は、近世における山辺の利用に対する態度と、当時の利用の態度を比較することで明らかになると考えられる。

1 円山公園敷地の指定

よく知られるように、明治6年(1871)1月の太政官布告第16号「社寺其他ノ名区勝跡ヲ公園ト定ムルノ件」によって日本の公園づくりがはじまる。その内容を以下に示す。

三府ヲ始、人民輻輳ノ地ニシテ、古来ノ勝区、名人ノ旧跡等、是迄群衆遊観ノ場所(東京ニ於テハ金龍山浅草寺、東叡山寛永寺境内ノ類。京都ニ於テハ八坂社、清水ノ境内、嵐山ノ類、総テ社寺境内除地或ハ公用地ノ類。)従前高外除地ニ属セル分ハ、永ク万人偕楽ノ地トシ、公園ト相定メ被ル可キニ付、府県ニ於テ右地所ヲ択ヒ、其景今況巨細取調、図面相添、大蔵省ヘ伺出ズ可キ事⁸⁷⁾

多く指摘されてきたように⁸⁸⁾、全国の公園成立の時期に比べて京都市の公園はやや遅れている。当時京都府には「万人偕楽」の地を公に指定せずとも、神社仏閣等が多く、オープンスペースの確保という点では、それほど的重要性が問われなかったという考え方もある⁸⁹⁾。では、何故そのような京都府においても、結局明治中期に京都第1号の公園として、円山公園が成立したのだろうか。

同じ明治6年(1871)、京都で社寺上知令が実施され、寺社の持つ土地の多くが一旦官有となった。続いて行われた同土地の払い下げ・貸し下げの結果、かつての社寺領の多くの土地は民有地となり、細分化されたこれらの土地において各々様々な利用がなされた。このとき、景観の統一感が大きく損なわれたものと推測できる。

明治19年(1886)12月に「京都円山公園」が誕生した。同年の8月に京都府知事北垣国道が明治政府へ提出した「公園地指定伺」に付けられた意見書には、

…当府古来の名所にして、衆庶群衆遊観の場所に付、公園地に指定致度候、(中略)双林寺、長楽寺、安養寺、弁天堂境内は、公園地第3種に編入すと雖も、尚ほ境内区域は、其儘据置き、且寺堂の格により取扱等の義は、別に変更不致積…

と書かれており、古来の遊興性が重要視されていること、社寺境内の空間をそのまま利用しようとしていることが分かる。つまり、上記のように細分化された土地よりも、まず近世からの遺されている社寺境内のオープンスペースを、保護して敷地指定する必要に迫られたと考えられる。

このように、当時の円山公園は図 5-61⁹⁰⁾ a のようにかつて寺社の所有地（八坂神社以外の境内を含む）であった場所とそれらを結ぶ道路敷に公園の枠を当てはめただけのものであり、現在のような一続きの敷地ではなかった。このような公園敷地の求め方は、当時の日本全国に興ったいわゆる境内地公園に共通したものである。しかし、ここではこの枠の決め方が、とりわけこの山辺において、以後の円山公園を特徴付ける二つの条件を満たしていた。

一つは、公園地になった場所は時衆寺院の庭園名所や飲食施設、祇園林といったそれぞれ近世から存在する遊興の敷地であり、山辺の原型的空间利用を継承する可能性を維持していた。もう一つは、公園の枠に関して柔軟に捉え、これらの隙間をつないで敷地を編集することによって、近世から重要であった周囲の文化領域との繋がりを公園敷地で断絶することを免れた事である。

明治 23 年（1889）円山公園は京都府から京都市へ移管された。以後京都市は散在した公園敷地をつなぐべく公園地の拡張事業を進め、明治 41 年（1908）に現在の円山公園の敷地をほぼ獲得する（図 5-51b）。

では円山公園の敷地拡大は、どのような意図によって進められたのであろうか。次項で、そのヒントになると思われる、この一帯の領域における急激な空間変化に着目する。

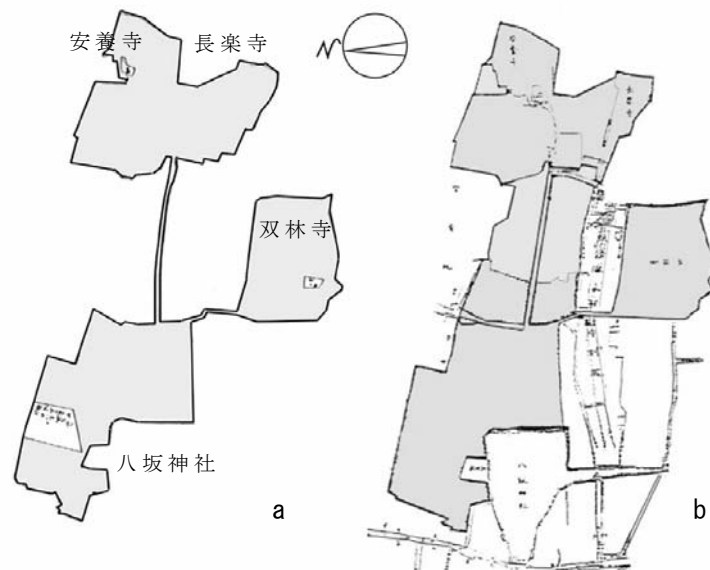


図 5-61 円山公園の拡張（a：1886～，b：1908～）

2 公園周辺の分割的な近代化

前項で述べたような経緯で初期の円山公園の敷地は形成され、周辺は図5-62⁹¹⁾のような平面構成をしていた。まず近世において利用の盛んであった場所に、近代化の影響を受けた人工温泉やホテルや料亭などの新たな経営が発生し、さらにその周辺へ利用が広がった。けれども公園地の拡張が完了しない明治期には、「広大なる部分は、(中略)粗悪の建造物等散在し、隅々空地の部分も常に雑草繁生し、塵芥瓦礫の散乱せる籬塀の毀壊せる等頗る荒廢に処せり⁹²⁾」と評されたように、細分化された土地それぞれにおいて都合のよい利用がされ、全体としてはまとまりのない景観であったと考えられる。本節では、当時の敷地利用を分析し、円山公園の拡張・整備が完了する以前の景観的特長を記述する。

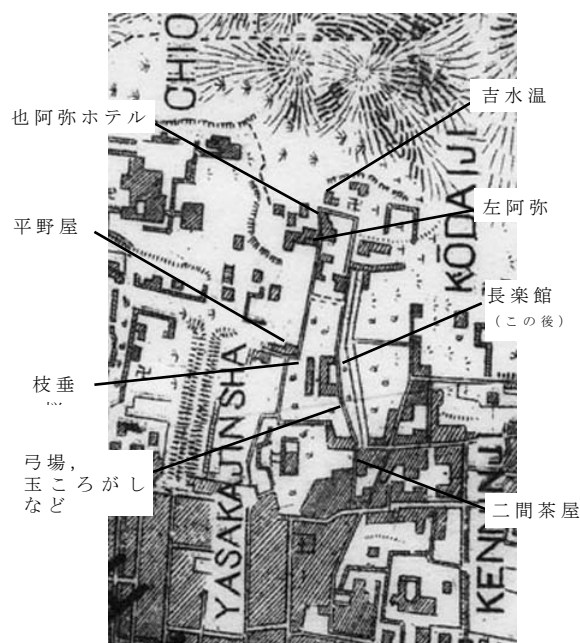


図5-62 明治期の円山公園周辺

1) 近世の敷地利用の流れを汲むもの

明治期の山辺上部、六阿弥の空間変容は特に著しかった。近世において席貸が盛んであった塔頭は、近代に入ると人工温泉(吉水温泉)、洋風ホテル(也阿弥ホテル)に取って代わった。

明治6年(1873)頃を開業した吉水温泉は、金閣に模した三層楼であった⁹³⁾。三層楼は静養室兼展望室として使用され、その眺望の良さが人を集めた。開業後すぐに周囲に新たな席貸が多く設けられて遊興場となった(図5-63⁹⁴⁾)。この吉水温泉は旧長楽寺境内と六阿弥の春阿弥跡にまたがり、円山においても特に高台であった。それ故この三層楼は洛中からもよく目立ち、円山のランドマークとして認知されることとなった⁹⁵⁾。

一方也阿弥ホテルは明治12年(1879)に也阿弥その他の施設を買収した井上万吉によって、待望された外国人用ホテルとして登場した(図5-64⁹⁶⁾)。館内からの眺望は



図5-63 吉水温泉と周囲の席貸

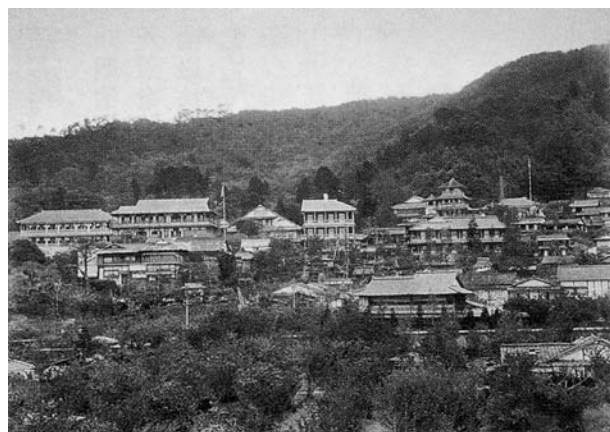


図5-64 也阿弥ホテルの全景

素晴らしく、訪れた外国人の撮影した写真や記述が多く残されている。也阿弥ホテルはその後敷地を広げ増築し、スケールの大きな建築を山辺に林立させた。それは、かつての六阿弥と同様に、眺望をテーマとした営為ではあったが、近世において重要であった、微地形と建築の解け合うような組み合わせを拉いでしまったように思われる。四条河原町などの都市の中心部からもよく目立ち、山際に雑然と浮かぶ全体が広告塔のような存在であったが、明治 39 年（1906）の火災後、京都市が公園地として買収し、営業を終了した⁹⁷⁾。



図 5-65 枝垂桜周辺に立ち並ぶ掛茶屋

山辺下部の祇園社門前では、二軒茶屋として知られた中村屋が、屋号を中村楼と変えて、洋室を八室持ったペンキ塗り二階建ての洋館を建て、明治中葉まではホテルも兼業し、洋食も扱った⁹⁸⁾。中村楼はその後、日本料理店に経営を絞り、現在も続いているが、特に元二軒茶屋の建っていた場所には、当時を偲ばせる掛茶屋風の建築を残している。

また六阿弥の一つ、左阿弥は、周囲の著しい変貌に関わらず、近世の空間構成をほぼ保存し、日本料理屋として経営を始め、現在まで続いている。

一方、祇園社東部の三院七坊が上地された跡に、祇園社社務執行の院にあった枝垂桜は、明石博高により伐採を免れ保護され、公園設立の頃には、**図 5-65**⁹⁹⁾のように多くの掛茶屋が出来、年々人気を呼び円山のシンボルとなった。優れた景観の周囲に席貸を設け、座して飲食や宴の場を持つことは、近世から行われてきた方法であった。

また、この三院七坊の跡には、明治 19 年（1886）に円山公園が成立した後に、弓場や玉ころがし、達磨落としなどの庶民的遊びの店も立ち並んだ¹⁰⁰⁾。景勝地に都市内の世俗的な娯楽の施設を持ち込むことで人気を博したというが、これらの露店は、近世の祇園林にみた、屋外に自由に場所をとって娯楽を提供するようなものであった。しかし、かつて祇園社北林に展開したような、大きな空間の包容性に頼る構成は、その規模が大きくなり、その範囲を拡大する事で、まとまった空隙を持っていた真葛ヶ原などの領域を分解していった。

2) 新たな敷地利用

一方、この界限に全く新たなまとまった景観を創出した敷地利用もあった。明治 42 年（1909）、タバコ製造で財をなし財閥を形成した村井吉兵衛の別邸として、中村楼の東隣にアメリカの建築家ガーディナーが設計した長楽館である（**図 5-66**）。政界財界の賓客をはじめ海外の要人も多くここへ招かれたように、社交娯楽の一機関とする意図



図 5-66 現在の公園風景をつくる長楽館

によるものであった¹⁰¹⁾。内部は豪華絢爛を極め、ロココ様式で飾られた応接間をはじめ、和洋混在する各種様式で彩られたが、外装は禁欲的で厳正なプロポーションの四階建てで、鉄骨構造の上に石張りがしてある¹⁰²⁾。長楽館の出現は、次章で述べる周辺景観の調和への動きとして円山公園の拡張が進み、再整備が始まるのとはほぼ同時期であった。

3) 敷地利用の変遷

近代から現在にかけて、旅館や料亭をはじめとした主要な景観要素になった特異な利用の変遷をまとめたものが図5-67¹⁰³⁾である。これより現在まで残っているものは、比較的近世からの利用の仕方を上手に踏襲したものであると思われる。概してこの領域における利用は、景観の中に飲食などの愉しみの行為を持ち込み自ら景観と一体になって遊ぶという近世から続く構図を、近代風に上手に解釈しなかった。ここに、例えば也阿弥ホテルは内部からの景観がもてはやされたが、逆に外見は自然との境界として重要なはずの山辺上部の景観を圧倒的に独占し、これ自身が美しい景観として見られる為に周辺と調和する意識が欠落していたものと思われる。

このように公園の拡張以前の対象領域では、山辺上部と下部において、概ね近世の利用の流れを捉えようとした動きはみられたが、それらが非常に激しい、あるいは偏った景観的变化を招いた。さらには歴史的にこれらを調整し適切な間合いをとってきた山辺中部においても、土地の細分化によって利用部分と空隙が錯綜するようになっていった（次頁図 5-68¹⁰⁴⁾）。思い思いの家屋やバラックが建てられて広い原野による見通しのよさも失われ、真葛ヶ原は、景域をつなぐ役割を果たさなくなっていた。

こうして、本項の始めに引用した意見書で見たように、この状態の解決が求められた。

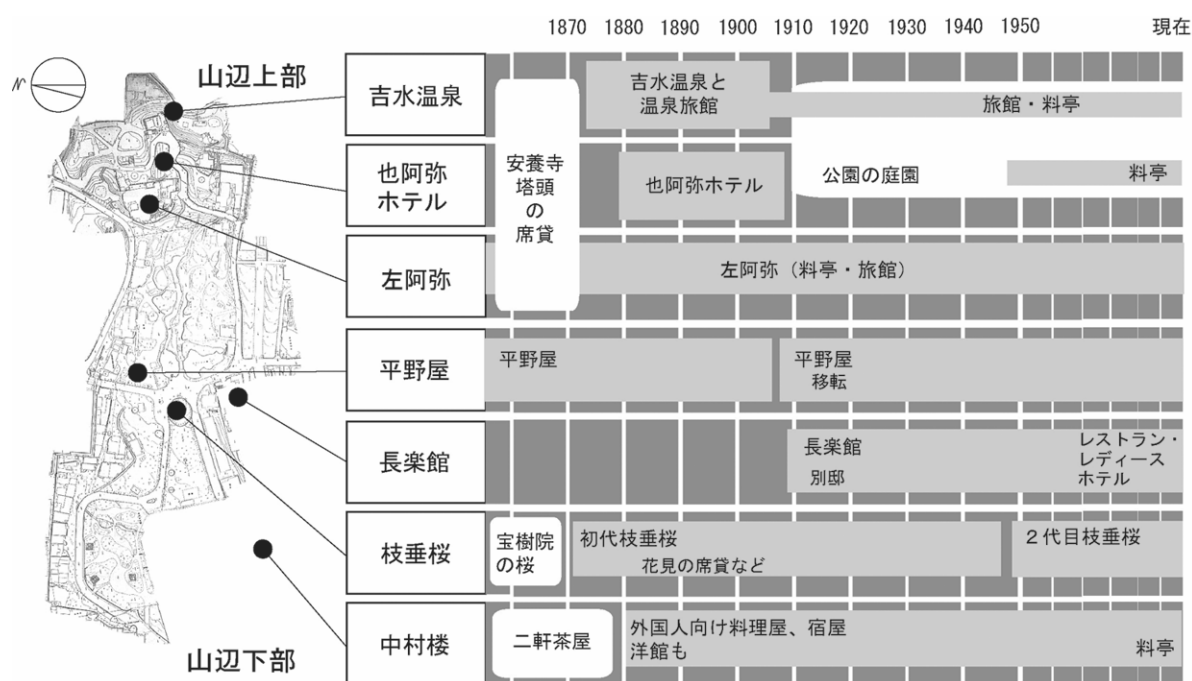


図 5-67 円山公園における特異な景観要素の変遷



図 5-68 荒れる真葛ヶ原（山辺上部から西向）

3 結語

都市に近接する山辺として、円山・真葛ヶ原・祇園社の領域は、近世から特別な遊興地として扱われてきた。近世においては、真葛ヶ原による十分な間をとりながら、山辺の上部と下部において、それぞれ場所に応じた空間が設えられた。

既に前節で、近世における山辺下部の祇園社および祇園林の領域は、大きな広がりの中に仮設的な愉しみの装置を用いる事が頻繁に行われた事と、山辺上部の時衆寺院の領域では、急斜面を利用して凹凸の豊かな林泉を創り、それを臨む座敷の遊びが盛んに行われた事を明らかにしてきた。近世における人々の山辺の遊び（利用）に対する態度は、このように場所性、相対的位置を保ったまま、景観的に高度な技術をもって演出できる場所（山辺上部）では、それを最大限に活かし、林や敷地の広さによって包容力の高い場所（山辺下部）では、仮設的で邪魔にならない程度の装置をもって賑わいを創出するものであった。

しかし近代では、同様の利用でも、異なる態度で行われた。近代における人々の態度は、新しい時代の都市における開発の延長上に、過剰に場所を求め、本来の相対的な位置や、規模にかかわらず押し進めるものであった。すなわち、真葛ヶ原も祇園林も区別なく利用が繰り返され、全体としてそれぞれの要素間に特別な関係はなくなり、無秩序な細分化された利用と空隙が混在した。

その結果、まずは真葛ヶ原の景観的な役割を取り戻すことが、大きな公園の景観域を形成する鍵であり、次の総合的な景観デザインが展開することになった。

5 - 4 公園拡張後の造園

本節では、前節までに明らかにした公園整備の必要性に対して施された、円山公園の改良計画と、現地調査において明らかにした現在の景観特性とを分析することにより、植治を擁して大々的に行われ、新たな領域形成に用いられた構成上の手法を明らかにする。

1 植治による総合的デザインの意図

近世の名所図会などから判断すると、山辺の上部・中部・下部の間には分かりやすい地形の断絶が存在していたと考えられる。しかし、図 5 - 69 に示す現在の円山公園における東西立断面（八坂神社西門—安養寺）でみると、山辺下部から上部へ段階的に傾斜が急になっている事は把握できるが、山辺上部・中部・下部間の地形的な分節が明瞭ではない。これは地形的に意図された変更であり、拡張後に行われた総合デザインの結果である。この意図は、「圓山公園の中心ともなる可き櫻樹の当方より也阿彌ホテル跡に至る一帯の整備に就いては最も注意し種々研究の結果、大に水を利用するの必要を認め」第二疏水から鉄管を埋設して引水¹⁰⁵⁾するという、「公園改良工事設計案」にみられるように、傾斜、落差による断絶の大きかった山辺下部から上部の間を上手くつなぎ景観域を成立させる事であったと容易に推測される。

京都円山公園誕生から拡張を含み公園施設が整うまでの公園整備の概要を表 5 - 1¹⁰⁶⁾（次頁）にまとめた。拡張によって獲得した真葛ヶ原を中心に、年々公園全体が形作られていく様子がわかる。この中で、特に注目すべき項目は、拡張後の円山公園内の作庭を、近代日本庭園の先覚者といわれた庭師であった小川治兵衛が担当した事である。彼の作庭に共通する特徴は、近代に琵琶湖疏水によって得られるようになった豊富な水を使い、東山を借景にして、「あるがままの自然」の再生を意図し、雄大な風景を展開した事、或いは日本庭園の因襲的な空間と様式にとらわれず、洋風庭園の概念なども自由に取り入れて「植治流」と呼ばれた新鮮な庭作りをした事である¹⁰⁷⁾。彼による公園整備によって、現在目にする円山公園の景観がほぼ出来上がった。

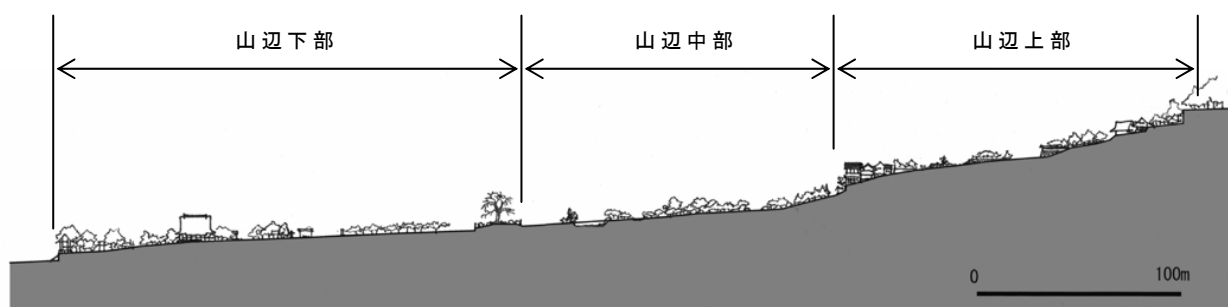


図 5 - 69 円山公園東西断面図（筆者作成）

表 5 - 1 円山公園整備の概要

西暦	整備事項	備考
1887	櫻樹数百本植え足し	
1889		所管が京都府から京都市へ
1891	禁止事項の公園掲示	
1892	「アーク」灯の取付	第1次公園地拡張はじまる
1893	京都市参議会が公園仮事務所の設置を決定	
	山櫻、枝垂櫻35本程市内から移植	
1894	八坂神社の末社太田社西北に威垣を設置	
	円山公園知恩院間の谷川の工事を入札で実施	
1895	485坪新池及び周辺開設	
	拡張工事によって旧御台場の構築物の撤去	
	自然の丘陵を利用した溪谷、四季の花樹を植樹	
	蹴上疏水から引水し、噴水を設置	
1900	北村桑蔵の寄付、樹木植付費等に使用	
1904	八坂神社が公園池排水を非常用水として引水	
1909	円山公園の拡張工事を直営工事より	第2次公園地拡張はじまる
1910	公園入口の改修を道路拡張と並行	
	園内の道路拡築、新設を急ぐ	
1911	園内道路の延長、溝渠排水管敷設、上水道敷設	
	左阿弥北接の紅葉谷を知恩院又は長楽寺と交換	
	八坂神社西楼前と園内地の一部を交換整理	
1912	公園改良工事着工	←小川治兵衛・武田五一に依頼
1913	一連の拡張、改良工事竣工	
1928	真葛ヶ原に音楽堂を建設	
	枝垂れ櫻の西方にはラジオ塔の設置	
	園内主要道路の舗装、休養施設の改善等の完備	

2 傾斜地形の操作

地形に着目して現在の円山公園を丁寧に観察すると、公園地拡張後の造園時に造成されたと思われる地形を見出す事ができる。山辺上部六阿弥と、真葛ヶ原の境界領域がこれにあたり、現在の地形と先に見た近世の絵画や明治初期の写真を頼りに推察すると、図5-70¹⁰⁸⁾の灰色部で示すように、山辺の肩を作るように盛土された土地が明らかになる。この造成が、新しい円山公園の景観を特徴付ける事になった。それまで石垣などによる高低差で断絶していた部分に盛土を用いて、山辺中部から上部への地形的連続性を作り出した。

この盛土の効果は、特に山辺中部において顕著である。山辺中部では、造成されて操作が自在となった斜面上に流水を設けて、それを軸に図5-71のような多種の植栽によって造園をした。麓へ向かって短距離で緩やかになるその地形から、上流と下流の流れは短い間に劇的な変化をみせ、下流へ行くほど広く緩やかな流れとなり、上流へ行くほどに細く急な流れが強調された。ここに築山としての盛土が複雑に隆起する深山を演出し、常に借景として捕らえられるようになった背景の東山稜線へ逍遙者の視線を誘導し、引きつける効果を見せた。

この山辺中部（真葛ヶ原）は、明治維新以来疎らに立つ民家や、雑草が繁茂しバラックの散在する荒地と化していたが、植治の自然を基調にした造園により山辺の場所性が強調され、山辺下部から、山辺上部を越えて一気に稜線まで至る領域の調和が図られた。

3 回遊式苑路とせせらぎによる造園

大小さまざまな石によって構成されるせせらぎ自身は、自然の営みを想起させるものである。四季折々の色彩を水面に映し込み、心地よい音を立てて流れる。前節で述べたように地形を巧みに利用したせせらぎは、ある秩序を持って変化し、この秩序に真葛ヶ

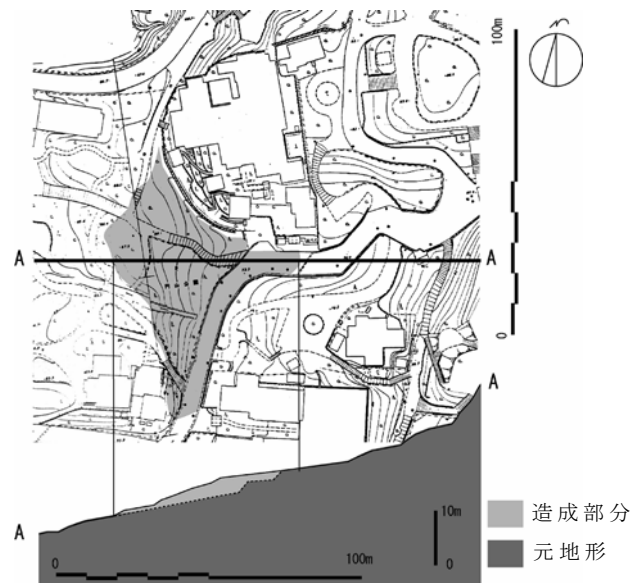


図5-70 山辺上部中部間の地形改変
(筆者作成)



図5-71 自然を模したせせらぎと豊かな植栽

原全体が従っている．つまり一つはせせらぎの上流と下流の間の自然（植栽）の変化について，もう一つは水辺への距離に関わるデザインの変化について秩序が設けられた．

せせらぎは，先に見た地形を活かした大規模な盛土の造成によって上流へ行くほど細く急な流れになるが，周囲の自然も同様に深く表現される．下流へ向かうと周囲の植栽は次第にきれいに刈り込まれた低層のものへ変化する．

また水辺へ近づくほど植栽によって「あるがままの自然」が豊かに表現され，水辺から離れると，周囲には高植えされ手入れされた桜や，人の活動を期待するための疎らな植樹などの人為的な自然を用いた「公園」のプロトタイプともいえるスタイルが現れる．つまり，図 5-72 のように水辺周囲に展開する豊かな「あるがままの自然」と，洋風の人工的な自然が対比的に場を共有している．ここに園内の人の動線，つまり回遊式の苑路がせせらぎに絡みつくように，また別れ結びながら非幾何学的に公園全体に張り巡らされた（図 5-73¹⁰⁹⁾）．この道を辿りながら移り変わる「あるがままの自然」の体験を創出し，全体としての地形の連続性を再生した．この明快な対比と，それを結ぶ手法を用いた近代の造園によって，山辺の一体感が意図的に強調された．

また，この対比を含んだまま調和する象徴として，もとよりあった枝垂桜を活かしている．ただし，植栽，とりわけ桜は手入れをしなければ傷んで枯れてしまうため，常に維持する努力をしなければならない．この枝垂桜は，昭和 22 年（1947）に一度枯死したが，佐野藤右衛門によって大作業がなされ，子桜（現在の枝垂桜）が植えられた．



図 5-72 あるがままの自然（左）と人為的な自然（右）の対比

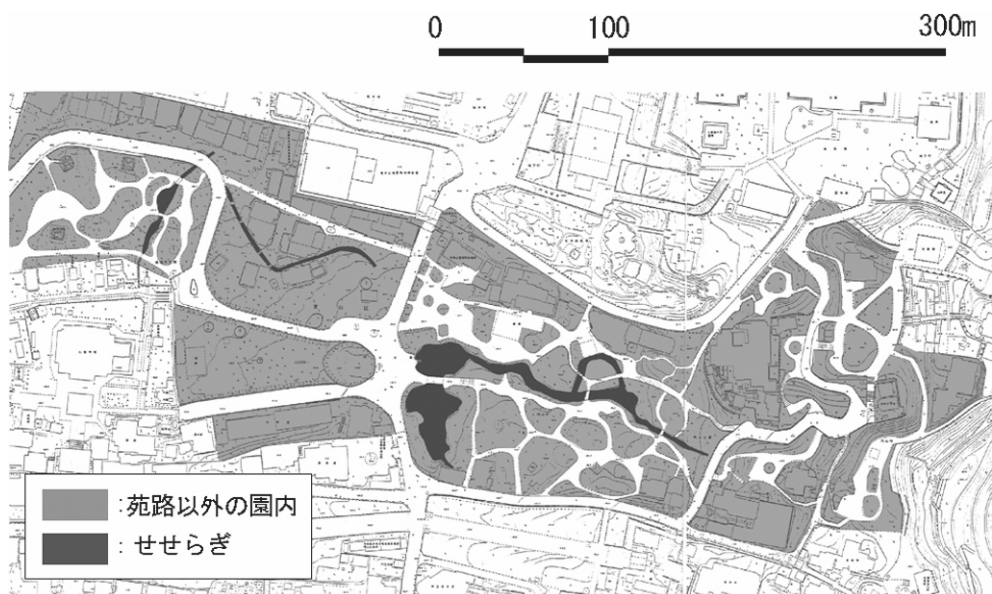


図 5-73 円山公園の苑路と水路

園内は伝統的な回遊式庭園の手法をとりながら、進路・方向性についての制約がなく、どの方向からのアクセスに対しても柔軟であるため、周囲とも無理のない接続に成功している。例えば公園中央には、南北を接続する道が通されており、北の岡崎公園、青蓮院、知恩院などと南の東大谷、石堀小路、高台寺、建仁寺、正法寺、清水寺などを結ぶ主要な道として利用できる。また、同様に方向性に関して自由である八坂神社と3つの部分で接続されており、西側とのつながりも自由であり断絶する境界がない。

4 庭園をとりまく飲食店

先に述べたように、円山界限には公園の成立以前から、席貸、掛茶屋の流れを汲む多くの料理屋、宿が経営され、潜在的な愉しみの場として存在していた。公園成立後もこれらの経営は、この地域の賑わいにとって重要な要素となっていたために、便益施設として公園地へ取り込まれていくことになった。公共の名の下にこれらの経営を追い出すのではなく、公園の中へ取り込んでいった柔軟な姿勢により、かえって公園地の愉しみの共有空間が次の時代へ受け継がれたといえる。



図5-74 店舗と庭園をつなぐ水路

造園竣工時、山辺下部に特に多く飲食店が並んでいたが、これらのルーツは本来祇園社周辺に店を構えた掛茶屋的な存在であったと思われる。ここで公園の庭園とこれらの飲食店の間に特別な境界が設けられなかったことは、注目すべき事柄である。これにより公園全体の外界との境界が、非常に曖昧になり、都市と自然の境界領域におけるグラデーションが、上手に演出されることとなった。現在では、飲食店の店舗がさらに公園地へ進出し、水路の際まで迫ったが、図5-74のように植栽とともに柔らかに空間をつなぐ水際の特質を活かして、店舗をさらに公園に溶け込ませる努力がみられる。

5 結語 ー近代造園の成果と限界

大正期以降の円山公園の風景は、それまでの雑然とした景観から大きな転換を遂げた。植治自身が「全部手がけた」と語った¹¹⁰⁾といわれるように、公園全域にわたる景観デザインは、「植治流」と呼ばれた自然と水の流れを基調にした空間作りに負うところが大きい。注目すべきは、近世から残る歴史的な諸要素の領域を含み混む複合景観域を対象に、その適切な地形操作と造園によって、山の側から緑地を引き降ろすようにして、都

市の際まで自然と歴史の混在した領域を繋ぐことに成功したことであった。

大正期の公園整備後における景観構成の要点をまとめると、次のようになる。

■斜面上の微地形、及び築山を設けたところに流水を導入し、風景の連続性、展開性を創出した。新しくデザインされた風景の方向性は、背景の山の稜線へ向かうものだった。

■変化をつけた植栽やせせらぎによる自然の表現が、景域全体の風景に調和をもたらし、そこへ張り巡らされた多方向性の導線が、高いアクセシビリティを生み出した。

■「あるがままの自然」は常に維持する努力によって支えられる。

■庭園をとりまく飲食店は、過去からの愉しみの方法を継承する重要な装置であり、公園境界を曖昧にして、都市と自然の狭間に位置する公園の境界領域的性質を際立たせた。

以上の近代になされたデザインは、ほぼそのまま現在に引き継がれている。今でも植治の造園による真葛ヶ原の再生が現在の公園景観の主要部分をなし、山辺の上部と下部を視覚的に繋ぐ。この山辺全域の広大さを感じさせる一体感が、現在でも名所で有り続ける所以であろう。

しかし現在、せせらぎに導かれて山辺を逍遙する人の多くは、山辺上部へは至らない。実際山辺上部は明治45年(1912)の公園改良案で「遊覧者は溪川に沿ひ徒歩にて圓山公園の眺望臺とも云ふ可き矢阿彌焼跡迄登り得る事¹¹¹⁾」といわれているように、特に吸引力を期待され、導線計画された場所であったが、そこに現れる車道が公園の境界であると勘違いされてしまうのである。その上、公園中央から見上げる稜線は、公園内部の造形の中に取り込まれて均斉がとれており、稜線までが一続きの景観域として把握されるが、この構図の中に、比較的近い山辺上部は、視線が稜線に至るまでの過程に過ぎず、それゆえに実感としては辿り着けるとは思わない稜線と同様に「手に届くようだけれどあちら側」の部類に認識されてしまっていると考えられる。これは植治の造園の持つ美的感覚であると考えられるが、同時にその間にある場所の無化が起こってしまっている。すなわちこれは、眺望に重きを置いた近世の山辺上部の景観的価値を放棄し、全体を一つのテーマで一元化した結果であるとも言える。植治の造園は、この領域の混沌に調和を与える役割を見事に果たしたが、同時に幾らかの風土的価値を埋没させてしまった。

また、祇園社にルーツを持つ山辺下部は、近世の賑わいが八坂神社に維持されているものの、その他の部分が閑散としている印象を受ける。結局現在に最も密なデザインが施されている箇所は、山辺中部に集中してしまい本来デザインの核心であったはずの周囲が沈黙してしまっている。

また先に述べたように、現在公園内に馴染んで存在する店舗は、公園内に特殊なアクティビティを加える重要な要素になっている。このように、店舗の賑わいと公園の賑わいを同じものとして捉える視点は、近世において庶民の活動場所であったここにおいて、特に意味を持つと思われる。この点において、店舗は公園景観の重要な要素と捉えられる必要があり、店舗の側もさらに積極的に公園景観を考慮する事が望まれる。

ここにおいて現在のこの地域には、一つ新たな空間変容の可能性があると気がつ

く．この場所は，近世において，飲食，饗宴，芸術文化の催し等の会場に頻繁に利用されてきたことは，前節までに明らかにした．現在その遊興性は，花見の時期に一斉に蘇るが，その他にも時折小さな文化的動きが見られる．例えば，山辺上部の最上位にある旅館「吉水」では，その敷地内で展覧会や能などの文化的企画が定期的に行われるようになっている¹¹²⁾．このように，ゆしみのためのソフトデザインを周囲一帯で一層充実させていくことで，この近代の公園整備に合わせて，この地に培われた文化を継承，再生することができるのではないだろうか．

近代にここで展開された美意識を理解した上で，これらの明確な問題点を踏まえ，現在に再び周囲を活用すれば，近世から近代を通して現在までに繋がる山辺の一大空間が，さらにリアリティを帯びて発展するであろう．

5-5 まとめ

以上の分析，考察における主要な成果は以下の通りである．

第一に，円山・真葛ヶ原・祇園社地域の前近代における景観像を把握するために，地形及び社寺領域における空間構成を，地形資料や絵図，文献史料を用いて分析した．

その結果，山辺の上部にあたる3つの時衆寺院において，傾斜地形を巧みに活かした庭園を基調とした空間づくりが行われていた事が明らかになった．それらは，傾斜の度合いによって，それぞれ異なる構成ではあったが，流水を伴う庭園に数寄屋風の建築を協調させる工夫が確認できた．眺望を自らの庭園に取り込む工夫，背景の山に斜面庭園を一体化させる工夫などは，特に優れていたといえる．また，こうして設えられた空間を用いて，諸行為を行う遊びが流行し，文化的な領域が形成されたことを把握した．

山辺下部にあたる祇園社は，近世には広い緩斜面の領域を門前，境内，北林に分けて，それぞれにおいて，やはり遊び場としての性格が卓越しており，全体は山辺を横につなぐ軸と，山辺を上下につなぐ軸の性格の異なる二つの軸で構成されていた．横軸の門前は下河原と結びながら二軒茶屋によって構成され，縦軸の門前は洛中からつながり祇園新町が発達した．境内には時代と共に茶屋が並び，北の祇園林では床机や幕，あるいは掛茶屋など，仮設的な遊びの装置を用いて，花見や宴会，その他多くの興業が行われる空間であったことを明らかにした．

次に，近代に円山公園が成立する前後の，この地域における大きな景観の変容状況を，行政資料，写真資料をはじめとした歴史資料から把握し，分析した．これにより，都市の近代化に併せてその利用の規模が著しく変容した時代に，山辺の利用への態度についても転換が迫られた状況を明らかにした．

続いて円山公園において総合的に行われた，小川治兵衛の公園改良工事による景観変容の詳細を調査し分析した．その結果，山辺中部の傾斜地形を操作し，疏水の水を用いた流水・回遊式庭園における「あるがままの自然」の表現によって，山辺全体をつなげて背景の山へ敷地を溶け込ませる努力がなされたことが明らかになった．さらに，過去の流れを汲む重要な存在である，公園内に残された飲食店の働きを明らかにした．

近世の円山では，微地形を巧みに操り自然景観をさらに魅力的に見せる工夫がされる中，外へ大きく開かれた仮設的な座敷を作り，主体が積極的に景観へ溶け込むための様々な方法が培われた．それには飲食や宴等の行為が重要な役割を果たしていた．それは近代にもある程度受け継がれ，分割された個々の景観の中で繰り返された．しかし，近代の興隆でそれぞれの経営がスケールアップするなかで，豊かな景観を基盤とするはずのこれらの行為がバランスを崩し，粗雑な景観が氾濫へつながった．その折に行われた拡張と植治の造園の結果，かつて視覚的な接続の機能を果たしていた真葛ヶ原を異なる手法で再生された．すなわち，山辺地形を活かし，公園内全体に流水を用いて全景観を山へ帰す「自然景観」を導入することによって，背景の山から麓までに一体感を作り出した．この地域では，近代の都市化に対して，公園緑地化という手法で立ち向かい，その中にかつての愉しみを内在化させることで，山辺の共有空間を獲得したといえよう．

◇第5章 参考資料

-
- 1) 丸山宏「京都円山公園成立前史」(『造園雑誌 48 (5)』1984 pp.7-12) / 「円山公園の拡張」(『造園雑誌 48 (5)』1998 pp.1-6)
 - 2) 土井勉「都市の公園形成史 一第二次世界大戦まで一」(『土木史研究第 11 号』, 1991.6) pp.167-174
 - 3) 荻谷勇雅「明治期の京都の風致景観行政に関する歴史的研究」(『土木史研究第 11 号』, 1991.6) pp.13-23
 - 4) 晴翁木村明啓『花洛名勝図会』(笹屋成兵衛, 1862.9) 東山一ノ六
 - 5) 『日本名所図会全集 都名所図絵 全』(名著普及会, 1975.5)
 - 6) 井口洋『都林泉名勝図会』(柳原書店, 1975.6)
 - 7) 晴翁木村明啓『花洛名勝図会』(須原屋茂兵衛, 1862.9) 東山三ノ三十二
 - 8) 同書 東山三ノ三十二
 - 9) 前掲『都名所図会』 p.223
 - 10) 同書 p.231
 - 11) 前掲『都林泉名勝図会』 p.226
 - 12) 『角川茶道大事典 本偏』(角川書店, 1990.5) p.228
 - 13) 「社寺土地一件」(『京都府庁文書』, 京都府立総合資料館蔵, 1886)
 - 14) 前掲『都名所図会』 pp.226-227
 - 15) 前掲『花洛名勝図会』 東山三ノ三十
 - 16) 同書 東山三ノ廿九
 - 17) 大野政男『名勝地円山公園の沿革』(京都市, 1996.8) p.6
 - 18) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.226-227
 - 19) 吉田光邦『京都百年パノラマ館』(淡交社, 1992.7) p.185
 - 20) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.228-231
 - 21) 前掲『京都百年パノラマ館』 p.26
 - 22) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.218-219
 - 23) 同書 pp.222-225
 - 24) 前掲『都名所図会』 pp.231
 - 25) 同上 pp.212-213
 - 26) 前掲『花洛名勝図会』 東山三ノ四十
 - 27) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.246-247
 - 28) 同書 pp.241-242
 - 29) 滝沢馬琴『羈旅漫録』(『日本随筆大成<第一期>1』吉川弘文館, 1975.10) p.233
 - 30) 本居宣長『在京日記』(『本居宣長全集第十六巻』筑摩書房, 1974.12) pp.75-76
 - 31) 「遊宴の場と能楽一東山時宗寺院の阿弥坊塔頭における催しをめぐって一」(小林英一, 『芸能史研究 No.135』1996.10, pp.15-31) では『後は昔物語』(1803)を史料に挙げている
 - 32) 書会〜生花会について, 『江戸時代図誌 京都 2』(林屋辰三郎ら, 筑摩書房, 1975.11 p.74)
 - 33) 素謡会, 演能に関しては前掲「遊宴の場と能楽一東山時宗寺院の阿弥坊塔頭における催しをめぐって一」に詳しい
 - 34) 『京都の歴史 第六巻』(京都市, 1979.9) pp.182-183
 - 35) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.228-229
 - 36) 同書 pp.220-221
 - 37) 田中緑紅『亡くなった京の廓 上』(京を語る会, 1958.6) pp.34-38
 - 38) 『京都市の地名』(平凡社, 1979.9)
 - 39) 同書 p.198
 - 40) 同書 p.196
 - 41) 同上
 - 42) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ六
 - 43) 前掲『京都市の地名』 p.210
 - 44) 前掲『江戸時代図誌 京都 2』 pp.80-81
 - 45) 『京都の歴史 第5巻』(京都市, 1979.7) p.476
 - 46) 前掲『京都市の地名』 p.203
 - 47) 『安永八年都細見之図』(京都大学総合図書館蔵, 1779)
 - 48) 狩野博幸『円山應舉画集』(京都新聞社, 1999.7) p.23
 - 49) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ三十五
 - 50) 「洛中洛外図屏風 六曲一双」国立民族博物館(『室町時代の狩野派一画壇制覇への道一』京都国立博物館, 中央公論美術出版, 1999.4, pp.148-149)
 - 51) 土佐光起の掛け軸, 中村楼所蔵

-
- 52) 今井育雄『日本名所図会全集 拾遺都名所図絵 全』(名著普及会, 1975.5) pp.128-129
- 53) 未詳『十国巡覧記』(『史料京都見聞記三 十国巡覧記』駒敏郎他, 1991.11) p.134
- 54) 前掲『在京日記』 pp.75-115
- 55) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ三十七
- 56) 前掲『都林泉名勝図会』 pp.248-251
- 57) 前掲『在京日記』 pp.114-115
- 58) 前掲『京都市の地名』 p.202
- 59) 同書 p.196
- 60) 同上
- 61) 『京都の歴史 第五巻』(京都市, 1979.7) p.474
- 62) 碓井小三郎『京都坊目誌 下京区之部坤』(『京都叢書第十五巻』京都叢書発行会, 1935.1) pp.298-299,
- 63) 「祇園新地細見図」(『新撰京都叢書第十一巻上』臨川書店, 1987.8)
- 64) 前掲『京都の歴史 第5巻』 pp.474-478
- 65) 「社領在家図」(『八坂神社文書 下』八坂神社社務所, 1937.2) p.96 折り込み
- 66) 「松本源之助普請願書」(前掲『八坂神社文書 下』) pp.183-187
- 67) 前掲『円山應舉画集』 p.22
- 68) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ三十三
- 69) 田中緑紅『なつかしい京都』(京を語る会, 1957.12) p.9
- 70) 岩井武俊『京ところどころ』(金尾文淵堂, 1928.11) p.186
- 71) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ廿八
- 72) 前掲『都名所図絵』 pp.212-213
- 73) 小野佐和子『江戸の花見』(築地書館, 1992.4) p.89
- 74) 前掲『在京日記』 p.94
- 75) 十返舎一九『東海道中膝栗毛』(『新編日本古典文学全集 東海道中膝栗毛』中村幸彦, 凸版印刷株式会社, 1995.6) p.397
- 76) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ三十七-三十八
- 77) 「東山遊楽図屏風(高津家本)」(前掲『江戸時代図誌 京都2』) p.80-81
- 78) 「祇園櫻図 吉川觀方氏蔵」(『京華聚英』京都市史編纂事務局, 1937.3)
- 79) 前掲『京都市の地名』 p.203
- 80) 京都市編『史料京都の歴史 10』(平凡社, 1987.3) p.179
- 81) 前掲『花洛名勝図会』 東山一ノ三十九
- 82) 同書 東山一ノ四十一
- 83) 「境内御増加願」(『京都府庁文書』, 京都府立総合資料館所蔵 社寺土地事件 8-39)
- 84) 「八坂神社境内外区別実測図」(前掲『京都府庁文書』 社寺境内外区別取調 42)
- 85) 例えば『京師巡覧集』(1672), 『都名所図会』(1780), 『拾遺都名所図会』(1788), 『花洛名勝図会』(1854)などに真葛ヶ原の歌が掲載されている。
- 86) 下絵は, 『花洛名勝図会』(前掲 東山一ノ六)
- 87) 白幡洋三郎『近代公園史の研究-欧化の系譜-』(思文閣出版, 1995.3) pp.178-179
- 88) 例えば「明治期の京都の風致景観行政に関する歴史的研究」(荻谷勇雅, 『土木史研究第11号』, 1991.6, p.15)
- 89) 土井勉「京都市の公園形成史-第二次大戦前まで-」(『土木史研究第11号』1991.6) pp.167-168
- 90) 「京都円山公園成立前史」(丸山宏『造園雑誌 47(5)』1984, pp.7-12)を基に筆者作成
- 91) 『京都市地図』(京都市参事会, 1894)をもとに筆者作成
- 92) 前掲『名勝地円山公園の沿革』 p.30
- 93) 前掲『京都百年パノラマ館』(p.185)には「明治6年(1873)9月1日」とあり, 前掲『京都市の地名』(p.328)には「明治10年」とされている。『円山公園』(田中緑紅, 京を語る会, 1960.3, p.37)には「明治6年8月に竣工, 翌9月1日開業」と書かれている。明治6年に吉水温泉工事中に付近の見回りをしていた明石博高によって枝垂れ桜が救われた話(前掲『史料京都の歴史 10』p.202)があるので, 明治6年頃の開業かと思われる。
- 94) 石田有年『都の魁』(石田木次郎出版, 1883.1)
- 95) 例えば明治23年(1890)発行の『改正新刻京都市郡名所新図』では円山一帯を「圓山温泉」と紹介している。
- 96) 菊池昌治『写真で見る京都今昔』(新潮社, 1997.9) p.22
- 97) 前掲『名勝地円山公園の沿革』 p.48
- 98) 筆者による2000.1.20の中村楼当主へのヒアリング
- 99) 前掲『なつかしい京都』 p.12

-
- 100) 前掲『なつかしい京都』 p. 14
101) 前掲『資料京都の歴史 10 東山区』 p. 207
102) ギャラリー・間『建築MAP京都』(TOTO出版, 1998. 1) p. 91
103) 主に『京都の歴史』(前掲), 『名勝地円山公園の沿革』(前掲), 『京都市の地名』(前掲) などの文献に基づき筆者作成
104) 前掲『写真で見る京都今昔』 p. 22
105) 「円山公園改良案」(「日出新聞」明治45年(1912)3月15日)
106) 前掲『名勝円山公園の沿革』をもとに筆者作成
107) 杉田博昭『近代京都を生きた人々／明治人物誌』(京都書院, 1987. 4) pp. 5-21
108) 「公園平面図 1/500」(京都市作成) 及び, 現地踏査を元に筆者作成
109) 「都市計画図」(京都市都市計画局, 1994) を元に筆者作成
110) 山根徳太郎『小川治兵衛』(小川金三, 1965. 11) p. 57
111) 「円山公園改良案」(前掲「日出新聞」)
112) 筆者による 2001. 11. 3 のお宿吉水女将へのヒアリング

第 6 章

結章 一 複合景観域の創造

前章までの成果

人々は京都東山の山辺において、近代以降の人の営為上、あるいは計画上の理由によって、どのような工夫で景観を変容させ、環境との折り合いをつけてきたのだろうか。本研究では、この観点で好例となる三つの地域においてケーススタディを行った。

第2章では、まず京都における近代化のプロセスを「復興期」「活性期」「拡大期」の3段階に分けて、歴史事項の整理を行い、各プロセスにおける洛東の景観的状况を明らかにした。続いて場所認識上の景観のまとまりを「複合景観域」とよび、近世までに社寺境内を中心に培われた庶民の遊び場としての景観が、近代以降に人の営為上、あるいは計画上の理由によって新たな景観へと変容した複合景観域を選定し、次章以降のケーススタディを行う対象地域とした。

第3章から第5章では、各対象地域の景観変容に関するケーススタディを行った。

第3章では、「神楽岡地域」を対象とした。かつて社寺領域が空間を決定していたこの地域の原形を明らかにした。続いて、この地域における遊びの場について、近世におけるスタイルと近代以降のスタイルをそれぞれ整理して、近世の簡易な装置を用いた野遊びが、近代の数寄空間をしつらえての遊びへと変化したことを示した。それは、かつては社寺領域として保証されており、野遊びなどの場ともなった広い斜面地に、目の利く開発者が場所を押さえてこの場に調和するデザインの開発のために工夫を凝らした結果であった。ここで、近代の開発者による場所の創造的デザインの構成を分析し、急激な変化ではあったが即席に拵えたものではない、数寄の文化をはじめとする伝統に基づいた、開発者の自由な発想による構成法を明らかにした。

第4章では、「浄土寺・鹿ヶ谷地域」を対象にした。ここでも前近代の地域景観の原形を探り、ここでは山裾に並ぶ8つの社寺が山へ向かってそれぞれ独自の空間を造形したが、西側手前の広い野には3つの集落を囲む田園地帯が形成されていた事を明らかにした。ここに存在した道は、山裾を横につなぐ一本の道と、各集落を貫く東西の道でほぼ全てであった。次に、近代の景観は、琵琶湖疏水分線の挿入と大正11年(1922)頃に始まる住居開発の時期に変容が見られたが、疏水分線の挿入自体には、農村風景の中に与えるインパクトは殆どなく、景観意識の発生と境界の形成は大正期以降に起こった事を示した。住居地域の開発時には、都市計画を契機としながら、住み始めた住人による直接的空間創造と価値の発見に促進されて、境界が形成された。特に橋本関雪夫妻による疏水分線縁への桜並木の創造は、疏水縁の散策性を生み出した。その結果、かつてより山裾に存在する歴史的身体的に文化と交感できる領域と、散策性を得た水辺を含む住宅地の領域の二層構造で特徴付けられる一つの領域へと成長した。そして都市化の中で時期を得た景観整備に至る、時代ごとに積み重ねられてきた地域への自主的積極的な関わりが背景にあり、現在に続く良好な環境が形成されたことが明らかになった。

第5章では、現在の円山公園の敷地であり、ふもとで中心市街地と接続する「円山・真葛ヶ原・祇園社地域」を対象とした。ここでは、近世には褶曲する微地形に細かな造成を加えて、自然景観を人為的部分に融合させる工夫がされる中、外界へ大きく開かれた構造の座敷を作り眺望を主とした景観に臨場感を与える方法と、仮設的座敷を設けて周囲の景

観と一体化する方法が培われた事を明らかにした。それには飲食や宴等の行為が重要な役割を果たしていたが、それは近代初期にもある程度受け継がれ、分割されていった個々の景観の中で繰り返された。しかし、中心市街地と直に接続するこの地域において、それぞれの営為がスケールアップするなかに、美しい景観を基盤とするはずのこれらの行為がバランスを崩し、粗雑な景観の氾濫へつながった。このような近代の都市化に対して、この地域は、公園敷地の指定・拡張を行い、植治を擁して広範囲にわたる造園を行った。地形を活かして公園内中央に流水を用いた「自然景観」を導入する、公園緑地化という手法に解決を見出し、そこへ飲食店を介在させて、かつての愉しみを内在化させることで、山辺の新しい共有空間を獲得したことが明らかになった。

ケーススタディの統括

結論を導くにあたって、これらの3つのケーススタディで分析してきた内容を比較する。近代の成功例と見なしうるこれらの開発において、使用された技術的解の傾向と、それによって出来た複合景観域の構造的特徴を把握したい。

上記のまとめに従って、要点を図6-1（次頁）のように表現した。ここでは自然的領域（山、森、林）を灰色透明の円で、社寺境内を中抜きで、山辺に迫る市街地を黒色角形で、大きな空隙を中抜き破線の円で表している。図の中で、神楽岡の1905年から登場している右側の太破線は、見る対象として認識されていく東山の存在を表している。黒縁で白色あるいは灰色の丸は、茶屋、席貸、飲食店、主要な庭園、良質の住居領域など、本論で議論した核となる景観要素である。こうした特殊なデザイン密度の高い要素を一つの概念に仕立てて概観すると、議論してきた状況がよくわかる。

この図に見る変遷は、碁という布石（序盤の打ち方、構想）のようなものであると考えられる。この置き方が上手くゆけばその後の領域形成に非常に有利である。神楽岡でみれば、谷川茂次郎の開発や、吉田山荘の造営の布石が後に効いている。浄土寺・鹿ヶ谷・若王子でみれば、最も有効な布石は、山裾に潜んでいた複数の社寺領域であり、これらとの結びつきを志向した橋本関雪、住友春翠の造園と、手に入れた疏水をそのつなぎへ活用できた事が効いている。円山・真葛ヶ原・祇園社の場合は、過去に同様の良好な布石（安養寺、双林寺の塔頭作りや、祇園林の植樹）がされていたために前近代には既に、確固とした複合景観域が出来ていた。これらは近代にとっての潜在的な布石であった（図中の白丸）。ところが近代の風潮は、それらの要素そのものを場所性に関わらず拡大させてしまった事が、景観域の崩壊へ導いた。このときに取られた決死の策が全域の緑地化であり、規模を転換して巨大な領域そのものを布石の要素とするに至ったのではないだろうか。ただし、円山公園では、内部にあった潜在的布石を再び活かし、飲食店を確保している事が現在の公園の固有性に効いている。これらの、布石として有効であった図に示す黒縁灰色円を、以上の特性から重要視すべき要素として「布石要素」とよび概念化できるだろう。

まとめが出来たところで、成立した複合景観域の構造を明らかにする。

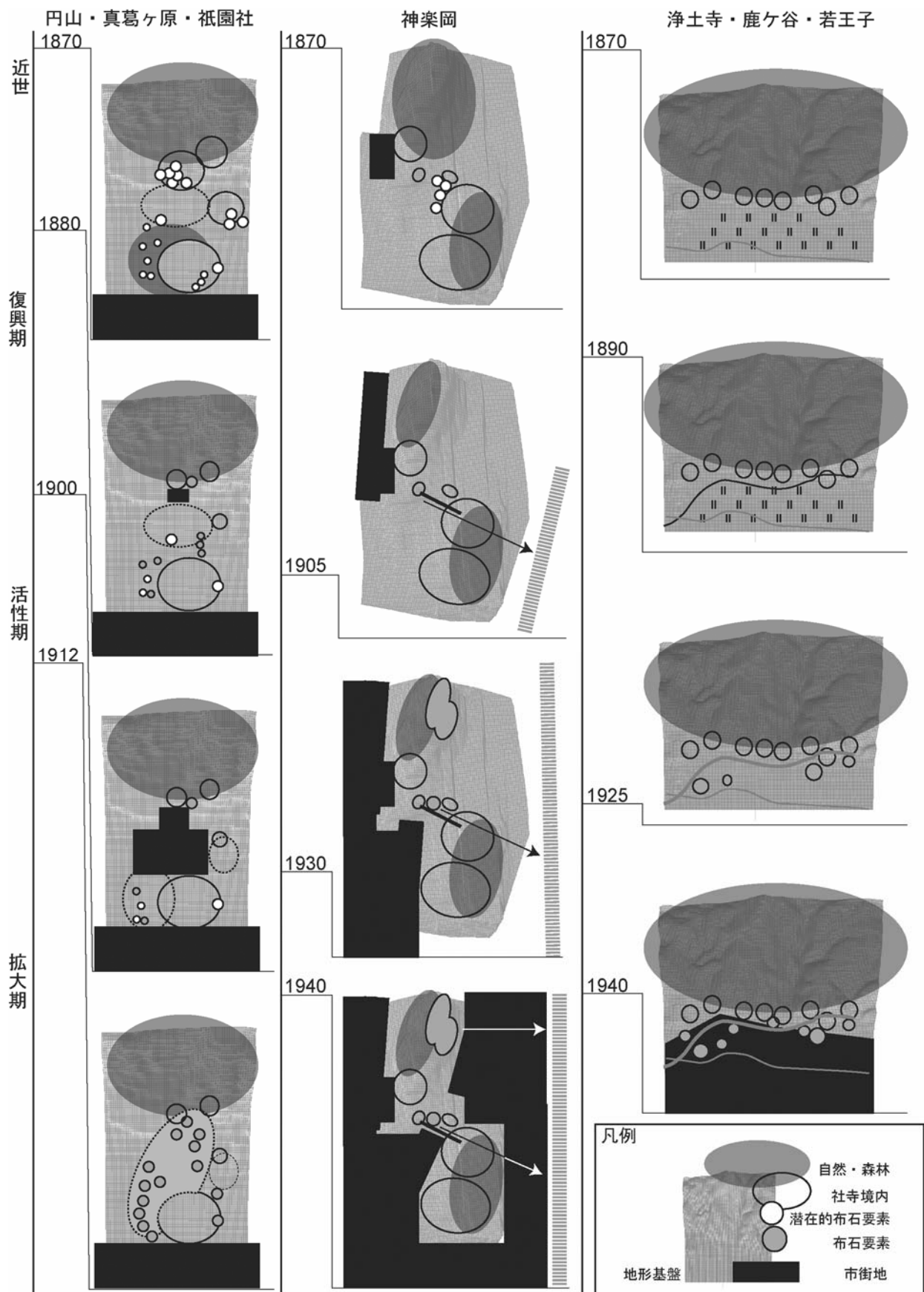


図 6-1 ケーススタディのまとめ：各複合景観域の構造的変遷

1) 地形的・基盤的特徴について

基に照らして考察すれば、布石が基石による陣取りであるのに対し、それ以前に基盤として存在する環境条件は基盤、あるいは基盤の目という事になろう。このときの基盤の目、すなわち地形的・基盤的特性は、均等に引かれたものではなく、密度に差ができる。つまり前時代までの布石を含めて形成された空間そのものが、次の時代の基盤となる。

近代における基盤的特徴は、それぞれ前近代の段階における社寺領域と密接に関係している。そして、これらの場所においては、背後に（概ね傾斜上方に）深い森を蓄えた山を控えさせ、そうでないものはその代わりになる林が保持された。境内の構成は、こうした背景へ向かって密度を増す植栽がしつらえられている。安養寺に代表される眺望型の空間づくりにおいても、背後の山と視点場周囲の土地造成を含めた造園によって創造される、近景の自然的要素と街への眺望の間のコントラストが重要であった。

山には森があり、山辺には社寺がある。基本的にはこのような非常に分かりやすい構成であった。祇園社は山辺の下部に占地されたが、例に漏れず背後には林が蓄えられた。この時に山辺上部に発達する時衆寺院との間は、森ではなく原野が保たれている。森では時衆寺院の眺望は保たれなかったであろうし、この空隙が全域の密度にバランスをとっていた。この絶妙な空隙（真葛ヶ原）を存在させたのは、上下二つの社寺境内の布石的働きだったともいえる。

近代に都市化が進むと、先陣を切る開発が良好な「布石」となっていた場合に、本論のケーススタディのような複合景観域が形成できると考えるが、この布石についても、地形・基盤的な思慮が必要であろう。吉田山開発の良好な布石となった谷川茂庵の開発や吉田山荘の造営は、比叡山や大文字といった東山と向き合う場所的特徴を見抜き、新しい眺望の価値を見出したものであった。橋本閑雪や住友春翠の造園は、山辺下部から仰ぎ見る山並みの稜線を志向するものだった。疏水縁の桜並木も重要な広範囲に渡る布石であるが、疏水そのものが地形的な配慮に基づく造形であったことが重要な前提条件となっている。

2) 近代に選ばれた「布石要素」のデザインについて

近代の布石の仕方は、本論のケーススタディにおいても、三者三様の方策が採られ、それぞれに美的秩序を持ち合わせた開発であったことが分かるが、それらの特徴は以下の通りである。

神楽岡領域では、東向きの眺望を内部に取り込み、山を相対的に眺めながら自らも山に居るという立場を愉しんで景観がデザインされた。すなわち、吉田山（吉田神社）と紫雲山（真如堂）の間は、前近代には折れ曲がる道沿いに茶屋が並んで両者の往来を結んでいたが、近代には宗忠神社参道と東伏見宮別邸（吉田山荘）が、吉田山から紫雲山・東山へ向かう視線を強く求め、庭園を中心に造営された。谷川茂庵の開発においては、中腹の壁面的構成から頂の数寄庭園へ向かう人為の自然化に至る、段階的秩序が設けられた。神楽岡領域におけるこれらの開発の感性的規範は、数寄の文化、あるいは日本に伝統の美的感覚を伝える本流の作法であり、石垣・石段・木造の家屋・植栽といった自然素材の組み合わせによる伝統的技術で実現された。

浄土寺・鹿ヶ谷・若王子の領域における布石要素の形成は、潜在的布石とその顕在化を促進する布石の2段階であった。潜在的布石は、山辺に対する水辺としての琵琶湖疏水分

線であった。しかしこの時点では、可能性としての布石であったに過ぎず、次の段階を伴って始めてその価値が見出されるものだった。続く段階は、橋本関雪や住友春翠によって行われた先行開発の遣水庭園と、関雪夫妻による桜並木の植樹である。住居としてはかなり大きい敷地をとって、遣水によって疏水の価値を見出し、山の自然と自らの領域内の庭園を結び、周囲に緑地としての環境を提供するものであった。疏水縁の桜並木も、水辺に造形を加えてその価値を引き出すものであった。布石の適切さを示すように、その後の住居開発は、疏水縁が当時日本の文化の重要な一端を担う画家や哲学者らの住まいになり、散策路となり、山辺の社寺を含んだ文人界限を形成するに至ったのである。

円山公園は、遣水を用いた溪流の表現を基に、自然と人為の両者を土と植栽で表現し、全てを自然の調和の中に還元する造園と、そこに相見える茶店の配置で特徴付けられる、さらに大きな領域への布石であると考えられる。この公園の総合的整備は、近世の構成を分析して明らかにしたように、布石の段階に絶妙なバランスをとって成り立っていた複合景観域（つまり、社寺境内に出現した席貸や掛茶屋などの遊興的施設を布石として周囲に構成された景観的領域）において、布石の段階で有効だった布石要素そのものが近代化して変質、拡大し、重要であった空隙（真葛ヶ原）を失って、領域の崩壊を招いたために、その一つの打開策として、全領域を内部化して巨大な庭園に見立て、同時代に南禅寺周辺の近代化における「布石」の執行者として評判の高かった植治の、自然に対して非常に協調的な手法を導入したものであったと意味付けられる。ただし、公園内部の構成は、遣水の庭園が、周囲の自然、多少の人為、麓の都市等に囲まれた中央に造られて、それを囲むように存在していた潜在的布石要素としての店舗を残した。一帯は造園による自然の表現によって覆うことで調和を果たされて山へ開いており、かつて近世には庭園や林地に開いて存在していた掛茶屋の店舗のように、並ぶ飲食店はこの新たな庭園へ開いた。

こうしてみると、近代における布石要素は、それぞれの背景あるいは周囲の山と自らの領域をどのように関係づけるかという問題に対して真摯に、あるいは愉しんで取り組んだものであったと考えられる。

3) 複合景観域を形成する要素の構成について

円山公園の場合は、公園敷地と周囲の社寺境内が複合景観域であり、公園敷地内の構成は、先に示した通りであるので省略する。

神楽岡地域では、社寺境内が複合景観域の主要要素である。ただし、吉田山と紫雲山を強力に連鎖させたのが、宗忠神社の参道であった。このような直線的な軸は一つの近代的要素と考えられる。さて、ここで二つの主要な布石要素を見てきた。谷川茂庵の開発領域と、前述の軸を含む吉田山荘周辺であるが、この二つの要素はどちらも東山の景観を自らの領域の特徴として見出す位置にあり、谷川茂庵の領域は大文字を正面で捉え、吉田山荘の領域は紫雲山の社寺がつくる領域を捉えている。布石は自らの領域周辺だけでなく、接続したい領域に有効な箇所へ置かれたといえる。

浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域においても、第1に有効な布石は既に存在していた社寺の領域であった。ただし、これらの領域内の構成は、それぞれが山へ向かっていて独立していた為に、大きな領域の広がりとは作られていなかった。近代の布石要素は二段階の登場の仕方をしたと先に述べたが、疏水縁はこの後形成される複合景観域内の横のつながりを創

出し、白沙村莊と鹿ヶ谷の住友別邸はそれぞれ、北部の拠点、南部の拠点となった。

以上から、複合景観域の形成には、既にある幾つかの可能的要素（自然領域や社寺領域など）を接続し、景観的に顕在化させる要所に布石要素が配置されることが、重要であったことが分かる。

ここまでの考察で、複合景観域の構造的な概念をモデル化すると図6-2のようになる。

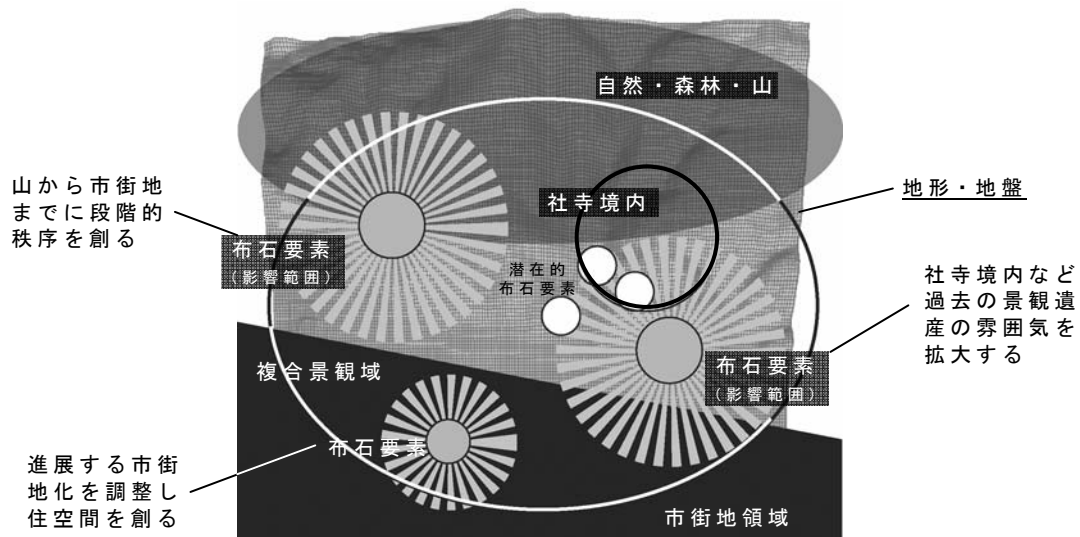


図6-2 複合景観域モデル

4) 場所に対する意識の変容について

こういったデザイン的な取り組みは、近代を通じた開発の試行錯誤の文脈にあって軽やかに出現したもののように受け止められる。しかし、こうしたデザインの実現の背景には、山辺という場所に対する利用者の意識に変容があったことを伺わせる。

概して近世の山辺における活動は、町中の活動とは異なり、洛中からある程度の地理的・精神的な距離を持つ領域であるという認識に基づき、社寺巡礼や物見遊山が行われた。そして人々は、場所に親しみを感じると、野遊びや花見、さらには席貸といったような非日常の場として山辺を自ら演出し、仮設的で場を開いた装置を設けてそのままの環境を自らの遊びの場としていた。

これに対して近代の取り組みは、その成功の条件として、新しい遊び、あるいは愉しみの形態を確立させる事が要求されていたように見える。円山領域が得た愉しみは、飲食と共に名所を愉しむ近世までのやり方を受け継ぎつつ、公共の公園として誰でも都心から少しの距離で、自然景観に満たされる近代的安らぎを得た。そして、祇園北林よりもさらに領域を広げた公共的空隙によって、春にはかつてよりも大規模な花見宴席が実現した。

神楽岡領域が得た愉しみは、眺望と穏やかな環境に恵まれた居住の愉しみであり、また谷川茂庵の茶席のような大規模な発展的芸術的野遊びとでもいうような、数寄であった。

そして鹿ヶ谷領域が得た愉しみは、居住の愉しみに加えて、西谷啓示が言ったように歴史的身体的に働きかける、山裾の社寺領域と融合した閑静な住宅地における、散策の愉しみである。

以上のように、近代には著しい都市化によって町と山辺との距離が縮められていった際に、実際の距離では町と非常に近接していた東山において、各領域の意識における場所性

は、近世における非日常を愉しむ遊び場から、それぞれの地域で景観デザイン上の工夫ともいえる合理的な手法を用いて、近づきすぎた自然を自らの日常的な居所として愉しむための開発が、新たな複合景観域形成の布石となっていくといえるだろう。

結論 ―はじめの問いについて

以上の分析・考察において、近代京都の山辺における景観変容の具体的内容と、その背景および意味が明らかにされた。ここで、はじめに立てた問い、「いかにして近代において山辺の美的景観を創造することが可能であったか」、に対して答えることが求められる。

山辺における美的景観の創造は、すなわち新たな複合景観域が形成されたことに他ならない。つまり、問いは良質な複合景観域はどのような構造で形成するのかという事に置き換えられる。本論で観察した良好な複合景観域は、概ね地形的優位、社寺境内との関係性、そして他の開発に先行する効果的な場所の創造（布石）によって成立していた。

京都東山の山辺において、該当する複合景観域は、全てに置いて社寺領域がその原形を形づくっていた。近代における布石は、この社寺領域が地形の中で作り出した環境に適応して置かれなければならなかった。その構造から、各ケーススタディはそれぞれ、次のように整理できる。

1. 新たな基盤としての山居と住宅地の開発（神楽岡地域）

構成上の要点は以下の通りである。

- ・ 二つの独立丘陵地形から成り、潜在的に核となる社寺領域が西（洛中方向）へ偏って占地され、周囲はこれらを基準に構成されていた。
- ・ 複数の社寺領域があり、社寺境内あるいはその背後に豊かな林地があった。
- ・ 近代の布石要素が、社寺境内やその周囲の自然を新たな領域、あるいは視対象（大文字、紫雲山など）と結びつける位置（東側）に配置された。
- ・ 近代の布石要素としては、広範囲を占める別荘、数寄庭園や、借家群の総合的开发、新しい直線的軸の創造（新参道）など基盤と同時に形作られ、石垣や石畳による小径と庭園、そして新しさの中に伝統を受け継ぐ木造建築によるものだった。
- ・ 布石要素を核として、東側傾斜地に静閑な居住域が形成された。

2. 基盤価値の発見による文人界隈の形成（浄土寺・鹿ヶ谷・若王子地域）

構成上の要点は以下の通りである。

- ・ 緩傾斜から突如隆起した地形の麓、あるいは谷と扇状地の出会う地形に、潜在的に核となる社寺領域が占地されていた。
- ・ 複数の社寺領域があり、社寺境内の背後（周囲）には森が蓄えられていた。
- ・ 近代の布石要素が、社寺の籠もる山裾のさらに裾野に領域を広げるように、さらに独立した社寺領域を結びつける位置に配置された。
- ・ 近代の布石要素としては、広い敷地を持つ別荘、庭園開発や、新しい曲線的軸の創造（疏水縁の並木）で、どれも流水と造園によるものであった。

- ・ 布石要素を核として、文人の住む界隈が形成された。

3. 公園による統一（円山公園）

構成上の要点は以下の通りである。

- ・ 大きな山辺の地形で急傾斜から緩傾斜まで多様にあり、潜在的に核となる有効な社寺領域が占地されていた。
- ・ 複数の社寺領域があり、社寺境内あるいはその背後に豊かな林地があり、これらを活かして（布石要素を内在させて）既に複合景観域が形成されていた。
- ・ 近代の布石要素は、かつて同様の発達をした箇所に重ねて配置された。
- ・ 近代の布石要素としては、人工温泉、大規模ホテル、席貸、料理屋、弓道場などの遊興施設、掛茶屋、別荘など、多岐に渡って建設されたが、それまでの基盤（細かな地形操作・空隙のバランス）を壊してしまったために、有効に働かなかった。
- ・ 最終的には、全てを公園敷地で包み、遣水庭園の手法で一元化された。ただし、幾つかの飲食店などが園内に残され、庭園と調和した。

成立した上記三つの典型的複合景観域が、現在でもリアリティの高い場所として好まれるのは、それらの核となった布石要素が、時間的超越性をもつ自然、そして深い歴史を持つ社寺に対して、進出する人々の新しい生活の基盤を協調させる技術を持っていたからであることが、本論で明らかにされた。

場所のリアリティとは、場所自体の实在の確信というよりは、むしろ生活者自らに立ち戻ってくる実在性、つまり自己存在の確信がその場所において得られるということだった。本論でみたような良質の複合景観領域において可能となった、歴史的身体的に景観と交感する体験は、その環境を媒介に自己の人格形成をする生活者にとって、自らのアイデンティティを確認する重要な手掛かりとなる。それゆえに、山辺に形成された優れた複合景観域は、近世には人々の遊び場として構成され、その後社会構造の急変によって職住の分離を迫られた都市生活者が、郊外にあたる山辺に住宅地域を求めた近代においては、住人の散策し、思索し、文化的生活を営む領域として、特異な布石要素が加えられて再編成されたのである。

C. アレグザンダーは、『パタンランゲージ』の中で、大パタンに該当する「町・コミュニティのパタン」に関して、「息の長い漸進的な成長により徐々に」実現されると言っているが、本論で考察した「布石要素」によって形成される複合景観域においても、同様に景観域内の充実には長い時間を要する。円山公園の例のように、この過程が上手くいかないと、もう一度徹底的に布石をやりなおす必要のある場合も考えられる。本論では、このような、過去と現在を繋ぐ時間感覚によって、領域の構造を把握し、K. リンチが提唱した米国の都市イメージモデルに対して、日本の都市空間に適した山辺の空間モデルを提示できた。

今後の課題 ― 京都の郊外とその美学

本論を終えるにあたって、この先に臨まなければならない幾つかの新たな課題が明らかになった。以上の議論の中で、複合景観域という概念と、布石要素を核とするその構造の一端を明らかに出来たことは、重要な景観の捉え方の提示であり、一つの成果であると思われる。しかし、布石要素の内容は、地域に見出される根拠に従うべきものであり、本論で見出された布石要素とは異なる手法による成功例を探すことも出来るだろう。この複合景観域について体系立てるためには、さらに厳しい態度で考察を重ねる必要がある。

そのために、本論では扱わなかった近代山辺変容の多くの事例の分析も、続けてせねばならない。ここでははじめに、近代前後の景観の変化の著しく、それによって新しい名所の地位を獲得したという条件によって、対象地を選びケーススタディとしているが、この条件に外れた事例を批判的に分析する労を妨げてしまった。困難な分析ではあるが、是非やらねばならないだろう。さらに、東山に囚われずに、京都周囲の山々全体を見回せば、同じ京都という都市背景の中で、異なる変容の要因を市街地との関係から観察でき、さらに深い回答が得られるであろう。

また、本論で取り上げたような、京都における山辺の複合景観域が、同時に観光の名所として十分な資質を備えている事は、ここまでの議論の中で既に明らかであろう。既に明治期から、京都は世界の公園であって云々と議論が重ねられ、昭和45年の大阪万博の時期から、観光のブームは勢いを増し、観光を主要な産業と考えている京都市にとって、さらに力を入れるべき分野になっている。しかし、観光バスで大挙押し寄せ、名所といわれる場所を写真に撮り、みやげ屋を漁るような、現在の観光のイメージは非常に一元的なものとなっているように思われる。本論のケーススタディをそのまま観光名所の基盤と考えても明らかなように、観光の形態はその場所毎の多様性を持ってしかるべきである。他の観光スポットに競って、観光バスの便を図り、風景を創る樹木を刈ってしまうなどといった、観光戦略は間違っていると言わねばならないだろう。この観光の問題は、次に残された重要な課題である。

近代を通じて山辺の領域において行われた努力は、一体何であったのか。それは、この場所に住居領域づくり、自らの生活環境として洗練させていく仕事に他ならない。本論で扱った計画者、並びに創造に荷担した住人達は、山に囲まれた京都の環境を愛し、自らの住処をよりよくしようという純粋な動機から、芸術的な領域の空間構成を作り出したのである。円山公園において山へ引き込まれるような四季を感じる瞬間、吉田山の茶室にあって斜陽を正面にうける大文字山を臨む瞬間、疏水縁を歩き法然院門前に重なり合う陰の深みへ浸り込む瞬間は、それが他ならぬ人為的に構成された環境であるのに、それ以上に自然と歴史の深みを感じ、超越的な存在に届くかのようなものである。

工学は、方法を一元化して、事を効率的に運ぶことを研究する学問であるとは限らない。諸問題に対して、技術的確信を持って解決に挑む学問であろう。人がリアリティのある豊かな生活を求めるとき、その技術的解はどのようなものになるだろうか。本論ではその方向性を見た。続けて追求せねばならない。

付録

関係事項整理年表

		京都一般	円山・真葛ヶ原・祇園社	神楽岡	浄土寺・鹿ヶ谷・若王子
1867	慶応3	大政奉還			
1868	明治1	3.28太政官布告「神仏分離令」			
1869	明治2	東京遷都・版籍奉還			
1870	明治3				
1871	明治4	廃藩置県 1.5第一次上知令 植村時代始まる		吉田神社は官幣中社	
1872	明治5	4.12大蔵省布達第53号 「名所古蹟保存の件」 京都博覧会			
1873	明治6	1.15太政官布達第16号「公園」	吉水温泉竣工		
1874	明治7				
1875	明治8	6第二次上知令（引裂き上知）			
1876	明治9		鳩居堂主人熊谷酔香追慕茶会		
1877	明治10	外国人遊歩規定廃止			
1878	明治11				
1879	明治12	コレラ大流行	也阿弥ホテル開業		
1880	明治13				
1881	明治14	北垣時代始まる			
1882	明治15				
1883	明治16				
1884	明治17	日清戦争			
1885	明治18	琵琶湖疏水起工			
1886	明治19		円山公園開設 也阿弥ホテル増築		
1887	明治20			聖護院・吉田・岡崎で 大根の栽培が最盛期	
1888	明治21				浄土寺村・鹿ヶ谷村 京都市上京区へ編入
1889	明治22	京都市制・町村制施行 琵琶湖疏水敷上インクライン完成 人口28万	円山公園京都市に移管	第三高等学校設立	第三高等学校設立
1890	明治23	4.9琵琶湖疏水の完成			琵琶湖疏水分線完成
1891	明治24				
1892	明治25				
1893	明治26		田辺朝郎、公園内に噴水		
1894	明治27		也阿弥ホテル増築		
1895	明治28	平安遷都千百年紀年祭 平安神宮創建 第一回時代祭	凱旋祝賀会	宗忠神社参道？	
1896	明治29				
1897	明治30	森林法公布（保安林制度）		京都帝国大学設立	京都帝国大学設立
1898	明治31				
1899	明治32		也阿弥ホテル火災		
1900	明治33				
1901	明治34		也阿弥ホテル再建		
1902	明治35		第一回公園拡張		多能村直入・鹿ヶ谷
1903	明治36	日露戦争			
1904	明治37	岡崎公園開設			
1905	明治38				
1906	明治39		也阿弥ホテル火災	文科大学設立	文科大学設立
1907	明治40	人口40万			
1908	明治41		也阿弥ホテル閉業		
1909	明治42	京都電鉄、鴨東線敷設の請願	長楽館竣工 第二回公園拡張	吉田神社大修理はじめ	
1910	明治43				西田幾多郎、京大助教授
1911	明治44				
1912	明治45	6月「三大事業竣工祝賀式典」		吉田神社大修理完了 宗忠神社本殿改装	
1913	大正2		公園改良工事着工		
1914	大正3		公園改良工事完了		
1915	大正4		八坂神社官幣大社昇格 八坂神社境内拡張決定 八坂神社祭会		
1916	大正5				橋本閑雪「白沙村荘」・浄土寺
1917	大正6				
1918	大正7	四月周辺町村の大合併			
1919	大正8	都市計画法・史蹟名勝天然記念物保存法 12.27京都市区改正設計			
1920	大正9	都市計画法による 都市計画京都地方委員会設立			住友春翠・鹿ヶ谷別邸 野長瀬睦花・鹿ヶ谷 閑雪桜植樹 西谷啓治、京大入学
1921	大正10				
1922	大正11	市都市計画区域法定			
1923	大正12				
1924	大正13	都市計画区域における用途区域の指定			西谷啓治・鹿ヶ谷 和辻哲郎・若王子
1925	大正14	人口68万人			西川一草亭「去風洞」・浄土寺
1926	大正15			「吉田山荘の茶」（茂庵） 吉田山荘竣工（茂庵庭園） 第1回吉田神社追儺式	疎水分水が上水用の給水路に
1927	昭和2	松ヶ崎浄水場建設	市立円山音楽堂が竣工		
1928	昭和3	御大典			
1929	昭和4	東山・中京・左京の三区増設 都市計画風致地区として			
1930	昭和5	鴨川沿岸・東山・北山等が初指定			
1931	昭和6		10.14文部省が円山公園を 史蹟名勝天然記念物に指定		
1932	昭和7	船岡山公園（都市計画公園第一号）		吉田山荘建設（吉田山荘） 宗忠神社参道が石畳に	
1933	昭和8				
1934	昭和9				
1935	昭和10				登内微笑・鹿ヶ谷（この頃）
1936	昭和11				石崎光瑠・鹿ヶ谷（この頃）
1937	昭和12				
1938	昭和13			宗忠神社拝殿改装	
1939	昭和14				
1947	昭和22				
1948	昭和23			料理旅館「吉田山荘」	
1949	昭和24				疏水分線と導水路（管渠）の分離 吉井勇・浄土寺
1950	昭和25				
1951	昭和26				
1952	昭和27				田中美知太郎・鹿ヶ谷
1953	昭和28				
1969	昭和44				
1970	昭和45	大阪万博			疏水緑散策路工事
1971	昭和46				
1972	昭和47				疏水緑散策路工事 「哲学の道」竣工
1973	昭和48				

謝辞

本論文を結ぶにあたり、研究を遂行する上でご指導とご援助を下さった方々に感謝の意を表します。

中村良夫先生には、本研究の構想から遂行にわたって常に暖かいご指導とご鞭撻を頂きました。都市の風景に対する様々な観点や思想を提示していただき、萎縮しがちな筆者の視野を拡げて下さいました。樋口忠彦教授には、研究の統括にあたり日本の空間概念に関する深い洞察をもってご指導していただきました。今後の都市空間創造において重要となる景観領域の概念を深めることができました。川崎雅史助教授には、筆者が学部・大学院で研究を遂行する間を通じて、景観研究に対する姿勢とその愉しさに気付かせていただき、情熱を持ってご指導していただきました。また学位論文審査にあたり、副査となっていた高橋康夫教授には、本論文で重要であった歴史的記述の方法をはじめ、歴史的考察によってどれほど物事の本質に迫ることができるのかを示し、丁寧にご指導して頂きました。深い感謝の意と深甚の敬意を表します。

小林正美教授、故外山義教授には、筆者が研究の方針に関わる問題意識が洗練できずに悩みながら遂行した修士論文の副査をしていただき、的確なご助言を与えていただきました。特に、日本の固有の空間をとらえるときに、必要な方法論とはどのようなものかという問題意識を、このときに強く持つようになりました。非常に感謝しております。

石田潤一郎教授には、近代京都郊外の歴史について、様々な助言をいただきました。土井勉氏（千里国際情報事業団）には、筆者が研究者として歩み始めるその時に、非常に有益な示唆を与えていただきました。田中尚人講師には、筆者の不勉強も厭わずに研究室において常に議論の相手となつていただき、励ましていただき、多くの貴重なアドバイスを惜しみなく与えて下さいました。深厚な感謝の念に耐えません。

小林義樹氏（京都市都市緑化協会）、諸寺社関係者、飲食店経営者、庭園管理者をはじめ、快く資料を提供していただき、ヒアリングにご協力して下さいました多くの方々にも、深い感謝の意を表します。

また、本論文の資料収集、整理、論文作成にあたっては、首藤恵子、谷中友美、嶋田裕士、前田淳仁、相川裕一、真嶋一博ら諸兄に多くの協力をいただきました。様々な面で筆者を支えてくれた、旧人間環境設計学研究室及び、景域環境計画学研究室すべての方々に感謝します。

最後に、長い学生生活の間筆者を気遣って支えてくれた我が家族に感謝の意を捧げます。